国際日本研究

第十二号　二〇二〇年　二月

論 文

■ 平山 朝治
日本の元号・歴史意識とキリスト教

■ 平沢 照雄
ニッチトップ型中小企業の地方移転と国内・海外事業展開
―株式会社 協立製作所の事例分析―

■ 田中 洋子・田中 光
日本とドイツにおける協同組合金融機関の歴史的比較研究

■ 柴田 政子
第二次世界大戦後の占領下ドイツにおける
ストゥディウム・ゲネラーレ（Studium generale）導入の試み：
大学の社会的使命についての考察

■ Eric R. LOFGREN
Recovery versus Reversion:
The Implications of Multiple Signifieds in Ōoka Shōhei's *Fires on the Plain*

研究ノート

■ 津城 寛文
日本の頂点文化―ミニマリズムの達成

■ James Harry MORRIS
A New Analysis of Persian Visits to Japan in the 7th and 8th Centuries

■ 青山 俊之
自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇化によるタイプ分析

■ Olena KALASHNIKOVA and Fabian SCHAEFER
A Corpus-Linguistic Analysis of Media Discourses on
Nuclear Phase-out in Japan, 2011-2014

筑波大学大学院 人文社会科学研究科国際日本研究専攻
ISSN 2186-0564

『国際日本研究』は、筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻により年に 1 回発行される、国際的視野を持った日本研究のジャーナルです。

本ジャーナルは、国際比較、国際学の観点から広義の日本研究領域（政治、経済、社会、メディア・情報研究、文化、言語学、言語教育、芸術、文学研究）に関する専攻内外の先端的な研究成果を公表することによって、開かれた議論を促進するために刊行されています。

『国際日本研究』を通じて、日本研究・日本語研究をはじめ、国際比較研究、国際学研究がさらに発展することを期待しています。

著作権について

本紀要・ウェブサイト（http://japan.tsukuba.ac.jp/research/）の掲載内容（著作者を明記した論文等を除く）に関する著作権は、筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻に帰属します。掲載論文等の著作権は著作者に属し、引用や使用許可を含む各論文等の内容に関する責任は著作者にあります。

国際日本研究 第十二号

〔編集委員会〕
ヴァンバーレン・ルート（編集長）
タック川﨑レスリー
生藤昌子
ブッシュネル・ケード・コンラン
関能徳
田川寛之

2020 年 2 月 15 日発行
編集・発行　筑波大学大学院人文社会科学研究科
国際日本研究専攻
〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学大学院人文社会科学研究科国際日本研究専攻
TEL：029-853-4037
FAX：029-853-4038
E メール：jiajs@japan.tsukuba.ac.jp

筑波大学
国際日本研究
第12号
2020年 2 月

目　次『印刷版』

論文

■ 平山 朝治 1
日本の元号・歴史意識とキリスト教
■ 平沢 照雄 23
ニッチトップ型中小企業の地方移転と国内・海外事業展開
―株式会社 協立製作所の事例分析―
■ 田中 洋子・田中 光 45
日本とドイツにおける協同組合金融機関の歴史的比較研究
■ 柴田 政子 63
第二次世界大戦後の占領下ドイツにおける
ストゥディウム・ゲネラーレ（Studium generale）導入の試み：
大学の社会的使命についての考察
■ Eric R. LOFGREN 75
Recovery versus Reversion:
The Implications of Multiple Signifieds in Ōoka Shōhei's *Fires on the Plain*

研究ノート

■ 津城 寛文 91
日本の頂点文化―ミニマリズムの達成
■ James Harry MORRIS 105
A New Analysis of Persian Visits to Japan in the 7th and 8th Centuries
■ 青山 俊之 121
自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇化によるタイプ分析
■ Olena KALASHNIKOVA and Fabian SCHAEFER 137
A Corpus-Linguistic Analysis of Media Discourses on Nuclear Phase-out in Japan, 2011-2014

目　次『オンライン版』　ISSN 2189-2598

http://japan.research.tsukuba.ac.jp/research

論文

■ 高　揚　155
再依頼から合意形成に至る断りの談話の展開構造
　―被依頼側の日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較―

研究ノート

■ 大茂矢 由佳　172
日本は「移民」のタブーを克服したか
―2018年の入管法改正をめぐる国会審議の定量分析―
■ 片山 奈緒美　184
「わかりあえる日本語」の構築
―クルド人コミュニティにおける日本語意識調査から―
■ 陳　祥　198
「白・白い・白々・白々しい」の意味拡張及び認知プロセスについて

『国際日本研究』
投稿規定

（H 31. 3 月改訂）

⑴本紀要は、筑波大学大学院人文社会科学研究科国際日本研究専攻により発行され、国際比較、国際学の観点から行われる広義の日本研究領域（政治、経済、社会、メディア・情報研究、文化、言語学と言語教育学、芸術、文学研究等）の専攻内外の先端的な研究成果を公表することによって、開かれた議論を促進するために刊行される。

⑵本紀要は、⑴の目的にかなう原稿、また本専攻の教育研究活動に資する原稿の投稿を受け付ける。

⑶本紀要に投稿できる原稿は、以下のものとする。

①未投稿・未発表の原稿。

②学会等で口頭発表され、その旨を明記した原稿。

③本紀要編集委員会の定めた投稿規定および執筆要領に従った原稿。

⑷他の学会誌や研究紀要等で出版された原稿と著しく重複する内容の原稿を、本紀要に投稿することは認めない。

⑸本紀要に投稿できる原稿の種別は、以下のものとする。

①研究論文：「研究論文」とは、新規性を有する研究を報告するものであり、その原稿は、序論、当該研究分野に関する文献及び当該研究に用いられた理論上の構成概念又は枠組みに対する批評、研究を行うために使用した方法、研究のデータ及び結果、そして分析結果及びその含意について論じた結論部分を含んでいることを要する。

②研究ノート：「研究ノート」とは、研究論文のように厳密な構成の文書である必要はないが、学会誌の読者の目に新たな見解をもたらし、理論的な視点、研究計画又は方法論的アプローチを進展させることを試みるものであることを要する。

③その他：書評論文、研究調査の内容を資料として提供するもの、教育研究活動についての報告、研究プロジェクトの報告、オーラルヒストリー（史・資料の紹介に重点を置きつつ、考察を加えたもの）等。

⑹本紀要に投稿することができる者は，次の者とする。

①大学教員または研究員（国内・外を問わない。投稿の際、所属・肩書、住所、電話番号、所属機関から発行されている投稿者のメールアドレス（Gmail などのフリーメール、独自ドメインのメールアドレスは不可）が明記されていること。）

②国際日本研究専攻に所属する学生（短期プログラム等に参加中もしくは参加経験のある学生を含む）（指導教員の承認を要する）

③本専攻の修了生またはその他本紀要編集委員会が認める者

⑺本紀要に投稿する者は、以下の責務を負う。

①投稿者は、大学が定める CITI Japan、eL CoRE の e-learning 等の研究倫理教育を、最低５年ごとに受講する。但し、これらの e-learning 教育を受けることができない者は、これと同等の研究倫理教育を受講することで代替することができる。

②投稿者は、iThenticate 等の論文剽窃検知ツールによりチェックを行い、投稿原稿に既存の著作との類似がないことを確認する。

③投稿者は、投稿原稿に剽窃、データの捏造、改ざん、個人情報の不当な扱い等の不適切な作成方法が含まれていないという誓約書を提出する。

⑻同一投稿者が複数の原稿を投稿することは、特に禁じない。

⑼原稿は、日本語または英語を使用し、ワープロ（Ａ４サイズ）にて横書きで作成する。執筆は原則として執筆要領で指定した形式（国際日本研究専攻ホームページ参照）に合わせることとする。

⑽各原稿の冒頭に、日本語と英語の双方で、氏名、論文タイトル、プロフィール（所属・肩書）、要旨（英文原稿の場合 300 語程度の英文要旨のみ、和文原稿の場合 300 語程度の英文要旨および 800 字程度の和文要旨）、キーワード（英文原稿の場合３～５語程度、和文原稿の場合は日本語と英語で各３～５語程度）を明記する。

⑾英文原稿は英語母語話者のチェック、和文原稿は日本語母語話者のチェックを受けておくことが望ましい。

⑿一度提出した原稿の差し替えは原則として認めない。また、投稿原稿は返却しない。

⒀投稿原稿に対する査読は、以下の規定に従って行われる。

①本紀要編集委員会が投稿原稿の全てについて精査した上で、投稿者に原稿の加筆・修正を求めることができる。

②投稿原稿１件について査読者を２名以上とし、当該原稿が該当する研究分野を専門とする者とする。

③査読は、本紀要編集委員会が、原則として人文社会系構成員に対して依頼する。人文社会系構成員に適任者がいない場合には、人文社会系以外の教員又は学外者に対して、国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長が依頼する。

④査読者は、査読結果について、国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長に報告する。投稿原稿に不適切な作成方法が含まれている疑いがあると判断する場合は、その旨を国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長に報告する。

⑤本紀要編集委員長は、採録、加筆・修正または不採録ついての査読結果を、その理由を付して投稿者に通知する。個々の査読者の判定結果及び査読者の氏名は、投稿者に対して通知しない。

⑥投稿者は、査読結果について、別途定める手続きにより、本紀要編集委員長に不服申立てをすることができる。

⒁投稿原稿の採録、加筆・修正または不採録に関する裁定は、査読結果に基づき、本紀要編集委員会が行う。投稿原稿の採否について査読者の意見が分かれた場合、国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長は、別の査読者に査読を依頼し、本紀要編集委員会が最終的に採否を決定する。

⒂採録決定者は、査読結果に関する通知を受けた後、入稿用の原稿を作成し、電子ファイルをメール添付で指定された日時までに提出する。

⒃『国際日本研究』に掲載された原稿は、筑波大学つくばリポジトリ等で電子化され、保管され、本専攻の HP においても、PDF 形式で公開される。

⒄発行回数は年１回以上とする。紀要別冊を設ける場合もある。

原稿提出先・問い合わせ先

〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学大学院人文社会科学研究科国際日本研究専攻
『国際日本研究』紀要編集委員長宛
jiajs@japan.tsukuba.ac.jp

※原稿募集および執筆要領については、以下のウェブサイトをご参照ください。

http://japan.tsukuba.ac.jp/research/

Journal of International and Advanced Japanese Studies
Submission Guidelines

(Revised March 2019)

1. The *Journal of International and Advanced Japanese Studies* is published by the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. The *Journal* aims to promote open debate through publishing the results of leading research in Japanese Studies and welcomes submissions from the perspectives of cross-national and international studies (encompassing politics, economy, society, media and information studies, culture, linguistics and pedagogy, the arts, and literature).
2. Manuscripts that contribute to the purpose outlined above and to the Programs' educational practices and research activities will be considered.
3. The following manuscripts will be considered for publication:
   A) Unpublished manuscripts that are not under review elsewhere.
   B) Manuscripts that are clearly identified as based on oral presentations.
   C) Manuscripts that conform to the submission and formatting guidelines specified by the Editorial Committee.
4. Manuscripts that significantly overlap in content with those published in other academic journals or research bulletins will not be accepted.
5. The following types of manuscripts will be considered:
   A) Research Articles: A "research article" is a fully structured academic paper that reports on original research. The manuscript must include an introductory section, a critical review of the literature in the field and any theoretical constructs or framework used in the research, the method(s) employed to undertake the research, the data/results of the research, and a concluding section discussing the findings and implications.
   B) Research Notes: In terms of content and structure, a "research note" may differ from a research paper. However, it should attempt to advance a new idea, theoretical perspective, research program, or methodological approach.
   C) Other papers: Review articles, research survey reports, reports on educational or research activities, research project reports, and oral histories (with a focus on introducing and discussing historical and factual materials), etc.
6. Those who are eligible to submit to the *Journal* are as follows:
   A) University-affiliated faculty members or researchers (in Japan and abroad; contributors must provide their affiliation, title, phone number, and institutional email address. In order to confirm affiliation, free email addresses such as Gmail and private email addresses are not acceptable.).
   B) Students (including short-term students) who are affiliated with the Programs (Supervisor's approval required).
   C) Alumni or other contributors as deemed eligible by the Editorial Committee.
7. Authors intending to submit manuscripts for consideration by the *Journal* have the following responsibilities:
   A) Authors must demonstrate that they have taken an educational course on research ethics, such as those provided online by the University of Tsukuba that include CITI Japan and eL CoRE, within the past five years. Those potential authors who are unable to take the University of Tsukuba's online research ethics courses are allowed to submit proof that they have taken one or more equivalent courses.
   B) Authors must undertake the task of checking their manuscripts with anti-plagiarism software (such as iThenticate) to confirm that the content of their submission does not significantly overlap with that of previously published research.
   C) Authors must attest that their manuscripts are not plagiarized, that the data referred to within the manuscript has not been falsified, and that there has been fair and legal treatment of any collection of personal and identifiable data.
8. There is no limit as to the number of manuscripts that may be submitted.
9. Manuscripts must be written in either Japanese or English and formatted for A4-size paper using word processing software. Manuscripts are required to follow the formatting guidelines that are available on the Programs' website.
10. Each manuscript must include: (1) Author(s') name(s), (2) Title, (3) Affiliated institution(s) and job title, (4) Abstract (about 300 words in English for all manuscripts; Japanese-language manuscripts also must include a Japanese-language abstract of about 800 characters); and (5) Keywords (3 to 5 words in English for all manuscripts; Japanese-language manuscripts also must include keywords in Japanese).
11. Prior to submission, it is highly recommended that English-language manuscripts be checked by a native English speaker and Japanese-language manuscripts be checked by a native Japanese speaker.
12. In principle, originally submitted manuscripts may not be replaced by updated versions and submitted manuscripts will not be returned.
13. Submitted manuscripts will undergo the following peer review process:
    A) The Editorial Committee will review all manuscripts and may ask authors to supplement or revise the content of their manuscripts.
    B) Each manuscript will undergo a peer review process by at least two peer reviewers who are specialists in the appropriate academic field.
    C) In principle, the Editorial Committee will request reviews from researchers affiliated with the Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. If necessary, the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the Editorial Committee will request reviews from researchers affiliated with other programs within the University of Tsukuba or from researchers affiliated with educational institutions outside the University of Tsukuba.
    D) Peer reviewers will report the results of the peer review process to the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the Editorial Committee. Any issues that may arise concerning inappropriate creation methods (including plagiarism, data falsification, or breaches in the handling of personal and identifiable information and/or data) will be reported to the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the head of the Editorial Committee.
    E) The head of the Editorial Committee will inform the author(s) of the decisions of the peer review process, as well as reasons for acceptance, revision, or rejection. Neither individual peer reviewers' results nor their names will be communicated to the authors.
    F) Authors may appeal the results of the peer review process to the head of the Editorial Committee through a separate set of procedures.
14. Decisions as to acceptance, revision, or rejection, based on the results of the peer review process, will be made by the Editorial Committee. In cases where there is non-agreement between peer review results, the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the head of the Editorial Committee may request further peer reviews of the manuscript under consideration. The final decision as to acceptance, conditional acceptance, or rejection will be decided by the Editorial Committee.
15. Authors whose papers have been accepted for the *Journal* must prepare the manuscript for publication and submit it through email by the due date designated by the Editorial Committee.
16. The *Journal* will be stored electronically in the Tsukuba Repository (University of Tsukuba Library). The papers will be also available in PDF format on the Programs' website.
17. The *Journal* is published at least once per year. Supplements may also be published.

Address for submissions and/or inquiries:
Editorial Committee

Journal of International and Advanced Japanese Studies
Master's and Doctoral Programs in
International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences
University of Tsukuba
Tennodai 1-1-1, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken,
JAPAN 305-8571
jiajs@japan.tsukuba.ac.jp

* For the CFP and Formatting Guidelines, please refer to our website: http://japan.tsukuba.ac.jp/research/

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 1-22
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

論文

日本の元号・歴史意識とキリスト教

Japanese *Gengo*, Historical Consciousness and Christianity

平山　朝治 (Asaji HIRAYAMA)
筑波大学人文社会系　教授

日本で途切れることなく定められるようになった最初の元号である大宝は首皇子（後の聖武天皇）誕生に因んだものと思われ、中国の建元が漢の武帝即位を基準とするのとは異なり、キリスト受肉紀元 AD の影響があるのではないかという仮説を立てて検証を試みる。

AD は641年には東シリア教会キリスト教とともに唐に伝わっており、久米邦武は聖徳太子伝にキリスト伝の影響があるとし、７世紀後半に唐からそれが伝わったと論じたが、根拠薄弱と批判されてきた。中国経由ではなく、インド人夫婦をはじめとするドヴァーラヴァティー（現在のタイ国チャオプラヤー川流域）の遣唐使節が654年日向に漂着し、彼らによってキリスト教が伝えられたことが､天智朝において製作されて流通した日本最初の鋳貨である枌銀貨（無文銀銭）や、インドから中国を経ずに朝鮮半島を経由して日本に渡来したとされる善光寺本尊如来によって裏付けられ、善光寺信仰のほか、祇園信仰、怨霊・御霊信仰や春秋彼岸会にもキリスト教の影響を読みとることができる。

日本に定着した不可逆的な歴史意識は終末を欠いており、ダーウィンの進化論との相性がよいことを丸山真男は指摘し、岡本太郎は '70年万博の太陽の塔のなかに生命の樹としてそれを表現した。終末思想は周期化されて辛酉革命・甲子革令の思想に基づく改元慣行となった。後醍醐天皇や孝明天皇の在位中にそれらによる改元があって討幕運動が高まり、1921辛酉年には原敬首相暗殺が起こり、その前後に大正デモクラシーが昂揚した。また、日本固有の進化論的歴史意識は高度経済成長後アイドルが担うようになった。

The Taiho era, which was the first era to be established without interruption in Japan, started from the birth of Prince Obito, who later became Emperor Shomu. This era is quite different from China's Kengen era, which was based on the enthronement of the Emperor Wu of Han. In this paper, we explore and test the hypothesis of the influence of the *anno domino* (AD) period after Christ's incarnation on Taiho.

AD was transmitted to Tang with East-Syriac Christianity in 641. Although Kunitake KUME points out that Christianity influenced Prince Shotoku's biography and that it was transmitted from Tang to Japan in the late 7th century, this argument has been criticized as unsound. An entourage which included an envoy of Dvaravati (the present-day Chao Phraya River area in Thailand) as well as Indian couples who intended to pay tribute to Tang came to Japan in 654 via a route that by-passed China. The fact that they also brought Christianity to Japan is supported by the production and circulation of the first Japanese coin (Bon Silver Coin), circulated in the Tenchi era. The principal image of Amida Sanzo-zo (the statue of Amida Triad) in Zenko-ji Temple（善光寺）is believed to have been sent to Japan from India via the Korean peninsula without passing through China. In addition to the Zenko-ji Faith, Christianity's influence can also be found in the Gion Faith（祇園信仰）, the Spiritual Faith（怨霊・御霊信仰）, and the Spring/Autumn Fair Party（春秋彼岸会）.

As pointed out by Masao MARUYAMA, the irreversible historical consciousness that has been established in Japan is unending and compatible with Darwin's theory of evolution. Taro OKAMOTO expresses it as the Tree of Life within the Tower of the Sun in the 1970 Exposition. Eschatological thought was transformed into cyclical patterns and was found in the practice of Kaigens based on the ideas of the Shin-yu Revolution（辛酉革命）and the Ko-shi change of order（甲子革令）. During the reigns of Emperor Godaigo and Emperor Komei, the Kaigens based on these ideas were performed and the abolition

movement against shogunate government（幕府）became dominant. Prime Minister Takashi (Kei) HARA was assassinated in 1921, and the Taisho democracy movement started to become dominant around that time. In addition, Japan's unique evolutionary historical consciousness has been expressed by idols after the period of high economic growth.

キーワード：大宝、首皇子、枌銀貨（無文銀銭）、善光寺、祇園、辛酉革命、進化論、アイドル
Keywords：Taiho, Prince Obito, Bon Silver Coin, Zenko-ji, Gion, Shin-yu Revolution, Theory of Evolution, Idol

はじめに

日本の元号は、大化改新に伴う皇極天皇の退位・孝徳天皇の即位の５日後、皇極天皇４年６月19日（ユリウス暦 AD645年７月17日、以下西暦の AD は省略）に大化元年と定められたのが初例であり、大化から白雉へと改元されたが、白雉５年10月10日（654年11月24日）の孝徳天皇崩御後は改元のないまま元号は使われず、天武天皇15年７月20日（686年８月14日）に朱鳥が定められたものの、朱鳥元年９月９日（10月１日）の同天皇崩御後、改元がなく元号は使われなかった。このように、７世紀後半の日本においては、中国の元号のように中断なく年を刻む直線的時間の上で展開する歴史という意識がまだ希薄であったと思われる。

日本で中断なく継続的に元号が定められるようになったのは、文武天皇５年３月21日（701年５月３日）に大宝元年と定められて以降である。「『続日本紀』には建元とあり、木簡などの同時代の紀年はこれより以前を干支年で記し、大宝以降、年号は絶えることはなかった[1]。」建元とは BC140年～135年の中国最初の元号で、前漢武帝即位の翌年を建元元年にすると後で定められており[2]、それに擬えて大宝は当初より干支のように循環しない直線的な紀年法の最初の元号として定められたか、定められて間もなくそのような意味づけを与えられたと思われる。

1. 首皇子（聖武天皇）誕生、大宝建元と出雲系神話

対馬嶋から金が献上されたことに因んで大宝の元号が定められたと『続日本紀』は伝えている。しかし、首皇子（のちの聖武天皇）の誕生が、前漢武帝の建元に擬えられるような、それ以降中断せずに続く元号が定められた際に決定的に重要だったのではないかと思われる。首皇子の誕生日は不明だが、以下のような説がある。「『続日本紀』における天下大赦〔大赦天下が正しい――引用者注〕の初例は大宝元年一一月四日であるが、それより前の同年正月に役行者は赦されたと、『日本霊異記』は記している。『続日本紀』大宝元年正月二三日条には、翌年出発する遣唐使の人事が記され、鴨朝臣吉備麻呂が中位に任命されていることが、役行者の赦免と時期的に一致する。／大宝元年は、首皇子（聖武）が誕生した年であり、鴨朝臣吉備麻呂が遣唐使に中位として起用されたのは、彼の同族である賀茂朝臣比売（『尊卑分脈』は賀茂比売を吉備麻呂の孫（息子・賀茂小黒麻呂の娘）としているが、世代が合わないため、近藤敏喬編［1994］『宮廷公家系図集覧』東京堂書店、一二一頁は吉備麻呂の姉妹としている。――引用文中の注）と藤原不比等との間に生まれた藤原宮子が文武の子を妊娠したためではなかろうか。大赦が行われた11月４日が首皇子誕生の少し後とすれば、一月上旬に宮子はすでに妊娠していたと思われる。おそらく、宮子の妊娠のため、賀茂一族の役行者も帰朝を赦されたも

---

[1] 米田雄介編［2003］『歴代天皇年号事典』吉川弘文館、100頁。

[2] 当初は一元元年（BC140年）、二元元年（BC134年）、三元元年（BC128年）、四元元年（BC122年）、五元元年（BC116年）と改元され、五元３年（BC114年）に元鼎という元号（年号）がつけられ、一～四元にも元号がつけられた（藤田至善［1936］「史記漢書の一考察――漢代年號制定の時期に就いて」『東洋史研究』第１巻第５号、https://doi.org/10.14989/138707 ）。太初（BC104－101年）までは６年毎に改元される６進法だった。当初６進法が採用されたのは10元＝60年＝干支１周期というわかりやすい対応があるからだろう。

のと思われる。[3]」

しかし、『日本書紀』では大化２年３月19日を初例として12回大赦天下が行われ、そのほかに１回単なる大赦が行われており、大宝元年の大赦天下がとくに目新しいとはいえない。また、一族に限った恩恵は彼らが皇室の身内になったことによると考えるべきで、賀茂一族の役行者が赦され、鴨朝臣吉備麻呂が遣唐使の中位に任命されたのは首皇子が誕生した直後であると考えたほうがよいだろう。だとすれば、１月の首皇子の誕生を受けて大宝建元が企画され、実現したと考えるのが妥当ではなかろうか。山上憶良の有名な「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも」（『万葉集』803）のように金よりも大きな宝は子宝であるが、当時存命中の持統上皇にとっておそらく初曾孫である首皇子の誕生はとりわけ目出度い慶事だっただろう。

聖武即位は神亀元年２月４日（724年３月３日）であり、そこに至るまでの間も、無事に成長して即位に至ることを祈って瑞祥などを理由にしばしば改元されつつも、元号の空白は避けられたと思われる。『古事記』『日本書紀』（両者を合わせて記紀と略称する）は首皇子の誕生以降即位以前に完成しており、父の文武天皇が崩御して以降、祖母の元明天皇、父の同父母姉である元正天皇が首皇子の即位をめざすいわゆる中継ぎ女帝として首皇子の成長を見守っていた時期に、首皇子の成人と即位とを願うなかで、直線的不可逆的な歴史意識が確立した。

首皇子の誕生・成長のプロセスにおいて、大宝建元と記紀編纂を通して日本の歴史意識の原型が形成された。天地創造から終末に至るというユダヤ教の歴史意識において、「世界の時間のモデルが、自然の回帰性でなく人生の一回性となる[4]」が、首皇子の成長期において歴史意識が形作られる際には、以下で明らかにするように、それと似て非なる世界の時間のモデルが生み出された。

大宝建元以前の日本の歴史は干支による年表記によって記述されてきた。平均寿命が短かった時代においては60年周期の干支は独りの人の一生を不可逆的に表すためにはほぼ十分であり、還暦は長寿の慶事として祝われた。干支と並んで、あるいは干支に変わって不可逆的な年数の数え方が求められるのは、独りの人の生存年数を超えた長期に及ぶ時間を通観する必要があるからで、世代交代を通じて不可逆的に変化してゆくという歴史のとらえ方が前提となる。文武から首皇子（聖武）へという父から息子への直系による皇位継承が目指されていた時期において、皇位は世代交代によっても途切れることなく継承されてゆくべきであるという意識と、元号は改元によって途切れることなく連続的に年を表現すべきであるという意識とは明らかに連動しており、首皇子の成長プロセスは両方の意識を貴族達の間で昂揚させるものだった。このことは、そのころ成立した記紀の内容を検討することによって確認できる。

記紀神話（記紀で表記が異なる神名はカタカナで表記する）において、アマテラスは持統をモデルとし、アマテラスの孫ニニギは文武をモデルとしているということは、上山春平によって早くから指摘されている[5]が、それ以降の代について同様に神代と７～８世紀の対応を考えてみよう（以下の議論は、上山の着想を応用した、著者独自のものである）。

---

[3] 平山朝治［2012］「日本神話にみる自由主義のなりたち」『筑波大学経済学論集』第64号、http://doi.org/10.15068/00137840、14頁。

[4] 真木悠介［1981］『時間の比較社会学』岩波書店、180頁。

[5] 上山春平［1972］『神々の体系――深層文化の試掘』中公新書、174－７頁、同［1977］『埋もれた巨像――国家論の試み』岩波書店、202－３頁。継体・欽明朝においては、男性として描かれる太陽神の娘がアマテラスヒルメ（天照日女）だったが、女帝が出現するようになると太陽神と太陽神の娘との間の区別が曖昧になり、持統は女帝である自身に擬えて太陽神を女神であるアマテラスだとした（平山［2012］二章（１）を参照）。

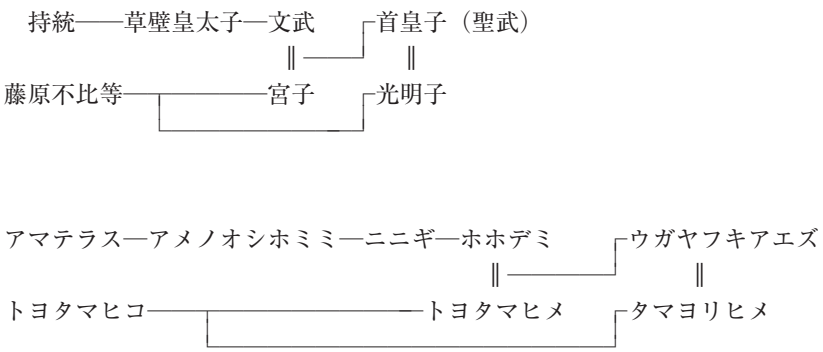


図1　持統～聖武とアマテラス～ウガヤフキアエズの系譜対応
著者作成

ニニギが文武に対応するならばホホデミは首皇子かとも思われるが、ニニギ、ホホデミ、ウガヤフキアエズの日向三代の神話は700年ころから朝廷の南九州支配が動揺し（『続日本紀』文武天皇４年６日３日条）、太宰府の軍備を強化して南九州に出兵し（同、大宝２年８月１日条）、『日本書紀』が成立した養老４年（720年）にはじまる隼人の乱に至るような朝廷の南九州統治と密接にかかわって作られており、海神トヨタマヒコの２人の娘がホホデミとウガヤフキアエズの直系二代に嫁していることから、皇室が同盟関係強化を望む相手をトヨタマヒコは寓意していることが読みとれ、文武と首皇子の直系二代に娘を配した藤原不比等に対応すると思われる。だとすれば、文武はニニギとホホデミの直系二代に対応していることになる。

神武天皇の皇后・媛蹈鞴五十鈴媛の祖父（『古事記』では父）とされるオオモノヌシについては、以下のように指摘されている。

記紀における出雲系神話の比重の高さは、オオモノヌシ神（神代紀第八段一書第六によれば、オオクニヌシの幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま））を祖とする大三輪氏・賀茂氏や胸形氏、とりわけ聖武の母方祖母を出した賀茂氏に対する配慮として、説明しなければなるまい（平山［2012］17頁）。

オオモノヌシを祭る大神（おおみわ）氏に従属する立場から、スサノオやオオクニヌシにも許されない大御神という皇祖神の称を与えられた神を祭る存在へと、賀茂氏は大躍進を遂げているのであり、藤原宮子の母にして首皇子の外祖母という賀茂比売の存在以外に、そのことを説明するものはみあたらないし、彼女の夫である藤原不比等の力によっていることも確かであろう。

賀茂氏が奉ずる神としては、オオモノヌシ（オオクニヌシ）の子・コトシロヌシも重要であり、名からして葛城山のヒトコトヌシとのつながりが強い。神代紀第八段一書第六に「事代主神、八尋熊鰐（やひろくまわに）に化（な）為り、三島溝樴姫（みしまのみぞくひめ）に通ひたまひて、或に云はく、玉櫛姫（たまくしひめ）といふ、児姫蹈鞴五十鈴姫（ひめたたらいすず）命（ひめのみこと）を生みたまふ。是、神日本磐余彦火火出見天皇の后と為る」（小島ほか校注・訳［1994］『新編　日本古典文学全集２ 日本書紀①』小学館一〇五頁――引用文中の注）、神武即位前紀庚申年八月一六日条に「事代主神、三嶋溝樴（みぞくひ）耳神の女玉櫛媛に共（あ）いて生める児、号（なづ）けて姫蹈鞴五十鈴媛」（同、二三三～四頁――引用文中の注）とあり、姫蹈鞴五十鈴姫が藤原宮子に対応するなら、その母である三島溝樴姫ないし玉櫛姫が賀茂比売にあたることになる。三島は摂津国の三島（茨木市・高槻市あたり）で、嶋下郡の式内社・三島鴨神社があり、『新撰姓氏録』「摂津国神別」には「賀茂朝臣同祖。大国主神之後也」とされる鴨部祝（かもべのはふり）が載っている（佐伯有清［1962］『新撰姓氏録の研究　本文篇』吉川弘文館、二五八頁――引用文中の注）。溝咋（みぞくい）神社も嶋下郡の式内社である。

以上のような対応関係から演繹すれば、三島溝樴姫の夫、コトシロヌシに対応するのは、賀茂比売の夫、藤原不比等である（平山［2012］94頁）。

乙巳の変の直前である皇極三年三月一日、「中臣鎌子連を以ちて神祇伯に拝（め）す。再三固辞（いな）びて就（つかへまつ）らず。疾と称して退でて三島に居り。」（小島ほか校注・訳［1998］『新編　日本古典文学全集

４ 日本書紀③』小学館八五頁――引用文中の注）とあり、『多武峰略記』所引『荷西記』によれば、鎌足は薨去後まず、摂津国下嶋郡（三嶋郡が上嶋・下嶋二郡に分かれた）阿威山に葬られ、帰朝した不比等の兄・定慧によって多武峰に移された（高槻市阿武山古墳に埋葬されていたのは鎌足だとする説が有力である（http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi/kohun_abuyama.html）。そうだとすれば、定慧は誤って別人の骨を多武峰に改葬したことになる。――引用文中の注）。このように、鎌足のころから中臣・藤原氏は摂津国三島郡と関係が非常に深いのであり、その地で不比等は賀茂比売を娶ったのか、あるいは摂津の鴨氏の取り持ちで賀茂比売と結ばれたなどと想像できる。いずれにせよ、摂津の三島は、藤原氏と賀茂氏の接点なのである。したがって、三島の姫とその夫としてのコトシロヌシが賀茂比売と不比等を念頭に描かれていることは、間違いなかろう（平山［2012］95頁）。

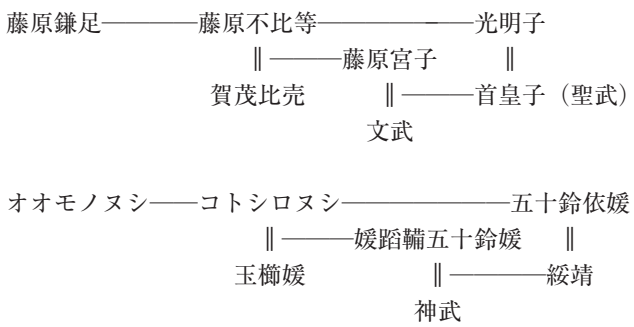


図２　藤原氏と出雲系神話の系譜対応
出所：平山［2012］96頁によって著者作成。

このように、皇室の外戚として発言権を増した藤原不比等や、不比等との間に宮子を生んだ賀茂氏（男系でみると皇室の外戚の外戚だが、首皇子の属する女系氏族）と、それに対応する神話とをみると、出雲系神話が記紀において重視されている理由がわかる。『古事記』や『日本書紀』神代紀第八段一書第六によれば、オオモノヌシが海を渡って出雲にやってきたとされるが、図１で藤原不比等が海神トヨタマヒコに対応するのも、オオモノヌシとトヨタマヒコが共に海と結びつくからであろう。

以上より、文武と首皇子を中心とする現実世界に対応するものが、神話時代（神武とそれに続く第９代開化までのいわゆる欠史八代）において繰り返し登場している。通例、神話と歴史は祖型とその反復であるが、その逆に、特定の歴史が重視されて祖型となり、過去に遡って反復しつつ描かれるなかで神話が展開され、それのみならず神話が天地開闢以来の不可逆的時間に沿って展開する歴史的物語となっているのであり、これは天地創造にはじまるユダヤ・キリスト教的な直線的歴史意識ときわめて近い。

2. キリスト受肉紀元の日本元号への影響

神武元年正月朔に神武は即位したとされ、神武紀元（皇紀）は前漢武帝の即位翌年を元年とする中国の紀年法（当初は元号がなく６進法だった）と近いものであると言える。ただし、神武紀元を元年（１年）とする10進法によって暦年を算えるのは、明治になって太陽暦（グレゴリウス暦）が導入されるとともに西暦紀元に変えて神武紀元が採用されて以降のものである。元号を701年５月３日に建元するのならば、文武天皇元年（697年）をもって遡って大宝元年とし、建元時点は大宝 ５年とするのが中国の建元に倣ったやり方であり、文武の子である首皇子の誕生年をもって元年とする際には、それとは異質な暦年思想の影響があったと思われる。

その候補としては、イエス・キリストが誕生したと信じられていた年の翌年[6]を元年とするキリスト受肉紀元 (Anno Domini nostri Iesu Christi, AD) の影響が考えられる。記紀が編纂された７世紀後半から８世紀はじめにかけての歴史を過去に投影して反復しながら不可逆的な物語が展開されることがユダヤ・キリスト教の歴史意識に似ていることも、そのころ日本にキリスト教や AD が伝わり、記紀がその影響を受けて編纂されたことによって説明できる。

AD は西方よりも東方で早く伝播したらしく、635年の東シリア教会キリスト教[7]（景教）中国公伝直後に「向五蔭身六百四十一年不過」（『一神論第三』「世尊布施論第三」第149行）とあるように、641年ころには既にキリスト教とともに AD が唐に伝わっていた[8]ので、それが日本に伝えられた可能性はある。『日本書紀』の聖徳太子伝にキリスト伝の影響があるとする主張は近代日本史学の草分けである久米邦武の説[9]としてよく知られているが、定説とは言えず、「景教の知識が日本に伝わったという徴証は、他に全然見当らぬのであるから、ここにだけその影響を見ることは危険である[10]」などと批判されて、実証的には疑わしい仮説とされている。しかし、日本神話が天地開闢以降の不可逆的な歴史的時間のなかで展開される物語となっていることや、首皇子の誕生によって大宝元年以降の連続的な紀年が始まったことは、久米説を支持する徴証と言えるのではなかろうか？

大宝元年は701年であり、大宝元年からの通年を日本の紀年とすれば、AD マイナス700がそれになるというように、AD と大宝紀元との間に単純な対応関係があることも、AD が大宝建元に影響したことの傍証のひとつとなる。キリスト生誕の700年後に生まれた首皇子がキリストに擬えられるのは自然であり、AD の発想と中国の元号の発想が合わさって大宝建元となったのだろう。

皇紀と AD との間にも似たような対応関係がある。1940年（昭和15年）は皇紀2600年であり、戦争がなければ東京オリンピックの開催など国を挙げて大々的に祝われるはずだった年であり、661年マイナス BC の西暦年および AD の西暦年プラス660年が皇紀となり[11]、660年は60年周期で一巡する干支の11回分にあたる。

神武元年（BC660年）は辛酉革命説に拠っているとされるが、それに60×11年を足すと得られる AD 元年も辛酉年である。辛酉革命説は後漢の『易緯鄭玄注』にみられるとされるが、『易緯』やその鄭玄注とされるもののなかに唐代に作られた部分があることがすでに指摘されており、辛酉革命説自体も唐代の661年における、高宗の皇后となった武則天の実権掌握に伴う龍朔改元を事前あるいは事後に正当化するために生まれたのではないかと思われる[12]。したがって、神武紀元と辛酉革命説のもとになったと思われる龍朔元年のちょうど真ん中に AD１年があり、いずれも辛酉年であるという、偶然ではまずあり得ないような関係が３つの元年にはある。

661年は日本において、斉明女帝が九州に出征して崩御し、天智称制が開始された年で、中臣鎌足とともに蘇我入鹿を倒した中大兄皇子にとって即位年に準ずる意味を持ち、大和から九州に赴いて称制を開始した天智と、九州から大和に赴いて即位した神武とは双対関係にあると言える。

『易緯鄭玄注』は1320年を一蔀とし[13]、日本の神武元年もそれに従って BC660辛酉年とされた。なぜ

---

6 イエス・キリストの誕生日は異教の〈太陽の誕生祭〉に倣って４世紀後半には毎年12月25日に祝われるようになり、１月６日の顕現日までが降誕節とされた（柚木康［1988］「クリスマス」『キリスト教大事典　改訂新版』教文館、350－１頁）。

7 従来「ネストリウス派」と呼ばれてきたが、それは他からの蔑称であるため最近は「東方教会」「東シリア教会」などと呼ばれるようである（諫早庸一［2018］『マニ教とイエスの習合、美術史と文献研究の習合』2018/01/19、https://researchmap.jp/index.php?page_id=1455555#_2237052 ）。

8 羽田亨［1923］「漢訳景教経典に就いて」『史林』第８巻第４号、158頁、平山朝治［2015］『聖徳太子伝ルーツはキリスト伝：キリスト教伝来のインドルートを探る』http://hdl.handle.net/2241/00125293。

9 久米邦武［1903］『上宮太子実録』（久米邦武［1988］『久米邦武歴史著作集　第一巻　聖徳太子の研究』吉川弘文館）。

10 坂本太郎［1979］『聖徳太子』吉川弘文館、12頁。

11 天文学の紀年法をのぞいて紀元０年は存在せず、BC１年の翌年は AD１年である。

12 平山朝治［2005］『改元・官僚制・革命（改訂版）』http://hdl.handle.net/2241/100801、６－７頁。

13 1260年を一蔀とする説に対する批判は、安居香山［1983］『中国神秘思想の日本への展開』大正大学出版部、平山［2005］「Ⅲ　革年改元の起源」を参照。

661年を過去に遡る起点とし、AD１年を中央として、BC660年を重要な年とし、1320年を一蔀とするような年代観が生まれたのかを説明する必要がある。平山［2005］は、武則天が弥勒下生とされていたことと、AD１年がイエスの生年とされていたこととをもとに、BC660年は釈迦の生年とされたのではないかとしているが、釈迦の誕生年には諸説あるものの、BC660年説そのものやそう算出できるような史料は伝わっていない。龍朔改元やキリスト生誕に比肩しえる出来事は釈迦誕生なので、一蔀を重視する辛酉革命の年代観にあわせて釈迦の生誕年がBC660年とされたのではなかろうか[14]。

690年、弥勒下生として武則天の登位を正当化する「証明因縁讖」などの讖文によって経文を解釈した『大雲経疏』をふまえて、『大雲経』を収めた大雲寺（大雲経寺）が各州に置かれ、武則天は登位した。661辛酉年から約30年後に武周革命を正当化すべく1320年を一蔀とする辛酉革命思想ができたとは考えにくいが、武則天弥勒下生説を述べた「証明因縁讖」は『大雲経疏』が作られたときにはすでに存在していた可能性が高い[15]。したがって、武則天が皇帝になるという易姓革命よりかなり前に、実権掌握を正当化するものとして弥勒下生説が生まれたのかもしれない。『大雲経疏』には「証明因縁讖」のほかにさまざまな讖文が引用されており（坪田［1996］51頁）、武則天の台頭とともに讖緯思想が流行し、辛酉革命説も後漢の『易緯鄭玄注』に仮託されて作られたのであろう。

マニ教は仏教やキリスト教を取り入れ、それらを装って布教したので、釈迦とキリストと武則天（弥勒下生）とを同列に扱うのはマニ教的と言ってよいだろう。大雲寺の旧名は光明寺で[16]、マニ教寺院とされることもあり[17]、「唐は安史の乱平定のためウイグルに援軍を請うたのでウイグルの発言が強まり，その信仰するマニ教の会堂設置を認め，大暦３（768）年これに大雲光明寺の額を与えた。３年後に荊，揚，洪，越の諸州にも同名のマニ寺が建てられ，元和２(807) 年には洛陽，太原にもマニ寺がおかれた。[18]」しかし、中国北部で579年に亡くなった人の墓が最近発掘され、６世紀後半にはすでにマニ教が伝わっていたことが明らかになった[19]。光明寺・大雲寺でマニ教は仏教とともに伝えられ、768年に正式のマニ教寺院として大雲光明寺が設置されたのではなかろうか。また、「中国にとってのマニ教の魅力は、バビロニア伝来の優れた天文学と暦の知識にあった。このころ中国では暦の改訂が進められていたため、マニ教教師の知識が求められていたのである。[20]」麟徳２年（665年）から開元16年（728年）にかけて唐で使われた麟徳暦が準備されていたころに龍朔改元が行われた。したがって、661年ころマニ教が辛酉革命思想や一蔀1320年説の形成に影響を与えた可能性は低くないと思われる。

西暦１年と唐の龍朔元年や日本の天智称制開始年である661年の干支がいずれも辛酉であり、神武即位年もそれらに基づいて辛酉のBC660年正月朔（ユリウス暦BC660年２月18日、グレゴリオ暦同年同月11日、建国記念の日）に求められたということも、キリスト教ないしマニ教の影響が日本に及んだひとつの徴候である。しかし、久米説によればそれらをもたらしたのは遣唐使の官人あるいは留学僧であり、彼らに唐、とりわけ長安において東シリア教会ないしマニ教について何らかの知識を得る

---

[14] 釈迦の誕生年（仏滅の80年前）はBC1029年（『周書異記』）、BC624年（南伝）、BC566－５年（南伝に基づく『歴代三宝紀』の衆聖点記）、BC563（南伝に基づく近代の説）、BC463（北伝に基づく中村元説）などの諸説があり（山崎元一［1984］「仏滅年代について」『東洋学術研究 』106号）、661年ころ中国で知られていたと思われるのはBC1029年とBC565－６年で、BC660はその間にある。

[15] 坪田昭子［1996］「彌勒としての武則天――『大雲経疏』の考察」『信大国語教育』第５巻、http://hdl.handle.net/10091/13718、50頁。「『証明因縁讖』は彌勒が慈氏と訳されることから、慈悲は女性の象徴であり、彌勒がとりもなおさず太后（武則天）のことであるとして、太后は彌勒仏の下生で閻浮提の主たるべき人であるという教説を作り上げたのである。」（同）

[16] 「大雲經寺〈本名光明寺隋開皇四年文帝為沙門法經所立時有延興寺僧曇延因隋文賜以蠟燭自然發焰隋文帝竒之將改所住寺為光明寺曇延請更立寺以廣其教時此寺未制名因以名焉武太后初幸此寺沙門宣政進大雲經經中有女王之符因改為大雲經寺遂令天下每州置一大雲經寺此寺當中寶閣崇百尺時人謂之七寶臺〉」（『長安志』巻十、https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=457321、2019年６月６日閲覧）〈　〉内は割注）

[17] 加藤武「大雲寺（中国）」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』小学館、https://kotobank.jp/word/ 大雲寺 %28中国 %29－1560405、2019年６月３日閲覧。

[18] 「大雲光明寺」『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』2014年、https://kotobank.jp/word/ 大雲光明寺－90811、2019年６月19日閲覧。

[19] La Vaissière, Etienne de [2005] “Mani en Chine au VIe siècle”, *Journal Asiatique*, Vol.293 No.1.pp.357－8.

[20] 山本由美子［1998］『マニ教とゾロアスター教（世界史リブレット）』山川出版社、71頁。

機会がなかったはずはないが、それらについて積極的に学んだり、それらを信仰するようになった者がいたという記録はない。渡唐した官人あるいは僧侶によって公式にそれらの漢訳教典が日本にもたらされたという記録もないらしい[21]。そういう理由から、聖徳太子伝に唐経由でキリスト教の影響があるとする久米説に対しては、実証的な裏付けを欠くという批判が大勢を占めているのではないかとも思われる。

3. インド・東南アジア経由のキリスト教・銀貨伝来と善光寺・祇園信仰

７世紀後半の日本にキリスト教ないしマニ教が伝わり得たのはシルクロード・長安という陸路による中国経由だけではない。キリスト教は12使徒のひとり聖トマスが１世紀半ばのインドに伝えてトマス派と呼ばれ、のちにペルシャから伝わった東シリア教会と混然一体化したようであり[22]、インドから海路東南アジアを経て日本に伝わったという仮説もなりたちえる（この仮説を提示した先行研究は管見の限り著者自身のもの以外に存在しない）。その可能性を示唆する海路による渡来としては、７世紀後半にドヴァーラヴァティー（現在のタイ国チャオプラヤー川下流域）から日向に漂着した人々がいるので、彼らに関する記録を、以下に挙げる[23]。

① 吐火羅国男二人･女二人、舎衛女一人、被レ風流二来于日向一。（『日本書紀』白雉５（654）年４月）
② 覩貨邏国男二人・女四人、漂二泊于筑紫一、言臣等初漂二泊于海見嶋一、乃以レ駅召。作二須弥山像於飛鳥寺西一。且設二盂蘭瓮会一。暮饗二覩貨邏人一。〈或本云、堕羅人。〉（同、斉明３（657）年７月３日、15日、〈　〉内は割注）
③ 吐火羅人共二妻舎衛婦人一来。（同、同５（659）年３月10日）
④ 高麗使人乙相賀取文等罷帰。又都賵羅人乾豆波斯達阿欲レ帰二本土一、求二請送使一曰、願後朝二於大国一。所以留レ妻為レ表。乃与二数十人一入二于西海之路一。〈高麗沙門道顕日本世記曰、七月云云。春秋智借二大将軍蘇定方之手一。使レ撃二百済一亡之。或曰。百済自亡。……〉（同、同６（660）年７月16日、〈　〉内は割注）
⑤ 大学寮諸学生、陰陽寮・外薬寮及舎衛女・堕羅女・百済王善光、新羅仕丁等、捧二薬及珍異等物一進。（同、天武４（675）年正月朔）。

彼らはドヴァーラヴァティーからの遣唐使だったが日本に漂着したので、それらの漢字名は当時の中国語の意味を帯びているはずであり、乾豆波斯達阿（④）と舎衛女（①）妻舎衛婦人（③）は、名前からしてインド人であったことが読みとれる。「乾豆」はインド、「波斯」はペルシャであるが、出身地としてインドとペルシャが並列するのはおかしい。当時唐では東シリア教会キリスト教はペルシャから伝わったためその僧侶は波斯僧、教えは波斯経教、寺院は波斯寺と呼ばれていた[24]ので、「乾豆波斯」とはインドのキリスト教という意味で、「達阿」はインドの人名末尾であり、妻の「舎衛」はインドのコーサラ国の漢訳名で、漢訳仏典にしばしば登場し、舎衛城の南に祇園精舎があった。「乾

---

[21] 西本願寺には景教の漢訳経典『世尊布施論』が伝えられており、法然や親鸞が読んだという説があるが、真偽を確かめた研究はないようだ。20世紀初頭の西本願寺の大谷光瑞が組織した探検隊がもたらしたものが過失か故意で古くから日本に伝来したものとして紹介されたことがあったのかもしれない。

[22] 平山朝治［2009－３］『平山朝治著作集　第３巻　貨幣と市民社会の起源』中央経済社、「Ⅱ－１章　大乗仏教の誕生とキリスト教」「Ⅱ－２章　一世紀の思想革命とローマ帝国・インド間貿易」を参照。

[23] 漢文は小島憲之ほか校注・訳［1998］『新編日本古典文学全集　日本書紀③』小学館、による。

[24] 「大秦寺／／貞觀十二年〔637年〕七月。詔曰。道無常名。聖無常體。隨方設教。密濟群生。波斯僧阿羅本。遠將經教。來獻上京。詳其教旨。元妙無為。生成立要。濟物利人。宜行天下所司。即于義寧坊建寺一所。度僧廿一人。／天寶四載〔745年〕九月。詔曰。波斯經教。齣自大秦。傳習而來。久行中國。爰初建寺。因以為名。將欲示人。必脩其本。其兩京波斯寺。宜改為大秦寺。天下諸府郡置者。亦準此。」（『唐会要』巻四十九、http://www.guoxue123.com/shibu/0401/01thy/051.htm、2019年６月17日閲覧、https://dokochina.com/sim2traconv.phpによって繁体字に変換）

豆波斯達阿の妻が舎衛婦人と呼ばれるのは、三八四～五年に漢訳された『増一阿含経』巻二八（大正二）にある、最初の仏像を巡る次のような伝説に因んだものと思われる（要旨は高田修［一九六七］『佛像の起源』岩波書店、一〇～一頁による）。『釈尊が祇園に住していたとき、誰にも告げずに三十三天に昇ってそこに再生していた生母摩耶夫人に三ヶ月間説法した。憍賞弥国の優填王と拘薩羅国舎衛城の波斯匿王は行方不明の如来を思慕するあまり病臥した。群臣の建言によって優填王は牛頭栴檀で五尺の仏像を作り、これを聞いた波斯匿王も紫磨金で同じく五尺の像を作った……。』つまり、乾豆波斯達阿は、そのなかにある「波斯」によって、黄金の仏像を作った波斯匿王と関連づけられて拘薩羅国舎衛城のあたりの人とみなされ、妻も舎衛婦人と呼ばれたとみることができる。」（平山［2009－３］88－９頁）このように、漂着した人々はインド人キリスト教徒夫婦に率いられていたと思われるが、最初の黄金の仏像を作った波斯匿王ゆかりの夫婦だと思われ、以下で触れる善光寺本尊を巡る伝説もそのことをふまえている（平山［2009－３］77頁以下を参照）。

天智天皇のころに作られはじめたと思われる、無文銀銭と呼びならわされてきた銀貨は、当時の東南アジア大陸部の国際通貨として使われていた銀貨の大きさと重さ（直径約28～33mm、重さ9.2～9.4g）に従い、しばしば上下と左右がほぼ等しいギリシャ十字が刻まれており、その計数単位である「枌」はインドを表す「梵」の「木」がひとつだけというあまり使われない漢字であり、インド人夫婦のうち夫が帰国したのち日本に残った妻がこの銀貨の製作を指導したことに由来するものと思われる（同、55頁以下、145頁以下を参照）。

図３　東南アジア大陸部の標準銀貨と十字刻印入り枌銀貨

左（裏・表・断面）：R. S. Wicks [1992], *Money, Markets, and Trade in Early Southeast Asia: the Development of Indigenous Monetary Systems to AD 1400*, Ithaca, p.117.

中：真宝院出土（「データベースれきはく」https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html で、「館蔵資料（画像付き）」をクリックしてフリーワードに「無文銀銭」を入力した結果のうち、資料番号H－242－29－3－1、2019年4月13日閲覧）

右：崇福寺跡出土（国立歴史民俗博物館編［1998］『お金の不思議――貨幣の歴史学』山川出版社17頁）

鋳貨（計数金属貨幣・コイン）と大宝建元以降途切れることなく続いてきた元号には、共通点がある。１にはじまる自然数によって数えることである。中国で建元当初６年１元の６進法がとられていたように、年数の十進法的表記も一種の改元法とみなすこともできる。10年ごとに改元し、最初は０元元年、０元11年は１元元年、……という風に、予め決められたルールに従って改元してゆくやり方として十進法を表現することができる。

つまり、天智朝における枌銀貨の流通によって、１に始まり無際限に増えてゆくという自然数の数観念が人々の日常意識にしだいに定着し、年数も60年周期の干支よりもそのような数観念によって数えたほうが便利だとみなされるようになることが、大宝以降元号が途絶えることなく定められる前提になっていると思われる[25]。さらに、大宝建元以降の日本の元号は中国の元号だけではなくADの特性

[25]「数量としての時間が、鋳貨、すなわち貨幣のそれ自体としての製造を需要するまでに成熟し展開された商品世界においてはじめて明確に客観化された表現を獲得する」（真木［1981］182頁）。

を持ち、キリスト教の影響が日本特有の鋳貨と紀年法をともに生み出したのである。

日本初の鋳貨のモデルとなったのはインド人キリスト教徒が日本にもたらした東南アジア大陸部の国際通貨であって中国の銭貨ではなく、当時の代表的な中国銭貨である開元通宝（開通元宝）の大きさ（直径24mm）、重さ（４ｇ前後）や円形方孔の形を模した日本最初の銅銭である富本銭は机銀貨の使用を禁じて流通させようとしたために失敗し、それに学んで、最初の皇朝十二銭である和同開珎はまず銀銭として発行されて机銀貨の流通力を継承し、やがて銅銭が発行された[26]。

乾豆波斯達阿とその妻舎衛婦人のように、インドから中国を経由せずに日本に来たものとして有名なのは、⑤の百済王善光に因んでいると思われる善光寺の本尊如来であり、善光寺本堂の最も古い絵画（図４）では屋根が十字型だった（平山［2009－３］76頁以下を参照。善光寺創建にキリスト教の影響があることを論じたものは研究史上、このもとになった論文[27]が最初である）。

図４　聖戒編『一遍聖絵』京都市・歓喜光寺所蔵、善光寺（1299年ころ）
長野県編［1986］『長野県史　通史編　第二巻　中世一』長野県史刊行会、口絵

④において、乾豆波斯達阿の記録は百済滅亡に至る朝鮮半島情勢をめぐる記述のなかに置かれており、彼は日本人数十人とともにドヴァーラヴァティーに向かい、妻を人質として残した日本に帰ることを誓っているので、唐・新羅連合軍の攻勢に対抗すべくドヴァーラヴァティーとの同盟をめざすことが彼らのミッションだったことは明らかだろう。善光寺の寺名は、百済王族として日本に滞在し百済滅亡後は亡命した百済王善光に由来し、インドから中国を経由せず朝鮮半島を経て日本に善光寺本尊が到来したとする由来譚は、乾豆波斯達阿が唐・新羅連合軍に攻められた百済・日本との同盟をめざしてドヴァーラヴァティーに一時帰国しようとしたと思われることや、⑤に「舎衛女・堕羅女・百済王善光」とあるように百済滅亡後もインド・ドヴァーラヴァティーから渡来した人たちと百済王善光は近い関係にあったと思われることを反映しているのだろう（平山［2009－３］91頁）。「江戸時代に銀貨一〇〇枚ほどを出土した大阪市天王寺区真宝院（真法院）は、富本銭、和同開珎枝銭などを出土した百済尼寺跡（細工谷遺跡）や、百済寺跡とみられる堂ヶ芝廃寺の近くで、百済王氏の本拠地に属する（大阪市文化財協会［一九九九］『細工谷遺跡発掘調査報告 Ⅰ』一〇～四頁――引用文中の注）。この地域が四天王寺の東北にあたることは、〔善光寺の――引用者注〕守屋柱が四天王寺の艮角柱だったという伝承を想起させるなど、善光寺と四天王寺・聖徳太子信仰との密接な関連ともつながる。」「四天王寺近くの百済寺が移転して信州善光寺になったと示唆する言い伝えがあった（坂井衡平［一九六九］『善光寺史　上下』東京美術、九一頁――引用文中の注）。／百済王善光と彼の子孫たちが机銀貨から和同開珎にいたる貨幣製造と善光寺創建に深く関わっていたことは、四天王寺周辺の伝承や出土品によって裏付けられる。また、渡来系女性が多くいたはずの百済尼寺が和同開珎鋳造所の一つであったことは、東南アジア標準に従った銀貨を発案したのがドゥヴァーラヴァティーから渡来し

[26] 今村啓爾［2001］『富本銭と謎の銀銭――貨幣誕生の真相』小学館、平山［2009－３］145頁以下を参照。
[27] 平山朝治［2006］「貨幣の起源について」『筑波大学経済学論集』第55号、http://doi.org/10.15068/00137871。

た女性たちであったことによってうまく説明できる。」（平山［2009－３］91頁）

善光寺へのキリスト教の影響は以下の諸点などにもあらわれている。善光寺の開山御三卿として、善光、弥生と彼らの息子善佐の三人が祀られている。キリスト教の聖三位一体像においては父なる神の右にキリスト、左に聖霊を意味する女性が位置するが、善光寺の開山三卿像は父善光の右に善佐、左に弥生がいるように聖三位一体像に由来し、善佐はキリストであると思われる。善佐が地獄で出会った斉明女帝といっしょに復活するという『善光寺縁起』（『続群書類従』第28輯上 釈家部 巻第814）巻第三の話など、シリア系キリスト論に似た話が伝えられ、善光寺最大の秘儀である12月２の申の日の夜に行われる御越年式は善佐の生誕祭でクリスマスに由来すると思われ、正月７日の御印文加持においても本堂内々陣中央の善佐が秘仏一光三尊像より格上の、真の救い主と意味付けられ、七年に一度（六年周期）の前立本尊開帳は、秘仏本尊を安置する瑠璃壇の前ではなく善佐像前で行われ、戒壇巡りにおける極楽の錠前は善佐像のほぼ後方（図５の♥）にあり、極楽の錠前は、イエスが「あなたたちは、私を誰だと言うのか」と問うたのに対して「あなたこそキリスト、活ける神の子です」と答えたペテロが天国の鍵を与えられ、「その後、彼は、自分がキリストであることを誰にも話さないように、弟子たちに命令した」という『マタイ福音書』（16:15－17:19）をふまえていると思われ、瑠璃壇前で焼香参拝するとき三卿の間と瑠璃壇とを仕切る板壁にある影向窓を通して三卿の間の善佐が見え、影向窓の北側にある「守屋柱（もりやばしら）」は十字架の立柱だと思われ、図５の灰色矢印のように、影向窓の向こうの善佐は十字架上のキリストを表わしている[28]。また、善光寺巡礼・戒壇巡廻はメッカ巡礼・カアバ神殿巡廻に似ており、善光寺信仰は、日本人にとって異質とされてきたユダヤ教、キリスト教やイスラム教といった一神教の伝統を今日まで濃厚に伝えてきた（平山［2015］15頁）。

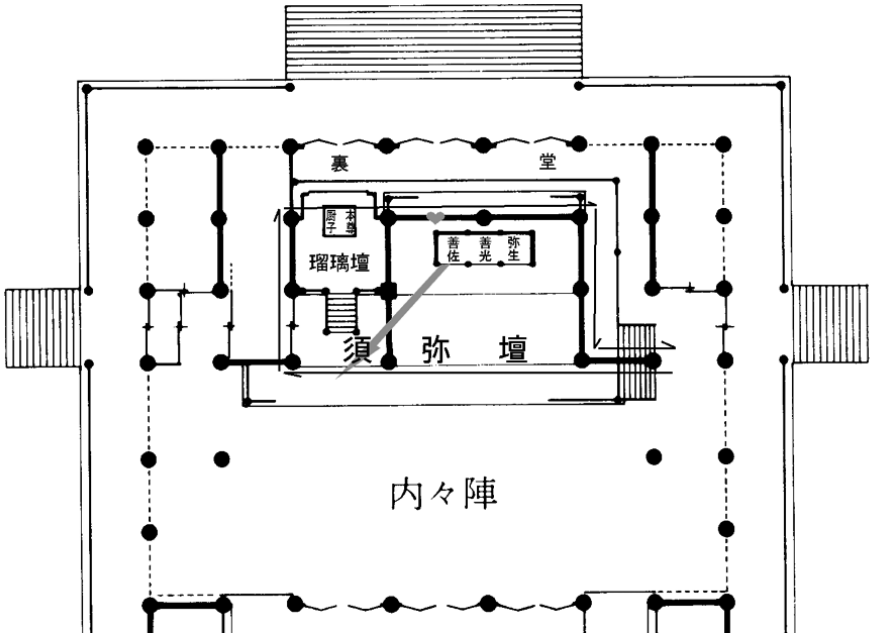


図５　善光寺本堂内々陣以北の平面図
出所：長野県編［1990］121頁図1（「内々陣」以外の活字と矢印を加筆）

[28] 以上、詳しくは平山［2009－３］98－110頁、平山［2015］６－８頁を参照のこと。なお、査読者より、京都伏見稲荷大社の鍵をくわえた狐の眷属が「天国の鍵」との関連で重要であり、善光寺の艮（北東）の方向に稲荷社があればさらに示唆的であるとの指摘があった。すでに引用したように、善光寺の守屋柱は四天王寺の艮角柱に由来し、信濃に移転する前の善光寺は大阪四天王寺近くの百済寺であったと伝えられており、四天王寺の艮に稲荷大社が位置する。また、上野三碑、とりわけ「胡」という地名と「羊」という人名との関連についても考察するよう査読者に求められており、今後の課題としたい。

図６　善光寺の一光三尊（御前立本尊）と開山三卿

出所：左　五来［1988］45頁
　　右　文化財建造物保存技術協会編［1999］『国宝善光寺本堂保存修理工事報告書』善光寺、口絵5頁下

善光寺の創始については、死後生き返れることになった善佐が地獄で皇極（＝斉明）女帝に出会い、いっしょに復活したという『善光寺縁起』の話を重視すれば皇極・斉明朝が画期であり、657年（斉明３年）に②ドヴァーラヴァティーの人々が筑紫から召されて飛鳥で盂蘭盆会が催されたことがもとになっているのであろう。というのは、『盂蘭盆経』[29]は「聞如是一時仏在舎衛国祇樹給孤独園大目乾連始得六通欲度父母報乳哺之恩即以道眼観視世間見其亡母生餓鬼中……」と、舞台が舎衛国の祇樹給孤独園すなわち祇園精舎であり、餓鬼道に堕ちていた目蓮の母を釈迦が救うという筋と、善佐が地獄で会った皇極女帝とともに復活するという筋は似ているので、シリア系キリスト論の冥府降りと『盂蘭盆経』とは混同ないし同一視されやすいと思われ、キリスト教と祇園とを強く結びつける契機になったと思われる。

東シリア教会キリスト教の影響を強く受けて創建された寺社として、善光寺と並んで祇園社ないし八坂神社を挙げることができる。このことを論じた研究は、著者自身のものも含めてこれまで存在しなかった。

祇園社の創建は、社伝『八坂郷鎮座大神之記』に「齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主／再來之時新羅國牛頭山ニ座ス須佐之雄尊之神御魂ヲ齋祭來而／皇國ニ祭始依レ之愛宕郡ニ賜二八坂郷並八坂造之姓ヲ十二年後／天智天皇御宇六年丁夘社ヲ號テ為二感神院宮殿全造營而牛頭／山坐之大神乎牛頭天王ト奉レ称ヘ祭祀畢ヌ／淳和天皇御宇天長六年右衛門督紀朝臣百繼尓感神院祀／官並八坂造ノ之業ヲ賜テ為二受續一／（以下略）[30]」とあるように、656年（斉明２年）に高句麗の伊利之（イリシ）使主（オミ）が伝えた神を祭ったことにはじまるらしい[31]。ドヴァーラヴァティーからのインド人キリスト教徒夫妻の来朝と時

[29]『盂蘭盆経』は西域か中国で作られた偽経とする説が従来有力だったが、最近はインドで作られたとされている（Karashima, Seishi [2013] “The Meaning of Yulanpen 盂蘭盆 —— “Rice Bowl” on Pravāraṇā Day”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhologyat at Soka University,* Vol.16 No.1, https://www.academia.edu/9211768/, 辛嶋静志［2013］「『盂蘭盆』の本当の意味 ―『ご飯をのせた盆』と推定」『中外日報』2013年７月25日、https://web.archive.org/web/20170501091520/http://www.chugainippoh.co.jp/ronbun/2013/0725rondan.html ）。

[30]「八坂郷鎮座大神之記」紀繁継編［1870］『八坂社旧記集録』上巻、http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/816139/７、2019年６月15日閲覧。「承暦三[illegible]有方記」（コマ番号９－10、有方の２字は左１／３程度虫食い）とあるように、1079年に紀有方が著したとされている。

[31] 祇園社の創建については、伊利之使主創建説を批判し、貞観18年（876年）僧・円如が寺院を建立したあとで祇園神が垂迹したとする説（久保田収［1974］『八坂神社の研究』神道史学会、「二　祇園社の創祀」）が従来有力であったが、「後代の祇園社の前身となる施設は、それ以前から存在していたとみてよいことだけは確かである。」（五島健児［2002］「『祇園信仰』七つのキーワード」、真弓常忠編［2002］『祇園信仰事典』戎光祥出版、33頁）のように、創建を久保田説より前に遡らせ、伊利之使主とする社伝を重視するようになってきた。また、「蘇民将来之子孫者」と書かれた８世紀末の木札が長岡京右京六条条間南小路北側溝から出土した（中島皆夫［2002］「右京第688次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成12年度』）ので、平安時代より前に蘇民将来伝説が流布していた。「齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主／再来」が『日本書紀』の「是歳、高麗・百済・新羅、並遣レ使進調。」（斉明元年（655年））「高麗遣二達沙等一進調。〈大使達沙。副使伊利之。総八十一人。〉」（斉明２年（656年）８月８日、〈　〉内は割注）と整合的であることも社伝の信頼性を示唆する。

期的に重なり、④によれば「高麗使人乙相賀取文等罷帰」と同じ日に乾豆波斯達阿らも帰国しているので両者は百済救援という同じ使命を帯びて北九州までは同道していたと思われ、660年の百済滅亡に続いて高句麗も668年に滅亡しているので、その後も祖国を失った高句麗の人々は百済王善光や舎衛婦人と密接な関係にあったと思われる。伊利之使主は再来の翌年、ドヴァーラヴァティーの人々と共に盂蘭盆会に参加し、このとき彼のもたらした神はキリスト教の神と同一視されて祇園精舎と結びつけられることになったのではなかろうか。祇園社創建は天智天皇６年（667年）とされ、近江大津宮と祇園の交通は現在の京阪京津線沿いの逢坂山関・粟田口を通る道（逢坂越え・旧東海道）が比較的平坦で至近距離であり、天智天皇の母斉明天皇を供養する意味を銘文から読みとることのできる枌銀貨が京都市左京区北白川にある小倉町別当町遺跡から出土している[32]ように、大津京を中心とする枌銀貨流通圏に京都盆地東側の祇園～北白川も含まれており、祇園社・八坂神社のもとになった感神院は創建当初、舎衛婦人のキリスト教信仰の影響を受ける可能性の高い時期と場所にあった。祭神は牛頭天王やスサノオとされる以前には単に天神とされており[33]、一神教の神は嵐を司る天候神である[34]ため天神と呼ばれたと思われる。

八坂の五重塔で知られ、八坂造の氏寺であったと思われる法観寺境内から出土した古い軒丸瓦は７世紀中頃～後半のものである[35]ことも、伊利之使主が656年（斉明２年）に八坂郷と八坂造の姓を賜ったことを支持する。法観寺の近くには小野篁の冥土通いの井戸と黄泉がえりの井戸のある六道珍皇寺があり、善佐が皇極天皇と地獄から蘇ったという『善光寺縁起』と同様、シリア系キリスト論の冥府降りに由来すると思われる。こう考えると、あの世の先祖がこの世に帰ってくるという日本独特の盂蘭盆会はキリストの冥府降りや死者の甦りの影響を顕著に受けたものと推測できる。

牛頭天王信仰はインドから百済を経て日本に飛来し、大化５年宮中に召されて孝徳天皇の病気を治し、後に帰国した法道仙人がもたらしたとされ[36]、同時期にドヴァーラヴァティーから渡来し、日本人を連れて帰国した乾豆波斯達阿が、自在に飛翔し、飛鉢を操る法道仙人のイメージのもとになったのだろう。法道は播磨国法華山に降り立ったとされているが、法華山一乗寺の北方古法華山中に石造の厨子入り三尊像があり[37]、７世紀後半に地元産の凝灰岩で作られ、破損が著しいものの中央は弥勒仏の倚坐像かとされている[38]が、古法華山でも法道が来日したとされるころから善光寺本尊と同様の三尊像があることは、牛頭天王信仰と善光寺信仰の根源が重なることを示唆しているのではなかろうか？善光寺の厨子入りの秘仏三尊像はインドで如是姫をはじめ国中の人々の悪疫を治したとされ、古法華山中の厨子入り石仏三尊も同様に秘仏で、悪疫を治す霊験があるとされ、紫磨金の像と対の牛頭栴檀の像とみなされ、それと過越の神がもとになって牛頭天王のイメージが形成されていったというよう

---

[32] 平山［2009－３］52－４頁、長戸満男［2007］「無文銀銭試論」『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第10号、https://www.kyoto-arc.or.jp/News/kenkyu/10nagato.pdf。

[33] 『二十二社註式』所引「承平五年（935年）六月十三日官符」（『群書類従』第二輯　神祇部　巻第二十二、236頁）、五島［2002］31－２頁。

[34] 安田喜憲［2009］『蛇と十字架――東西の風土と宗教　新装版』人文書院、「Ⅱ　蛇を殺す一神教の誕生」、同［2004］『文明の環境史観』中央公論新社、267－72頁。

[35] 京都市埋蔵文化財研究所編［2010］『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2009－11 史跡法観寺境内』京都市埋蔵文化財研究所、13頁）。

[36] 『元亨釈書』巻第十八神仙五「法道」（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース、http://doi.org/10.20730/200004930、531－533コマ、2019年６月29日閲覧）。同書は「一時乗テ二紫雲ニ一出テ二仙苑ニ一経ヘ二支那ヲ一過テ二百済ヲ一入テ二我カ日域ニ一（中略）大化元年秋八月舩師藤井載テ二官租ヲ一而過ク道飛メレ鉢乞フレ供ヲ」とあるように藤井の件のあった大化元年八月より前に中国を経て来日したとするが、『峰相記』は「大化元年ノ比紫雲ニ乗新羅百済ヲ経過メ我朝ニ飛来リ（中略）或時太宰府船頭藤井麻呂正税ト号メ供養ヲ致サス」（魚澄惣五郎［1943］『斑鳩寺と峰相記』全国書房、http://doi.org/10.11501/1042193、60コマ・翻刻88コマ）のように中国には言及せず、大化元年のころに来朝したとする。後者は大化改新以後インド人が中国を経ずに来日したという事実の概略を伝えていると思われ、両者が矛盾する場合前者のほうが本来の情報に近いと思われる。

[37] 田岡香逸・宮川秀一・高井悌三郎［1959］『播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏』甲陽史学会、２頁。

[38] 水野清一［1961］「さまざまなる造像」『世界考古学大系　第４巻　日本Ⅳ　歴史時代』平凡社、105頁，図90。

な展開を想定できるのではなかろうか。『信貴山縁起絵巻』で有名な、飛鉢を操る妙蓮が、『古本説話集』で信濃国の出身とされていることも、偶然ではないかもしれない。

旱魃の際に牛馬を殺して犠牲として捧げる風習が『日本書紀』（皇極天皇元年七月二五日条）に記されており、羊のいない当時の日本では犠牲の小羊が犠牲の牛と結びつけられて牛頭天王信仰を生み出したのではないかと思われる[39]。『日本書紀』神代上第八段一書第四には、スサノオが高天原から追放されて新羅国の曽尸茂梨（ソシモリ）に滞在したあと埴土の舟で出雲国に来たとあり、ソシモリは金城の意味で現在のソウルに通じ、新羅の首都慶州のことであるとされるが、牛頭とも音が似ているためスサノオと牛頭天王が同一視されたらしい。ソは蘇民将来のソでもあり「蘇」は牛乳から作られる非発酵チーズの一種で、蘇民は朝鮮半島から渡来した牛を飼う人々だとする解釈もある[40]。高句麗から渡来した伊利之使主らとともにドヴァーラヴァティーから渡来した人々が祇園信仰の核を形成し、キリスト教の影響を強く受けているということによって、日本の牛頭天王信仰がインド・中国・朝鮮にはみられない独自のものであることをうまく説明できる。具体的には、以下のようなことを指摘できるだろう。

図７　祇園御本社粽と祇園守紋

出所：左　著者撮影（八坂神社＝祇園御本社授与の粽、自宅玄関先、2019年４月18日撮影）
右上　https://ja.wikipedia.org/wiki/成駒屋#/media/File:Narikoma-ya_Gion-mamori_inverted.png
右下　https://twitter.com/hideki27fc5/status/712972109023064064
いずれも、2019年4月12日閲覧。

多くの人が説くように祇園信仰の蘇民将来伝説は過越と似ている。過越は屠った小羊の血を家の入口につけた人々が神のもたらす災厄を避けることができるとするが、蘇民将来伝説は茅の輪をつけていれば牛頭天王＝スサノオ＝武塔神の災厄から免れるとし、祇園祭では八坂神社や各鉾が家の入口の上につける粽（ちまき）を授与する[41]。

---

[39] 羊はウシ科ヤギ亜科ヒツジ属、牛はウシ科ウシ亜科ウシ族ウシ属である。

[40] 川村湊［2007］『牛頭天王と蘇民将来伝説――消された異神たち』作品社、63－８頁。そうだとすると、「難波長柄豊前宮御字天皇御世。大山上和薬使主福常。習㆓取㆑乳術㆒始授㆓此職㆒自㆑斯以降子孫相承。世居㆓此任㆒。至㆑今不㆑絶。」（『類聚三代格』巻第五、弘 仁 11（820）年２月27日付太政官符所引典薬寮解 ）「始令㆓山背國點㆓乳牛戸五十戸㆒」（『続日本紀』和銅６（713）年５月25日）とあるように、和薬使主や山背国の乳戸が牛頭天王・蘇民将来伝説のもとになる信仰を受け入れ、発展させる基盤になったと思われる。具体的には「孝徳天皇時代に善那によって牛乳飲用が伝えられて以来、牛乳は飲用、薬餌、供物として利用され、当初天皇および三宮のみに供せられていたものが、上流貴族にも利用がひろがるようになっていった。」「しかし、現在のホルスタイン種のように多量に乳を出す乳牛ではないため、搾乳量が少なく、せいぜい貴族階級の需要を満たすのみで、一般にまでは普及しえなかった点が重要である」（斎藤瑠美子・勝田啓子［1988］「日本古代における乳製品『蘇』に関する文献的考察」『日本家政学会誌』Vol.39 No.4, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhej1987/39/ 4 /39_ 4 _349/_pdf/-char/ja、91頁）という指摘をふまえれば、上流貴族に広まった牛乳の健康増進や薬としての効果が広く知られるようになり、牛乳を入手できない人々がその代わりに求めたものが牛頭天王の霊験で、その段階においてキリスト教に由来する天神が牛頭天王と呼ばれるようになったのではなかろうか。

[41]「蘇民将来子孫也」と書いた紙の上の部分で、ワラを束ねるために茅でぐるぐる蒔いているのでちまきと呼び、この部分が茅の輪である（「祇園祭の粽、茅の輪」『京都観光ＩＮＤＥＸ』http://www.zekkeikana.com/kyoto/saijiki/gionmatsuri/chimaki11.html、2019年５月24日閲覧）。

血は茅と同音であり、チガヤについて「若い穂は雄しべも雌しべも赤く全体が赤く見えるので血茅、味が乳の甘味に似ているので乳茅などの諸説があるようだ。古名はチ（茅）で浅茅ヶ原などという[42]」という説明が示唆するように、茅は血を寓意しえる。また、祇園守の紋は牛頭天王祭文が斜めに直交する×（聖アンデレ十字型　図７右上）が標準だが、東京都荒川区南千住の素盞雄神社（図７右下）のようにギリシャ十字を含む例もある。「出雲の神庭荒神谷遺跡から1984年に358本の銅剣が発見された。その中の344本には×印が刻まれていた。……1996年には加茂岩倉遺跡から39個の埋納された銅鐸が発見された。その中の12個の銅鐸の吊手にも×印が刻まれていた。[43]」というように、出雲では弥生時代から×が重要な意味を有しており、祇園守りの×につながると思われる（同）が、それは聖アンデレ十字でもあり、45度回転させればギリシャ十字になることも、スサノオ＝牛頭天王とキリスト教の神の同一視・習合の前提となっただろう。祇園守は隠れキリシタンが十字架に見立てたが、このように、もともと十字架だったと思われる。

以上のように、７世紀後半にインドから東南アジアを経て日本にキリスト教がもたらされ、朝鮮半島・日本の土着信仰や仏教と習合しながら、波斯匿王ゆかりの本尊を伝える百済系の善光寺と祇園精舎を守護する天神を伝える高句麗系の祇園感神院・八坂神社で保存されるとともに、銀貨が作られて流通し、貨幣経済が発展した。

憍賞弥国の優填王は牛頭栴檀で五尺の仏像を作り、拘薩羅国の波斯匿王も紫磨金で同じく五尺の像を作ったことから、後者をふまえた善光寺本尊に対して祇園感神院の天神が牛頭天王と呼ばれるようになったことを説明でき、インド人夫妻の伝えたキリスト教が仏教に即して受け取られる際に重要な意味を持った『盂蘭盆経』は木蓮の母の救済、最初の仏像に関する『増一阿含経』は釈迦の母の救済に関する話であり、舞台はいずれも祇園精舎とされていることから、大津京や平安京にほど近い信仰の拠点が祇園と呼ばれるようになったことも説明できる。

草壁皇太子や軽皇子（文武天皇）を庇護する持統女帝は自らを太陽神たる皇祖神アマテラスに擬したが、キリスト教の聖母子イメージがそれを支え、当時の即位可能年齢に満たない数え年15歳の軽皇子への譲位もそれによって可能になったと思われる。

４．東シリア教会キリスト教と怨霊・御霊信仰

天智天皇の男系子孫としては久し振りに即位した光仁の晩年、伊勢斎宮に美雲が現れたことによって781年に天応と改元されたのは、王朝交代を天命思想によって正当化する中国的な易姓革命の影響を受けていると思われるが、ちょうど辛酉年にあたり、AD の影響も読みとれるかもしれない。以下のように、光仁の後を継いだ桓武の治世においてもキリスト教の影響が顕著にみられた。

> 日本仏教特有の行事とされる春秋分七日間の彼岸会は、八〇六（大同元）年三月一七日に、崇道天皇（＝相良親王：桓武天皇の同父母弟、藤原種継暗殺に関与したとして廃太子、無実を訴えて絶食、淡路に配流される途中に憤死し、天皇号を追増される）のために春秋二仲月（２月と８月）の七日間諸国国分寺の僧に金剛般若経を読ませるよう、桓武が命じて崩じた（『日本後紀』同日条）ことにはじまるが、聖徳太子信仰にキリスト教が影響している[44]ので、小羊の血によって神の崇

---

[42] http://arakawasaitama.com/hanaindex/subchigaya.html、2019年５月24日閲覧。

[43]「東日本大震災　貞観地震と祇園祭（祇園御霊会）の起源ー祇園守り」『ブログ　古代からの暗号』2011-05-20 18:42:34、https://blog.goo.ne.jp/kotodama2009/e/ 7 ad 5 ab55a 0 da 2 acda 7 dbaa 2 d217a 4 e02。

[44]（引用者による注）久米邦武は聖徳太子誕生を巡る説話にキリスト伝の影響があるとしたが、受難は聖徳太子の嫡子・山背大兄王の最期に反映されている。「聖徳太子の嫡子・山背大兄王が、百姓を救うために自分（上宮王家）は犠牲になるとしているのは、万人救済のための受難に近く、そのような彼は「山羊（かましし）の小父（を じ）」に喩えられている（小島ほか校注［1998］83頁――引用文中の注）。山羊はニホンカモシカのことだが、ウシ科ヤギ亜科である点で羊と同じであり、当時の日本で最も羊に近い種だろうから、「（雄の）小羊」は「山羊の小父」と訳し得たと思われる。」（平山朝治［2009－５］『平山朝治著作集　第５巻　天皇制を読み解く』中央経済社、291－２頁）。

りを避けたことを記念する過越祭が、ユダヤ教の第一月であるニサンの月の一四日夕方（夕方から一日のはじまるユダヤ暦では一五日のはじまり、春分後最初の満月の出るころ）から二一日夕方までの七日間、種なし（無発酵）パンを食べて祝われる（『出エジプト記』一二ノ一四～二〇）ことや、それに因むキリスト教の受難週（聖週間）に由来し、種なしパンはぼたもちになったと推測できる。

過越祭のちょうど半年前と後、ユダヤ教第七月の一五日から七日間は仮庵祭であり、『民数記』第二八～九章によれば最大規模の供犠が捧げられる（旧約聖書翻訳委員会訳［2004］旧約聖書Ⅰ律法』岩波書店、補注９頁、「仮庵祭」の項を参照）。『ヨハネ福音書』第七章は、仮庵祭の半ばにイエスが神殿にのぼって教えはじめ、祭司長たちやファリサイ派の人々がイエスに殺意を抱いて逮捕しようとし、祭りの最終日にイエスが活ける水について語ったと述べ、仮庵祭での出来事を過越祭における受難や贖罪の前触れと位置付けているように、キリスト教においても仮庵祭は受難週に準じるものとされている。

この世の現実たる此岸から脱出し、理想境たる彼岸を目指すという宗教的意味付けが彼岸会にはあるが、過越祭と仮庵祭はいずれもエクソダス・出エジプトに因んだものとされており、エクソダスは出発点から、彼岸は目的地から、同じことを表現しているのも、日本の彼岸会が過越祭と仮庵祭の影響を受けていることの証になろう。（平山［2015］14頁）

冤罪で死に至った貴人を春分や秋分のころに祭るのはキリスト受難信仰に由来すると思われ、ぼたもちの小豆の赤は魔除けの色とされるが、本来、犠牲の小羊の血を表していたとすれば、聖餐の葡萄酒とパンに通じる。崇道天皇を嚆矢として、無実の罪で殺された（自殺、配流や左遷と衰弱死も含む）と多くの人々にみなされた貴人が祟り、供養すると守護神になるという怨霊・御霊信仰が形成された。

貞観５年（863年）５月20日に神泉苑御霊会が行われ、「貞観十一年天下大疫之時、為　宝祚隆栄、人民安全、疫病消除、鎮護、卜部日良麿奉　勅、六月七日建六十六本之矛長二丈許、同十四日、率洛中男児及郊外百姓而送　神輿于神苑（ママ）泉以祭焉、是号祇園御霊会」と『祇園本縁雑実記』[45]にあるように、祇園祭（祇園御霊会）は貞観11年（869年）５月26日の貞観地震直後に創始されて2019年に1150年を迎えた[46]。粽や茅の輪によって祇園天神の災厄を免れるという信仰は旧約の過越祭を起源とし、怨霊・御霊信仰は過越祭をふまえたキリスト受難の影響を受けたものであり、両者が一体化したものが祇園祭ということになる。

これらのことをふまえると、「平和の町」を意味するエルサレムを漢字に直したものが平安京である可能性も否定できない[47]。「又子來之民、謳歌之輩、異口同辭、號曰平安京」（『日本後紀』巻三、『日本紀略』逸文、延暦13（794）年11月８日）と遷都した年にあるように、新しい都の呼び名や、のちに時代を表すようにもなる「平安」という呼称は朝廷が定めたものではではなく、民間で形成され広まっていることは、冤罪死した貴人を恐れ祭る怨霊・御霊信仰が民間で広まったことにもつながる。それらは、渡唐官人・僧侶のようなエリートによって中国のキリスト教ないしマニ教が伝えられたのではなく、インド人キリスト教徒の夫妻、とりわけ日本に終生留まって銀貨製作などを指導したと思われる舎衛婦人を中心に、聖トマスのインド伝道にはじまるインドのキリスト教が、舎衛婦人という漢字名が示唆するように仏教と明確に区別されないまま民間に広まったこととも符合している。

---

[45] 八坂神社文書編纂委員会編［2016］『新編八坂神社記録』臨川書店、66頁。『祇園本縁雑実記』は寛文年間に編纂されたと考えられるものであり、従来、八坂神社編［1906］『八坂誌　乾』八坂神社、121頁（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904398/84、2019年６月26日閲覧）に『祇園社本縁録』として引用されていた（河内将芳［2016］『2015 年度 実績報告書　日本中世・近世寺社古記録成立に関する基礎的研究』https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-25370811/253708112015jisseki/、2019年６月27日閲覧）。

[46] ５月26日の貞観地震が同年６月７日の矛立て～14日の神輿渡御を帰結したとする説は、注43で挙げたブログや、尾池和夫［2015］「祇園祭と貞観地震」『京都の地球科学（二五五）』2015年07月号、http://catfish-kazu.la.coocan.jp/201507hm.html にある。

[47] エルサレムの翻訳が平安京であるという説は学術的には荒唐無稽な日猶同祖論において唱えられてきたものと同じだが、日猶同祖の仮定は不要である。

このように、7世紀後半の日本に伝来したインドのキリスト教は、中国文明由来の元号や仏教信仰のなかに混じり込みながら、それらにはもともとなかった特質を帯びて大宝建元以降の元号や神武紀元、鋳貨、善光寺信仰、祇園信仰、秘仏信仰、春秋彼岸会、怨霊・御霊信仰、日本の祭りの原型となった祇園御霊会などを生み出したのであり、東アジアのみならず世界のなかでも特異な日本文明の個性の多くはインド・東南アジアから7世紀後半に伝来したキリスト教に由来している。それらは、唐に留学したエリート貴族・僧侶からみればいかがわしいもので、善光寺は難波から信濃に移された[48]。

5.「つぎつぎになりゆくいきほひ」と進化論

丸山眞男は記紀にみられる神話と歴史の連続性を「つぎつぎになりゆくいきほひ」と特徴付けてそれ以降の日本人の歴史意識の根底になったとし[49]、レヴィ＝ストロースは「私たち西洋人にとっては、一つの深淵が、神話と歴史を隔てています。反対に、私が最も心を惹かれる日本の魅力の一つは、神話と歴史相互のあいだに、密接なつながりがあることです。」「この連続性は、日本を訪れた初期のヨーロッパ人たちに、衝撃を与えずにはおきませんでした。すでに十七世紀に、ケンペルは日本の歴史を三つの時代に分けています。伝説の時代〔『日本誌』では「天神の時代」〕、不確実の時代〔「人神の時代」〕、真実の時代〔「人皇の時代」〕です。ですからケンペルは、そこに神話を含めたわけです。[50]」と述べている。私見では、ユダヤ・キリスト教的歴史意識とギリシャ・ローマ的な神話意識とが断絶したまま西洋では保存され、両者が対立的にとらえられるのに対して、日本では8世紀に編纂された記紀において神話の歴史化を主としながら両者の連続性が形作られた。

西洋においては、歴史から超越した神話はプラトンのイデア論へと洗練され、神話と断絶した歴史は天地創造から終末に至る、はじめと終わりによって区切られた線分としての歴史となり、前者はプラトン『国家論』の哲人政治、後者は神の意思を伝える預言者を生み出し、ホッブズの社会契約論や共産党一党独裁支配による計画経済のような設計主義的合理主義の源流となったのに対し、天地開闢以降の歴史を超越的設計者・主宰者なしに不可逆的に変化してゆく「つぎつぎになりゆくいきほひ」によってとらえる日本の歴史意識は自生的秩序の進化を叙述するのに適している[51]。

丸山は「つぎつぎになりゆくいきほひ」がダーウィン的な進化の論理を含意していることを『古事記』によって示している。

> 黄泉比良坂（よもつひらさか）でのイザナミの呪言とイザナキの応答のあとで、『記』は、「是以一日必千人死、一日必千五百人生也」と付記しているが、これは、生死の紀元説話であるとともに、生者の数が死者の数を上まわるという「現実」の理由の説明でもある。生と死との二元的原理（または神対悪魔）の闘争を通じて生が勝利するのではなくて、一方でいくら死んでも他方で生まれる者が多い

---

[48] 唐の仏教を規準に朝鮮半島由来の仏教・道教やそれらと混淆していたキリスト教を批判・排除して善光寺を難波から信濃に追いやったのは道慈であると思われるが、長屋王の変のあと、彼は排除したキリスト教的特徴を裏口からこっそり入れて聖徳太子信仰・御霊信仰の形成にもかかわった（平山［2009－5］268、305－15頁）。

[49] 丸山眞男［1972］「歴史意識の『古層』」『丸山眞男集　第10巻　1972～1978』岩波書店を参照、引用は45頁。

[50] レヴィ＝ストロース、川田順造訳［2014］『月の裏側――日本文化への視角』中央公論新社、18、19頁。「真実の時代」の「真実」とは歴史的事実といった意味合いだが、実証的な意味での事実だけが含まれるわけではなく、『日本書紀』編纂時において歴史的事実と信じられていたものが年代記的に叙述されるようになって以降の時代であり、神武即位前紀以降にあたる。

[51] F. A. ハイエク、一谷藤一郎訳［1954］『隷従への道――全体主義と自由』東京創元社（同、西山千明訳［1992］『ハイエク全集　第1期別巻　隷属への道』春秋社）、同、佐藤茂行訳［1979］『科学による反革命――理性の濫用』木鐸社（同、渡辺幹雄訳［2011］『ハイエク全集　第2期第3巻　科学による反革命』春秋社）、同、矢島鈞次・水吉俊彦訳［1986］『ハイエク全集　第1期第8巻　法と立法と自由（1）ルールと秩序』春秋社、同、篠塚慎吾訳［1987］『ハイエク全集　第1期第9巻　法と立法と自由（2）社会正義の幻想』春秋社、同、渡部茂訳［1988］『ハイエク全集　第1期第10巻　法と立法と自由（3）自由人の政治的秩序』春秋社を参照。

ので、結局は増殖して（＝成（な）り）ゆく、という自然増殖のオプティミズムの発想であり、それが産霊（むすび）の発動によるアシカビの生長繁殖のイメージで裏打ちされている。（丸山［1972］19頁注）

丸山が「つぎつぎになりゆくいきほひ」を「自然増殖のオプティミズムの発想」とみているのは、一面的ではなかろうか。持統天皇が近江に行幸した際に作られ、女帝に奉呈されたと解釈されている[52]、不可逆的な時間を日本ではじめて表現したとされる柿本人麻呂の「近江荒都の歌」においては永遠回帰する神話的時間と眼前の廃墟が示す不可逆的時間との対立がみられた[53]。この歌は草壁皇太子を失った持統が壬申の乱で滅んだ近江方を祀る挽歌の枠組によっており[54]、天智天皇の血は自分を通して草壁皇太子から軽皇子にも伝えられていることによりながら天智の血を受け継いでいない他の天武天皇の皇子たちに対する軽皇子の優位を主張し、軽皇子の登位を実現させようとしたものであった[55]。

また、文武天皇の唯一の直系男子首皇子の成長プロセスは、乳幼児死亡率が高かった当時、彼の死やそれに伴う文武直系皇統の断絶の危機と背中合わせだったのであり、皇統断絶の危機が神武以降第13代成務まで皇位の父子直系継承が続くという皇統譜を生み出した[56]。即位せずに薨去した草壁皇太子から文武・聖武へと繋がる直系系譜は、天武天皇の皇子が少なからず現存するなかで正統性を主張しなければならず、天智の定めた不改常典[57]は、それが定めた直系継承を破って即位した天武の正統性を否定しつつ、天智―持統（女帝）―草壁皇太子―文武―首皇子および天智―元明（女帝）―文武―首皇子と、天智の娘を含む直系で二重に天智の血を受け継いだ文武と聖武の皇位継承権を正統化した。持統をモデルとするアマテラスという女性太陽神にはじまる皇統譜における「つぎつぎになりゆくいきほひ」は、乳幼児死亡率の高さと有力な天武の男系直系皇子たちの存在という過酷な環境に打ち克つために要請された思想であり、天智→持統・元明直系皇統断絶の危機を背景としている。

７世紀末の持統朝において詠まれた「近江荒都の歌」にみられる永遠回帰する神話的時間と不可逆的な歴史的時間との対立を止揚したものが、つぎつぎになりゆくいきほひによる記紀の神話と歴史の

---

[52] 北山茂夫［1958］『萬葉の創造的精神』新潮社、36－７頁。

[53] 『万葉集』29－31、平野仁啓［1976］『続　古代日本人の精神構造』未来社、318－34頁、真木［1981］101－７頁。

[54] 山本健吉［1975］『柿本人麻呂　新装版』講談社、71頁、50頁。

[55] 真木［1981］102－４頁。そこでは、女帝は男系継承の中継ぎにすぎないとする従来の通説に従って、壬申の乱で天智から大友皇子（弘文）への皇統を否定した天武の皇統と天智の女系子孫である軽皇子とを、天智と天武の父である舒明まで遡って統合することを持統は目指したとされているが、それならば神話において皇祖神は舒明に対応する男神となったはずであり、自らを皇祖神に擬することによって自らの子孫に皇位継承資格を限定して天武系の皇子たちから正統性を奪うことこそが持統の狙いだった（平山［2009－５］６－15、200－３頁）。さらに、持統が皇祖太陽神を女神とする以前は、男性太陽神の娘とスサノオが結婚して皇祖神になるという婿入り神話があって、継体の即位を正当化していたと思われる（平山［2012］「二章　アマテラスと天岩戸神話のなりたち」を参照）。

[56] 成務は、即位せずに薨去したヤマトタケルの弟で、成務の次にはヤマトタケルの子・仲哀が即位する。仲哀の子とされる応神はその出生日から逆算して仲哀の死後に神功皇后は妊娠したので仲哀の子ではないとする説が新井白石などによって唱えられてきた。さらに、神功皇后には新羅王室の血が入っており、新羅王室は女系継承を認めており、応神の５世孫継体も武烈の姉に婿入りしているように、仲哀以降の系譜は女系継承を認める新羅王室の継承ルールの影響や皇統の男系としての断絶・交代を示唆していると解釈できる。首皇子は即位して聖武天皇になると娘を皇太子にし、さらに孝謙天皇として即位させ、もし孝謙に男子が産まれれば女系継承をさせるつもりだったと思われ、それを正統化するような皇統譜が現在では失われている『日本書紀』系図一巻のなかに伝えられていたと推測することもでき、女系継承を認めるような新羅王室と同様の規範意識に基づく系譜は継体から欽明への継承のころに形成され（平山朝治［2011］「記紀皇統譜の女系原理――天日槍（＝天彦火）王家の復元」『筑波大学経済学論集』第63号、http://doi.org/10.15068/00137842）、文武から聖武への父子直系継承を強く望む意識によって、女帝に相当するアマテラスを皇祖とすることで女系継承を前提としながら父子直系を重視するような神統・皇統譜が仲哀よりも前に欠史十代として架上されたと思われる。

[57] 不改常典については、村井康彦［1989］王権の継受――不改常典をめぐって」『日本研究』国際日本文化研究センター、第１集、平山［2009－５］「Ⅰ－１章－１　女帝子孫の相承とアマテラス神話」を参照。

連続的叙述であり、適者生存と不適者滅亡と近江朝廷や蘇我氏のような滅亡者の包摂[58]は三位一体として解釈しなければならない。末法思想は後二者に重点を置いたものであり、仏の教えが伝えられて行くうちに、形だけ伝わっている像法の世の次に跡形もなく滅びる末法の世が訪れるという危機感のなかで、インドでは大乗仏教が生まれ、日本では鎌倉新仏教が生まれるという風に、このままでは過酷な現実によって衰滅するという危機意識をバネに適応力を増す進化が生じた。

生者が死者を上まわるため結果的に増殖してゆく際に、適者生存の自然選択が働き、生物の種は不可逆的に進化し、枝分かれして多様化してゆくというダーウィンのロジックが、日本神話では、つぎつぎになりゆくなかで新たな神々が次々と登場し、神々の数が増加するという風に表現されていると解釈することができ、日本神話＝歴史のロジックに科学の装いを与えたものがダーウィンの進化論であると言うことすら可能だろう。丸山は「この古層は、進歩とではなく、生物学をモデルとした無限の適応過程としての――しかも個体の目的意識的行動の産物ではない――進化（evolution）の表象とは、奇妙にも相性が合う」（丸山［1972］54頁）と指摘している。彼はまた、「『いきほひ』のあるものに対する賛辞が『徳』である」（同、32頁）という「徳」のとらえかたを日本独特としているが、自然選択によって生存するものが適者であるという「適者」のとらえ方と非常に近い。

丸山は「生成のエネルギー自体が原初点になっている（はじめに「いきほひ」ありき！）」（丸山［1972］38頁）と述べて、「つぎつぎになりゆくいきほひ」の哲学的・宗教的な可能性を示唆している。進化論の自然選択・適者生存は、西洋においては無神論的とされることが多いのに対して、日本の伝統的な宗教性と親和的であることは、縄文美を発見した岡本太郎が1970年の大阪万博のシンボルとして制作した太陽の塔のなかに進化系統樹である生命の樹を置き、上方に向かって伸びることばかり考える西洋起源の進歩主義と対比して、系統樹のおおもとである生命の根源に立ち戻って生命の一体性を回復すべきことを表現したのにも現れている。『生誕100年　岡本太郎展』（東京近代美術館、2011年）で放映された記録映像で、彼は生命の樹について人間は思い上がりを棄てて単細胞生物にまで降りなければならないなどと語っていた。

丸山が「古層」としたものを岡本は縄文以来の生命観・宗教観として表現し、終末論史観や進歩史観に対置したと評することができるだろう。岡本の生命の樹に表現されている日本的な生命観・歴史観は、縄文以来の自然観とインドから伝来したキリスト教に由来する不可逆的な歴史の観念とが融合することによって生まれ、記紀における神話と歴史の連続的な扱いとして定式化されたと言うことができるだろう。

図８　太陽の塔と生命の樹

出所　左：http://www.fashionsnap.com/news/2011-12-13/osaka-banpaku-taro/ 2011年12月13日 14:26 JST
右：著者撮影（岡本太郎記念館所蔵 生命の樹 1/20縮小模型）

[58] 持統と元明は母が姉妹で、母方祖父が蘇我石川麻呂であるから、乙巳の変で中大兄皇子側に与したが４年後の649年（大化５年）に謀叛の嫌疑で自害した石川麻呂の血をも文武と聖武は濃厚に受け継いでいたことになる。当時はまだ怨霊・御霊信仰は形成されていなかったが、蘇我氏と近江朝廷という現世では滅亡した勢力の血が女系によって文武と聖武に流れ込んでいることが、他の諸皇子たちに対する彼らの強みになっていたと言えるかもしれない。また、持統と元明が文武に宮子、聖武に光明子と藤原不比等の娘を配したのは、自分たちの母方蘇我氏を継ぐ外戚氏として藤原氏に期待したからであろう。

6. 天皇をよりどころとする辛酉革命

キリスト教の終末論は古代日本に伝わると跡形もなく消えたのだろうか？　キリスト紀元元年が辛酉なのは偶然ではないとすればそうではなく、60年周期の辛酉革命改元、甲子革令改元に反映されているとみることができる。また、江戸時代に、1650年（慶安３年）、1705年（宝永２年）、1771年（明和８年）、1830年（文政13年・天保元年）と約60年周期に起こった大規模なおかげまいり[59]も周期化された終末現象であろう。前者は知識層、後者は一般庶民が主たる担い手だが、60年は当時としては普通に長生きした人の誕生から死までの標準的な時間と考えることができる[60]。

革命と訳される revolution の動詞形 revolve は「回転する、ぐるぐる回る、循環する、周期的に起こる、（…を）中心題目とする[61]」を意味し、革命は西洋においても周期的に起こるとみなさることもあった。

辛酉革命と甲子革令に因む改元は、擬似革命によって皇統の連続性を保障するものと意味付けられ、日本には易姓革命が根付かなかったことと関連付けられることもあるが、辛酉革命・甲子革令改元慣行のきっかけとなった三善清行の菅原道真に対する右大臣辞職勧告[62]は菅原道真ら寵臣を重用する宇多上皇の影響力を排除して醍醐天皇を中心とする政権を樹立しようという政治変革を辛酉革命によって推進し、「革命勘文」では道真左遷によってそれを実現した昌泰の変を事後的に正当化する革命改元を提言したのであり[63]、天皇をよりどころとする政治改革の旗印として革命・革令改元慣行は始まり、これ以降天皇は日本における革命の旗印となった。

清行は「革命勘文」で天智即位を称政開始と混同して661辛酉年とし、1320年周期を一蔀として重視することによって神武を太祖、天智を中宗とし[64]、蘇我蝦夷入鹿父子を討ち、蘇我氏の専横を排して皇室中心の政治を実現した乙巳の変を理想化して昌泰の変を正統化したのであり、それに倣って武家の台頭後も辛酉革命・甲子革令思想は倒幕や藩閥政権打倒などによる天皇を中心とする政治体制の回復と結びついてきた。鎌倉幕府末期、後醍醐天皇は辛酉年である1321年に元亨、甲子年である1334年に正中と改元した。また、幕末期の孝明天皇は辛酉年である1861年に文久、甲子年である1864年に元治と改元しており、革命･革令改元のころ倒幕の気運が高まり、天皇を中心に政局が推移したことからして、日本史上典型的な革命は倒幕と天皇親政回復としての革命であり、辛酉年とその３年後の甲子年に行われた２度の改元は天皇の権威を高め、倒幕＝革命を自己実現するようなものであったと言える。ちなみに、一世一元の制のため革命革令改元はなかったとはいえ、1921年（辛酉･大正10年）や1924年（甲子・大正13年）のころは普通選挙に向けて一君万民を理念とする大正デモクラシー運動が高揚し、辛酉年には原敬首相が暗殺され、甲子年の翌年である1925年（大正14年）に普通選挙法が成立した。

日本に定着した革命観念も「つぎつぎになりゆくいきほひ」に従うものではあるが、神武創業や天智中興という理想を伴っている。他方、武家政権の成立も「つぎつぎになりゆくいきほひ」によって正統化される（丸山［1972］41－５頁）とはいえ、辛酉革命の思想からみれば天皇中心の理想の政治体制からの堕落という、末法思想的な下降局面であり、やがて革命を経て上昇局面に転換するという風に、めざすべき理想の観念を伴いつつ循環する長期波動も見出せるものとして、日本の伝統的歴史意識の全体像をとらえる必要があるだろう。

---

[59] 山口千代己［1992］「多くの民衆伊勢へ『おかげまいり』」『歴史の情報蔵』http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/arekore/detail.asp?record=85、2019年６月21日閲覧。

[60] 当時としては恵まれた生活・医療環境を享受していた徳川将軍15人の平均寿命は51.4歳であり、60歳以上生きた将軍は６人である（「徳川将軍の平均寿命は何歳？」『歴史ハック』https://rekishi-hack.com/tokugawa265/、2019年５月12日閲覧）。

[61] https://ejje.weblio.jp/content/revolve、2019年５月12日閲覧。

[62]「右大臣道真、重ねて右近衛大将ヲ辞ス、明日文章博士三善清行、書ヲ道真に送リテ、辞職ヲ勧ム」（『大日本史料　第一編之二』昌泰３年10月11日条）、「文章博士三善清行、明年辛酉革命ノ議ヲ上ル」（同、同年11月21日条）。

[63] 平山［2005］「Ⅲ　革年改元の起源」、とくに注13を参照。

[64] 三善清行「革命勘文」（『大日本史料　第一編之二』延喜元年２月22日条、山岸徳平ほか校注［1979］『日本思想大系８　古代政治社会思想』岩波書店）。

おわりに

戦後日本に定着した象徴天皇制と天皇をよりどころとする旧弊打破という伝統的な革命思想とは両立し難い。大正デモクラシーが求めた一君万民の理想を安定的な制度として実現したのが象徴天皇制のもとでの戦後民主主義だと言うこともできるだろう。他方、1970年代初頭には戦後高度成長がピークを迎え、新左翼的な学生運動が連合赤軍による浅間山荘・リンチ殺人事件に至って社会主義的終末を求める思想への若い世代の支持が失われて西洋起源の進歩史観は説得力を失った。このように、日本の主な歴史意識のなかでは丸山が1972年に指摘した「つぎつぎになりゆくいきほひ」のみが、ちょうどそのころ淘汰を免れて自然選択されたと思われる。自生的秩序の進化という終わりの観念を欠いた歴史意識は、多様な諸文明の共存や、持続可能性という、終末論に代わる社会の現実的な目標とも整合的であろう。

そのころから、「つぎつぎになりゆくいきほひ」を体現して登場したのが、『スター誕生！』などの視聴者参加型オーディションでデビューを勝ち取り、阿久悠、松本隆、秋元康らの詞を歌ってブレイクしたアイドルである。阿久悠はアイドルへの作詞について「十四歳、十五歳から始まり、彼女たちの成長や、社会的印象の変化などを見つめながら、彼女たちの内部に起こるであろう問題を取り込むことが、不可欠になっていった[65]」と述べ、岩崎宏美のキャッチフレーズについて、「日常の中の夢を売る少女とか、時代が要求したアイドルといった立場を説明するものより、『天まで響け！』この一言で、歌手としての使命の大きさと、明るくひろがった未来を感じさせた[66]」と岩崎のデビュー30周年に寄せたメッセージで書いたように、アイドルは成長プロセスを見せ、日常の中の夢を売って未来への希望を人々に与えることで、時代が要求する使命を果たしてきた。

アイドルの源流は数え年15歳で即位した文武天皇や、即位を期待された首皇子の成長プロセスで、イメージ（像）としては、聖武天皇の皇女でのちに孝謙天皇として即位した阿倍内親王の数え年16歳のときの姿を写しているとする説[67]もある、天平６年（734年）に作られた興福寺阿修羅像まで遡る[68]。目的＝終末を欠いた不可逆的連続的時間としての歴史意識は聖武天皇の誕生と成長にはじまり、今日のアイドルにまで受け継がれてきた。

典型的な日本のアイドルは、1970年代はじめにおける高度成長の終焉や新左翼革命運動の挫折とともにあらわれ、AKB48[69]や乃木坂46に代表される21世紀の多人数グループ・アイドルはリーマンショックや東日本大震災とともに大ブレイクした。

流行していた当時は「アイドル」とは呼ばれなかったがアイドルとみなしえる存在としては、経済成長の長期波動に即してみると、幕末維新にはじまる第１長波に対応するものとして娘義太夫、1916年にはじまる第２長波に対応するものとして劇中歌を唄う松井須磨子・浅草オペラ・少女歌劇、1930年ころからの第２長波上昇局面なかばから1955年ころからの第３長波に対応するものとしてアンコものを中心に唄うソロの少女歌手を挙げることができ、長波の上昇局面において新たなものが出現し、下降局面において大ブレイクする傾向が見られるが、1940年～1954年ころの第２長波下降局面は戦争や戦後復興という撹乱要因が大きいためアイドル的現象を読みとることは困難であり、1955年以降については上昇局面に島倉千代子や都はるみがあらわれ、1970年以降の下降局面に森昌子ら視聴者参加

---

[65] 阿久悠［2007］『夢を食った男たち――「スター誕生」と歌謡曲黄金の70年代』文春文庫（初出は1992－３年）175－６頁。

[66] 阿久悠［2005］「『天まで響け』から永遠に」『HIROMI IWASAKI 30 TH ANNIVERSARY BOX』テイチクエンタティンメント。

[67] 鈴木八朗［2001］「阿修羅の美とモデル」、興福寺監修『阿修羅を究める』小学館、山口博［2006］『平安貴族のシルクロード』角川選書、114頁を参照。

[68] 平山朝治［2016］「ポストモダン社会経済における、アイドルの芸術性と宗教性」『筑波大学経済学論集』第68号、http://doi.org/10.15068/00137027、４頁、同［2018］「アイドル150年――アイドル・ブームと長期波動」『筑波大学経済学論集』第70号、http://doi.org/10.15068/00150843、５－６頁。

[69] 平山朝治［2019］「AKB レインボー経済」『筑波大学経済学論集』第71号、http://doi.org/10.15068/00154855。

型オーディション出身者を中心とする狭義のアイドルが出現し、2005年以降の第４長波始動に堀北真希やAKB48らメジャーなアキバ系アイドルが登場したとまとめることができる（平山［2018］）。

長期経済変動の上昇局面は進歩主義が説得力を持つのに対してピークから下降局面にかけてそれが魅力を失ってアイドル的存在の人気が高まるという傾向を見出すことができる。2005年以降の第４長波上昇局面は前途不透明な未来に向かって手探りで進むという性格が強いとすれば、進歩史観が優勢だった従来の長波では上昇局面がピークに達して以降次々と大ブレイクしやすかったアイドルが始動直後から次々と大ブレイクしたと言えるかもしれない。

1970年代はじめに西洋的・終末論的な歴史意識の近現代ヴァージョンである進歩主義史観が行き詰まるとともに、日本では個々人の成長プロセスを重視する歴史意識が表面に出て影響力を発揮し、アイドルの人気が高まった。西洋的な歴史意識における終末や目標が説得力を失うとともに、それら抜きで未来への希望をもたらしてきた記紀以来の「つぎつぎになりゆくいきほひ」が顕在化し、成長プロセスを重視するアイドルがそれを担って活躍する。このような観点に立つと、同じキリスト教に紀元を有する西洋と日本の歴史意識には重大な相違があることも理解できるのではなかろうか。

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 23-44
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

論文

ニッチトップ型中小企業の地方移転と国内・海外事業展開
―株式会社 協立製作所の事例分析―

Transfer to a Local City and Business Development of a Japanese Niche Top Small and Medium Sized Enterprise in Domestic and Overseas Areas:
A Case Study of Kyoritsu Seisakusho Co., Ltd.

平沢　照雄（Teruo HIRASAWA）
筑波大学人文社会系　教授

本論文は、地域経済の再生あるいは産業の空洞化を回避する一翼を担うことが期待されるニッチトップ型中小企業の国内および海外における事業展開について経営史的に検討することを目的とする。特に本論文では、日本を代表する企業城下町として発展してきた日立の周辺地域（筑西市）に移転し、その後同地を拠点として活動する協立製作所を事例として取り上げる。その分析により、［１］1970年代初頭に東京から地方への工場移転を契機として、油圧部品の一貫加工体制を整備することで同社発展の基盤を形成したこと、［２］1990年代以降、油圧機器のメインスプール市場においてニッチトップの座を獲得し、ニッチトップ型中小企業へと転身するとともに、［３］油圧部品の加工のみならず、製品の組立を新たに手がけることで事業の多角化と取引関係の拡大をはかり、それまでの一社専属的な事業展開からの転換を実現したこと、［４］同じ時期に中国（上海）に現地工場を設立することで、日本国内における生産拡張の制約を克服するとともに、現地での新たな取引関係を形成したこと、［５］以上の展開により、同社は、バブル崩壊以降の外部環境の変化に適応しただけでなく、それ以前より高い企業成長を実現するに至ったことを明らかにした。

The purpose of this paper is to examine the business development of the niche top type small and medium sized enterprises, which are expected to take revitalization of regional economies or a role avoiding deindustrialization. In this paper, we focus on the case of Kyoritsu Seisakusho Co., Ltd. (KS) based in Chikusei City, Japan and clarify as follows: [1] KS formed a base of the company development by making an integrated production system after transferring the factory from Tokyo to the local city in the early 1970s. [2] KS got a position of the niche top in the main spool market of the hydraulic equipment parts after the 1990s, and [3] it realized switch from business relationship to depend on the specific company by newly entering the assembling business of the products as well as the processing of the hydraulic equipment part. [4] KS also overcame limitation of the production expansion in Japan and formed new business relationships in Shanghai, China by establishing a local factory there at the same time. [5] By these results, KS achieved the company growth that was higher than it past as well as adapted to the changes in the external environment after the collapse of Japanese bubble economy.

キーワード：ニッチトップ型中小企業　協立製作所　油圧機器　地方移転　海外事業展開
Keywords：Niche Top Small and Medium Sized Enterprise, Kyoritsu Seisakusho Co., Ltd., Hydraulic Equipment, Transfer to a Local City, Overseas Business Development

はじめに

1990年代以降、グローバル競争が本格化するなかで、地域経済の再生あるいは産業の空洞化を回避する有力な担い手として、地域を主要な活動拠点とし、地域経済の発展を支える中小企業の存在が重要性を増しつつある。なおこうした地域企業の実証分析にあたっては、以下の２つの研究史に注目することが重要である。

第１は、戦後日本の中小企業を「近代化・合理化」への取り組みが遅れ、企業成長力が弱い存在として一面的・固定的にとらえるのではなく、経済発展・成長に貢献する「貢献型中小企業」として注目し、その主体的な取組みの歴史を積極的に評価しようとする研究である（植田2004）[1]。そこで示された分析視点は、地域経済を停滞あるいは衰退一色で固定的にとらえるのではなく、地域再生に貢献しうる企業の存在とその役割を積極的に評価するうえで重要な意味をもつといえる。

第２は、企業城下町の下で発展してきた下請型中小企業とは異なり、「ニッチトップ型」と特徴付けることができる企業の実証分析である[2]。ここでニッチトップ型とは、独自の基盤技術をもとに自社製品・サービスを開発・製造し、それらを販売する隙間市場（ニッチ市場）を開拓して、その市場で高い競争力とシェアを有する企業をさす。特に大手中核企業による海外への工場移転などに伴い、企業城下町としての発展が行き詰まりの様相を呈しつつある地域においては、下請型とは異なり中核企業の立地や動向による制約を受けにくく、それゆえ地域経済の新たな発展を担い得るニッチトップ型企業に着目することは重要な意味を持つといえよう。

以上のような研究動向を念頭におき、本論文では、地域に密着し地域経済の再生あるいは産業の空洞化を回避する一翼を担うことが期待される貢献型企業を「地域貢献型中小企業」[3]としてとらえ、さらにそうした地域企業のなかでニッチトップ型のそれに焦点をあてる。特に本論文では、企業城下町型地域経済の行き詰まりあるいは空洞化が問題視されている状況を踏まえ、同周辺地域において独自の事業展開を行ってきた企業に着目する[4]。具体的には、日本を代表する企業城下町として発展してきた日立に近い茨城県筑西市に拠点をおく協立製作所を取り上げ、同社の地方移転とその事業展開を経営史的に明らかにすることを課題とする。

ところで、地域貢献型中小企業の１つとしてニッチトップ型のそれに焦点をあて、同企業の地方移転とその事業展開の特徴について事例分析した研究成果として平沢（2019）がある[5]。本論文は、さらにそうした事例分析の豊富化を企図するものであるが、その一方で平沢（2019）が取り上げた先行事例とは以下の点で異なる特徴を有する。

第１は、先の研究が事例とした野上技研が、移転先（茨城県常陸大宮）での国内事業展開を基本とし、海外展開はあくまで輸出によっていたのに対して、本論文が着目する協立製作所は移転先での事業展開を基本としつつも、同時に1990年代初頭に中国にて現地工場を立ち上げた点である。第２は、野上技研が主に自社製品・サービスの開発・製造・販売に取り組んでいったのに対して、後に改めて言及するように協立製作所の場合はむしろ OEM（相手先ブランドによる製品供給）を基本とした点である。

グローバル競争時代の地域経済は、かつての企業城下町における中核企業のような特定企業のみで牽引できるものではない。むしろ特定企業に過度に依存することのない、多様な地域貢献型企業群に

---

[1] それとともに、産業・企業の変遷過程の観察を通じて、経済再生の起動力となる「産業発展や企業成長のダイナミズム」の歴史的把握を試みる取り組みも進められている（橘川2007）。

[2] 特にグローバル・ニッチトップ企業に関する主な研究として、難波・鈴木・福谷（2014）、細谷（2014）、藤本・牧田（2015）、後藤（2015）などがある。さらに経済産業省は、こうした企業の認定も含めて支援していく新制度として、2014年以降、「グローバル・ニッチトップ企業100選」事業を展開している。

[3] こうした地域貢献型中小企業の重要性に関しては平沢（2014a）も参照されたい。

[4] なおこうした事例選択の背景には、企業城下町地域に集積する企業だけでなく、その周辺で活躍する地域中小企業にも着目する形で、より広域的に地域経済の再生あるいは新たな発展を考える必要があるという問題意識がある。

[5] ニッチトップ型企業の地方移転に関連して、これらの企業が有する立地特性に関しては、細谷（2017）26－27頁を参照されたい。

よる地域経済の再生・活性化が必要とされていると考えられる。その意味で、先行事例とは異なる一面をもつ事例に新たに着目し、その事業展開を分析することは、地域貢献型企業の多様な存在とその重要性を明らかにする一助となり、当該期の地域経済研究に貢献することになるといえよう。

そこで本論文が分析対象とする協立製作所について、その概要を示すと**表１**のようになる。そこにみられるように、同社は、油圧機器の精密部品製造をはじめとし、油圧のピストンポンプやバルブのアッセンブルを主な事業とする油圧機器部品・組立の専門メーカーである。なかでも建設機械分野における油圧ショベル用コントロールバルブの主要コンポーネントであるスプールで世界シェアの約４割を占めるニッチトップ企業である。

表1　協立製作所・会社概要

設　　立	1958 年 2 月（創業 1954 年）
代 表 者	高橋日出男（取締役社長）
資 本 金	9,400 万円
従 業 員	273 名（正社員：248 名、パート他：25 名）
主要事業	建設機械・油圧機器メーカー向け部品（スプール）
	建設機械・油圧機器メーカー向けコントロールバルブ組立製品
	建設機械・油圧機器メーカー向けピストンポンプ組立製品
本　　社	東京都品川区東中延
茨城工場	茨城県筑西市三郷
関係会社	（株）協立熱処理工業（茨城県筑西市三郷）
	上海協立機械部件有限公司（中国上海市松江工業区）

（資料）会社提供資料より作成。
（注）従業員数：2013年４月１日現在。茨城工場および協立熱処理工業の合計。

そうした同社の事業展開に関しては、以下の３つが重要な意味をもつ。すなわち、［Ⅰ］東京から地方（筑西市）への工場移転を契機とする一貫加工体制の形成、［Ⅱ］1990年初頭のバブル崩壊以降におけるニッチトップ型企業への転換と新たな事業展開、［Ⅲ］中国（上海）での工場設立による海外事業展開の積極化である。以下では、第１ ～ ３章において上記Ⅰ～Ⅲに関して立ち入って検討することを通して、同社がニッチトップ型企業として進化する過程を歴史的に明らかにすることにしたい[6]。

1．生産拠点の地方移転と取引関係の多角化

1－1　創業期の事業展開

はじめに、同社の沿革を示すと**表２**のようになる。そこに明らかなように、同社は高橋庫吉により1954年に設立された。ここで創業者の経歴と創業に至る経緯について行論に必要なかぎりでふれておきたい[7]。

創業者の高橋庫吉は、茨城県西茨城郡岩瀬町（現桜川市）出身で、戦前期（1938－1943年）は東京

[6] こうした目的から、本論文では、主に2013年までの時期を分析対象としている。
[7] 以下、創業者に関しては、聞き取り調査（平沢2014b）および高橋（2010a）による。

墨田区の工作機械部品の製造・組立メーカーであった水谷鉄工に勤務した。さらに戦後（1946年）には、農業機械の脱穀機・精米機等の駆動源となる発動機を製造する日平産業伊佐美工場へと再就職した。同工場において庫吉氏は製造部に所属し、旋盤、プレーナー、ジグボーラー等の職人として従事する。しかし、1948年に同工場閉鎖と横浜工場への集約化が発表されたのを契機として独立するに至り、品川において協立製作所を設立した[8]。

創業期の同社は、工具メーカーＴ社の切削用工具の最終工程である「刃付け研磨」を担う下請けとして出発した。具体的には、円筒研削盤、カッターグラインダー、ロータリーグラインダー、内径研削盤などの設備により、高速度鋼のリーマ、メタルソー、サイドカッター等の研削加工を請け負うことで順調に業績を拡大していったのである。

さらに協立製作所の企業発展にとって重要な意味をもったのが、1960年代後半以降に、油圧機器部品の研削加工を新たに手がけたことである（前掲**表２**）。上述のように、当時、切削工具類は高速度鋼が中心であり、同社はその加工により企業成長を実現したといえるが、その一方で将来的には切削工具が超硬やセラミックに変わってゆく可能性も考えられ、そうした事態への対応策の１つとして事業の多角化が必要とされていた。

こうした状況下にあって、1965年に港区芝浦にあった油圧機器メーカーのカヤバ工業（現KYB）から、油圧部品の最終工程における研削加工の依頼があった。これに対して協立製作所は、工具研磨で蓄積した技術を活かして試作を行い、それが高い評価を得たことでカヤバ工業との取引が開始されたのである。

その結果、協立製作所は、研磨技術を基盤として、①切削工具と②油圧部品の研磨・研削加工へと事業の多角化を実現した。しかしその後、前者の受注量が徐々に減少し、1970 ～ 1971年にはゼロとなるに至る。その一方で、当時、油圧機器は動力伝達手段として脚光を浴びており、そのため工具の受注がゼロになったにもかかわらず、油圧関係の受注が順調に伸びることで企業全体の売上は回復し業績は拡大していった。

１－２　生産拠点の地方移転

こうして協立製作所は、工具の研磨事業のみに依存していた場合に生じたであろう倒産の危機を回避するとともに、切削工具の研磨企業から油圧部品加工の専門企業へと事業転換するに至る。

その一方で、この時期直面した問題は労働力不足であった。この点は、高度成長末期の日本経済全般における問題でもあったが、それに加えて以下の固有な事情に起因していた。すなわち、同社の請け負う研削加工は最終工程に位置し、常に前工程の進捗状況の影響を受ける。支給品（前工程）に遅れが生じれば、それだけ自身の工程で納期短縮の要請に応じざるを得なかった。そのため、徹夜、休日出勤、深夜残業等が常態化し、その結果として従業員の定着率は悪く、慢性的な人手不足状態に陥っていたのである。

こうした問題への対応策として、協立製作所は、茨城県筑西市への工場進出を企図した。この点に関して、同社２代目社長の高橋日出男氏は、以下のように証言している（高橋2010b、括弧内は原文）。

> 私が大学３年の時、後継問題を父庫吉と話しあった。私は地方に工場を作ってくれれば、自分が地方に赴任し跡を継ぐと話した。私は幼い時から父の仕事を観察していたので、東京では従業員は集まらず、工場の拡張余地がないとの理由で将来性がないと思っていた。そこで地方に工場を作り、前工程の機械加工工場を建設し、部品の一貫加工体制を作れば将来が開けると説得した。そして昭和45年、父庫吉の生まれ故郷近くの茨城県真壁郡協和町（現筑西市）に敷地300坪（660㎡）、建屋20坪（66㎡）の工場を建設することになった。

[8] 前掲**表２**にみられるように、正式な会社設立は1958年であるが、それに先立つ1954年に品川区東中延にあった賃貸工場で庫吉氏と弟の２人で創業した。

表2　協立製作所・沿革

1954年	11月	切削工具の研削・製造開始
1958年	2月	東京都品川区に有限会社協立製作所を設立
1965年	5月	油圧部品の研削・製造開始
		カヤバ工業（株）（現 KYB）と取引開始
1971年	8月	茨城県協和町（現 筑西市）に茨城工場開設
1979年	5月	油研工業（株）と取引開始
	9月	不二越（株）と取引開始
1980年	7月	日立建機（株）と取引開始
1991年	6月	上海協立機械部件有限公司を設立
		川崎重工業（株）と取引開始
1992年	9月	（株）小松製作所（現コマツ）と取引開始
1993年	11月	（茨城工場）スプール専用工場完成
1996年	10月	（茨城工場）組立工場完成：バルブ Assy 製品納入開始
1997年	9月	（茨城工場）熱処理工場完成
2000年	11月	ISO9001 認証取得
2001年	7月	東芝機械（株）（現ハイエストコーポレーション）と取引開始
	10月	キャタピラー三菱（株）（現キャタピラージャパン（株））と取引開始
2004年	4月	（茨城）新工場完成：FMS 導入
	4月	三菱重工業（株）と取引開始
	4月	ハイエストコーポレーションへポンプ Assy 製品納入開始
2005年	12月	コマツへポンプ Assy 製品納入開始
		ISO9001（2000 年版）更新
2006年	2月	協立熱処理工業（株）設立
2007年	9月	（茨城）新工場増設（K6 工場）
2008年	1月	資本金 9,400 万円に増資
	2月	ISO14001 認証取得
	4月	経済産業省「元気なモノ作り中小企業 300 社」に選ばれる
	6月	コマツへフォークリフト用新バルブ Assy 製品納入開始
2009年	5月	東京工場を茨城工場へ統合
	7月	日立建機へパワーショベル（PS）用レギュレータバルブ納入開始
	12月	ISO14001（2004 年版）更新
2010年	2月	ISO9001（2008 年版）移行・更新
2011年	7月	「いばらぎ産業大賞」（茨城県知事表彰）を受賞
	8月	PS 用メインスプール増産設備（40,000 本 / 月）導入
	11月	ISO9001（2008 年版）更新
2012年	2月	日立ティエラにバルブ供給開始

（資料）協立製作所提供資料により作成。

以上のような経緯による地方進出に関して、その後の事業展開との関連で重要なのは、以下の点である。第１は、上記証言にあるように、茨城進出の当初の主な目的は人手不足問題の解消にあったが、実際には進出先においても従業員の確保が必ずしも容易ではなかった点である。氏の別の証言によれば、従業員の確保が比較的容易になったのはバブル崩壊以降であり（平沢2014b、119頁）、その意味で茨城への進出は当初の目的を直ちに実現するものではなかったといえる。

しかし第２として、この移転は、事業承継とセットでみた場合に重要な意味をもっていた。さらにこの点は、冒頭で言及した野上技研の事例（平沢2019）と共通する側面としても注目できる。すなわち、両社とも創業者にゆかりのある茨城へと生産拠点の移転を実現するが、それとほぼ同時期に後継者が当社へ入社し、それ以降の事業展開におけるキーパーソンになるという点である。

協立製作所の場合、上記のように地方への工場建設を主導したのは、後に２代目社長となる高橋日出男氏であった。氏は大学卒業後、油圧ユニットメーカー（赤間製作所）に２年間勤務した後、1974年に協立製作所に入社する（高橋2009）。その際、事業承継の条件として、地方進出が重視されていた点は先にみたとおりである。また後に改めて検討するように、同社を工具研磨の下請企業（東京時代）から、茨城を拠点とした油圧機器部品のニッチトップ企業へと転換させるうえでキーパーソンとなったのが日出男氏であった。

第３は、野上技研と同様に、進出先として企業城下町日立地域への進出を意図しなかった点である。この点に関して、日出男氏は以下のように語っている（平沢2014b、118頁）。

> 私が「地方に出たい」と言った時に、父親は「全然知らない土地には行きたくない」ということでした。父の実家がここ（筑西市）から30分くらいのところにある農家でした。その近くで、また知り合いも何人かいたので、ここの土地を求めました。そういうわけで日立地区に行こうという考えはありませんでした。また仮にあの頃日立地区に行ったからといって、ただちに日立製作所さんと取引ができたとは思いません。地元がしっかり固まっていて、よそ者が入っていってもすぐにビジネスにつながるものではなかったと思います。

ただし、そのことは日立製作所との取引を行わないというものではない。実際、協立製作所は、日出男氏が入社する直前（1973年）に、日立製作所川崎工場からエチレン精製プラント向け超高圧給油ポンプ（HP ポンプ）の試作・開発を求められた。エチレンは原油から作られたナフサを超高圧（3,000kg/cm²）に圧縮して作られるが、日立製作所は、その時に圧縮するピストンにそれと同じ3,000kg/cm²の圧力で潤滑油を送るポンプの開発を協立製作所に依頼したのである[9]。さらに日出男氏の入社後は、同製品の OEM 取引を開始するに至っている。

１－３ 石油危機以降における取引関係の拡大

以上のように、協立製作所の茨城への進出は、当初の目的（人手不足問題の解消）を直ちに実現するものではなかった。しかしここで注目すべきは、茨城への進出を契機として、同地に前工程の機械加工工場を建設したことが、同社による取引関係の拡大を可能とする基盤となったという点である。

特にそれは石油危機により高度経済成長が終焉し、受注が減少する時期に重要な意味をもった。すなわち、同社が、高度成長期後半に切削工具の研磨から油圧部品の研磨・研削加工を主な事業とする企業へ転換したことは先に述べた。その場合、この時期の取引としては、油圧機器メーカーのカヤバ工業とのそれが売り上げの９割を占めており（平沢2014b、116頁）、一社専属に近い下請関係が形成されていたとみることができる。

これに対して、石油危機以降においては、茨城工場（前工程の機械加工）と東京工場（後工程の研

[9] なお試作・開発当初、協立製作所は日立製作所との間に取引口座を持っていなかった。そのため、すでに取引関係にあった堀川実業との共同開発という形がとられた。以上、日立製作所との HP ポンプ取引に関しては、平沢（2014b）118頁および高橋（2009）による。

磨加工）とを組み合わせる形で、「一貫加工のできる企業」として他の油圧機器メーカーに営業活動を精力的に行った。ただしそのスタンスは、カヤバ工業との取引をあくまでメインとし、同社の油圧製品とバッティングしない会社のみとの取引を開拓してゆくというものであった（同上）。

その結果、1970年代末以降、油圧機器メーカー、建設機械メーカーとの新規取引が実現した。具体的には、1979年５月に油圧専門メーカーの油研工業（本社：神奈川県）、同年９月不二越（同：富山県）と取引を開始した。さらに、1980年には、当時、油圧機器の内製化に取り組んでいた日立建機の土浦工場に油圧部品の供給を開始したのである（前掲**表２**）[10]。

なお、以上のような取引関係の拡大を可能にしたもう１つの要因として、この時期にNC旋盤が中小工場に普及していった点に着目する必要がある。すなわち、NC旋盤が登場する以前は、フライス盤や旋盤などは全て手動で操作する必要があり、それらを十分に使いこなすためには約10年の期間を要したとされている。これは人手不足および技術者不足問題を抱える中小企業にとって、大きな人的・技術的制約要因となっていた。

この点は協立製作所にとっても同様であり、前述のように人集めが容易であることを期待して進出した茨城工場でも実際には人の出入りが激しく、そのため技能者が育たない状況にあった。これに対して1970年代後半以降、NC旋盤の価格が中小企業の導入しやすい水準へと下がってきていた[11]。

そこで、同社はNC機械を導入し、日出男氏が生産技術担当となり、同旋盤に関する生産技術を確立していった。その過程で同機械を扱える従業員が定着し始め、人手・技術者不足状況を相対的に緩和しつつ、上述のように新規取引先の確保が可能となったのである。

以上のように、1970年代後半以降における協立製作所は、（１）茨城に前工程の機械加工工場を建設するとともに、（２）NC旋盤を導入することで人的・技術的制約要因を緩和しつつ、（３）油圧部品の一貫加工をセールスポイントとして取引関係を拡大していったととらえることができる。

2. バブル崩壊以降における新たな事業展開

2－1　ニッチトップ企業への成長：「研磨の協立」から「スプールの協立」へ

そのうえで、協立製作所の経営史に関して注目すべき特徴は、バブル崩壊後の時期にむしろ油圧機器メーカーとの取引が拡大し、それ以前の時期よりも顕著な企業成長を実現した点にある。そこで本章では、バブル崩壊以降における企業成長を可能にした新たな事業展開について立ち入って検討する。

その場合、まず注目すべき点は、同社が油圧機器のメインスプール市場においてニッチトップの座を獲得し、それまでの「研磨の協立」から「スプールの協立」へと進化したことである。

なお、この点に言及する前提として、油圧システムおよび同機器に関して簡単にふれておきたい[12]。まず油圧システムの基本構成を示すと**図１**のようになる。そこにみられるように、同システムは、油圧ポンプで油（作動油）を圧縮し、その圧力エネルギーを利用するシステムである。油圧ポンプから排出された高圧の作動油は、制御弁で圧力、流量、方向を制御しながらアクチュエータに送られ、機械的エネルギーに変換される。この一連の動作にかかわる機器が油圧機器である。

こうした油圧ユニットは、大きく分けてポンプ、バルブ、アクチュエータの３つのコンポーネントにより構成されている。このうちポンプは作動油の圧力を発生するユニットの心臓にあたる。そこで発生した圧力や方向をコントロールするのがバルブ、上述のように油圧を機械的エネルギーに変える

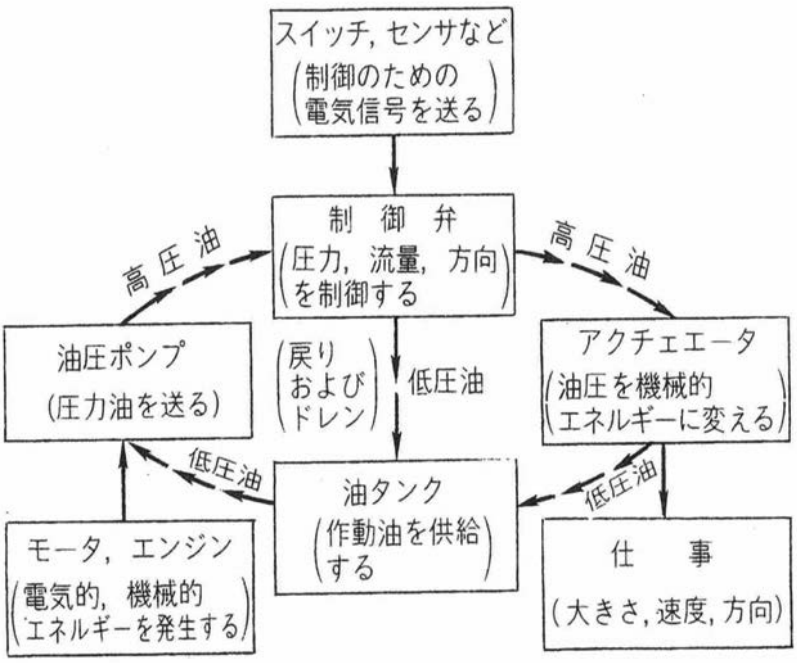
---

[10] ここで、国内の油圧機器メーカーについてふれておけば、兼業大手では自動車部品のカヤバ工業（東京都港区）をはじめ、川崎重工業（東京都港区）、ダイキン工業（大阪府大阪市）、不二越（富山県富山市）、東京計器（東京都大田区、旧トキメック）、島津製作所（京都府京都市）、東芝機械（静岡県沼津市）など、また専業大手は油研工業（神奈川県綾瀬市）などが存在する（金融財政事情研究会2012、36頁、同2016、38－39頁）。

[11] 以上、この時期の技術変化に関しては、中小企業基盤整備機構経営支援センター（2009）255－256頁による。

[12] 以下、油圧機器および油圧システムに関しては、金融財政事情研究会（2012）38－39頁、同（2016）41－42頁による。

図1　油圧システムの基本構造



（資料）高橋徹『メカトロ・エンジニアリング8 油圧・空気圧』パワー社、1998年。

のがアクチュエータである。

そして、協立製作所の中核製品となるスプールは、バルブやポンプのなかに組み込まれ、作動油の油量や流路の方向を調節・制御するキーパーツであった。なお同じくキーパーツとしてはシリンダーがあるが、同社はその製造には踏み込まないスタンスをとった。その理由は、シリンダーは約6割が材料費で占められており、同社が新規参入しても得られる付加価値が少ないと判断したからである（平沢2014b、105頁）。

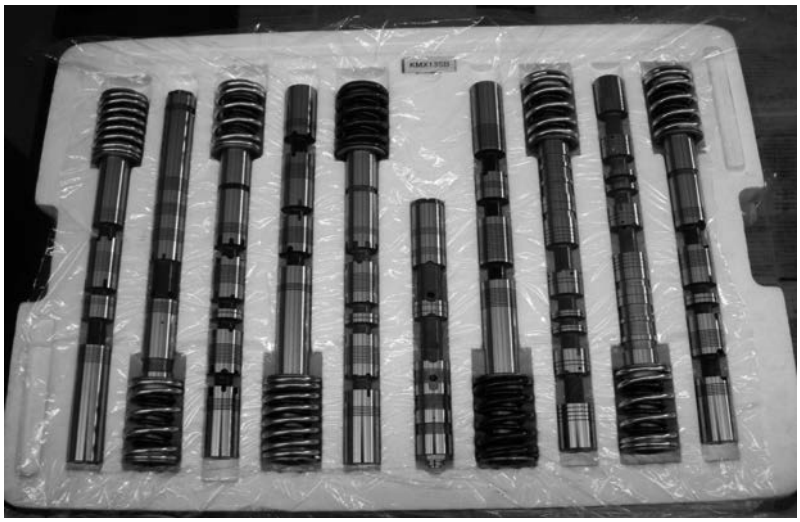
そうしたスタンスから、同社はポンプやバルブに組み込まれるスプールに絞る形で、ニッチトップ化を指向した。その場合、例えば油圧ショベル向けコントロールバルブでは、スプールを1台平均で9本使用する。協立製作所では、**写真1**にみられるように、同製品にスプリングやプラグなどを自社内でサブアッセンブルし、コントロールバルブ1台分のスプールセットとしてパッキングしたうえで出荷している。

同製品は農業機械やフォークリフトなどでも使用されるが、これらの市場で世界一のシェアを持つメーカーはスウェーデンの企業である。これに対して協立製作所は、油圧ショベル向けというニッチ市場で約40％の世界トップシェアを占める点に独自性があった。

このように、同社が、従来の「研磨の協立」から「スプールの協立」へと進化しえた主な要因として、スプー生産に関する自社内一貫体制が順次整備された点をあげることができる。具体的には、スプールは＜材料調達→機械加工→熱処理→研削加工＞の工程を経て製造される。その場合、最終工程である研削は、創業期以来、同社が蓄積してきた基盤技術であり、同社にとって競争力の源泉であった。

それに加えて、以下の点が重要である。第1は、茨城への工場建設を契機として、同地において機械加工技術が蓄積されていったことである。第2として、その過程において、同社では、以下の証言にあるように自社独自のノウハウや生産技術を盛り込む形で工作機械のカスタマイズに取り組み、機械加工工程を進化させた点である（平沢2014b、121頁）。

写真1　スプールセット



（資料）協立製作所提供資料。

我社の製品は大量生産ではなく、類似品の少量多品種生産です。そうすると頻繁に機械のセット替え、段取り替えがあります。例えばＡというスプールを作り、続いてＢというスプールを作る場合にはその都度、刃物が微妙に違うのでセット替えをします。そこで我社ではバーコードが世間に出回り始めた頃ですが、そのバーコードを使って刃物を効率よく交換して、ＡもＢもＣもＤも全部作れるような工作機械にカスタマイズしました。その時には、工作機械はこの機械メーカーに、バーコードリーダーは別の会社に、その他はこっちの会社にというように分けて発注したこともあります。これらは製造特許を取れるかもしれませんが、取得したからといって今度はそれを管理するのに多くの費用がかかりますし、模倣を立証することは結構難しい場合があります。

なお、こうしたカスタマイズでは、協立製作所が長年蓄積した独自のノウハウや生産技術が発注先の工作機械メーカーに漏れてしまう危険性をともなう。この点に関して、ニッチビジネスを展開する同社の特徴から、以下のような基本スタンスにたっている点が注目される（平沢2014b、120頁）[13]。

そうしたノウハウや設計が漏れてしまう可能性はあります。これに対して製造特許によってそれを防ぐという方法が考えられます。ただし我々は隙間産業に属するので、製造特許によって重要なノウハウなどを全部公開してしまうと、逆に模倣されやすくなるというリスクもあります。他社に真似された場合に、どこでどう真似しているのか調べるだけでも大変です。ですから、極力そうした特許戦略によらず、独自のノウハウのなかに閉じ込める形でやっています。

以上のように、協立製作所は、研削加工に加えて機械加工技術も基盤技術として蓄積していった。そして、1993年には、茨城工場敷地内にスプールの専用工場を新設して生産体制を拡充・整備するに至る（前掲**表２**）。

さらに第３として重要なのは、スプール生産において機械加工や研削加工とともに主要な工程であった熱処理に関しても内製化を実現した点である。先に指摘したように、スプールの製造プロセスに

[13] 改めて言うまでもなく、本文で指摘した点は、協立製作所が特許取得を全く行わないことを意味するものではない。実際、同社は一部の製造特許を含め、その取得にも取り組んでいる。

おいて熱処理は、機械加工と研削加工との中間に位置する工程である。したがって、1997年の熱処理工場の設立による同工程の内製化は、スプールに関するほぼ全ての工程を自社内でスムーズに行う体制が整備されたことを意味していた[14]。

しかもその場合、熱処理工場とスプール専用工場のいずれもが、茨城工場敷地内に設立された点にも着目する必要がある。すなわちそれは、前章でみたように茨城への地方進出当初は東京と茨城とで機械加工と研削加工を棲み分ける形で生産していた体制から、バブル崩壊以降の時期においては茨城工場で自己完結しうる体制が構築されたことを意味していた。前掲**表２**のように、同社は2009年に東京工場を閉鎖して茨城への統合を終了するに至るが、実質的には1990年代に茨城での一貫体制を構築したとみることができる。

２−２　事業の多角化：油圧部品の一貫生産からアッセンブル製品製造へ

さらにバブル崩壊以降における新たな事業展開として注目されるのが、油圧ポンプとバルブのアッセンブル製品製造への進出である。それにより協立製作所は、油圧スプールにおいてニッチトップの地位を確保したうえで、同部品をキーパーツとして内装するアッセンブル分野へと事業の幅を拡大していった。こうした新たな事業への参入に至った経緯に関して、日出男氏は以下のように述べている（平沢2014b、121－122頁）。

> 我社の製品が自動車部品のように数が多ければ専門の部品メーカーとしてやっていくこともあるのでしょうが、我社の主要製品は、車の部品が月産10万や100万個単位なのと比べて50個、100個、200個単位なのです。そうすると、そうした部品の生産だけをやっていくとどんどんと間接部門が膨れ上がってきて、最終的には規模の小さい会社とコスト競争で負けてしまいます。小さい会社というのは間接部門がなく、30 ～ 40人規模ならば社長が一人いれば全部できます。それが100 ～ 200人規模になってくると、１人じゃできないので生産管理とか品質保証などの部門を作ることになります。そうするとこれが間接部門となり固定費の増大につながります。そうすると、人数の少ない会社、間接部門が少ない会社と競争すると負けることになります。価格競争で負けるのならば、別な付加価値を求める必要があります。そこで我社は、部品製造のみでなくアッセンブルも手がけることになりました。部品の価格競争に巻き込まれないように、また次の企業成長につなげるということで、ポンプバルブの OEM 生産を手がけたのです。

以上のように、それまで量産品市場とは異なり多品種少量部品のニッチ市場を拠点としてきた協立製作所の場合、同市場で今後生じうる新規参入者の台頭とそれによる価格競争を回避しつつ、同時に今後の持続的な企業成長の実現を目的としてアッセンブル分野へと参入したことがわかる。

その場合、最初に手がけたのが**写真２**に例示したバルブのアッセンブル（以下、バルブ Assy と略称）であった[15]。具体的には、1996年に組立工場を茨城工場内に完成し、同製品の出荷が開始された（前掲**表２**）。

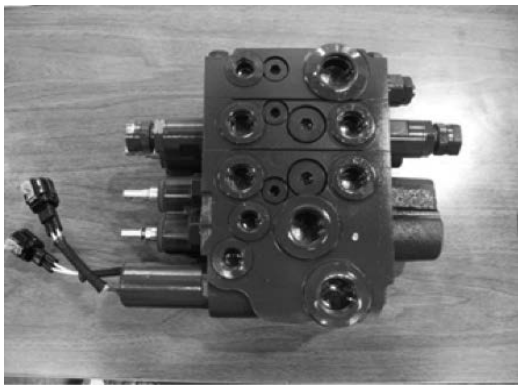
これらの製品は、＜材料調達→機械加工→熱処理→研削→組立→性能検査→塗装＞の工程を経て製造される。こうした一連の工程においては、部品製造レベル以上に様々な副資材品の調達ノウハウが必要であり、また新たに自社製部品以外の部品をも組み合わせる生産技術とともに性能試験や塗装設備・技術を必要とする。それゆえ、以下の証言からもうかがえるように、スプールのみならずバルブ Assy においても、協立製作所の独自性を発揮しうる余地があった（平沢2014b、119－120頁、［ ］内は引用者）。

---

[14] それとともに、同社の熱処理は一般的なそれにとどまらず、快削鋼を素材とする特殊処理なども行える技術を具備するに至っており、その面でも同社の競争力の源泉の１つとなっているといえる。

[15] 以下、協立製作所のアッセンブル製品の説明に関しては、同社提供資料および中小企業基盤整備機構経営支援センター（2009）による。

写真2　バルブ・アッセンブル製品



（資料）協立製作所提供資料。

「スプールを［手がけています］」というと、スプールという部品だけ作っているかのようなイメージを与えてしまいます。部品というのは必ずライバル会社が出てきて、もしくはお客さんが自分たちで作るということもあります。これに対して我社が手がけるポンプやバルブは簡単には追随できません。例えばポンプにはベアリングをはじめとして色々な副資材品をいっぱい使います。それらを安定して、しかも安く調達しなくてはいけません。つまり製品を作る技術と、多様な部品を調達する技術の両方が組み合わさらないと、うまくできないのです。もちろん油圧メーカーとか建機メーカーの大手さんは自分たちで事業部を持っていますのでそれが可能ですが、中小・中堅企業でそこまでできる会社というのは多くありません。我社クラスの会社は日本全国で10社無いのが現状です。

さらに、以上のバルブ Assy に続いて取り組まれたのが、**写真 3** に例示したポンプ Assy であった。なお、先にも指摘したように、ポンプは油圧システムにおいて心臓部にあたる重要度の高いパーツであった。その製造工程はバルブのそれとほぼ同じであるが、部品の集積度はバルブ以上に高いため、この技術を確立するために 5 年の時間を要したとされている（中小企業基盤整備機構経営支援センター 2009、258頁）。

写真3　ポンプ・アッセンブル製品

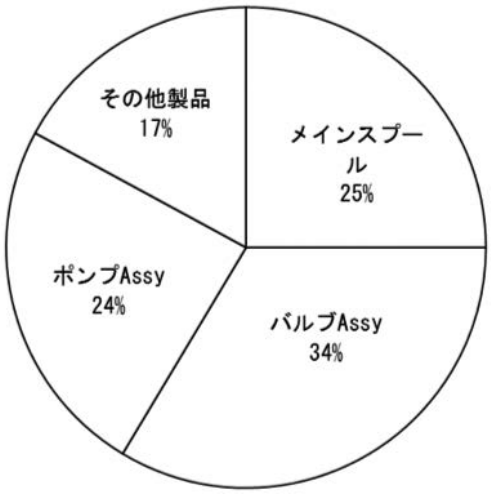
（資料）協立製作所提供資料。

加えて、ポンプ Assy はバルブ Assy とは異なり、取引先からの依頼があり、それに対応する形で取り組むことになった事業であった。それゆえ、以下の証言にあるように依頼先とのすり合わせ調整にも時間が必要となり、ポンプ Assy が本格的に稼働し、製品の出荷を開始するに至ったのは2004年であった（平沢2014b、122頁）。

我社は後発メーカーですから、見積もりでお客さんの希望通りの値段に到達するまでに２年ほどかかりました。図面をもらって、一点一点の見積もりをやって提出するまでに半年以上かかります。それで、いったん提出してもこれではまだ高いから駄目だということになります。そういうことをずっとやっていきながらようやく価格が決まり、「さあこれからやろう」と言うことになっても、今度は今まで作っていた先発の会社があるわけです。その会社は在庫を持っているし、ラインももっていますから、そことの調整に１年くらいかかります。その間我社は、材料で鋳物を作る場合は型を作ったりしています。それで最初はすごく時間がかかりました。

こうした一連の取り組みにより、協立製作所の製品別にみた売上げ構成もバブル崩壊以降大きく変化した。その場合、バブル崩壊以前においては、上述のように油圧スプールの専門メーカーとして、同製品の売上げがほとんどを占めていた。これに対して、2012年時点における製品別売上げ比率を示すと**図２**のようになる。そこにみられるように、「その他製品」[16]を除いた場合、スプール、ポンプ Assy がそれぞれ４分の１、またバルブ Assy が３分の１を占め、同社事業の３つの柱となるに至ったことがわかる。

図2 主要製品別売上比率（%）



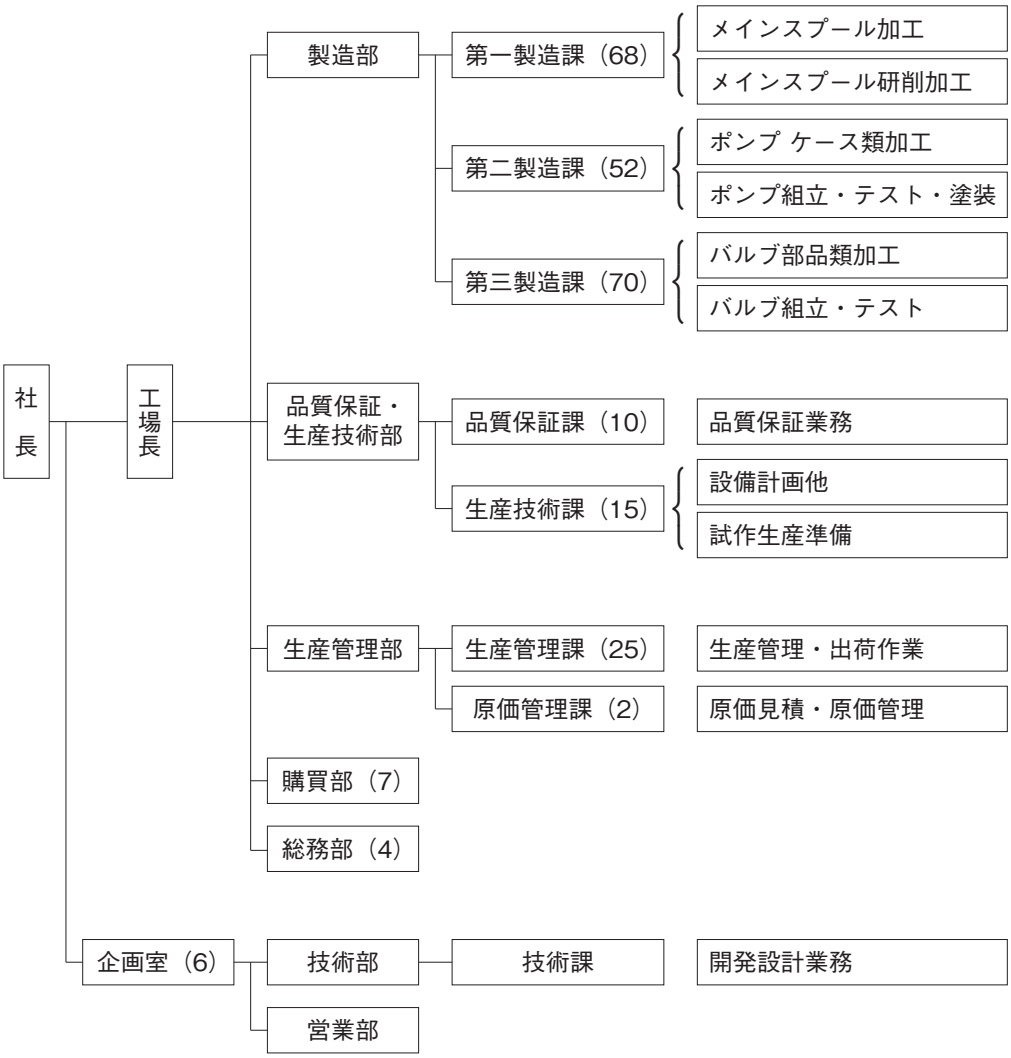
（資料）協立製作所提供資料より作成。
（注）2012年時点。

なお、部品・製品の販売単価でみた場合、Assy 製品の方がスプールのそれよりも高い。そのため**図２**において、売上額ベースでみた場合には、Assy 製品の比率がスプールのそれより高くなる点に留意する必要がある。その点を念頭におくならば、協立製作所としては、バブル崩壊以降においても、メインスプールでニッチトップの地位と評判を確保しつつ、そのうえでポンプとバルブ Assy 製品の売上増大をはかる展開を基本的な経営スタンスとしたといえよう[17]。

[16]「その他製品」とは、メインスプール以外の油圧専用部品（ポペット、スリーブ、小スプール等）であった。
[17] こうした経営スタンスに関する高橋社長自身の証言については、平沢（2014b）109－111頁を参照されたい。

さらに、こうした事業の多角化に対応する形で進められたのが企業組織の拡充･整備であった[18]。この点に関して、**図3**は2013年時点における協立製作所の組織を示したものである。そこにみられるように、同社の製造部はスプール製造部門を第1事業部（68名）とし、さらに組立部門のポンプ部門（第2事業部：52名）とバルブ部門（第3事業部：70名）の3つの事業部により構成されることになった。それとともに生産技術と品質保証および生産管理業務を重視する目的から、品質管理･生産技術部（25名）と生産管理部（27名）の充実がはかられたのである。

図3 協立製作所の組織と業務



（資料）協立製作所提供資料より作成。
（注）2013年時点（括弧内は配置人数）。

[18] 加えて、バブル崩壊以降の事業拡大の過程では従業員の採用を拡大していった。その場合、「バブル崩壊直後の頃で従業員が70～80人でしたが、そのうち外国人が30人くらいいました。……人が集めやすくなったのはバブルが崩壊してからです。バブル崩壊後に大企業が人を取らなくなってゆくと、だんだん我社にも直接人が来てくれるようになりました。」（平沢2014b､119頁）という証言からもうかがえるように、この時期、かつての人材調達難は解消されつつあったことも、そうした規模拡大を可能としたといえる。

2－3　取引関係の多角化と企業成長

以上のように、この時期の協立製作所は、工具の研削加工から油圧部品の研削加工をへて、スプール加工、バルブ Assy、ポンプ Assy の３事業を柱とする油圧製品の加工組立企業へと進化したといえる。

さらにこの時期の経営展開に関して注目されるのは、同社がスプールに関しては自社ブランドの確立を重視したのに対して、Assy 製品に関しては自社ブランドによる展開ではなく OEM 製品の組立てに特化した戦略をとった点である。その主な理由は、主要な取引先である建機および油圧メーカーの油圧事業部との競合と、自社ブランド構築にともなうサービスや営業拠点の整備等にかかる大幅な固定費増大を回避する点にあった。

しかしながら、その一方で、以下の証言にみられるように、たんに相手先から貸与された図面どおりに製造するのにとどまるのではなく、（１）OEM 生産をより円滑に立ち上げるために自社の設計能力の充実化に取り組むとともに、（２）取引先の製品開発過程に積極的に関与する提案型の営業をしながら取引関係の強化をはかっていった点にも注目する必要がある[19]。

> 我社は自社ブランドの製品は何も作っていません。OEM 製品の組立てに特化しています。そして、これらの製品を受注する際に設計の者がいないとお客様に有効な提案ができないということで、技術部に３名を配置しています。…よく色々な人に「なぜ自社ブランドを出さないのか」と尋ねられますが、理由は簡単で「自社ブランドを出すと、油圧メーカーやコマツ、日立さんなどの油圧事業部と競合することになってしまうから」です。それで我社は自社のブランド製品を出さず、あくまで OEM に徹しています。OEM はお客様の図面で作るだけなので付加価値は低いのですが、我社では設計者３名を抱え、彼らをお客様のところに２ ～ ３年ほど行かせて、そこの設計技術を学ばせています。そしてお客様との共同開発のなかで、提案型の営業をしながら取引関係の強化をはかっています。

さらに注目されるのは、バブル崩壊を契機として取引関係が大きく拡大するに至った点である。その要因としては、第１に、バブル崩壊後の景気後退局面において、それまでメインの取引先として販売高の約９割を占めていたカヤバ工業からの受注が激減したことがあげられる。

具体的には、スプール取引に関して、バブル崩壊以前にはカヤバ工業向けに約２万本 / 月を出荷していた。ところがバブルの崩壊により、取引数はそれまでの半分以下の水準である８千本 / 月へと急落した。さらに、カヤバ工業がスプールを内製化するに至ると、取引数は４千本にまで低下した。そこで、協立製作所としては、こうした事態を打開するために、今まで以上に新たな取引先を獲得する必要があったことによる。

その一方で、第２として、以下の証言にみられるように、バブル崩壊後に従来の系列的な取引関係が弛緩するなかで、協立製作所にとって新たな取引関係を結びやすい状況へと外部環境が変化した点にも注目する必要がある（平沢2014b、116－117頁）。

> 最初はカヤバ工業さんとの取引をメインにして、その後はカヤバ工業の油圧とバッティングしない会社とのみ取引をしていました。その方針が大きく転換したのはバブル崩壊以降です。それ以降になると、ほとんどの親会社が協力会社の面倒を見られるだけの余裕がなくなり、系列関係

---

[19] 以上、同社の OEM 戦略に関しては、平沢（2014b）111頁による。また設計能力を強化するために技術課を設立（前掲図３）した経緯に関して、高橋日出男社長は以下のように証言している。「我社では技術課になりますが、一人を中途採用し、彼を取引相手先に半年くらい行かせて、基本的なことを全て教わってこさせました。あとは３年か４年前に新卒で採用した者を、東芝機械さんへ２年間設計に行かせました。OEM 製品を作る場合には、自分たちで色々な提案をできる力が無いと駄目です。何かトラブルがあった時にその問題点を見つけるには製造の人間だけでは無理で、きちんとした技術の裏付けをもったある程度の専門家を技術スタッフとして用意していないと、なかなか話が円滑に進みません。」（同上、123頁）。

とか下請関係とかが非常に希薄になりました。我社の取引関係も同様で、メインの取引以外の開拓が必要になりました。……バブル崩壊というのは大変な出来事でしたが、従来の固定的な枠組みが崩れることになり、結果的には我社の取引相手を拡大することにつながりました。もしバブル崩壊がなければ、そうした変化はなかったと思います。

およそ以上のような状況を背景として、まずは1991年の川崎重工との取引を皮切りに、1992年に小松製作所（後にコマツ）との取引が開始された。さらにAssy製品を手がけるようになった後には、2001年に東芝機械（油圧機器事業部）およびキャタピラー三菱、2004年に三菱重工業（相模原製作所）およびハイエストコーポレーション、2005年（ポンプ製品）および2008年（バルブ製品）にコマツ、2009年に日立建機というように、次々と取引先を拡大していったのである。

ここで、2012時点における協立製作所の主要取引相手別の売上構成比を示すと、**図4**のようになる。なお、1980年代までに関しては、その9割をカヤバ工業との取引によっていた点は先に指摘した。これに対して同図にみられるように、それ以降になると取引関係の多角化を反映して、主要取引先4社がほぼ均等に2割前後（17～26%）を占める構造へと大きく変化するに至ったことがわかる。

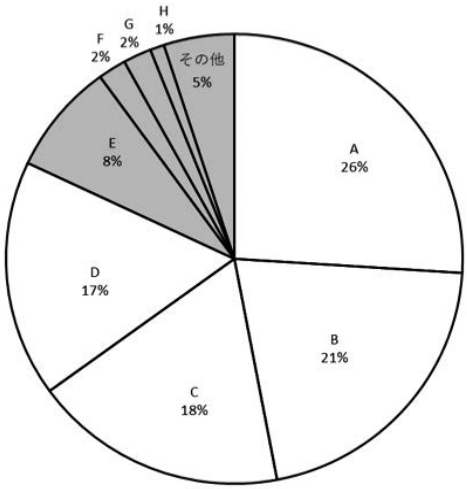
しかも、**図4**においてカヤバ工業との取引は主要取引先の1つではあったが、第1位の取引先というわけではなかった。その意味で、協立製作所の取引関係は、1980年代までの一社専属的なそれから、質的にも大きく転換したといえよう。

さらに、こうした多角化方針は、熱処理工程に関してもみることができる。その場合、協立製作所が1997年に熱処理工場を完成させ、加工から組み立て工程に至る一貫生産体制を整備した点については先に指摘した。これに対して同社は、2006年に熱処理工程を協立熱処理工業として分社化した。その概要を示すと**表3**のようになる。

表に示した設備による分社会社の熱処理が、これまでと同様に協立製作所の一貫体制を支えることに変わりはなかったが、それに加えてこの分社化は、同工程に関しても周辺地域（日立や水戸）との取引開始とその拡大を意図したものであった（平沢2014b、105頁）。

以上のように、バブル崩壊以降における協立製作所は、（1）油圧製品のスプールに関してはニッチトップメーカーとしての地位と評判を確保しつつ、（2）バルブとポンプの組立分野にも新たに参入しOEM供給に特化した戦略をとるとともに、（3）積極的に提案型の営業を展開することで取引

図4 主要取引相手別売上比率（%）



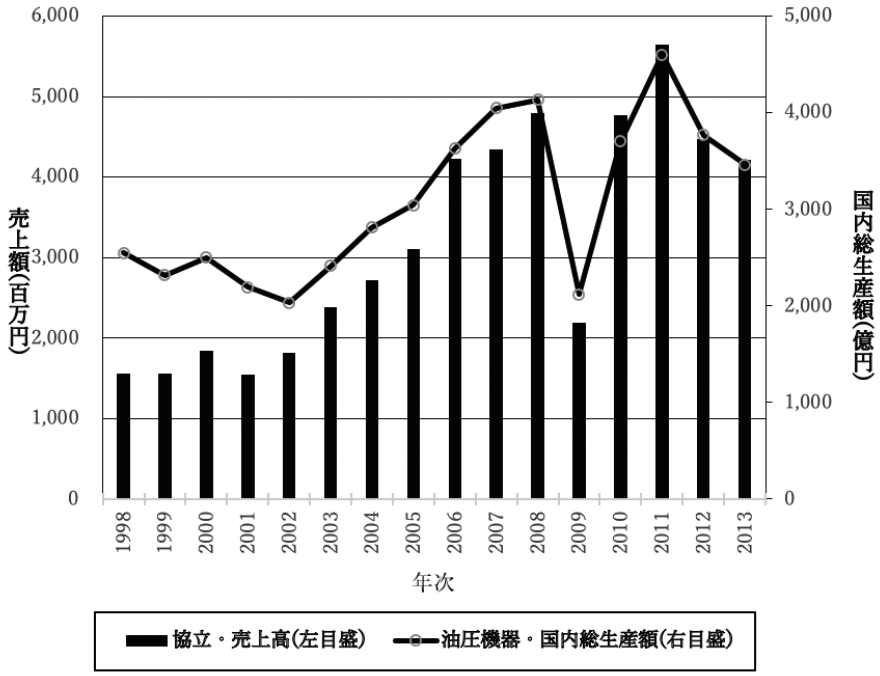
（資料）協立製作所提供資料より作成。
（注）　2012年時点。

表3　協立熱処理工業・会社概要

会　社　名	協立熱処理工業（株）
設　立　年	2006 年 2 月
住　　所	茨城県筑西市三郷（協立製作所内）
代　表　者	坂口哲郎
従 業 員 数	15 名
営 業 品 目	金属熱処理加工、ガス浸炭焼入、焼入・焼戻し、ガス軟窒化、真空熱処理、シャフト自動矯正、ショット、エアーブラスト処理
主 要 設 備	ガス浸炭焼入炉　4 基 ガス浸炭焼入軟窒化兼用炉　　1 基 真空熱処理炉（焼入れ焼戻し）　1 基
備　　考	24 時間全自動運転体制
	ISO9001 認証取得（2002 年 11 月）

（資料）協立製作所提供資料および同社ホームページhttp://www.kyoritsu-ss.co.jp/blog/
（2019年6月21日）より作成。
（注）主要設備：2013年時点、代表者、従業員、営業品目：2019年時点。

図5 協立製作所売上高と日本国内油圧機器総生産額の推移



（資料）協立製作所提供資料、帝国データバンク『企業名鑑』各年版、経済産業省
『生産動態統計・機械統計編』各年版より作成。

先の開拓・拡大をはかっていったととらえることができる。

そこで、このような新たな事業展開を推進した時期の同社売上高と、日本国内における油圧機器総生産額の推移をみたのが**図５**である。協立製作所の売上げは、1990年代前半期に12 ～ 13億円の水準で推移した（平沢2014b、108頁）。続いて1998年から2002年にかけては、国内の油圧機器生産額が2,550億円から2,035億円へと傾向的に低下してゆくなかにあって、同社の売上げは15.6億円から18.1億円へと増大した。

しかしながら、同社の成長が顕著になったのは2003年からである。同年から2008年にかけて、国内の油圧機器の生産が停滞から上昇基調へと転ずるなかで、同社の売上げも23.9億円から48.0億円へと倍増した。これは、この時期増産に転じた国内油圧機器メーカーからの発注の増大に協立製作所が適応し得た結果といえるが、同時にそれまでの部品だけを製造する部品専業メーカーから脱皮して、バルブやポンプ Assy の OEM 生産を手がけるなで、取引先の拡大による受注増大がもたらした結果でもあったととらえることができよう[20]。

3. バブル崩壊以降における海外展開

3－1 中国（上海）における現地子会社の設立

以上、前章では、バブル崩壊以降における企業成長を可能にした新たな事業展開について検討してきた。これに対して本章では、この時期の企業成長を支えたもう１つの要因として、海外現地子会社の設立とその事業展開について検討することにしたい。

協立製作所は、1991年に上海市松江工業区に、海外現地子会社として上海協立機械部件有限公司（以下、上海協立と略記）を設立した。**表４**は、その概要を示したものである。その場合、まず第１に注目されるのが設立時期である。日本企業の海外事業展開は1985年のプラザ合意以後の円高を契機と

表4　上海協立機械部件有限公司・会社概要

住　　所	上海市松江工業区東部新区新飛路
設　立　年	1991 年 6 月　（外資系企業登録番号 69）
建 築 面 積	3,300㎡
資　本　金	110 万 US ドル
理　事　長	高橋日出男
総　経　理	張惠強
従　業　員	28 名
売上構成比	日本協立製作所向け（10%）、上海進出日系メーカー向け（40%）、欧米メーカー向け（50%）
主要取引先および部品	協立製作所：アウトレットハウジング、ブラケット 上海ナブテスコ : ブレーキバルブ用ピストン、スプール、プラグ 米国 HUSCO：インレットハウジング、ボディ 仏国 TOKHEIM：カムリング、ローター、シャフト

（資料）協立製作所提供資料より作成。
（注）2013年時点。

[20] なお、**図５**に明らかなように、同社の業績はリーマンショックの影響により2009年に急落した。しかし、2009年10月に中国が３ ヶ年にわたり総額４兆元の公共事業を発表し、それを契機として中国における油圧ショベルを中心とする需要が増大するなかで、同社の業績もＶ字回復をとげた。しかし2011年の東日本大震災により茨城工場が被災し、再び業績は低下した。また上述の中国による大型公共事業が終焉するのにともない、同社の売り上げも最高を記録した2010年に比べて、それ以降減少傾向にあることがわかる。

して積極化したが、特に中小企業においては1990年代後半以降、進出企業数が増大していった（中小企業庁2008、同2009）。

その一方で、常陽地域研究センターの調査によれば、この時期の茨城県に関しては、第２次産業比率（37.3％）では全国平均（26.5％）と比べ高い位置にあるものの、海外進出比率（0.6％）は全国平均（2.3％）より低い水準にあったことが明らかにされている[21]。

また、企業城下町型産業集積地域として知られる日立地域に着目した場合、協立製作所と同じ上海市松江工業区へ進出した中小企業として亀屋工業所と那珂製作所がある[22]。両社は日立地域下請企業の海外展開における先駆として位置づけることができるが、上海に現地子会社（上海亀屋電気、上海坂井塑料成形）を設立したのは、それぞれ1995年、1996年であった。

海外事業展開をめぐる以上の状況を踏まえた場合、協立製作所のそれは、海外進出比率が相対的に低い茨城県にあって、また日立地域の動向と比べても早い時期における進出であったとみることができよう[23]。

さらに第２として、その展開は、（１）国内生産設備の海外移転とそれによる国内生産の縮小を意図したものではなく、また（２）取引先の海外進出に追随したもの、あるいは（３）取引先からの要請に対応した進出とは異なっていた。

ちなみに、上述の常陽地域研究センターの調査によれば、この時期、茨城県内に立地する中小製造企業のうち、既に海外進出している企業の約３分の１が取引先からの要請を受けて進出したとされている（常陽地域研究センター 2012、図２－７）。この点は、先に例示した日立地域下請企業の海外展開においても同様であり、上海亀屋電気、上海坂井塑料成形とも、主要取引先である日立製作所上海工場の設立（1995年12月）に呼応する形で設立されたものであった[24]。

これに対して、協立製作所の進出は、以下のような理由によるものであった（平沢2014b、126頁、（　）内は引用者）。

> 実は、ここ（茨城工場）でもし人を集めることができ、工場の拡張が順調にいっていれば、多分上海への進出など考えなかったと思います。ところが私が茨城に来てから７、８年後に土地の用途変更があり、ここが市街化調整区域に入り、工場の操業あるいは増築が制約されるかもしれないということになりました。私も色々手を尽くし、なんとかやっていけることになるまでに２年半もかかりました。私が39歳くらいの時ですが、こうした状況に嫌気がさして、このような状況が続くのならば、私が60歳を超えた頃にはこの仕事を辞めなくてはならないかもしれないと思うぐらい悲観しました。…… それで、どうせリスクがあるのならば、日本でいつ建築許可が下りるかわからないのをじっと待つだけではなく、同時並行して中国への進出を考えるようになりました。

以上の引用からもうかがえるように、同社の場合は、茨城での企業成長にともなう制約要因であった人材の調達難および工場の拡張制限をクリアするために海外展開に踏み切ったといえる。これに対して、新たな進出先としては日本国内他地域の工業団地等も考えられるが、この点に関して同社は以下のような認識に立っていた（平沢2014b、127頁）。

---

[21] ここで海外進出比率は、2009年時点における海外進出企業数／事業所総数（従業者10人以上）を算出したものである。以上、調査結果については、常陽地域研究センター（2012）17－24頁による。

[22] 亀屋工業所は1939年創業で、本社は日立市神峰町にあり、洗濯機、衣類乾燥機、食器洗い機等の電気制御部品および小型精密モータ、小型ポンプ等の開発、製造、販売を主要な事業とする。また那珂製作所は那珂市鴻巣にて1967年に創業し、1971年以降は家電部品（洗濯機、掃除機等）のプラスチック射出成形を主要事業とする。同社は2001年に株式会社泉製作所と合併し、その工場は泉商事株式会社第二工場へと改名された。

[23] なお、同社の中国における外資系企業登録番号は69番であった（**表４**）。

[24] 以上、『日経産業新聞』1997年２月26日による。

我々のようにいつも人手不足で困っているような会社が、山形とか岩手といった東北の工業団地に入ったとします。ところがその団地に後から大企業が入ってくるとします。大企業が入ってくると、福利厚生などの面で中小企業はかなわないので、結局働き手がそちらに流れてしまう。それで、地場企業が疲弊しているという事例がありました。それでどうせ苦労するのならば、いっそのこと中国へ出ようということを考えました[25]。

3－2 現地販売拡大への方針転換

およそ以上の経緯により、協立製作所は、東京から茨城への進出を経て、1990年代以降になると茨城と上海での生産体制の構築へと転換していったととらえることができる。

その場合、進出当初、上海協立はコストメリットを活かした部品加工を行い、それらを全て日本へ輸出し、本社が品質保証をしたうえで販売した。これに対して茨城の工場は、付加価値の高い製品の製造を担うという形で両者の棲み分けが行われていた。

ところが、こうした関係に転換を迫る重要な契機となったのが、1998年に生じたアジア通貨危機であった。具体的には、同危機の影響により上海協立が担う部品への受注量が激減し、日本本社から上海協立へのオーダーが皆無となる事態が生じたのである。

これを契機として、（1）日本本社向けの目標比率を従来の100％から20％へと変更したうえで、（2）残りの80％については現地営業により本社以外の取引先を精力的に新規開拓し、現地販売の自由度を大幅に拡大する方針へと転換した。この現地取引関係の拡大に関して、高橋氏は以下のように証言している（平沢2014b、128頁）。

最初は、私の関係で、アメリカのメーカーをお客さんから紹介してもらいました。「今度こういう会社ができるから部品の供給をしてほしい」と言われて、アメリカのメーカーと取引が始まりました。なお上海には、その昔、油圧局という役所がありました。中国語では液圧と書きますが、そこが民営化されて上海液圧駆動総公司になりました。精密部品を調達するために世界中の人たちが上海に来ると、まずこの上海液圧を表敬訪問します。訪問した際に、精密部品を作るところを紹介してほしいと言うと、我社は進出が早かったこともあり、大抵は我社を紹介してくれます。フランス、デンマーク、オランダ、スペインの会社は、皆そこが紹介してくれました。

以上の証言からもうかがえるように、先の方針転換による取引関係の多角化は、協立製作所が日本の中小製造企業のなかでは比較的早い時期に上海で現地化していたこともメリットとして機能したといえよう。

その結果、上海協立は、日本の油圧機器メーカー（ナブテスコ）の子会社である上海ナブテスコとの間でブレーキバルブ用ピストン、スプール、プラグなどの取引を開始するとともに、フランスTOKHEIMとは軽油・ガソリンを給油する際に使用する業務用給油ポンプ向けコアパーツ（カムリング、ローター、シャフト）を、またアメリカHUSCOとはインレットハウジング、ボディ部品等の取引が実現するに至った[26]。

以上により、上海協立の取引先は、前掲**表4**に示したように、日本本社向けは10％にまで低下する一方で、同地に進出した日系メーカー（売上比率40％）にとどまらず、欧米メーカー（同50％）にも拡大した。このように、協立製作所の海外事業展開は、当初の目的である日本（茨城）での成長制約要因を緩和するだけなく、現地進出企業との取引拡大を実現することによっても、同社の企業成長を支える役割を果たすに至ったといえよう。

---

[25] さらに進出先を上海としたのは、現地工場を立ち上げるにあたり、「昔我社に勤めていた優秀な中国人が当地にいたから」であったことによる。なお、上海協立の設立は2人の中国人により行われたが、その2人はともに協立製作所茨城工場にかつて勤めていた人物であった（以上、平沢2014b、125頁）。

[26] 以上の主要取引以外では、風力発電用の部品を同地で作り、ヨーロッパ（デンマーク）へと輸出している。

おわりに

本論文では、茨城（筑西市）に生産拠点を置き、ニッチトップ型中小企業として独自の活動を展開してきた協立製作所を事例に取り上げ、その地方移転と国内および海外における事業展開について明らかにしてきた。それらの知見をもとに、協立製作所がニッチトップ型企業として歴史的にどのように進化をとげてきたのかについて、簡単にまとめると以下のようになる。

まず重要なのは、第１章でみたように、切削工具の研磨企業として出発した同社が、油圧部品の切削を新たに手がけたことである。それにより、前者の事業のみに依存していた場合に生じたであろう倒産の危機を回避するとともに、油圧部品加工の専門企業として再出発する足がかりを得たといえる。そのうえで1970年代初頭に東京から地方への工場移転を契機として油圧部品の一貫加工体制を整備することで、石油危機後の経営安定を実現して同社発展の基盤を形成した。

しかしながら、同社が、それまでの一社専属的な下請型事業展開から、ニッチトップ型企業のそれへと本格的に転換するに至るのは、バブルが崩壊した1990年代以降であった。この点、第２章でみたように、日本国内においては、（１）油圧機器のメインスプールというニッチ市場においてトップシェアの座を獲得することで、ニッチトップ型企業としての評価を確立するとともに、（２）部品の加工のみならず、自社のスプールを採用した油圧バルブならびにポンプ製品の組立てを新たに手がけることで事業の多角化と取引関係の拡大をはかった。

さらに海外展開においては、第３章でみたように、同地域内の中小製造企業のなかでは相対的に早い時期に、中国へ現地工場を設立した。しかもその進出は、国内生産設備の海外移転による国内生産の縮小を意図したものではなく、また取引先からの要請に呼応する形で進出した下請企業とも異なり、日本国内における生産拡張の制約を克服するとともに、現地での新たな取引関係の形成・拡大を意図した主体的で積極的なものであった。

およそ以上の国内および海外における新たな事業展開の結果、協立製作所は、日本経済がバブル崩壊以降、「失われた10年」といわれる停滞局面にあるなかで、むしろそれ以前より高い企業成長を実現するに至った。しかもその場合、同社は茨城県筑西地域を拠点とする基本スタンスを保持し続けており、その意味で地域に根ざしたニッチトップ企業として発展してきたといえよう。

以上を踏まえ、本論文の最後に、協立製作所による事業展開の特徴を、同じく茨城を代表するニッチトップ型中小企業である野上技研のそれと比較すると**表５**のようになる[27]。

そこにみられるように、両社とも、創業者からの事業継承と大都市からの地方移転を契機として独自の生産体制を構築し、それをもとにニッチトップ型中小企業へと転身するに至った点、さらに提案型営業に取り組み、取引関係の拡大・多角化に務めることで持続的な企業成長を指向している点で共通した特徴を有している。

その一方で、国内の移転先を活動拠点としながらも、事業展開の基本スタンスとしては、野上技研が自社製品の製造販売を基本とするのに対して、協立製作所はOEM供給に特化している点で大きく異なる。また海外事業展開に関しても、野上技研が輸出を基本とするのに対して、協立製作所は現地子会社による活動を積極的に展開している点で対照的といえる。

もちろん、本論文は、両社のうちどちらが理想型かといった議論を意図するものではなく、むしろ

[27] ここで野上技研およびその事業展開に関して簡単に紹介するならば、同社は精密研削、精密プレス加工、同金型の設計・製造を主要事業とする。1970年に目黒にて創業し、1987年に茨城（常陸大宮）に工場を移転し、以後同地を拠点として事業活動を展開するに至った。工場移転とほぼ同時期に創業者の長男（野上良太氏）が入社し、良太氏が中心となって新規事業（精密プレス事業）に取り組み、自社製品を開発・製造・販売することでニッチ市場を開拓してニッチトップ企業として発展するに至った。その意味で、同社は、創業者から２代目へと事業継承を実現し、２代目が中心となって1990年代に「第２の創業」を実現した企業でもある。さらに同社は、上記３つの事業を基盤としてソリューション事業を展開するに至っており、その観点から提案型営業を重視している。海外展開にあたっては、現地子会社の設立には慎重であり、常陸大宮を拠点とするスタンスは保持しつつ、欧米におけるニッチ市場の開拓を積極的に行い、輸出による販路拡大に取り組んでいる。以上詳しくは、平沢（2019）を参照されたい。

表5　茨城におけるニッチトップ型中小企業の比較－共通点と相違点－

項　　目	協立製作所	野上技研
ニッチトップ製品の存在	○	○
事業承継	○	○
大都市からの地方移転	○	○
事業展開の基本	OEM	自社製品の製造販売
提案型営業	○	○
現地子会社の設立	○	×

事例の豊富化によりニッチトップ企業の多様な存在を明らかにすることに主眼がある。こうした視点に立った場合、今後の地域経済の再生・活性化にとって、(a) 企業城下町のなかにあって経営革新により自立化を進める下請企業や[28]、(b) 同地域内にありながらも独自の企業活動を展開する独立系企業[29]などとともに、(c) 企業城下町型産業集積の周辺にあって、そうした立地条件に制約されない形で革新的な企業活動を展開する協立製作所や野上技研のようなニッチトップ型企業も、新たなキープレイヤー＝地域貢献型企業としての役割を担うことが期待されているといえよう[30]。

参考文献

植田浩史（2004）『現代日本の中小企業』岩波書店
橘川武郎（2007）「地域経済活性化への応用経営史的アプローチ」（『企業研究』12号）
金融財政事情研究会（2012）『第12次業種別審査事典』第５巻、きんざい
金融財政事情研究会（2016）『第13次業種別審査事典』第５巻、きんざい
経済産業省『生産動態統計・機械統計編』各年版
後藤康雄（2015）「我が国のニッチトップ企業のマクロ的概観」（『経済のプリズム』142号）
常陽地域研究センター（2012）「海外進出に挑む中小製造業」（『JOYO ARC』2012年４月号）
高橋徹（1998）『メカトロ・エンジニアリング８ 油圧・空気圧』パワー社
高橋日出男（2009）「茨城への道」（１）～（４）（協立製作所「会社ヒストリー」http://www.kyoritsu-ss.co.jp/blog/ 2013年６月４日）
高橋日出男（2010a）「創業への道」（１）～（５）（同上）
高橋日出男（2010b）「油圧との出会い」（１）～（２）（同上）
中小企業基盤整備機構経営支援センター（2009）『中小製造業の技術経営に関する調査研究報告書』
中小企業庁（2008）『中小企業白書』2008年版、ぎょうせい
中小企業庁（2009）『中小企業白書』2009年版、経済産業調査会
難波正憲・鈴木勘一郎・福谷正信（2013）『グローバル・ニッチトップ企業の経営戦略』東信堂
平沢照雄（2014a）「< 地域に拘る企業 > の創業理念と経営改革－多摩川精機の取り組みを事例として」

[28] その一例として平沢（2017a）を参照されたい。
[29] その一例として平沢（2017b）を参照されたい。
[30] 地域経済の発展期に機能し、地域内に蓄積されてきたメカニズムが、外部環境の変化に適応できず停滞する状況を「地域的ロックイン」（regional lock-in）と呼ぶことがある。Martin と Sunley は、他地域からの工場移転が移転先に 新たな産業や技術を搬入することとなり、こうしたロックインからの開放＝新たな発展経路を創出する源泉の１つとなることを指摘している（Martin and Sunley 2006, pp.419－420）。協立製作所および野上技研の事業展開は、そうした可能性を内包する事例として注目することができる。

（『経営史学』49巻２号）
平沢照雄（2014b）「オーラルヒストリー 茨城におけるものづくり企業経営史－協立製作所・高橋日出男社長に聞く」（筑波大学『経済学論集』66号）
平沢照雄（2017a）「企業城下町日立における自立指向型中小企業の産学官連携と海外事業展開－スターエンジニアリング社の取り組みを事例として」（『国際日本研究』９号）
平沢照雄（2017b）「企業城下町日立における独立系中小企業の製品開発と事業展開―TMP 社の取り組みを事例として」（筑波大学『経済学論集』69号）
平沢照雄（2019）「ニッチトップ型中小企業の地方移転と事業展開―野上技研株式会社を事例として」（筑波大学『経済学論集』71号）
藤本武士・牧田正裕（2015）『グローバル・ニッチトップ企業の事業戦略』文理閣
細谷祐二（2014）『グローバル・ニッチトップ企業論』白桃書房
細谷祐二（2017）『地域の力を引き出す企業』筑摩書房
Ron Martin and Peter Sunley（2006）, Path dependence and regional economic evolution, *Journal of Economic Geography* 4 （６）

［付記］本論文の作成にあたり、聞き取り調査、資料提供、事実確認にご協力くださった株式会社協立製作所および同社社長高橋日出男氏に対して記して感謝の意を表したい。また本誌査読担当の方々から貴重なコメントを賜った。なお本研究は、日本学術振興会（JSPS）科研費（課題番号18K01718）の助成を受けた研究成果の一部である。

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 45-62
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

論文

日本とドイツにおける協同組合金融機関の歴史的比較研究

Comparative Historical Study on Cooperative Banks in Japan and Germany

田中　洋子（Yoko TANAKA）
筑波大学人文社会系　教授

田中　光（Hikaru TANAKA）
中央大学経済学部　准教授

ドイツと日本の工業化の過程においては、協同組合が地域経済を支える金融機関として重要な役割を果たした。ドイツでは19世紀中葉に生まれたライファイゼン貸付組合、後のライファイゼンバンク、VR バンク、日本では20世紀初頭からの産業組合、後の農業協同組合、JA がそれにあたる。これらの協同組合金融機関は戦後に入ってからも両国で発展を続け、高度経済成長期をへて民間大銀行にも劣らない規模の中央組織を形成しながら成長してきた。ところが、こうした両国の共通性にも関わらず、21世紀に入る前後から日本とドイツにおける協同組合金融機関の社会的評価は大きく分かれている。日本では農協無用論が論じられる一方、ドイツでは協同組合銀行の評価が特にリーマンショック以降大きく上昇し、持続可能な経済を実現できる担い手と高い評価を受けるようになっている。

本論文は、これまでの研究史でほとんど扱われてこなかった協同組合金融機関の日独両国での発展と近年の評価の大きな分岐に着目し、このような変化がどうして出現してきたのかを歴史的な日独比較を通じて明らかにする。特に、協同組合金融機関がその歴史的誕生時から、農村部の日常的な経済活動を支える金融需要を少額融資という形で満たすという、地元密着型の金融活動をしてきたことの意義に注目する。本論文は、ドイツと日本の協同組合金融機関の歴史的展開と戦後の活動を考察する中で、こうした地域経済の小規模で多様なニーズに対応した金融活動の継続性を検討した。その結果、日本の協同組合金融機関では、農業以外に融資をするべきではないとする政治的な圧力によって多様な地元の金融需要に応えることが難しくなり、余った金の投資に失敗する一方、ドイツにおいては持続可能な社会のためのさまざまな地元の小規模な金融需要に応えていく方法を拡大させながら発展していることが明らかになった。

In the industrialization process in Germany and Japan, cooperative banks have taken a significant role to support local economy in the agricultural regions. In Germany it is Raiffeisen-kasse, born in the middle of 19th century, now Raiffeisenbank/VR Bank, and in Japan it is Sangyo-kumiai (cooperative), born in 1900, now Japan Agricultural Cooperatives (JA). These cooperative banks kept developing after the second World War and high economic growth, making their central bank competitive to the biggest private banks in both countries. In spite of many similarities in two countries, however, their social evaluation became critically divergent particularly in 21st century: in Japan claims on abolition the cooperatives have become louder, while in Germany, especially after Lehman-shock, the cooperatives got more evaluated as an important means of sustainable development.

Here we focus on the similar but divergent development of cooperative banks in Germany and Japan, which have been seldom dealt in academic discussions, and examine why this kind of divergence made its appearance through historical comparative study on two countries. Particularly we focus on the significance of the community-based role of cooperative banks which responds to the diversified local financial needs through their microcredit loans. We examined the continuity and disconnection of this financial activities of cooperative banks in the local economy through their historical development before

and after the War. As a result we could argue that on one hand in Japanese cooperative banks they have been exposed to the continuous political pressure that their financing would be limited only to agricultural loans, so that they could not adequately respond to the more diversified small credits. On the other hand in Germany, just as the example of GLS Bank shows, they have developed methods to respond the more diversified financial needs in local economy, where cooperative banks were evaluated as the means for sustainable development.

キーワード：協同組合金融機関、小規模金融、産業組合／農業協同組合／ JA、VR 銀行（フォルクスバンク、ライファイゼンバンク）、GLS 銀行

Keywords：Cooperative Banks, Micro Credit, Japan Agricultural Cooperative, VR-Bank (Volksbank, Raiffeisen Bank), GLS Bank

はじめに

工業化と経済発展の歴史において、協同組合が地域経済を支える金融機関として大きな役割を果たしてきた典型的な事例としてドイツと日本をあげることができる。ドイツの協同組合銀行は、19世紀半ばに都市部と農村部の双方で誕生して以来、20世紀から21世紀にかけて、農民や小営業者への少額融資機関として発達を続け、民間大銀行と並ぶまでに発展してきた。ドイツの協同組合から学んだ日本においても、1900年の産業組合法の制定以来、着実に全国に広がり、少額融資を通じて地域経済を下支えする金融機関として、経済的機能の重要性を増していった（田中2015；田中2018）。工業化の進展の中での協同組合金融機関の役割は、日独両国の戦後の高度経済成長期、経済の奇跡の中でも一貫して増大を続け、今日に到るまで両国経済の大きな金融的役割を担い続けている。

特に農村部における協同組合金融機関としては、日本においては産業組合を引き継いだ農業協同組合、JA が、ドイツにおいてはライファイゼン貸付組合を引き継いだライファイゼンバンクが、歴史的にも現在でも、地域経済で重要な金融的役割を果たしている。その経済規模は、注目される機会が稀ではあるが、民間大銀行に匹敵するほど巨大であり、ドイツのシュピーゲル誌は「隠れた金融コンツェルンのトップグループ」とも評した（Spiegel 1988）。日独の協同組合銀行は、百年以上続く長い歴史的背景を持ち、少額融資等を通じた地域経済の循環の下支えという機能を果たし、それが巨大な金融機関として大きな経済的影響力を有するという点において、多くの共通点を持っていると考えられる。

ところが近年、特に2000年代以降になり、日本とドイツの協同組合金融機関をめぐる状況は大きく分岐してきた。日本では協同組合系の金融機関に対するさまざまな非難や時に強い批判が行われるようになった。日本には農業協同組合（JA）・信用組合・信用金庫などの協同組合金融機関があるが、中でも JA は時代に対応していない古い組織として政治的改革の対象とされるなど、必ずしも高評価を受けなくなった。バブル崩壊後に中央金融機関である農林中金が不良債権を抱えたこともあり、農協不要論が起こった（青柳1997:152）。2008年には農林水産省の元官僚によって「こんな JA は要らない」とする論説も発表された（山下2008:20-23）。そうした論調を受け、第二次安倍政権下では「JA 全中全廃」論のように農協の活動を大きく制限しようとする政策的動きもあり（日本経済新聞2015）、それは現在まで続いている。日本における近年の議論では、協同組合系の金融機関は概して時代遅れで停滞、縮小傾向にあるものとして評価されており、新しい社会経済状況にうまく適応できない金融メカニズムだと判断されることが多いと言える。

これに対してドイツは日本とは対照的な展開をとげている。ドイツでは近年、協同組合銀行の信用力がますます増加し、社会的・経済的により高く評価される方向が進んでいる。1990年代以降も一貫して発展を続けただけでなく、2000年代、特にリーマンショックによる経済不況以来、全国的に協同組合銀行への信頼が高まり、ドイツ銀行などの民間投資大銀行から協同組合銀行への大規模な資金の移動が起った。さらに、地域における少額融資の必要性に対応する、新しいタイプの社会的投資を行う協同組合銀行も急成長している。アンゲラ・メルケル首相は、協同組合銀行を「経済のグローバル化の中で地域経済を守り、人々の新たな必要性に応えていく存在」だと位置づけ、「グローバル経済

の時代にこそ必要な金融組織である」と積極的に評価した（Bundesregierung 2012）。つまりドイツでは日本の論調と大きく異なり、協同組合銀行こそ、グローバル化した社会経済状況に適合的な組織であり、新しい時代を切り拓く金融機関であると評価されているのである。

なぜ日本とドイツでこのように協同組合金融機関の評価が大きく分かれてしまったのであろうか。なぜ一方は政府によって組織の縮小・廃止が意図され、他方は政府から持続的発展の担い手として大きな期待が寄せられているのか。それには、協同組合銀行が歴史的に果たしてきた金融的機能が日本とドイツで近年分岐してきたという背景があると考えられる。

そもそも19～20世紀の工業化過程から戦後高度経済成長期にいたるまで、日本とドイツでは共通して、農村部の協同組合とその金融機関が地域に密着した金融ニーズに少額融資で応えることを通じて発展し、これにより地方経済が自立化、活性化し、国全体の経済を下支えすることになった（田中2018）。この意味で日独の協同組合金融機関の機能はよく似た面を持っていた。しかし、それにもかかわらず、両国の協同組合金融機関の発展や評価が近年異なってきたのは、歴史的な発展の動因であった機能、つまり小さな地域に密着した形で、そこでの金融ニーズに少額融資で応え、それによって地域経済を支えるという本来の協同組合の機能において、特に日本になんらかの変化が生じたからではないだろうか。

ここではこうした問題意識にもとづき、日本とドイツの協同組合金融機関の誕生から戦後までの歴史的発展を確認する中で、日本とドイツの協同組合金融機関の近年の評価の分岐を生み出した要因を、地域密着型の少額金融がどのように展開、あるいは変質してきたのかという観点から考察していきたい。

これまで日本でもドイツでも、協同組合金融機関の経済的役割について本格的に論じた研究は限られており、学問的に大きく注目されることはほとんどなかった。ドイツについて言えば、戸原四郎の研究（戸原1960）を代表とする民間大銀行研究が主流を占めており、ユニバーサル銀行としての特質や銀行と証券・投資との関係が論じられることが多かった（相澤1994；居城2001；飯野2003 ）。もう一つのドイツの金融の柱である貯蓄金庫・貯蓄銀行（Sparkasse）の研究（ Trende 1957；三ツ石2000）と比べても、協同組合銀行についての研究の多くは、関係する当事者による社史・伝記・報告書に限定される（Raiffeisen, F.W. 1866, 1887, 1966；Deutscher Raiffeisenverband e.V. 1949；Hönekopp 1977；DZ Bank 2017：Stappel 2018；帝国農会1913；産業組合中央金庫 1927；ライファイゼン1966）。ライファイゼン組合の誕生前後を分析した村岡の歴史研究（村岡1997）、ヨーロッパにおける協同組合についての歴史研究であるファウストの大著（Faust 1965）、協同組合銀行の現在の組織と機能を分析した田渕の研究（田渕 2010; 同2014）はあるものの、国内外を通じて少ない。

日本については、戦前の農村部における協同組合の役割に関しては個別事例研究を含め多くの歴史研究の蓄積がある（篠浦1972; 森2005; 大門2006; 万木2019）。ただし協同組合による金融機関が地域経済に果たした役割に焦点を絞って行われた研究は限られている（田中2018）、また、第二次世界大戦後の協同組合金融機関に関しては、ドイツ同様社史・伝記・報告書に留まるか、同時代の現状分析の蓄積に留まっている。戦前から戦後の協同組合金融の役割と影響について一貫した視野から歴史分析を行う試みはまだ日独双方において少なく、長期的・歴史的視野からの分析という意味では、協同組合金融の研究はようやく端緒についた状態だと言える。

そこでここでは、日本については産業組合を引き継いだ農業協同組合＝農協＝JA の金融機関を対象とし、ドイツについては協同組合銀行ファイナンシャル・グループ、中でも日本の JA に匹敵するライファイゼンバンクと、その中の新進気鋭の銀行である GLS 銀行をとりあげ、日独の協同組合金融機関の歴史的国際比較を行う。主に同時代資料を用いて分析を進めるが、ドイツについてはインタビュー調査および文書館資料にも依拠する[1]。

---

[1] ドイツについては2013年ベルリンの Stiftung GIZ(Genossenschaftshistorisches Informationszentrum) およびベルリン国立図書館においてライファイゼン協同組合の歴史資料を収集し、2014年にフランクフルトの GLS 銀行でインタビュー調査を行い、資料提供を受けた。

はじめに両国の協同組合金融機関の発展を誕生から第二次大戦前までたどってその共通点を見たあと、次に日本について戦後から現在にかけての法的・制度的変遷を追い、協同組合金融機関の活動の自由が制限されてきたことを考察する。続いて戦後の西ドイツの協同組合銀行の発展を確認した上で、新しい協同組合銀行の動きとして大きく成長しているGLS共同体銀行をとりあげ、地元に根ざした最新の活動の意義を考察する（田中2014；田中2015）。最後に、地域に密着した小規模金融という歴史的機能の展開と変化について日独比較の視点から考察し、日本の協同組合金融機関が新たに発展する可能性について含意として言及する。

1. 日独における協同組合金融機関の歴史的発展――誕生から第二次大戦前まで

（1）ドイツにおける協同組合金融機関 . 誕生から第二次大戦まで

ドイツで協同組合が初めて形成されたのは、市場経済の浸透がそれ以前の社会経済構造を揺り動かした19世紀半ばのことである。19世紀初頭以降のシュタイン・ハルデンベルクの農村改革や工業化の進展により、農民に経済的自立の自由、手工業者・小営業者にツンフト規制からの開放がもたらされた一方、多くの人々には生活の困窮ももたらされた。農民は市場変動の波を受け、農業用具の調達などの借入能力を持たないまま貧困化して都市に流入し、新大陸アメリカに移民として渡る者も増えた。1846～1847年には飢饉により飢餓に陥る地域が出現し、窮乏化が深刻な社会問題として認識されるようになった。こうした状況の中から、人々の経済的苦境を克服するために自生的に生まれたのが協同組合（Genossenschaft）運動である（Faust 1965；村岡1997；Hönekopp 1977；Aschhoff 1985）。

協同組合は、国家でも企業でもない社会経済組織である。現在につながる協同組合を創設したヘルマン・シュルツェ－デーリッチュ Hermann Schulze-Delitzsch（1808－1883）とフリードリヒ・ヴィルヘルム・ライファイゼン Friedrich Wilhelm Raiffeisen（1818－1888）は、協同組合の基本理念について、「たくさんの小さな力が集まると、一人だけではできない大きなことを達成することができる。そのために人はほかの人びとと結びついていくべきだ」（シュルツェ－デーリッチュ）、「一人はみんなのために、みんなは一人のために（Einer für alle, alle für einen）」（ライファイゼン）と語っている。

協同組合は、団結を通じて小生産者を市場の混乱と窮乏化から守ることを意図し、人びとの力を合わせることでリスクに対抗し、互いの向上を励ます（Schulze-Delitsch 1867；ders 1875；Raiffeisen 1887；ders 1966；BVR 2019）。その原理は、自助・自治・自己責任（Selbsthilfe, Selbstverwaltung, Selbstverantwortung）にもとづく。目に見える範囲の人びとが結びついた団体で、責任ある民主的運営を行うことで、国による保護や制度でもなく、企業による営利の追求でもなく、互いの信頼関係を基礎として個人の経済的無力を乗り越え、共同体（Gemeinschaft）のための経済活動を行うこと、自分たち自身で自らの安定を図ることが協同組合の原則とされた（Hansen 1976:16）。

都市部では、苦境に立たされた手工業者や中小商工業者のため、法学を修めた国会議員であるシュルツェ－デーリッチュが信用組合（Kreditgenossenschaft）・貯蓄貸付金庫（Spar- und Darlehnskasse）を結成した。1850年にドイツ初の信用組合となるアイレンブルク前貸組合を作り、その後も各地で信用組合や消費組合がつくられた。彼の尽力で協同組合法が1867年にプロイセンで制定され、その後彼の草案にもとづいて1889年にドイツ帝国の協同組合法の改正が行われた。シュルツェ－デーリッチュは、『国民銀行としての前貸・信用金庫』の中で貯蓄貸付金庫を「庶民のための銀行、国民銀行（フォルクスバンク）（Volksbank）」と位置づけたため、その後シュルツェ系の金融機関はフォルクスバンクと呼ばれることになる（Schulze-Delitsch 1867）。

もう一つの流れがライファイゼンによる農村部の信用組合の組織化である。ライファイゼンは高学歴でも議員でもないが、ライン地方の村長を歴任し、村人の窮状に何度も接する中、キリスト教の隣人愛にもとづいて協同組合の考え方を独自に発展させた。1846～47年の飢饉時に麦を共同購入して製パン小屋を作って焼き、村民に配るパン組合を設立したのを契機に、高利貸の家畜商の代わりに組合で家畜を一括購入する貧農救済組合や、裕福な人の出資によって貧民を助ける慈善組合などを作った。1864年には貸付業務に特化したヘッデスドルフ貸付組合が設立されて初の農村地域の信用組合とな

り、その後各地に拡大していった（Raiffeisen 1866；Aschhoff & Henningsen 1996:28；Hönekopp 1977:68）。

ライファイゼンが特に重視したのは、人柄がわかる範囲での密接な住民の結びつきであった。そのため「組合地区をできるかぎり小さな区域に限定」し、担保力を強化するために出資者の無限責任を規定した（Raiffeisen 1866:57－58）。他方、貯蓄貸付金庫の設立が各地で進む中、ある村では金が余り、別な村では金が足りない状態となる問題が表面化し、間にたって調整する地域の中央金庫の必要性が認識されるようになる（Raiffeisenverband 1949:187）。そのため1872年にはライン農業協同組合銀行がノイヴィートに設立され、狭い地区の組合の欠点を補う連合組織として中央金庫がその後も各地域に設立されていった（ライファイゼン1966:266－267）。

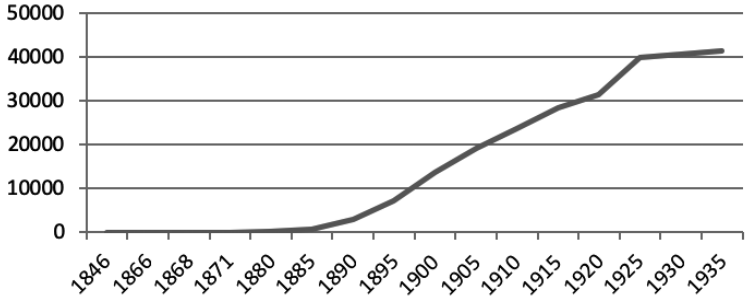
ライファイゼンに続き、農村部では法律家でヘッセン大公国の行政官吏であったヴィルヘルム・ハース Wilhelm Haas（1839－1913）による協同組合の組織化も進んだ。ハースは1873年に農業関連の購買・販売協同組合をもつヘッセン農業消費者組合をつくったのを皮切りに、各地で協同組合を組織化し、有限責任制を認めることで発展していった。その後農村部では、ライファイゼン系の全国組織「ドイツ農業協同組合総連盟」（1877年設立）とハース系の全国組織「ドイツ農業協同組合帝国連盟」（1883年設立）という二系統の協同組合が並び立つ状態が続いた。協同組合銀行の組織はその後、ごく小規模な地域信用組合、それらの調整を行う地方中央金庫、全国規模で大きな変動リスクに備える全国中央組織の三段階の制度へと発展していく（Ashhoff 1985:188－189; 村岡1997; Hansen21）。

シュルツェの草案とハースの尽力により改正された1889年の協同組合法では、組合員の出資制度と有限責任制が法的に規定された。1895年にはプロイセン政府の補助を得て、すべての協同組合金融機関の中央組織としてのプロイセン協同組合中央金庫も設立された。これは現在のドイツ協同組合中央銀行（DZ Bank）の前身となっている。その後1920年代にはハイパーインフレと農村不況によって財政状況の悪化が見られたため、1929年の大恐慌の中で二系列の協同組合組織の統合が進み、1930年にライファイゼン系とハース系は「ドイツ農業協同組合ライファイゼン帝国連盟」へと統合した。さらに1932年には帝国財政の支援を得て、協同組合の最終的な保障機関としてプロイセン協同組合中央金庫がドイツ協同組合中央金庫（ドイツ金庫）へと改組された。こうして戦前に農村部の協同組合は一組織にまとまった（Aschhoff 1985: 7 ; Faust 1965 :417－418）。

その間1921年にはドイツ協同組合不動産銀行、1922年にはライファイゼン一般相互保険株式会社、ライファイゼン一般生命保険銀行が創立されるなど、不動産や保険の分野への進出も行われた。1934年にはすべての登録協同組合は協同組合協会に所属すること、会計監査協会に所属することが義務づけられた（田渕2010：150）。

図１はドイツの農村部における1846年から1935年までの協同組合数の推移を表している。1889年の協同組合法改正を契機に大きな発展が一貫して続いたことが確認できる。19世紀半ばから第二次大戦前まで、ドイツの農村部では協同組合金融機関が各地の村々に大きく普及し、貯蓄と貸付を通じた地域経済内の資金循環を増加させていったと見ることができよう。

図1　ドイツの農村部における協同組合数の推移　1846 ～ 1935年



出典 . Raiffeisenverband 1949:186－187.

(2) 日本における信用組合の発達と地域経済のための業務多角化

その一方、日本の協同組合制度は、近代ヨーロッパ諸国の協同組合運動の隆盛をうけて形成された。ドイツの貯蓄貸付金庫、イギリスの消費組合・購買組合、フランスの生産組合・利用組合の発達を視察した政府当局者が、それらの制度を勘案して産業組合法を制定することで、協同組合運動を政府の側から持ち込んだのである（帝国農会1913: 44－69）。産業組合の考え方自体、平田東助、品川弥二郎という内務官僚、農商務官僚を歴任した二人のドイツ留学時代の見聞にもとづくものだった。その立法化の前提には、欧州に比べ遅れて工業化を開始したとはいえ、日本は19世紀末から既に世界市場の荒波と工業化による貧富の格差の拡大という危機に晒されていたという社会的状況があった（田中2018）。

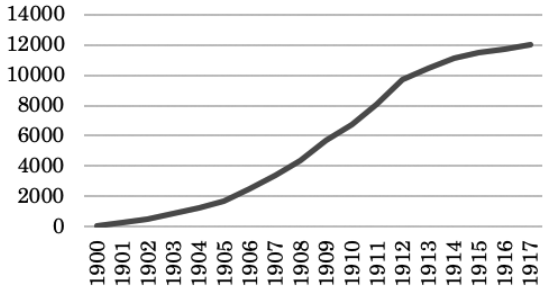
当時の日本経済の生産のほとんどは農家を含む小生産者によって担われていた。殖産興業という当時の日本政府の経済政策は、国民のほとんどを占める小生産者を市場の不安定さから守るだけでなく、小生産者を鼓舞してより多くの生産、とりわけ輸出向生産を増やさせることを意図していた。産業組合制度はこうした政策目標に合致するものと考えられた（篠浦1972）。

日本政府は「国富源泉の要部を占むる農商工の事業は多くは小規模に属し、事に従ふ者は概ね資産に乏しきを常とす」るという認識のもと、「我が産業の心髄たる中産以下の農工業者の金融を利する」ため、1900年に産業組合法を成立させた（帝国農会1913）。1908年の地方官会議における内務大臣平田東助の演説からは、この制度の狙いがよく窺える。

> 地方に於ける殖産興業の事は、我邦の如き小農、小工商を以て国家産業の原力と為す国に於て、其資本の融通を助け、産業の便宜を得せしむるが為に相協同せしむるは最も必要の事にして、彼の産業組合、貯蓄組合又は共済組合の如きは、此目的を達するが為に最も適切の方法（1908年10月地方長官会、内務大臣平田東助訓示要旨 : 大霞会1971:358）

政府はこの制度を用いて登記を行った組合に対して、近似の業務を行う企業より営業税を軽減する優遇政策を取った。制度の中には金融業務を行う信用組合を含めた５種の産業組合制度が盛り込まれており、1906年以降は信用組合業務と他の業務の兼営も可能になった。最終的には農商務省所管となったこの制度は、内務省が推進した地方改良運動などの政策の中でも称揚された（奥谷1940:264－276；渋谷1977:435；井岡2007: 5）。基本的に自治体ごとの設立が奨励された産業組合は、法の施行後から1910年代にかけて全国的に増加し、組合総数を全国の自治体数で除した「普及率」は1917年には98％に達した（図２）[2]。

図２　近代日本における初期の産業組合の普及　1900 ～ 1917年



出所 農商務省『産業組合要覧』各年度版

このように輸入された制度であったものの、国内でも全国的に自発的な協同組合設立への機運が見られた。設立された産業組合の９割は信用業務を行う信用組合であり、それだけ当時の日本の農村部

[2] この値は産業組合の普及の程度を測る尺度として当時から使用されていた。

では少額融資、マイクロクレジットに対する需要が根強かったものと考えられる。政府がドイツの協同組合制度に学び立法化した産業組合は、農村部での少額融資という資金需要を満たしたがために、農村部の自発的受容という面を持って広がっていったと言える（田中 2018）。

このように第二次大戦以前の協同組合金融機関は、ドイツと日本の双方において、農村部の旺盛な金融需要を背景に地元の共同体のための身近な金融機関として広く興隆して全国的な普及を見せ、多くの農業経営を組織して農村の地域経済を下支えする構造を形成してきたと見ることができる。

2. 戦後における協同組合金融の発展と意義

第二次大戦中に協同組合がたどった運命についても日独の展開はよく似ていた。つまり、協同組合は国家の統制のもとに置かれ、自主性を喪失し、国家管理下の金融機関･配分機関となったのである。ドイツではまず全国組織や消費者協同組合が解体され、総資産はナチスのドイツ労働戦線の基金に譲渡された。各地の協同組合は残ったものの、事業運営の自由を奪われ、「ドイツ帝国農業協会」に吸収されて政府統制の手段となった。敗戦後、ドイツの協同組合は中央組織を失った形からの出発となった。日本においても戦時中に地方部の産業組合は農会との組織的統合を政府から要求され、農業会として政府による農村統制のための組織となるように再編された。そして戦後、GHQ による日本経済の民主化の推進の中で、改めて農業協同組合として再登場した。

戦前の協同組合の長い歴史が戦争中の国家統制によって中断されたあと、戦後それぞれの国の協同組合金融機関はどのような社会経済的地位を占めるようになったのだろうか。

(1) 日本における発展と限界

まず日本から見てみよう。第二次大戦後に高度経済成長期を迎える中、日本の成長を支えたものは高位の家計貯蓄であった。20世紀末まで一貫して10％～15％の高水準にあり、1970年代には20％を超えた家計貯蓄率は、まさしく当時の日本経済の高投資を支えるものだった。

高度成長期の日本の金融市場では、企業部門が最大の借手であり、家計部門こそ貯蓄形成の主体であり最大の貸手であった。高度成長期の内需主導の成長の多くを担った企業の巨額の設備投資は、戦後に企業グループとして再編された民間銀行との連携を中心として金融的に支えられてきた。これらは同時代的にも先行研究でもよく知られており、日本の高度経済成長を理解する上で通説となっている（寺西2011: 4 ; 手塚1968:197; 日本銀行調査局1962:44）。

ところがその一方、表１が示すように、預金・貸付における銀行の地位はほぼ一貫して低下した。家計貯蓄を収集した銀行による、メインバンク制に基づいた系列企業に対する円滑な資金供給という構造が形成された一方、全金融機関の預金・貸付に銀行が占めるシェアそのものは漸次低下していった。銀行に代わって高度成長期の預金・貸付における地位を高めたのは、協同組合（および本稿では対象としないが郵便貯金）だったのである。農業協同組合、信用金庫、農林中金、商工中金から構成される協同組合金融機関の資金は戦後､預貯金におけるシェアだけではなくその資金としての総額も、民間銀行に匹敵するレベルにまでその存在感を高めていった（表２）。

しかし、金融機関として成長する一方で、戦後改革を通じた農業協同組合への改組と戦後日本経済の構造変化は、農村部における協同組合金融機関の活動に様々な制約をもたらし、協同組合が徐々に現場の少額金融から離れる方向が進んでいくことになる。

戦後の土地改革は地主制度を解体し、日本の農業の担い手を相対的に小規模な自営農民のみに再編したが、これは地方の社会構造を平等化するものであったと同時に、個々の農業経営の零細性を規定するものとなった（農林中央金庫調査部1973:110）。その一方、戦時中に非自主的組織の農業会に編成替えされていた地方部の産業組合は、1947年に制定された農業協同組合法および農業団体整理法に基づき、改めて自主的な協同組合として、しかし農業に特化した組織として、農業協同組合の名で再編された。

製造業をリーディングセクターとして成長した高度経済成長期の日本経済は都市部に雇用機会を増

表１　戦前戦後日本の預金・貸付における各金融機関のシェア

年度	預金総額に対するシェア		貸付総額に対するシェア	
	銀行	協同組合	銀行	協同組合
1930	61%	0%	77%	0%
1934	52%	4%	75%	8%
1938	54%	5%	71%	6%
1942	56%	10%	77%	6%
1946	50%	21%	88%	8%
1950	65%	14%	70%	9%
1954	59%	13%	58%	12%
1958	57%	12%	57%	11%
1962	49%	14%	53%	13%
1966	48%	16%	51%	13%
1970	43%	17%	47%	13%
1974	40%	17%	46%	14%
1978	36%	17%	42%	13%
1982	34%	16%	40%	12%

資料）総務庁統計局『日本長期統計総覧』三巻、1988年、表11－17－abから作成。
協同組合＝農協・信金・農林中金・商工中金、郵政関連＝資金運用部・簡保・郵便年金の合計。貸付には有価証券によるものを含まない。

表２　各種金融機関の戦後の成長

年度	銀行			農協		
	預金	貸付	資本金	預金	貸付	資本金
1946	145	146	327	38	2	0
1951	1506	1518	2401	179	42	11
1956	4764	4066	6626	441	173	33
1961	10332	9770	16060	1023	437	62
1966	23790	22046	35218	2986	1291	110
1971	52276	49048	75698	7275	3600	223
1976	104649	98672	162101	17778	8514	421
1981	168745	151214	249887	30374	11768	717

単位＝十億円
資料）総務庁統計局『日本長期統計総覧』三巻、表11－15、表11－9－bから作成。

大させ、結果、農村部からの人口を吸収、あるいは兼業農家化をもたらした。また、国内重化学工業の発達は化学肥料および農業用機械を比較的廉価に国内農業に供給し、農業労働の機械化が進んだ。食生活も変わり、需要の変化から国内農業の栽培品目も変化していった。その一方で政府による強力な米価支持政策が行われた結果、多くの農家経営は米作を志向しつづけた（渡久地1997:i）。

農業就業人口が高齢化し、兼業と機械化のために農業労働時間が短時間化する一方で、農業生産性そのものは向上し、農業生産自体は増加した。また1950年代から60年代は農作物価格も上昇基調にあり、農業による総生産額と生産所得も増加を見た。兼業農家はこれに加えて時として農業収入を上回る兼業収入があった事を考えれば､戦後の農家の経済状態は戦間期の不況期と比較して著しく改善し、高度経済成長の中で他の就業形態の家計と共に「所得倍増」の世を迎えた（中村1968：215－217）。

こうした中、協同組合金融機関には組合員の更なる貯蓄が集積し、農業協同組合の金融的中央機関である農林中金が運用すべき資金はますます増大した。一方で個人経営による農業投資への資金需要は企業による製造業の設備投資ほどは伸びず、1950年代後半からは協同組合金融機関は、農林中金のみならず傘下の協同組合全般が資金の運用先に頭を悩ませた。 農林中金は運用先として関連産業への短期貸付、社債の買入など多彩な金融活動を行うようになった。1954年の日銀売出手形359億円の買い入れは、当時の金融引き締め政策の一環として日銀側の要請に基づき農林中金が応えたものだが、この手形の発行そのものが戦後の日銀の売オペレーションの嚆矢であり、協同組合金融機関の資金力は日本経済全体の中でも影響力を持つものになっていた（農林中央金庫調査部1973:131）。

1960年代以降は日本経済の構造変化と共に、農村部では人口流出とともに非農業化が進んだ。農協の組合員の構成にも、農業従事者本人による正組合員ではなくその家族による準組合員の増加が見られた。また、個別組合の合併が政策的に称揚され、1965年には7320あった総合農協数は1972年には5488と、経営単位の広域化が進められた（農林中央金庫調査部1973:178）。

その一方、金融機関としての協同組合金融機関の成長と運用先の多角化は止まなかった。農林中金では1954年には総貸付額約800億円の内、500億円が傘下の農業関係団体、130億円が水産関係団体に貸し付けられたが、1958年には約1700億円の内、農業関係団体に貸し付けられたのは約300億円に過ぎず、水産関係にも約200億円であり、コールローンなど一般民間金融機関に対する短期貸付を中心として、協同組合外に約1200億円を貸し付けるようになった（農林中央金庫調査部1973:147）。戦後になって本格化した保険事業（現在の JA 共済）についても、1972年には保険業界において国内第二位のシェアを占めるまでに成長した。

高度経済成長期に農村部の所得向上を基盤に金融機関としての資金力を増した協同組合金融機関は、公庫などの政府系金融機関からの支援融資を受ける対象ではなくなっていた。その一方で農林水産業という協同組合の土台である第一次産業部門には投資需要の関係から資金を還元しきることができなくなっており、その結果、余剰資金を一般金融市場で運用する、巨大な機関投資家になっていった。

もっとも、協同組合金融機関として、組合員と地域産業に資金を還元しようとする試みは常に続けられた。農林中金は傘下組合に低利資金を供給し、農業・漁業の構造改善を行う指針を打ち出した。これらの傘下組合への農漁業関連の低利融資は中長期融資が中心であった。その一方、資金の貸付先が多様化する中で、組合外の関連産業に対する融資が増加した場合も、肥料や農業用資材といった産業に対するものであっても短期資金を主体とするものとなった。こうした資金の長期短期の運用差からも、農漁業を第一に支援するものとして協同組合金融機関がその経営方針を位置づけていたことがわかる（農林中央金庫調査部1973：184－193）。

しかし組合員レベルでの農業投資、農業における資金需要の減退は進み、農協はこの流れの中で、「農業専門金融機関としての性格を弱め」、「むしろ護身の生活面での資金供与を行う地域の金融機関としての性格を強め」た（両角1998:214）。1960年代から1970年代にかけては、組合員による資金需要は農業投資から住宅建設へと指向性を変えた。表３が示すように、1963年には約9000億円だった農協によ

表３　農協による貸付金の用途残高内訳

	農業資金	生活資金	農外事業	公共団体
1961	53.1%	17.2%	12.0%	
1975	26.5%	28.2%	24.2%	7.5%
1980	27.5%	31.4%	20.9%	7.0%
1985	26.9%	31.9%	18.8%	6.1%
1990	20.2%	51.3%	17.7%	6.1%
1993	16.3%	54.1%	18.7%	7.7%

注）1961年については9月末の都府県のデータ。それ以外は全国の年度末。
出典）両角和夫「農協の地域金融と組織運営」表8－3から一部抜粋。

る貸付金は、1972年には約４兆円にまで成長したが、その伸長の大宗が農村部・都市化部を問わない住宅の新改築用費用のための貸付だった。1970年代に入ると、組合員外への貸付、とりわけ地方公共団体および地元企業への融資も拡大した（農林中央金庫調査部1973：182－183）。

この流れは、組合員の就業・生活構造が高度経済成長の中で変化していくのに合わせ、日本の協同組合金融機関が新たな金融需要に応えようとしたものと評価できる。しかし、農協が傘下の組合員に対して農業以外のための融資を行うことには、1960年代から行政からの批判があった。1970年代から顕著になった住宅建設資金などの農林漁業以外への資金供給の積極的な展開は、行政側から「農業関連以外の事業に傾斜」することは「農協の目的およびその性格」の本旨に外れるものと見なされ、1980年代にも重ねて警告する農林水産省からの通達が発された。こうした行政からの制限に対しては、「農協が地域金融機関として地域の住民あるいは地域の開発に積極的に貢献することを期待されていることと矛盾する」とする批判が農協外部からも出ている（両角1998:217－218; 三輪1990:27）。

もっとも、既に1961年の時点で農林中央金庫は「関連産業貸出の増大にともない、この問題とくに関連産業の範囲をめぐって主務省の見解と金庫の見解との間にギャップを生ずることが多くなった」として、所管省庁である農林水産省と交渉を重ねていた。その結果「それまでの方針を成文化した自主規制の方針を作成」し、1962年８月には「農林中央金庫法第15条第１項第５業にもとづく短期貸付の規制について」との文書を提出した。これは農林水産省側で局議を経て、事実上の省通達同様の規制力を持つものと農協側からも了解された（農林中央金庫1973:163）。この通達の詳細は不明だが、こうした貸付範囲の制限に関する自主規制の方針が、農林中央金庫だけでなく農協全体に、その資金運用・貸付の規範として適用されたことは確かである。

つまり、戦後の日本の地方部における協同組合金融機関は、農業協同組合として農業に専従することを規定され、金融機関としても制度的に農業関係融資に専従することを要請されていた。農協は、地方における農業以外への金融需要に積極的に応えていくことを、政府から認められなかった。農協がこうした政府からの制限を受け入れた背景には、1950年代から高度成長期の初期にかけて、地域農協の経営安定化や農業の機械化・近代化のための資金などに、農協および地域農家団体が財政による補助金や公庫からの低利融資を受けてきたことがある（田代2018:12－13）。

結果として1980年代以降、従来は地方の現場で収集され地方の現場の事業に対して融資されてきた農協の資金は、一方では農業投資の不振の中で地域経済の現場への貸付が縮小し、他方で一般金融市場の情勢変化の中で有利な短期資金運用も不可能になり、金融機関としての経営状態を全般的に悪化させていった（両角1998:10－11）。こうした余裕資金を農林中金はその後1990年代に旧住宅専門金融会社、すなわち住専に貸し出し、バブル崩壊と共に大きな不良債権を抱えた（青柳1997:151－152）。この不良債権の破綻処理問題を通じて、農林中金ひいてはJA組織全体が、前時代的な金融機関として社会的政治的批判を受けることになる（亀谷2002:452－454）。1980年代以降における預貸率の低下に象徴される地域金融機関としての非活発性や、その分の運用資金を相対的に不利になった証券市場に振り向けたことに対しては、農協の内部や地域現場からも批判が上がるようになった。

このように、農業経営だけに限定された小規模融資、マイクロクレジットの供与を行う金融機関は、地方経済の変化と共に構造的な限界を迎えている。制度的な規制によって、地元の経済の多様な金融需要に応える力を喪失せざるをえなくなった少額金融は、21世紀現在における農協の地方経済への影響を限定的なものにしているように思われる。

それでも現在、日本の農業協同組合は正組合員・准組合員をそれぞれ約500万人ずつ抱える、1000万人規模の巨大組織である。現在の日本の農業者人口が250万人である中でこの数値は、マイナス面から語られることも多いが、非農業者であっても協同組合という地域の社会活動に参加できるという評価も可能である。金融機関としての農協も日本経済の中で現在も巨大である。2016年時点で、日本の協同組合金融ネットワークの中央組織である農林中金は連結総資産100兆円を超え、60兆円を超える預金残高を保有する。資産規模から言えば三菱東京UFJ、みずほ、三井住友に次ぐ国内銀行第４位にあたり、国内総預金から見れば約１割を保有し、これは国内最大の一般金融機関である三菱東京UFJ銀行の保有預金に匹敵する額となっている（三菱東京UFJ銀行2012）。

これはすなわち、協同組合金融機関の金融ネットワークは日本で21世紀現在もその経済的な地位を保ち、社会的安定に資する条件を備えていることを意味する。東日本大震災でいち早く被災地の金融的支援に乗り出した金融機関がJA共済であったように、農協は現在でも地方経済と農村部の危機に対応するだけの資金力と組織力を保持している。この資金力と組織力を地方経済、地域社会の活性化にいかに活かしていけるかが、農協の今後の大きな課題と言えよう。

JA内部でもこうした問題は意識されており、「農協金融の対象を農業金融から不動産金融、生活金融、開発金融、また農家組合員から一般地域住民、事業者へと広げていく」ことが重要であると議論されている。また、農業資金以外の貸付に関する資金運用に関する内部規制と政府による牽制、組合員外に対する貸出規制は、1980年代の金融自由化の流れと1990年代の農協法の相次ぐ改正により緩和されつつあり、協同組合金融機関が地域社会における多様な資金需要に応えるための制度条件は日本でも徐々に整いつつある（青柳1997:142－144）。この点において、次に見るドイツの新たな動きは日本にとっても示唆に富むと考えられる。

(2) 戦後西ドイツにおける協同組合金融機関の発展

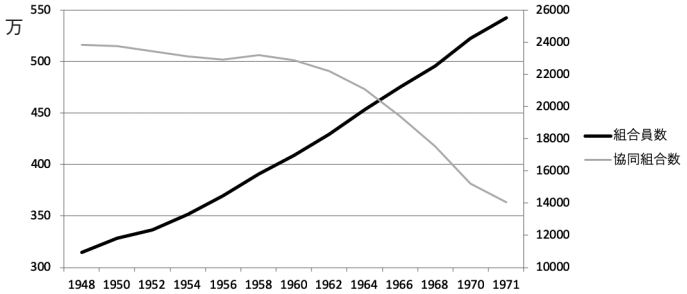
戦後の協同組合金融機関の発展は、西ドイツにおいて、一方で中央組織への統合と巨大金融コンツェルン化、他方ではそれを支える小規模な地域経済における多様で新しい少額金融の発達という二点によって特徴づけられる。初めに戦後の協同組合金融機関の組織の統合化について見ておこう。

日本と異なってドイツは敗戦後に英仏米ソの四カ国によって分割占領されたため、協同組合制度の再建は各占領地域ではじまった。1946年にイギリス占領地域農村組合作業部会が形成され、続いてアメリカ、フランス占領地域の団体が加わった。1948年には西側地域で農村部の協同組合中央組織としてドイツ・ライファイゼン協会が再建され、1949年には都市部でもシュルツェ＝デーリッチュ系の中央組織、ドイツ協同組合協会が再建された。戦前ベルリンに設立された協同組合中央金庫であるドイツ金庫も、1949年にフランクフルトでドイツ協同組合金庫（Deutsche Genossenschaftskasse）として改組された。

その後西ドイツの協同組合銀行はその機能を大きく拡大していく。中央組織の協同組合金庫は資本市場への参加が認められ、1957年には10年物の債権を発行する権利が与えられた。住宅貯蓄の分野でも、シュルツェ系の都フォルクスバンクにしか認められていなかった住宅貯蓄が農村部にも認められ、1956年にシュヴェービッシュ・ハル住宅貯蓄金庫として、シュルツェ系とライファイゼン系が統合された。保険の分野でもライファイゼン・フォルクスバンク保険ができ、都市のシュルツェ系と農村のライファイゼン系の統合が進む中で新しい信用機能が生まれた。他方、ソビエト連邦が占領した東ドイツでは、協同組合の自律性は失われ、国家の生産計画を監視・実行する機関である相互農民援助連盟に編入された（Aschhoff 1996：27－29）。

戦前の構造を引き継いで復活した西ドイツの協同組合は、戦後も順調な発展の道をたどる（Rosen-brock 1976:549）。1960年代に入る頃から各地域の協同組合の統合が始まって組合数が減少に向う一方、全協同組合員数は1971年に到るまで増加を続けて550万人に達した（図３）。

図３ 全協同組合数と組合員数の推移 1948－1971年



出典 Rosenbrock 1976:547より作成

その後も協同組合の統合が進む。1960年代後半に、銀行間競争や都市銀行の攻勢に対抗するため、協同組合の集中化をめぐる議論が起き、その結果、19世紀半ばから続いてきた、シュルツェ－デーリッチュによる都市中間層向けのフォルクスバンクと、ライファイゼンによる農民向けのライファイゼンバンクは1970年代に本格的な統合に向う。

1972年、シュルツェ系のドイツ協同組合連盟（Deutschen Genossenschaftsverband）とライファイゼン系のドイツ・ライファイゼン連盟（Deutschen Raiffeisenverband）は、百年以上の各々の歴史と確執を経て、「ドイツ協同組合・ライファイゼン協会（Deutsche Genossenschafts- und Raiffeisenverband）（DGRV）」の傘下に入った。協同組合銀行も「ドイツ・フォルクスバンク・ライファイゼンバンク連盟（Bundesverband der Deutschen Volksbanken und Raiffeisenbanken）（BVR）としてまとまった。

中央銀行の一元化も進んだ。各地の協同組合銀行を合併しながら、ドイツ協同組合中央金庫は1975年にドイツ協同組合銀行（Deutsche Genossenschaftsbank DG Bank）へと発展した。シュピーゲル紙が1988年に論じたように、「わずか10年前は無名だった協同組合の中央金庫は、ドイツの金融コンツェルンのトップグループの地位にまで躍進した」と論じるほど、その力を拡張した（Spiegel 1988）。

1990年にはドイツ統一により、東ドイツの協同組合が全国組織に組み込まれた。1998年に株式会社化したドイツ協同組合銀行は、2001年に南西ドイツやフランクフルト地域の巨大な地域中央銀行と合併して、協同組合中央銀行（Deutsche Zentral-Genossenschaftsbank, DZ Bank）となった（BVR 2019）。さらに2016年８月、ライン・ヴェストファーレン地域を基盤に200のフォルクスバンク、ライファイゼンバンクを傘下におく地域中央組織であった西ドイツ協同組合中央銀行を吸収することで、協同組合中央銀行はすべての地域中央銀行を一元管理することとなった。その結果、ドイツ協同組合中央銀行（DZ Bank）の規模はさらに巨大化し、2016年の総資産額は5090億ユーロ（約63兆円）で、ドイツの全銀行中、ドイツ銀行に次ぐ第二位の地位を占めるに到った（Stappel 2013/18）。ライファイゼンが目指した、地域の小規模融資を行う機関の弱点を地域の中央銀行で調整し、最終的に全国中央銀行でバックアップするという目標は、150年後に叶ったと言うことができる（BVR 2019a）。

統一されたフォルクスバンク・ライファイゼンバンク（以下 VR 銀行）グループの組合数・組合員数の推移を1970年から2018年まで見たのが図４である。戦後25年間を見た図３同様、組合数が統合で減少する一方、組合員数が21世紀まで一貫して増加していることがわかる。総資産、預金、融資の推移を見ても、VR 銀行グループが一貫して右肩上りの大きな成長を続けてきたことがわかる（図５）。2018年にはライファイゼン協同組合の全組合員・出資者は1856万人となり、成人した全ドイツ人の28％を占めるに到った[3]。他のすべての協同組合を含めるとその数は2270万人に達し、ドイツ人の34.3％、３人に１人以上が協同組合員となっている（DZ Bank 2018）。協同組合がドイツの社会経済にいかに根付いているかを示す数字と言えよう。

図４　VR 銀行グループの銀行数と組合員数　1970－2018年

図５　VR 銀行グループの総資産額・預金額・融資額推移 1970－2018年

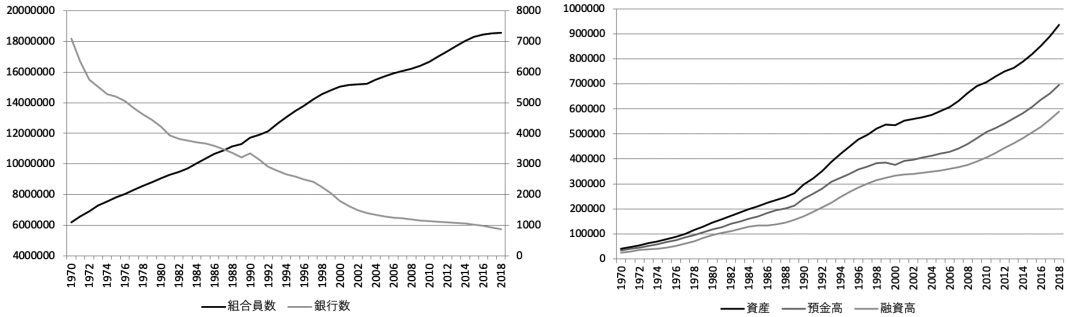


図4・5 出典 Entwicklung der Volksbanken und Raiffeisenbanken ab 1970, BVR 2019より作成

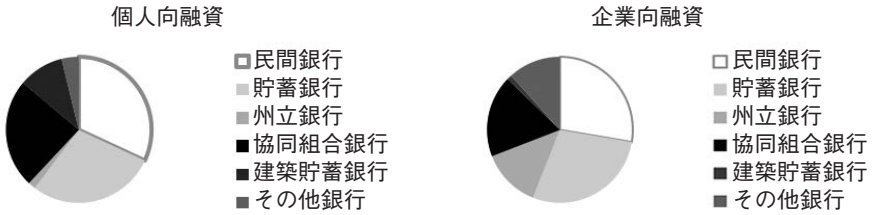
[3] Institut der deutschen Wirtschaft (IW) の Bevölkerung nach Altersklassen, によると、20歳以上人口は6617万人。

ただしここで注意すべきことは、協同組合中央銀行をトップ組織として巨大な協同組合金融グループが形成される一方、組織の本質は19世紀の創立以来、多くの無名の小さな村を含む市町村単位の協同組合にあり、協同組合銀行の活動としての金融業務もまた地域に密着した形の小規模金融として行われているという点である（田中2015; 同2019）。ドイツの協同組合銀行が、21世紀現在もいかに地元のニーズに即した小規模融資を行っているかについて、最後に具体的に確認してみよう。

(3) ドイツにおける協同組合銀行の融資と地域経済

そもそも協同組合銀行の融資は全体として、個人への融資が多く、また長期融資が多いという特徴をもっている。2017年の銀行連盟の調査によると、企業向け融資に占める割合では貯蓄銀行、民間銀行に次ぐ三番手であるのに対し、個人向け融資の中に占める割合では建築貯蓄銀行を含む協同組合銀行が34.2% と最大であり、民間銀行の31.9%、貯蓄銀行（州立銀行含）の30.1% を上回る（図６）。

図６　ドイツにおける個人向・企業向全融資の銀行種類別内訳　2017年



出典　Bankenverband 2018；BVR 2018より作成 .

また協同組合融資の内訳をみると、短期融資が5.8%、５年未満の中期融資が5.8% なのに対し、５年以上の長期融資が88.4% を占める。協同組合は主に個人、また小規模企業や非営利団体に対する長期融資を行うという特徴を持っているのである（BVR 2019b；BVR 2019; 田中2019）。

では実際にどのような少額融資が行われているのかについて、近年躍進が著しい協同組合銀行の一つである GLS 銀行の融資を例にとってみよう（田中2014; 同2015; 同2019）。

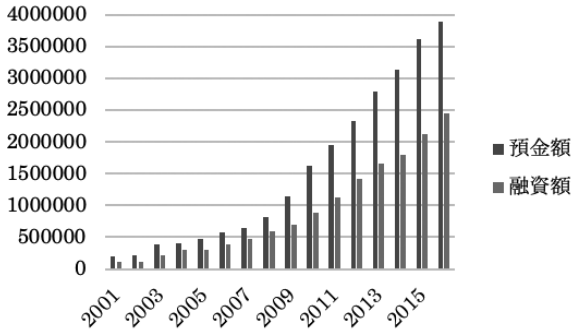
GLS 銀行とは、正式名称を「融資と寄付のための共同体銀行（Gemeinschaftsbank für Leihen und Schenken e. G.；GLS Bank）」という。2010年から2018年まで９年連続で「今年の銀行」に選ばれ続けている、きわめて社会的な評価の高い銀行である。2012年には、ドイツ政府の持続可能な発展委員会と経済団体・地方団体・市民団体・研究団体が決定する「ドイツ持続可能性大賞」を授与され、2013年には、金融商品の先見性とイノベーション力が評価されて、ファイナンシャルタイムズ・国際金融協会による「ヨーロッパにおける持続可能な銀行」賞を受賞するなど国際的な評価も高い。

GLS 銀行の成長ぶりは目覚ましいものがある。図７が示すように、預金額 , 融資額ともに2000 ～2010年代にかけて飛躍的に伸びた。リーマンショックによる経済不況の影響も全く受けていない。2010年代前半は20% を越える高成長率となっている。低成長時代とは思えない数字の高さは、いかにこの銀行が時代の要請に適ったものであるかを物語っている。

協同組合銀行の一つであり、VR（フォルクスバンク・ライファイゼンバンク）銀行グループの一角を構成するこの新しい銀行は1974年に設立された。銀行のモットーは、「社会的でエコロジー的（sozial und ökologisch）　な銀行活動を行う、世界ではじめてのユニバーサル・バンク」である（GLS 2014）。

「GLS 銀行は意義ある活動をする GLS Bank. Das macht Sinn」という銀行の商標が、銀行の理念かつ実際の業務方針を象徴している（GLS 2017）。GLS 銀行は銀行の活動目標について「金自身は働かない。人が金をうまく使うことで、はじめて社会的に意味のあることができる。純粋に利回りだけを求める融資は、金を現実の場で生かすという金融本来の目的を、事実上考慮していない。私たちは、人々のために役立つとはっきりわかる企業やプロジェクトだけに融資をする。私たちは『金はそこにいる人々

図７　GLS 銀行の発展 2001－2016年



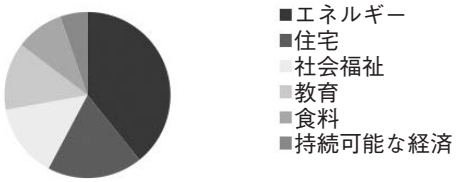
出典　Jahresbericht, Die wichtigsten Kennzahlen der GLS Bank各年度, https//www.gls.de（最終閲覧日2017年2月27日）

のためにある』という原則を追求して活動をする」と述べている（GLS 2012a: 1）。

GLS 銀行は協同組合の原則に則り、誰でも１口100ユーロを５口（約６万円[4]）以上出資すると組合員になれる。出資金は長期融資に使われ、５年間は解約できないが、毎年２～４％の配当を得られる。口座を開設すると全国約２万カ所ある VR 銀行の ATM や店舗を利用でき、万一の倒産時には協同組合中央銀行の保証システムで出資金が保証される。組合員の発言権を民主主義的に保証するため、組合員は出資金額に関わらず一票を持ち、総会で銀行の活動方針について投票権を行使できる（GLS 2012a: 4）。

資金が将来の世代のための融資に使われるために、銀行は人間的（menschlich）、エコロジー的（ökologisch）、経済的（ökonomish）という三つを守るべき持続可能性の基準として掲げている（GLS 2013a: 2）。「私たちが融資するもの」として、エコロジーな農業、再生可能なエネルギー、住宅、社会福祉・社会的ネットワーク、教育をあげ、逆に「私たちが融資しないもの」として原子力発電、軍需、児童労働、遺伝子操作、将来の社会を配慮しないものをあげている（GLS 2017）。集まった資金は、2019年第一四半期には、図８が示すように再生エネルギー、住宅、教育、福祉、有機農業、持続可能な経済という分野へ融資が行われた。

図８　GLS 銀行の分野別融資先（2019年第一四半期）



出典 GLS Bank 2019:22－27

歴史的な協同組合の精神を継いで「金はそこにいる人々のためにある」を融資原則とした GLS 銀行は、実際どのような融資を行ったのか。GLS 銀行の公開情報にもとづき、2019年第一四半期の融資事例をみてみよう（GLS Bank 2019:22-27）[5]。

再生エネルギーの融資の多くは、小さな町村における地域のエネルギー自給のため、太陽光・風力発電設備のために行われた。ヴェッター・アン・デア・ルールの市民エネルギー協同組合に13.9万ユ

[4]　１ユーロ＝約120円（2017年２月）で計算。
[5]　それ以前の融資については田中2014、田中2015、田中2019を参照。

ーロ、メルフェルデン・ヴァルドルフの太陽光発電に103.4万ユーロ、レーバッハの風力発電施設に1563.8万ユーロなどである。大型案件があるため１件当たりの融資額は最も高く121万ユーロ（約1.4億円）となっている。

住宅分野では社会的・環境的に意義のある住宅として、ハンブルクの多世代住宅の建設に97万ユーロ、タープの保育園建設に121万ユーロ、デュッセルドルフの多世代住宅の建設に237.8万ユーロ、レーゲンスブルクの省エネルギー住宅化に９万ユーロなどが融資されている。

福祉分野では１件平均52万ユーロ（約6000万円）で、施設の運転資金に多く使われるほか、グレーヴェスミューレンの障がい者施設のリフォームに50万ユーロ、レーネの介護施設に122.8万ユーロ、ノイスの児童・青年支援施設新築に15.9万ユーロ、ケルンの介護ホームに169.1ユーロが融資されている。

教育分野では多くが保育園設立に使われた。ベルリンの保育園の設立資金として４件（10.5万、14万、12万、34万ユーロ）、保育園の運営支援に３件（2.5万、５万、1.5万ユーロ）、ハンブルクの保育園設立に２件（11万、20万ユーロ）、ボーフムの保育園に45万ユーロなどが融資されている。

食料・有機農業では主に個人農家の運転・投資資金が融資された。ハルセヴヤンケルの農家に４万ユーロ、ブッフホルツの農家の有機の土地購入に3.5万ユーロ、アーレンスボックの農家に35万ユーロなどのほか、ハンブルクの梱包開封倉庫に14万ユーロ、ベルリンの有機オリーブ取引に9.6万ユーロ、コルシェンブロイヒの有機農業経営に89.5万ユーロなど多くの農家融資の事例がある。

持続可能な経済という分野では運転資金や保証金、つなぎ融資が多く、金額も17.2万ユーロと最も小さい。エッセンの740台の自転車リース業へ29.2万ユーロが融資されたのをはじめ、ベルリンの有機ワイン取引に1.1万ユーロ、ミュールハイムの有機ホテルの改装に８万ユーロ、ランゲンドルフのセミナーハウスの増築に5.5万ユーロ等の融資事例がある。

こうした地元の多様な、比較的少額な金融需要への融資こそ、GLS 銀行が「社会的意義」をもつと認め、ファイナンシャルタイムズが金融商品としての先見性を高く評価し、ドイツ政府が持続可能性をもつと顕彰し、毎年多くの人々がそこに投資したいと希望した融資先であると見ることができる。

2018－2019年に GLS 銀行はさらに二つの新しい融資領域を切り拓いた。一つは海外のマイクロクレジットであり、既にカザフスタン、コソボ、エルサルバドル、メキシコ、ボスニア、ボリビア等で展開している。もう一つは、インターネット上で形成された共同体への融資である。Futopolis と呼ばれる GLS ネットワーク上で、組合員が自分の身近な場所で必要だと感じた社会的・エコロジー的プロジェクトを自ら立ち上げ、ネット上でほかの組合員と連携しながら、GLS の資金を使って自分がいる場所を持続可能な形に変えるために投資するというものである（GLS 2019）。

かつてライファイゼンは、協同組合はお互いを長くよく知っている人間関係の中で作られるべきだと論じたが、現在ではインターネットの発達の中で、知らない者同士がネット上で議論して意見を一致させ、新しい発想で身近な現実を変革するプロジェクトを協力して興し、それを GLS の融資で実現するという新たなプラットフォームも提供されるようになった。デジタル時代における協同組合の新しい融資のあり方とも考えられよう。

3. 共通する歴史と異なる現状－その要因

ドイツで19世紀中葉、日本で20世紀初頭にさかのぼる協同組合金融機関は、農村部における旺盛な金融ニーズに対応した少額融資を基盤に工業化過程で地域経済を支えるという重要な機能を果たしてきた。戦後の高度経済成長をへてドイツのライファイゼンバンクも日本の農協・JA は、多くの資金を得て巨大な金融組織にまで成長してきた。

しかしこうした大きな共通点にもかかわらず、日独の現在の協同組合金融機関の展開やその社会的評価には大きな差異があることがわかった。それはドイツの協同組合銀行が多様で新しい地域のニーズに応える融資へ進んでいるのに対し、日本の農協・JA は融資の対象を制約され、地域経済内の資金循環から離れる方向に向ったという点にあるということが明らかになった。

日独両国とも戦後の成長期を通じて農業人口は減少を続け、産業としての農業の位置も低下を続け

てきた。にもかかわらず日本における農協は、あくまでも農業融資に特化するようにという政治的圧力を1960 ～ 70年代以降政府から受け続けてきた。これにより日本の農協・JA は、戦後の農家の就業構造の変化や収入構造の多様性の増大などに的確に対応する機能を制限され、ニーズに合わせた自由な融資活動の発展も妨げられることになったと考えることができる。結果として金余りとなった協同組合金融機関は他の分野の投資に手を出さざるを得なくなり、バブル期に大きな不良債権を負い、農協無用論までを引き起こすに到った。農協の金融機能を農業の枠内のみにとどめるようとする圧力は、農協が地域の変化するニーズに幅広く応えようとするメカニズムを困難にさせたと考えることができよう。

これに対してドイツでは、組織統合で巨大な中央金融機関を形成した一方で、地元密着型の融資をさらに多様な形で発展させていったため、社会的により高い評価を受けるようになっていった。組織面では農村部で二系列あったライファイゼン系とハース系組織が合同し、さらに都市部のシュルツェ系のフォルクスバンクと統合することにより、フォルクスバンク・ライファイゼンバンク VR 銀行が形成され、ドイツ銀行にも伍す巨大な経済力を有する金融機関へと発展した。ドイツ銀行が投資銀行業務を拡大してリーマンショック時に巨大な損失をだしたのとは反対に、地域経済に還元する形の融資を行い続けた協同組合銀行は、より多くの人びとの信頼を勝ち取ることに成功して右肩上りの発展を継続している。

協同組合銀行の中で顕著な成長を遂げている GLS 銀行の例は、VR 銀行グループの ATM や信用力の金融ネットワークを活用した上で、地域経済内の多様で新しいニーズに対応した少額融資によって新しい成長を遂げていることがわかった。地域内の再生エネルギーによるエネルギー自給への投資、地域内の多様なケアの必要性に対応した保育園や多世代ハウス、障がい者・介護施設などへの融資、有機農家と有機農産品の販売者への融資など、地元密着型の小規模融資を組合員の出資によって実現してきた。つまりドイツの協同組合銀行は、19世紀から一貫して、市場経済・グローバル経済の波に対して、地元の人びとがまわす経済を守り、育てるという機能を果たし続けているのである。最近ではインターネットを通じて人びとの身近に埋もれている必要性を掘り起こし、それに融資することで身近な所から社会変革を起こそうとする動きも起こっている。

日本とドイツの協同組合銀行が歴史的に多くの共通点をもってきたにもかかわらず、現在その評価に大きな違いが出てきているのは、まさにこの点にかかっていると言うことができよう。日本の協同組合金融機関が融資の対象範囲を政府から制限されることなく、ドイツの協同組合銀行のように多様なニーズに的確に対応し、新しい変化に柔軟に融資していけるようになるならば、農協無用論は大きく変化していく可能性があると言えよう。地域経済の創生や再生が課題となっている日本だからこそ、ドイツの GLS 銀行に見られるような新たな持続可能性にむけた社会的・金融的ニーズに応えていくことが、日本の協同組合金融機関にとってのこれからの挑戦になると言えるのではないだろうか。

参考文献

（ウェブサイト最終閲覧日は、特別に記述があるものを除いて2019年 6 月27日）

Aschhoff, Gunther & Eckart Henningsen (1985), *Das deutsche Genossenschaftswesen : Entwicklung, Struktur, wirtschaftliches Potential,*Frankfurt am Main:F.Knapp Verlag

Bundesregierung (2012), Rede von Bundeskanzlerin Angela Merkel, 25. Apr. 2012, Berlin.

Bankenverband（https://bankenvernand.de/statistik）(2018),Kreditgeschaeft,

Bundesverband der Deutschen Volksbanken und Raiffeisenbanken（BRV）（http://www.bvr.de）(2019a),Wer wir sind.

BRV (2019b), Entwicklung der Volksbanken und Raiffeisenbanken Ende 2018.

BRV (2019c), Zahlen, Daten, Fakten

Deutscher Genossenschaftsverband (1960),*100 Jahre deutscher GenossenschaftsVerband,* Wiesbaden.

Deutscher Raiffeisenverband e.V., (1949), *Raiffeisen in unserer Zeit: zum hundertjährigen Bestehen der*

ländlichen Genossenschaften, Bonn : Deutscher Raiffeisenverband

Deutsche Zentral-Genossenschaftsbank（DZ Bank）（http://dzbank.de）(2017), Genossenschaften erhöhen Mitgliederzahl auf 22,6 Millionen,13.11.2017

DZ Bank (2018), Genossenschaften gewinnen mehr als 100.000 Mitglieder

Die Bank (2016), *Die 100 Grössten deutschen Kreditinstitute, Zeitschrift für Bankpolitik und Praxis*

Faust, Helmut, (1965), *Geschichte der Genossenschaftsbewegung : Ursprung und Weg der Genossenschaften im deutschen Sprachraum*, Frankfurt am Main : F. Knapp

GLS Bank (2019), CO-KREATIV für eine Gesellschaft, die wir wollen, Bank Spiegel,Heft.234

Hansen, Johannes, (1976), *Genossenschaftliches Unternehmertu*m : Raiffeisengenossenschaften in der modernen Volkswirtschaft, Neuwied : Raiffeisendruckerei GmbH

Hönekopp, Joseph, (1977), *100 Jahre Raiffeisenverband, 1877-1977*, Wiesbaden: Deutscher Genossenschafts-Verlag

Raiffeisen, F.W. (1866/1887/1966), *Die Darlehnskassen-Vereine : in Verbindung mit Consum-, Verkaufs-, Winzer-, Molkerei-, Viehversicherungs-, etc. Genossenschaften als Mittel zur Abhilfe der Noth der ländlichen Bevölkerung : Praktische Anleitung zur Gründung und Leitung solcher Genossenschaften,*. Neuwied am Rhein : Raiffeisendruckerei

Rosenbrock, Ewald (1976), *Der Deutsche Raiffeisenverband in der Wirtschafts- und Agrarpolitik, 1945-1971*,Wiesbaden : Deutscher Genossenschafts-Verlag eG

Schulze-Delitzsch, Hermann (1867),*Vorschuss- und Creditvereine als Volksbanken*, Leipzig

Schulze-Delitzsch, Hermann (1875), *Die Raiffeisen' schen Darlehnskassen in der Rheinprovinz und die Grundcreditfrage für den ländlichen Kleinbesitz,* Leipzig

Spiegel (1988), DG Bank: „Die sind größenwahnsinnig“,30.05.1988.

Stappel, Michael (2013/18), *Die deutschen Genossenschaften 2013/2017. Entwicklungen–Meinungen –Zahlen*, Deutscher Genossenschafts-Verlag eG: Wiesbaden

相沢幸悦（1994）『欧州最強の金融帝国 . ドイツ銀行』日本経済新聞社

青柳斉（1997）「系統信用事業の現状と連合組織の課題」藤谷築次編『農協運動の展開方向を問う－21世紀を見据えて』家の光協会

アシュホフ、グンター、エッカルト・ヘニングセン、東信協研究センター訳1990『ドイツの協同組合制度 : その歴史・構造・経済力』日本経済評論社

居城弘（2001）『ドイツ金融史研究』ミネルヴァ書房

井岡泰時（2004）「産業組合と部落改善運動に関する覚え書き . 奈良県の事例から」『部落解放研究』159号

飯野由美子（2003）「ドイツの金融」戸原四郎 , 加藤榮一 , 工藤章編『ドイツ経済 . 統一後の10年』有斐閣

大河内一男（1936）『独逸社会政策思想史』日本評論社

大門正克（2006）「戦前日本における系統産業組合金融の歴史的役割―階層・地域間調節・国債消化」『エコノミア』第57巻第１号

奥谷松治（1940）『品川弥二郎伝』高陽書院

亀谷昱（2002）『農業における投資・財政・金融の基本問題』養賢堂

産業組合中央金庫 1927『普魯西産業組合中央金庫一九二六年事業報告 ；株式會社ライフアイゼン銀行一九二五年事業報告』産業組合中央金庫 : 東京

篠浦光（1972）『農村協同組合の展開過程』亜紀書房

渋谷隆一編（1977）『明治期日本特殊金融立法史』早稲田大学出版部

総務庁統計局（1988）『日本長期統計総覧』三巻、日本統計協会

大霞会編（1971）（復刻1980）『内務省史 第四巻』

田代洋一（2018）『農協改革と平成合併』筑波書房
田中光（2018）『もう一つの金融システム－近代日本とマイクロクレジット』名古屋大学出版会
田中洋子（2014）「社会とエコロジーに投資する銀行－ドイツのGLS銀行ともう一つの経済」『ドイツ研究』第48号
田中洋子（2015）「ドイツの農村における協同組合銀行とGLS共同体銀行」『農業と経済』第81巻第1号
田中洋子（2019）「協同組合銀行・共同体銀行の展開」藤澤利治・工藤章編『ドイツ経済－EUの中軸』ミネルヴァ書房
田渕進（2010）「ドイツ信用協同組合グループの構造変化」『大阪経大論集』60巻5号
田渕進（2014）「ドイツの協同組合－発展動向とメンバーバリュー」『大阪経大論集』65巻4号
帝国農会（1913）『中小農と産業組合』
手塚正夫編（1968）『日本の金融100年』金融財政事情研究会
寺西重郎（2011）『戦前期日本の金融システム』岩波書店
戸原四郎（1960）『ドイツ金融資本の成立過程』東京大学出版会
中村隆英（1968）『戦後日本経済』筑摩書房
日本協同組合学会訳編（2000）『21世紀の協同組合原則』日本経済評論社
日本銀行調査局（1962）『わが国の金融制度』
日本経済新聞（2015）「首相、JA全中『廃止』に執念」2015年2月12日3面
農商務省『産業組合要覧』各年度版
農林水産省経営局協同組織課編（2018）『平成28事業年度総合農協統計表』農協調査資料第399号
農林中央金庫調査部（1973）『農林中央金庫50年の歩み』
三菱東京UFJ銀行（2012）『有価証券報告書』
三輪昌男（1990）「農協と地域金融」『農林金融』第43巻第8号
村岡範男（1997）『ドイツ農村信用組合の成立－ライファイゼン・システムの軌跡』日本経済評論社
森武麿（2005）『戦間期の日本農村社会－農民運動と産業組合』日本経済評論社
両角和夫（1998）「農協の地域金融と組織運営」両角和夫編『農協再編と改革の課題』家の光協会
山下一仁（2008）「こんなJAは要らない」『WEDGE』9月号
万木孝雄（2019）『開発途上期日本の農村金融発展－戦前の農村信用組合を中心として』農林統計出版
F.W.ライファイゼン、田畑雄太郎訳（1966）『信用組合』家の光協会
渡久地朝明（1997）『戦後期における農業生産構造の計量分析』農林統計協会

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 63-74
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

論文

第二次世界大戦後の占領下ドイツにおけるストゥディウム・ゲネラーレ（Studium generale）導入の試み：
大学の社会的使命についての考察

Discussions on the introduction of *Studium generale* in Post-WWII Occupied-Germany:
Enquiry into the Societal Mission of the University

柴田　政子（Masako SHIBATA）
筑波大学人文社会系　准教授

本稿の目的は、第二次世界大戦後、四連合国軍の軍事占領下におかれたドイツ（1945－1949）における教育改革において、ストゥディウム・ゲネラーレ（Studium generale）導入試みの経緯を検証し、その理念について考察することにある。アメリカ占領下における大学改革の一環であったこの改革案は、結果としては、ドイツの大学課程に大きな変革を及ぼすには至らなかった。本稿では、中世にその起源をもつストゥディウム・ゲネラーレが、どの様な理念や思惑でこの時期に再び光が当てられることになり、またどういった経緯で定着することにはならなかったのかについて、主に連合国軍政府の公文書史料をもとに、検証し分析する。

対象とするのは、ヤルタ会議とポツダム会議での合意に沿いアメリカ合衆国の占領区とされ軍政府（Office of Military Government of U. S. for Germany, OMGUS）統治下におかれたバイエルン（Bavaria）、ヴュルテンベルク・バーデン（Württemberg-Baden）、大ヘッセン（Greater Hesse）各州と米領ブレーメン自由市（Bremen Enclave）、そしてベルリン市の南西部（American Sector of Berlin）である。

革新的な改革が、広範囲にわたって迅速かつ短期間に実行された日本やソ連占領区ドイツとは異なり、米・英・仏の西側三連合国の占領下にあったドイツの教育制度は、ナチ教育の排除以外著しい変革はもたらされなかったというのが多くの先行研究の見方であり、筆者も同様に考える。しかし、そのドイツにおいて、比較的明確な形で、緩やかながらも変化の必要性と可能性が検討されたストゥディウム・ゲネラーレに関する議論は注視に値する。

特に注目するのは、戦中のドイツの大学へのナチズムの浸透を、アメリカ軍政府がどの様に認識していたか、それに基づいてどのような改革策を考案していたのか、そしてそのアメリカの案に対しドイツの大学側がどの様に応じたかという点である。これらの枠組みに主眼におきながら、大学改革の一端を担うとされたストゥディウム・ゲネラーレをめぐる議論の過程を検証する。

The purpose of this paper is to investigate the processes in which the introduction of *Studium generale*, literally translated in English to 'general education', was attempted in Germany under the Allied military occupation between 1945 and 1949. It also explores the ideas of the Allies, especially the United States, for this introduction of post-war Germany. This American attempt was meant to be part of their education reform in Germany, whose purpose was to re-educate the Germans in the post-Nazi era. The paper thus focuses geographically on Bavaria, Württemberg-Baden, Greater Hesse, Bremen Enclave, and the American Sector of Berlin where the Office of Military Government of U. S. for Germany (OMGUS) was in charge of control.

Unlike occupied Japan (1945-1952) or Soviet-occupied Germany where rapid changes were brought in the education system by the Allied occupation authorities, the development of education reforms was stagnant in the U. S. Zone of occupied Germany. There, except for denazification, i.e. a large-scale screening project to find former Nazis, changes in German society as well as its education were far slow than in Japan and

the eastern part of Germany. Considering the fact, this attempt of a renewed introduction of *Studium generale* in German higher education was a remarkable change.

Special attention is paid to following two points. Firstly, it explores how the United Sates occupation authorities understood the actual penetration of Nazism in German university and the students. This is important because, as mentioned above, this reform attempt was part of the project of getting rid of Nazism in all aspects of German society. Secondly, it tries to analyse how the Americans' understanding influenced their overall proposal for reforming German education.

キーワード：ストゥディウム・ゲネラーレ、ドイツ、アメリカ合衆国、戦後占領教育改革、大学の社会的使命

Keywords：*Studium generale*, Germany, the United States, Post-WWII Education Reform, Societal Mission of University

はじめに

本稿の目的は、第二次世界大戦後、四連合国軍の軍事占領下におかれたドイツ（1945－1949）における教育改革において、ストゥディウム・ゲネラーレ（Studium generale）導入試みの経緯を検証し、その理念について考察することにある。アメリカ占領下における大学改革の一環であったこの改革案は、結果としては、ドイツの大学課程に大きな変革を及ぼすには至らなかった。下記に詳述する通り、中世にその起源をもつストゥディウム・ゲネラーレは、もともとはある一定の資質を誇る高等教育機関そのものを意味したが、転じて占領期には米・英のアングロサクソン的理念に基づいて、ここで提供されていた導入的課程 *artes liberals*、つまり今日で言うリベラル・アーツ、もしくはジェネラル・エデュケーションに近い意味で理解され、大学における幅広い知識の探求についての議論として発展した。本稿ではストゥディウム・ゲネラーレが、どの様な理念や思惑でこの時期に再び光が当てられることになり、またどういった経緯で定着することにはならなかったのかについて、主に連合国軍政府の公文書史料をもとに、検証し分析する。

対象とするのは、ヤルタ会議とポツダム会議での合意に沿いアメリカ合衆国の占領区とされ軍政府（Office of Military Government of U. S. for Germany, OMGUS）統治下におかれたバイエルン（Bavaria）、ヴュルテンベルク・バーデン（Württemberg-Baden）、大ヘッセン（Greater Hesse）各州と米領ブレーメン自由市（Bremen Enclave）、そしてベルリン市の南西部（American Sector of Berlin）である。

特に注目するのは、戦中のドイツの大学へのナチズムの浸透を、アメリカ軍政府がどの様に認識していたか、それに基づいてどのような改革策を考案していたのか、そしてそのアメリカの案に対しドイツの大学側がどの様に応じたかという点である。これらの点を主眼におきながら、大学改革の一端を担うとされたストゥディウム・ゲネラーレをめぐる議論の過程を検証する。

革新的な改革が、広範囲にわたって迅速かつ短期間に実行された日本やソ連占領区ドイツとは異なり、米・英・仏の西側三連合国の占領下にあったドイツの教育制度は、ナチ並びにナチ教育の排除以外著しい変革はもたらされなかったというのが多くの先行研究の見方であり、筆者も同様に考える。しかし、そのドイツにおいて、比較的明確な形で緩やかながらも改革議論が進められた大学におけるストゥディウム・ゲネラーレに関する議論は注目に値する。また昨今、大学のミッションの再定義が謳われるなか、高等教育機関の社会的役割に関わるこの議論について時代を遡り再考することは今日的な意義もある。

1．研究の位置づけ

本稿で議論するストゥディウム・ゲネラーレは、普遍的で包括的な学問の探究を行う形態、または概念を指す。教育上の理念は、高度な専門的学問の場としての大学が、それゆえ社会から遊離することなく調和しながら世の中の真実を探求する場、健全な市民を育成の場としての役割を担うことにある。近年、日本では大学のミッションの再定義の必要性が謳われ、リベラルアーツの再評価や文系・理系の幅広い知識の習得の重要性が議論され、社会からもそのことが期待されている（日本経済団体

連合会2018)。旧来の「専門領域内での学修に自足する傾向を解決し」、グローバル化する社会で活躍する人材の育成は、社会から求められており、今後の大学の存在意義に関わる重要な課題でもある（文科省 2015: 2）。時代の文脈は異なるが、高い専門性と広く社会を見据える一般的教養を備えた人材こそが、将来の社会をリードするという理念に通底する社会観・教育観は共通している。本研究の意義は、社会の大きな変革期における高等教育機関の社会的役割・機能ひいては存在意義に関する古くて新しい議論の一端を、歴史を遡り再考することにある。

ストゥディウム・ゲネラーレの語源は、12 ～ 13世紀の中世ヨーロッパにある。その概念的起源には、上述のような学問の形態・内容や教育課程の意味はなく、もともとはある一定の資質を誇る高等教育機関そのものを意味した。全ヨーロッパ・キリスト教国、もしくはキリスト教区内におけるすべての学生に門戸が開かれた大学を指した（Huber 1992: 286から引用、原点は Hildebrand 1989: 1471）。ストゥディウム・ゲネラーレのゲネラーレ（generale）は普遍的という意味で用いられ、ここで取得した学位が遍くヨーロッパ・キリスト教圏で「国際的」にその価値が認められており、各国の優秀な学生がまさしく国を越えて集うエリート養成機関であった（Huber 1992: 286; Pedersen 1997: 133）。また、導入的内容の *artes liberals* を教えるだけでなく、当時学問領域として広く価値が認められていた－例えばサレルノ、ボローニャ、パリなどに代表される－医学・法学・神学を探究する場であることもその定義条件とされていたが、この定義は教会に代表される当時の社会的・政治的権威から与えられるのではなく、当初はあくまで教育の世界における自負に基づく定義であった（Pedersen 1997: 133）。[1]この意味で、学問的成果にそのような普遍的価値をもたない地方のストゥディウム・パルティクラーレ（Studium particulare）やストゥディウム・プロヴィンシアーレ（Studium provinciale）とは区別されていた（Huber 1992: 286; Zutshi 2011: 155）。ストゥディウム・ゲネラーレは、後世転じてここで提供されていた導入的課程 *artes liberals*、つまり今日で言うリベラル・アーツ、もしくはジェネラル・エデュケーションに近い意味で理解されるようになったが、その契機は第二次世界大戦後のドイツにおける米・英のアングロサクソン的理念に基づいた高等教育改革であった（Huber 1992: 286）。

第一次世界大戦で、人類は科学技術の進歩がもたらした負の成果に慄然とし、第二次世界大戦の後、全体主義や独裁政権の権力を受容した社会や人々の政治的ナイーブさを非難した。第二次大戦でナチス・ドイツと大日本帝国は崩壊したが、禍根を絶つため各々の社会に残った人々には「再教育」が必要だとされた。敗戦後連合国軍の軍事占領下におかれた両国であるが、小中高の基盤的教育段階での改革が進んだ日本に対し、ドイツではナチズムが浸透した大学の変革が唱えられ、その一つの手がかりとしてストゥディウム・ゲネラーレの教育的・社会的価値が再考された。

ドイツに関する占領教育改革の研究は、1980年代に多くの実績が残された。包括的理解を促す研究の代表的なものとして、Manfred Heinemann の *Umerziehung und Wiederaufbau: Die Bildungspolitik der Besatzungsmächte in Deutschland und Österreich*（1983）をあげることができる。アメリカ占領下での教育改革については、James Tent が *Mission on the Rhine: Reeducation and denazification in American Occupied Germany*（1982）で網羅的な描写を展開しつつ、ドイツ側特に旧ナチに対峙する占領軍の改革を丁寧に検証している。1980年代に占領教育改革の研究が盛んであった時代的背景として、西ドイツ政府が国是としてきた「過去の克服」政策が、広く社会に理解され浸透し出したことがあげられる。1968年からの大規模な学生運動を契機に、それ以降西ドイツ社会に広まった、いわゆるナチ世代への批判的自国史観が、特にリベラル知識人や青年層の間で論争されたことも大きな原動力となった。1980年代に、ノルテ（Earnst Nolte）やハーバーマス（Jürgen Habermas）らが中心となり、ナチス・ドイツとホロコーストの歴史解釈について激しく展開した「歴史家論争」（Historikerstreit）は、当時ドイツ国外でも注目され議論を呼んだ。それ以降、日独両国における教育改革の比較研究が進み、Beate Rosenzweig の *Erziehung zur Demokratie?: Amerikanische Besatzungs- und Schulreformpolitik in Deutschland und Japan*（1998）や、Masako Shibata の *Japan and Germany under the U. S. Occupation*（2005）が、比較によって各々の事例を相対化することで全体像をとらえている。最新の顕著な業績としては、David Phillips の *Educating the Germans*（2018）がある。調査範囲の広さに加え、私信などを丁寧に読み込み辿ることで教育改革者たちの人間関係の描写も含んだ大著であるが（Shibata 2019）、イギリス

占領区に特化している。いずれも戦後占領教育改革を各々の視点から包括的にとらえたものであるが、結果としては、大きな変革をもたらすこのとのなかったストゥディウム・ゲネラーレを通じた改革の試みの扱いは極めて小さい。本研究では、如上のように今日的にも意義のあるこの大学改革の試みに光をあて改めて考察してみたい。

2. アメリカ占領区の状況

四連合国軍による共同統治となったドイツで、アメリカ占領区は分割統治のベルリンを除くと、面積はソ連占領区とほぼ同程度の最大区（約17,000km２、30.4%）であった。経済的に疲弊していた他の連合国と異なり、アメリカ合衆国には比較的余裕があった。後述する通り、ストゥディウム・ゲネラーレ導入の試みは、他の西側占領区であるイギリス区とフランス区にもある程度見られたが、ドイツ占領教育改革全体を俯瞰した場合、これら２か国（特にフランス）が注いだ経済的・人的資源は小さく、その成果はさらに限られたものであった。事実、イギリスにはその要請に応じ「占領補償」（Occupation Payment）という名目で、ドイツ占領といまだに続く日本との戦争継続のため400万ドルがアメリカから供与されている（McCloy 1953: 31; Bennett & Nicholls 1972: 181）。経済的困窮に加え、伝統的プラグマティズムにのっとり、イギリスは一定の重要事項に関し拒否権を保持しつつ、1946年12月に早くもドイツでの教育改革から撤退した。そもそもイギリスにとってドイツ占領の最優先課題は同国の経済と工業の復興で、「ヨーロッパのど真ん中に飢えて破産したドイツをおいておく余裕はヨーロッパにはない」（Cairncross　1986: 11）という英外相イーデンの言に集約されている。経済的疲弊という点ではフランスはより状況が悪く、ドイツ占領権に固執する一方で、ソ連占領区と同様むしろ自ら占領する地区のドイツ人から食糧などを供出させており（Stolper 1948: 70）、実際のドイツの教育改革に金とエネルギーを注ぎ込む政策はほぼ見らなかった。

アメリカ軍政府は占領区内に多くの避難民を受け入れており、1946年10月29日の時点で、受け入れ人数は3,055,300人（占領区内全人口の16.3%）で、最も多かったソ連占領区の3,598,400人（同20.3%）に次ぐもので、イギリスの受け入れ難民2,744,900人（同13.9%）と比べても多い。ちなみにフランスの難民受け入れは78,300人（同1.5%）と桁外れに少なかった（Vogel & Weisz 1989:25）。戦中、国を逃れ戦後帰還を試みたドイツ人に対し、国境を閉ざしたフランス軍政府の対応は、その後も人道的見地から批判された。アメリカ軍政府としては、自区内だけでも一括統治を希望していたが、地方分権が進んでいるドイツでは、特に文教政策に関しては各州の「文化高権（Kulturhoheit）」を重んじる伝統があり、軍政府が提案した全占領区内を統合する教育諮問会議の編成はドイツ側の反対で実現しなかった。この行政上の複雑さとそれに伴う業務の煩雑さは、占領期間を通してアメリカ軍政府の大きな負担となった。このことは、約３か月後に開始することになる日本占領を準備する上で重要な教訓となり、単独統治と総司令官への絶大な権力付与を決める一因になった。[2]

教育行政のみならず、アメリカ占領区内は政治的・文化的にも複雑・多様であった。面積も人口も最大のバイエルン州は、保守党キリスト教社会同盟（Christlich-Soziale Union, CSU）の地盤で、カトリック教会の政治的・社会的影響が強い。教育相[3]が第１代ヒップ（Otto Hipp）から第２代フェント（Franz Fendt）、第３代フントハマー（Alois Hundhammer）へと代わる度に、より保守化・反米化していった（Shibata 2005: 119-124）。現在は存在しないヴュルテンベルク・バーデン州は、アメリカとフランスによる交渉の結果、異なる２つの州、すなわちヴュルテンベルク・ホーエンツォーレルン州とバーデン州を分断かつ結合させた、いわば占領用に人工的に作り上げられた州ということもあり、土着の政治志向への固執は希薄であった。教育相ホイス（Theodor Heuss）とその後継者ボイエレ（Theodor Bäuerle）が、アメリカ型ではなく独自の改革案を練った。大ヘッセン州も、もともとの州領に旧プロイセン下にあったヘッセン・ナッサウを併せた一時的な州であった。同じく占領軍に作られた州であったが、革新的なドイツ社会民主党（Sozialdemokratischen Partei Deutschlands, SPD）が強力であった。戦後初代教育相ベーム（Franz Böhm）や後継のシュラム（Franz Schramm）、シュタイン（Erwin Stein）らも、改革には意欲的だったが、同様にアメリカ型教育の移入には至らなかった。ブレーメン区はドイツ社会民主党がリードする革新路線をいく地域で、学校教育評議会評議会長ポールマン

（Christian Paulmann）の下で、例外的にいくつかの改革が進んだ。

3. 非ナチ化と教育改革案

教育改革に携わったアメリカ軍政府が、ドイツの大学延いてはドイツの教育全体についてどのような認識を持っていたかは非常に重要である。『対独アメリカ教育使節団報告書』（以下『報告書』）（*The Report of the United States Education Mission to Germany*, 1946）にも表現されているように、視察をしたアメリカ人教育者や軍政府教育担当官は、ドイツの教育制度の長い伝統を、ヨーロッパにおける文明的遺産の片鱗として高く評価していた。前置きとして、人類に大いなる文明の功績を遺したドイツに対し、改革を提言するのは非常に困難な作業である[4]、と予め断わっている点は、日本に対する同様の報告書と大きく異なる。こうしたアメリカ人のドイツ観は、教育使節団のみならず軍政府内にも広く見られた。教育文化課（Education and Cultural Relations Division, E&CR）長官のグレース（Alonzo Grace）は、「アメリカ人だってコカコーラ以外に与えるものがある」ことをドイツ人に知らしめよう、と自嘲的である。[5]『報告書』は本国アメリカの教育学者からも、「的外れな勧告」であると分析されている。[6]ドイツでは占領開始直後から、「再教育（re-education / Umerziehung）などという考え自体が知的な意味でドイツ人に対する侮辱である」との反発が強かった。[7]アメリカ軍政府に最も早く報道再開が許可された新聞である『フランクフルター・ルントシャウ』紙は、「改革どころかドイツ教育の退化を招くだけだ」と『報告書』の勧告を一蹴している。[8]「全ての日本人が三度は読むべき」（周郷ほか 1950: 1 － 2）と絶賛の言で受け入れられた日本の場合と比較すると、ドイツの教育改革におけるアメリカの困難が容易にうかがえる。

こうした文脈のなかで、アメリカ占領区における教育改革は着手されていった。既述の通り、初等・中等教育段階に改革が集中した日本とは異なり、ドイツでは戦後の教育再建、延いては国民の精神的再建、すなわち「再教育」のため、青年層の民主化が特に重要であるとされた。大学生を中心とした若者に残存するナチズムと、彼らの占領軍に対する反抗的行動への危惧は、アメリカのみならず他の連合諸国でも重要問題として取り上げられていた（Philipps 2018: 146－156）。米政府は、「敗戦後の（ドイツ人青年の）空虚感の隙間に、民主主義的精神が入り込む余地はあるものの、そもそもドイツには若い世代に新たな精神的方向付けができるような民主主義が発展する社会的素地がない」とし、自らによるドイツ人青年再教育の必要性を訴えた。[9]大学生の「思想的健全性」を回復・維持しなければ、大学は反占領アジテーションの巣になると、占領が終わるころまで危惧されていた。[10]米国戦争省民間局（War Department, Civil Affairs Division）は以下の見解を記している：

> 公平にみて、ヒトラー政権下のドイツにおけるドイツ人青年へのナチズムの浸透は、戦時中に連合諸国が恐れたほどは徹底していなかった。若いドイツ人のなかに、熱狂的なナチは比較的少ない。しかし同時に、ナチズムに背を向けた、またはむしろ積極的な反ナチだったドイツ人の若者が、必ずしも親米や親占領軍とは限らない。[11]

このアメリカ側のこの観察を裏付けるものとして、非ナチ化を目的としたナチ審査質問票（Fragebogen）の結果がある。バイエルン州教育省でナチと判定された官僚は全省中最低のわずか６％だったが、アメリカ軍政府の対独占領政策に対し頻繁に異議を唱え改革実行を手こずらせた。ちなみに他省のナチ判定結果は、法務省81％、農業食糧省77％、財務省60％、労働省22％、交通省18％であった（Montgomery 1957: 80、原典は *New York Times*, 30 November 1949: 12）。

大学における非ナチ化は、歪んだエリート意識、弱者排除の思想、偏狭な民族的国粋主義思想や全体主義思想を育む温床を断ち切る手段として重要課題とされた。[12]学生も非ナチ化の対象となり、伝統的結社組織であるブルシェンシャフト（Burschenschaft）などの学生団体や校友会（Altherrenbuende）は、国家主義的・反動的・擬似軍隊的性格を擁すると糾弾された。[13]事実ナチス期には、キャンパス内で学生組織のメンバーを中心に、反ユダヤ的言動が横行しており、特に国家社会主義ドイツ学生連盟（Nationalsozialistischer Deutscher Studentenbund, NSDStB）が急成長した1930年代からは、大学内での対

ユダヤ人暴行が急増した。1931年に起きたハンブルク大学での対ユダヤ人暴力事件のように、多くの場合、大学側はこうしたドイツ人学生組織の違法な行為を無視、または軽視していた（Giles 1976: 5－7）。占領期、これらの組織とその下部組織のメンバーは、特にナチス党との関与を厳しく追及され、その結果放校された者は大学への再入学は許可されなかった。[14]また、危険分子ととらえられていた将校経験者の復学は、アメリカ占領区に限らず大きな問題とされた。1946年11月の時点で、学生のなかで復学を禁じられた将校経験者はアメリカ占領区で19.1%、イギリス占領区では約25%、フランス占領区では15.6%、ソ連占領区では3.1% であった（Phillips 2018: 188）。青年層の非ナチ化は、アメリカのみならず、ソ連も含めた他の占領国でも同様に重要視されており、各連合国軍の戦争捕虜キャンプには、青年兵士らの再教育の為の特別な機関が設けられていた。これは戦後世代の精神の健全化という目的と同時に、倫理的空虚感に陥ったドイツの青年層が反占領運動の先導力とならないよう阻止する政治的意図も大いにあったと言われる。[15]

アメリカ側は、ナチズムがドイツの大学の組織と人々に深く浸透した背景を分析にするにあたり、その政治的保守性とともに、厳格な職階構造のなかでふるう正教授（Ordinarius）の絶大とされる権力と、独善的大学運営を指摘した。[16]また、彼らに対する非正教授（Nichtordinarius）の隷属的関係が、大学や社会全体の非民主性やドイツ大学人と学生の政治的ナイーブさを生み出した素地だと批判した。さらに軍政府教育宗教課（Education and Religious Affairs Branch, E&RA, 1948年 3 月改組で ‘Branch’ から E&CR の ‘Division’ として昇格）は、哲学や神学など古典的な大学の科目の偏重が、ナチス期以前からのドイツ社会と大学の隔離を生んだと批判した。[17] スタンフォード大学のモルガン（B. Q. Morgan）らの調査書は、以下のように表現をしている：

> ドイツの大学は、われわれアメリカ人が考えるところの教育機関とは異なる。人間や人々の生活に関心がなく、知識そのものにしか関心がない。それは知識を得るための知識である。[18]

こうした組織的硬直性と保守性を克服する改革案として、理事会制度の導入が図られようとした。[19]1947年 4 月24日、アメリカ占領区ドイツ教育相会議において、ヴュルテンベルク・バーデン州教育諮問委員が大学理事会制度の導入に言及した。しかし、アメリカ型の理事会制度は、ワイマール期にフランクフルト大学やケルン大学で採用されていたクラトリウム（Kuratorium、英語では Board of Regents）の理念や実践とも異なり、ドイツの土壌に馴染まぬと判断された。結果的に、地域や学生の代表までが大学運営に携わるといった程度にまで革新的な大学運営を実現させたのは、アメリカ軍政府がソ連占領区にあったベルリン大学（現フンボルト大学）から自由主義的教授と学生を引き抜いて西ベルリンに新設したベルリン自由大学でのみ導入された。結論として、アメリカ型の理事会による大学運営制度は、近代国家における官僚機構の一翼を担う組織として発展してきたドイツの大学の土壌に相容れず、受け入れられることはなかった。

4. ストゥディウム・ゲネラーレについての議論

このように、大学と社会の連携を図ることで健全な大学運営を目指すというアメリカ型理事会制度の導入は、ドイツでは根付かなかったが、それに代わる両者の橋渡し的装置として議論されたのがストゥディウム・ゲネラーレであった。既述の通りこの起源は中世にあるが、占領期により近い時代では、20世紀初頭プロシアで、ポリテクニクと呼ばれる専門学校（Polytechnische Schulen）の工科大学（Technische Hochschulen）への昇格の動きのなかで見られた。1910年代にプロシア教育相ベッカー（Carl H. Becker）は、大学教育に一層の普遍性や一般性を加える目的で、哲学や社会学と共にストゥディウム・ゲネラーレを必修科目とする政策を推進している。前掲『報告書』は、ドイツの大学が「社会に対して責任ある知的市民」の育成するためには一般的教養は欠かせない、と訴えている。[20]またドイツ学問界のある種厭世的な志向を克服するには、一般的教育とともに政治科学の広まりも重要だと唱えられた。[21] それまで隔たりを築いてしまった一般社会と大学の結合とともに、「ばらばらになった学問の破片」と評された大学教育の再編がこうして試みられることになった。

ストゥディウム・ゲネラーレの形態としては、大まかに３つのパターンがある。第一に正規の講義に一般教養的内容を組み入れるなど既存のカリキュラムに最小限の変更を加える形態、第二に正規科目とは別に、例えば週ごとに特別な授業を行う形態（ディーズ・アカデミクス *Dies academicus* と呼ばれる）、第三に後期中等教育課程をも含む大規模な大学課程再編の形態である。第三の形態は、後期中等教育課程を終え大学に進学するまでの間、学生たちが一般教養を学ぶというもので、多くの若者が戦争で学問を中断せざるを得なかった当時の状況で、彼らの学問復帰に最も有用な方法であると考えられていた（Wenke 1953: 70－71）。この形態の活用度は大学により様々であったが、マインツ大学では86％の学生が受講している（Pilgert 1953: 93）。他方、当時注目されていたハーバード大学から出版された *General Education in a Free Society* の影響はむしろ薄く、人文科学・社会科学・自然科学というアメリカ型ハーバード・モデルの型にはめた学問体系は普及しなかった。

全国でほぼ単一的な改革が行われた日本とは異なり、既述の通りドイツにおける教育改革は、国内各地域の伝統や状況に応じる形で試みられた。非ナチ化以外の改革に関しては、個々の大学の伝統や個性を尊重し、その「土壌」に即した改革が必要であると、占領側・被占領側の両者で合意されていた（Wenke 1953: 70－71）。以下、具体的な導入の試みをみてみる。大規模で画期的試みであったのは、米占領区のハイデルベルク大学におけるカレッジ形式の一般教育教授形態（Collegium Academicum Heidelberg）である。ここでは、寮生活において、学部生、大学院生、講師（Dozent）らが共に日常生活の中で、民主主義の理念の理解と実践を学んだ（Schneider 1983: 56－67）。既に1945年10月、学長バウアー（Karl-Heinrich Bauer）が実験的にこの形態で、日常の「自由な政治的討論」を介してのストゥディウム・ゲネラーレ導入案を提示している。基本的にはカレッジで行われるストゥディウム・ゲネラーレ関連の行事に参加することが義務付けられ、カレッジ内での学生自治組織の運営も教育の一環とされた。当時165人の学生が寮生活をしながら受講した。

寮内における一般教育の教授は、アメリカ占領区のみならず、イギリス占領区やフランス占領区といった西側ドイツで奨励された。[22]ストゥディウム・ゲネラーレの「熱烈な信奉者」（Phillips 2018: 247）であったオックスフォード大学ベイリオール・カレッジ（Balliol College）のリンゼー教授（Birker Lindsay、後に１st Baron Lindsay of Birker）が長となり、ドイツの大学に諸改革の勧告を行った大学教員連合（Association of University Teachers, AUT）はその『大学改革報告書』（*Gutachten zur Hochschulreform*, 通称 *Blaues Gutachten*）のなかで、ストゥディウム・ゲネラーレをドイツ大学改革の中心課題として取り上げ重要性を力説している。その実行例として、ベルリン工科大学（Technischehochschule Berlin）ではイギリスの勧告により、ストゥディウム・ゲネラーレの受講が必須とされたこともあった。フランス占領下にあったテュービンゲン大学のライプニッツ・カレッジ（Leibniz Kolleg）でもストゥディウム・ゲネラーレは、占領の終わる1949年までに約60人の学生が受講した（HDO 1953: 93; Wenke 1953: 71）。同じくフランス占領下のフライブルク大学ではコロクィウム・ポリティクム（Colloquium Politicum）を開き、ストゥディウム・ゲネラーレは政治学と密接に融合した内容で講義された。またマインツ大学では、復員後に復学を試る者や新たな入学をめざす青年に対し、専門教育開始前の学問的準備としての一般的教育を提供していたが、これが1949年頃にはストゥディウム・ゲネラーレとして発展していった。テュービンゲン大学のライプニッツ・カレッジでは、専門的学問の追及とストゥディウム・ゲネラーレとの融合の可能性についての会議が1950年に開催されている。そしてここでは、大学進学者が最も多い後期中等教育機関であるギムナジウム（Gymnasium）とのカリキュラム上の連携が必要不可欠であるとの考えがまとめられた。また同年から、教育科学労働組合（Gewerkschaft Erziehung und Wissenschaft）の大学委員会の奨励により、大学教員によるストゥディウム・ゲネラーレフォーラムが開催されている。また冷戦の緊張が高まるにつれ、対独米国高等弁務官（The U.S. High Commissioner for Germany，HICOG）は、政治科学の重要性もことさら強調した（HDO 1953）。この動きに導かれるかたちで、マールブルク大学、フランクフルト大学、ダルムシュタット大学では、新たに政治科学を履修するコースが設けられ、テュービンゲン大学、ハンブルク大学、マインツ大学、ゲッティンゲン大学、ケルン大学がそれに続いた。ドイツ側教育者のあいだでも奨励する動きが見られ、シュプランガー（Eduard Spranger）、リット（Theodor Litt）、フリット

ナー（Wilhelm Flitner）といった著名な学者が、人文科学が根付く基礎を築いた（Führ & Furck 1998: 421）。

その一方で、こうした試みにもかかわらず、その後定着するに至らなかった要因には、ドイツ国内の問題と連合国側が面していた占領の課題という両面がある。ドイツ国内では、「教育」（Erziehung）と「人格形成」（Bildung）のバランスのとり方についての議論も再燃し、教育の民主化の名の下に、ストゥディウム・ゲネラーレをカリキュラムの中に組み込み、学生に強要することの是非も議論された。ナチス時代の大学教育の根本的誤りは、学生らの自由な学問を通じての人格形成の機会を奪い、まさに「教育し過ぎた」ことにあるという主張も出た。新たなカリキュラムの強要は、学生の自発的な学問的・人格的成長を促進するという理念を蔑ろにしたナチス期の大学教育の矛盾の遺物であり、その解消にはならないという考えもあった。各大学で、少しずつ成果をあげたと見えるストゥディウム・ゲネラーレ導入であったが、こうした動向は戦後期に次第に衰退し、多数の大学で受講が必修となることがないまま、戦後のドイツの大学教育制度に組み込まれることにはならなかった。また、取り扱う学問領域が広すぎたり、領域の選択に一貫性を欠いたりする事例が多く、単なる乱雑な寄せ集めとか、学問というよりは文化的性質の強いものとしてとらえられることもあった。

またドイツの場合、戦争によって大学の建物の破損や図書館所蔵書籍・研究資料の焼失といった物理的困難が、このストゥディウム・ゲネラーレのみならず他の大学教育改革の推進を妨げることになったと考えられる。アメリカ占領区においては、エアランゲン大学やハイデルベルク大学はほぼ難を逃れたが、フランクフルト大学は終戦の時点で建物50％を失くし、ミュンヘン大学は60％を破損、ヴュルツブルク大学に至っては、終戦直後は90％の施設が使用不可能な状態にあった。[23]

加えて、このストゥディウム・ゲネラーレ導入案をドイツ占領教育改革という連合国の一大プロジェクトの一角としてみた場合、その優先順位は必ずしも高くなかったことも一因である。日本におけるいわゆる「パージ」の範囲や規模が限定的であったのと対照的に、少なくともアメリカ占領区においては、クレイ将軍（General Lucius Clay）[24]のドイツ州政府代表へのスピーチ“Denazification is a must”（1946年３月５日）にも表現されているように、非ナチ化（Denazifizierung/denazification）は最優先・最重要課題で、当初は区内のすべての成人を審査対象とする徹底ぶりであった。[25]各大学内に設立された大学改革委員会（University Planning Committee, UPC）を中心に行われ、フランクフルト大学では全学で33人、エアランゲン大学では総数30人の教授が追放された。マールブルク大学に関しては、絶対数はつかめていないが、追放率でみると、法学部教授の50％、医学部44％、哲学部30％の教授が追放されている（Shibata 2005: 136－139）。大学教員のみならず、学生に対しても厳しいナチ審査とその後の処罰が行われたことでもその重要性は明確で、教育課程改革はまさに二次的・三次的重要性しかもたない課題であった。

さらに教育改革をドイツ占領というより広い観点で捉えた場合、終戦直後のヨーロッパの政治的・経済的文脈を踏まえると、前述イーデン英外相の発言の通り、それ自体の重要性は低かった。ヨーロッパにおける冷戦開始の時期とその緊張度も、占領側からみた教育改革全般の非重要性の背景にある。冷戦構造が明らかになり占領政策を大きく転換させたのが1948年後半であった日本・アジアの状況と異なり、ドイツ占領と同時にソビエト連邦がポツダム合意を反故にし出したヨーロッパにおいては、大学教育はいわずもがな教育改革自体の政治的重要性は低かった（Shibata 2005: 107－113）。こうした中、教育改革のなかでは優先順位が高く早急な対応が求められたのは、如上の非ナチ化と義務教育学校の再開であり、ドイツ高等教育機関の理念や教育課程についての議論は継続・定着しなかった。

5. むすび

ナチズムの台頭に際し無力であった、むしろその温床になったとされたドイツの大学が、社会とのつながりを再構築することを求められるなか、ストゥディウム・ゲネラーレ導入を試みた経緯を検証した。19世紀には世界の羨望の的で、多くのアメリカの大学自身その発展過程で倣ったドイツの大学は、大戦後は「人間や人々の生活に無関心」な「知識のための知識」を妄信する「ばらばらになった学問の破片」と評された。アメリカ軍政府の主張によれば、従来の高度に専門化した戦前の大学教育は、

社会における学問の孤立のみならず、国家・社会のリーダー層を構成する大学生の中に、歪んだエリート意識、弱者排除の思想、延いては偏狭な民族的国粋主義思想と全体主義思想を育むに至った。こうした禍根を取り除く手段として、ストゥディウム・ゲネラーレ改革の重要性が強調された。ドイツの大学におけるストゥディウム・ゲネラーレは、戦後ドイツの青年に民主主義理念を理解させる上で、重要な役割を担うものであると、ドイツ側もアメリカ側も認識していいた。この大学の教育課程再編の試みは、いわゆる一連の「ナチ科目」との単純な差し替えという以上の、教育的・社会的意味を持つものであったと言える。蒙昧な政治的ナイーブさでナチズムの禍根から眼を逸らした社会的責任を厳しく問われたドイツの大学は、アメリカ占領軍の勧告を受けるかたちで改革に取り組んだ。しかし一枚岩ではなかったドイツの大学は、自治の伝統に基づき――占領軍にとっては厄介だったが――各大学が各々の状況に応じ各々の理念とやり方で導入を試みた。

結果的に見ると、ストゥディウム・ゲネラーレは定着しなかった。非ナチ化のような、目を見張るほどの顕著な変化をドイツの大学にもたらすことはなく、改革は画一的もしくはシステマティックに行われたものでもなかった。ドイツの伝統的な州文化高権やアカデミック・オートノミー理念の外に、冷戦の緊張が増す中での共同統治という占領全体の政治環境と、それゆえの教育改革自体の比較的低い政治的優先性の位置づけも、こうした結果の重要な要因になった。大学のみならずドイツの教育全体をみても、占領期の改革は革新的には進まず、ようやく1964年、それまでの「保守的で、教会に影響を受けた、非常にイデオロギー的」な観念的な教育観‘*Bildungsideal*’が支配する時代から、教育政策‘*Bildungspolitik*’へ転換し（Springer 1965: 11）、西ドイツにおける教育の「新秩序」‘*Neuordnung im deutschen Schulwesen*’や「脱イデオロギー」‘*Entideologisierung*’といった大きな転換期を迎えるまで、「失われた20年」が過ぎることになる（Robinsohn & Kuhlmann 1995: 15－35）。[26]

終戦と同時に一旦は完全に封鎖されたが、再開後にその民主化の一環として取り組んだこの大学改革の理念は、名実共に民主主義の理念を尊重し育む教育機関としての大学の役割を考察するに際して、現代にも一つの視点を提供していると考えられる。現在の統合後のドイツにおいて、またグローバル化していく世界の中にあって、専門的知識の探究と、それを社会への貢献という視点でとらえられる学問的態度の融合が再び求められている。ドイツ技師連盟（Verband Deutscher Ingenierre, VDI）の1990年代からの主張もこうした考えを反映している。広い研究視野、包括的でシステマティックな分析、創造的で柔軟な方法論の発達が求められる現在、多領域にわたる学問への要求もますます高まっている。アメリカが、長い伝統に基づき世界の羨望の的であったドイツの大学、自らもモデルとしてきたドイツの大学に対し批判を加えたことも注目に値する。またこの批判に対し、ドイツの大学が取った、自らの社会的・学問的土壌に合う形でのストゥディウム・ゲネラーレ導入の試みも再評価されるに値する。終戦直後にドイツとアメリカが取り組んだ大学の学問的・社会的役割についての探求は、昨今大学のミッションの再定義の喫緊の課題として議論される日本にも少なからぬ示唆を与えると言える。

【注】

[1] 1318年に教皇ヨハネス22世がケンブリッジ大学のStudium generaleとしての資質に疑義を唱えた事例から、14世紀ごろにはローマ教皇に認められる必要があったとみられる。同大学のほとんどの学生がイングランド出身で、また卒業生の多くもイングランド国外で学んだ経験がないなどの点で、Studium generale と呼べるような傑出した学問機関であるとはみなされなかった（Zutshi 2011: 154－169）。

[2] ‘Positive Policy for Reorientation of the Japanese’, 19 July 1945, drafted by State-War-Navy Coordinating Committee (SWNCC 162/D, Secret) (ERJ 1 1-B－5). 英連邦軍 (British Commonwealth Occupation Force, BCOF) が中国・四国地方を管轄していたが（面積の約14%, Bates 1993: 264）、統治機構の機能からみて事実上米国の単独統治であった。

[3] ドイツでは州により行政機構の名称が異なるが、本稿では簡潔性を優先し全て「教育省」と表記する。ちなみに、当時の呼称は以下の通りである：バイエルン州は Staatsministerium für Unterricht und Kultus、ヘッセン州は Ministerium für Kultus und Unterricht、ヴュルテンブルク・バーデ州は Kultusministerium、ブレーメンは Senator für Schulen und Erziehung。

[4] ‘Report of the United States Education Mission to Germany’, 20 September 1946: 4 (Z45 F 5 /304- 2 / 4 - 5).

[5] ‘Report from Germany: Information of Dr. Grace, Director E&CR for American People’, 1 February 1949 in the OMGUS Newsletter (Z45 F 5 /310- 2 / 1).

[6] ‘Secondary Education in Germany: A memorandum on the Report of the United States Education Mission to Germany’ October 1947, Study Group for a German Problems of the University of Chicago (Z45 F 5 /304- 2 / 6).

[7] David Phillips (1988: 81) はドイツ語の接頭辞 um は英語の re に比べ、より大きな（再）変革を意味するため、英独相互の言語上の理解不足が軋轢を更に深めたと分析。

[8] ‘Schwierigkeiten der Umerziehung’. *Frankfurter Rundschau*, 17 October 1946 (Z 1 1029).

[9] ‘Long-Range Policy Statement for German Re-Education’, 28/29 May 1945 (released as ‘SWNCC 269/ 5 ’, 21 August 1946) (Z45 F 5 /310- 2 /22).

[10] ‘Functions of the university officers and occupation policy in the universities of the French, English and American Zones, Tri-zonal university officers meeting at Bad Nauheim’, 21-22 July 1949 (Z45 F 5 298- 1 15).

[11] ‘School for Self-Government and Civil Leadership in Germany’, 16 May 1946, drafted by the Civil Affairs Division of the War Department (Z45 F 5 /300- 1 /33).

[12] ‘American Education Policy, an address to German ministries by John W. Taylor’. February 1947 (Z45 F 5 /344- 1 / 5).

[13] ‘Reopening of universities and other Institutions of Higher Learning: Supplementary Directive to Section VII, Part 1, Administration of Military Government in the U.S. Zone in Germany’ 7 July 1945 (Z45 F 5 /309- 1 /28).

[14] ‘Non-Admittance of Persons with Former Nazi Affiliations as Students to Institutions of Higher Learning’, 14 January 1946, the Directorate of Internal Affairs and Communications, Control Council Co-ordinating Committee (Z45 F 5 /301- 3 /29); ‘Reopening of universities and other Institutions of Higher Learning: Supplementary Directive to Section VII, Part 1, Administration of Military Government in the U.S. Zone in Germany’, 7 July 1945 (Z45 F 5 /309- 1 /28); Giles 1985.

[15] ‘Recruitment for German Universities’, address to the Education Branch of the Main Headquarters of the British Military Government on 27 May 1946 (FO 1037/28); ‘Anrechnung von Studien im Ausland und im Gefangenenlager ‘ at the Rector Conference of the American Zone in Heidelberg on 25 November 1946, In: Neuhaus, 1961, p. 23; ‘The Minutes of the Tri-Zonal University Officers Meeting in Bad Nauheim’, 21-22 July 1949 (Z45 F 5 /298- 1 /15).

[16] ‘Report of the United States Education Mission to Germany’, 20 September 1946: 52 (Z45 F 5 /304- 2 / 4 - 5).

[17] ‘Divisional Recommendations for Assignment of Powers and Functions to German Governmental Levels: II Brief Description of Assignment of Jurisdiction over this (church’ s) Function and of its Administration’ of 25 June 1946, drafted by the E&RA (Z45 F 5 /304- 1 /33); Zook 1947:14-15.

[18] ‘Memorandum on Postwar Education Reconstruction in Germany, Prepared by B. Q. Morgan and F. W. Strothmann, Department of German, Stanford University’ (Z45 F 5 /307- 3 /20). ‘Report of the United States Education Mission to Germany’: 4 も同様の見解を記している .

[19] *Richtlinien für die Reform der Hochschulverfassungen in den Ländern des amerikanischen Besatzungsgebietes. Vorschläge eines Sachverständigenausschusses 1947*. Neuhaus 1961: 284-285; ‘The United States Education Mission Report to Germany’: 52.

[20] ‘Report of the United States Education Mission to Germany’: 48.

[21] *Rektorenkonferenz der amerikanischen Zone Heidelberg* on 25 November 1946. Neuhaus 1961: 23-24; Wenke 1953: 70.

[22] *Hochschultag des britischen Besatzungsgebietes und Hochschultag des amerikanischen Besatzungsgebietes Schönberg* on 18 July 1947; Neuhaus 1961: 28.

[23] ‘Report of the United States Education Mission to Germany’: 46; Hess 1968; Schneider 1990.

[24] クレイは1947年３月までは長官代理。長官職は、1945年11月アイゼンハワー (Dwight Eisenhower) からマクナーニー（Joseph T. McNarney）へ、そして47年３月にはクレイへと引き継がれた。

[25] 1946年１月15日以後、119万強の質問表（Fragebogen）が、米占領区のドイツ人成人に配布される。これ以前、管理委員会指令第８号（Prohibition of Employment of Nazi Party Members in Positions Other Than Ordinary Labor）に基づき配布された質問表と合わせると、米占領区では362万余りのドイツ人成人に対して、ナチ判定審査が行われたことになる。1945年段階でみると、米占領区人口16,682,573人中、その21.7% にあたる3,623,112人が質問票を提出したことになる（参照：日本は同比3.2%）。ドイツ人に対する質問表は150項目の質問が盛り込まれていた（参照：日本人への質問は23項目）（Montgomery, 1957）。

[26] この教育政策については、1964年１月から３月まで連邦議会 *Bundestag* で集中的に議論されている。議会セッションの議事録（Picht 1964: 101）

【公文書資料】

コブレンツ・ドイツ連邦公文書館文書

Z 1 : Länderrat des amerikanischen Besatzungsgebietes.

Z45 F: Office of Military Government United States.

英国国立公文書館

FO: Records of the Foreign Office of the British Government.

フンボルト大学教育学部付属図書館

ERG: Tsuchimochi, G. H. (ed.) (1991) *The U.S. Occupation of Germany: Educational Reform 1945-1949*. Washington D. C.: Congressional Information Service, Inc., and Maruzen.

【参考文献】

Bates, P. (1993) *Japan and the British Commonwealth Occupation Force, 1946-52*. London: Brassey’s.

Bennett, J. W. & A. Nicholls (1972) *The Semblance of Peace: The political settlement and the Second World War*. London, Macmillan.

Cairncross, A. (1986) *The Price of War: British policy on German reparations 1941-1949*. Oxford: Blackwell.

Führ, Ch. & C.-L. Furck (eds) (1998) Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte: 1945 bis zur Gegenwart. 1 : VI/1. München: Verlag C. H. Beck.

Giles, G. (1976) *University Government in Nazi Germany: The example of Hamburg*. New Haven, Institution for Social and Policy Studies, Yale University.

------- (1985) *Students and national socialism in Germany*. Princeton: Princeton University Press.

Heinemann, M. (hrg.) (1983) *Umerziehung und Wiederaufbau: Die Bildungspolitik der Besatzungsmächte in Deutschland und Österreich*. Stuttgart: Klett-Cotta.

Hess, G. (1968) *Universities in Germany 1930-1970*. Darmstadt, Druck- und Verlag-Gesellschaft GmbH.

Hildebrand, B. (1989) *Studium Generale*. In *Paedagogische Grundbegriffe*, ed. D. Lenzen. Reinbek: Rowohlt: 1471–1476.

Historical Division Office of the Executive Secretary Office of the U.S. High Commissioner for Germany (HDO) (1953) *The West German Education System: With special reference to the policies and programs of the Office of the U.S. High Commissioner for Germany*.

Huber, L. (1992) Towards a New Studium Generale: Some Conclusions. *European Journal of Education* 27 (3): 285–301.

文部科学省高等教育局（文科省）（2015）新時代を見据えた国立大学改革 .
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/10/01/1362382_2.pdf（2019年６月25日最終閲覧）

McCloy, J. J. (1953) *The Challenge to American Foreign Policy*. Cambridge: Harvard University Press.

Montgomery, J. D. (1957) *Forced to Be Free: The Artificial Revolution in Germany and Japan*. Chicago: The University of Chicago Press.

Neuhaus, R. (hrg.) (1961) *Dokumente zur Hochschulreform 1945-1959*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH.

日本経済団体連合会 (2018) 今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言 .
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/__icsFiles/afieldfile/2018/10/12/1410146_1.pdf（2019年６月25日最終閲覧）

Pedersen, O. (1997) *The First Universities:* Studium Generale *and the Origins of University Education in Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.

Picht, G. (1964) *Die deutsche Bildungskatastrophe. Analyse und Dokumentation*. Olten and Freiburg: Walter Verlag.

Phillips, D. (1988) British Educational Policy in Occupied Germany: Some Problems and Paradoxes in the Control of Schools and Universities. Paper read at the 1987 Annual Conference of the History of Education Society of Great Britain.

------- (2018) *Educating the Germans: People and policy in the British Zone of Germany, 1945-1949*. London, Bloomsbury Academic.

Pilgert, H. P. (1953) *The West German Educational System: With special reference to the policies and programs of the Office of the U. S. High Commissioner for Germany*. Historical Division Office of the Executive Secretary Office of the U. S. High Commissioner for Germany.

Robinsohn, S. & J. C. Kuhlmann (1995) Two Decades of Non-reform in West German Education. In *Education in Germany: Tradition and reform in historical context*, eds. D. Phillips. London: Routledge:15–35.

Rosenzweig, B. (1998) *Erziehung zur Demokratie?: Amerikanische Besatzungs- und Schulreformpolitik in Deutschland und Japan*. Stuttgart: Franz Steiner.

Schneider, U. (1983) Hochschulreform, *Studium generale* und das *Collegium Academicum* Heidelberg 1945–1952, *Bildung und Erziehung*. 36 (1): 55–67.

------- (1990) The Reconstruction of the Universities in American Occupied Germany. In *Hochschuloffiziere und Wiederaufbau der Hochschulwesens in Westdeutschland 1945-1952. Teil 2 : Die US-Zone,* hrg. M. Heinemann. Hildesheim: Verlag August Lax.

Shibata, M. (2005) *Japan and Germany under the U.S. Occupation: A comparative analaysis of the post-war education reform*. Lanham: Roman & Littlefield.

------- (2019) Book Review: Educating the Germans: people and policy in the British zone of Germany, 1945–1949. *Paedagogica Historica*: 1 –2.

Springer, U. K. (1965) West Germany's Turn to Bildungspolitik in Educational Planning. *Comparative Education Review* 9 (1): 11–17.

Stolper, G. (1948) *German Realities*. New York: Reynal & Hitchcock.

周郷博・宮原誠一・宗像誠也 (1950) 『アメリカ教育使節団報告書要解』国民図書刊行会 .

Tent, J. F. (1982) *Mission on the Rhine: Reeducation and Denazification in American Occupied Germany*. Chicago: University of Chicago Press.

Vogel, W. & C. Weisz (eds.) (1989) *Akten Zur Vorgeschichte Der Bundesrepublik Deutschland 1945-1949. Band 1. Teil 1*. München: R. Oldenbourg Verlag.

Wenke, H. (1953) *Education in Western Germany. A postwar survey*. Washington D. C.: The Library of Congress, European Affairs Division.

Zook, G. F. (1947) The Educational Mission to Japan and Germany. *International Conciliation* (427): 3 –33.

Zutshi, P. (2011) When Did Cambridge Become a *Studium Generale*?". In *Law as Profession and Practice in Medieval Europe: Essays in Honor of James A. Brundage*, eds. K. Pennington & M. H. Eichbauer. Farnham: Ashgate: 153–171.

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 75-89
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

Article

Recovery versus Reversion: The Implications of Multiple Signifieds in Ōoka Shōhei's *Fires on the Plain*

Erik R. LOFGREN
East Asian Studies Department, Bucknell University, Associate Professor

Much of the scholarship on Ōoka Shōhei's *Fires on the Plain* (*Nobi*, 1952; trans. 1957) is predicated on the assumption that the protagonist, Pfc. Tamura, is insane. This issue crystalizes when, at the end of the novel, Tamura returns to behavior he had previously rejected, now unconcerned about what people might think of him. The language Ōoka uses is subject to slippage which, in turn, creates trace structures of related meaning that problematize this assumption of insanity. As a consequence, the reader is forced to consider what meaning the text might have with a sane narrator, and why the author may have chosen to claim insanity for his protagonist. The answers point to both the expectations of readers in the aftermath of Japan's defeat in World War Two, and a strengthening of the cautionary message implicit in the novel.

Keywords: Trace Structures, *Shishōsetsu*, Japanese Militarism, Post-structuralism

In the summer of 2014, the efforts by the government of Prime Minister Abe Shinzō to effect a controversial reinterpretation of Japan's post-war constitution were in the news daily. The primary goal was a redefinition of the term *shūdanteki jieiken* (right of collective self-defense) from one that was extremely restrictive, limiting Japanese Self-Defense Forces (JSDF) to military actions only on Japanese territory, to one that expanded on "collective" and conceptualized "self-defense" as geographically unrestricted.[1] The Abe Government wanted authorization for the JSDF to participate jointly in military operations outside of Japan's sovereign territory, ostensibly to come to the aid of an ally under armed attack. A year later, despite substantial resistance and "opinion polls that showed the legislation to be exceedingly unpopular, the laws were rammed through the Diet on September 19, 2015" (Muto 1).

Over seven decades after the end of the Greater East Asia War, the conflict that occasioned the constitutional limitations that so irked the conservative Abe Government, it is beneficial to look at some of the literature that came out of that same conflict. There we may find a cautionary tale for those intent on moving Japan closer to its imperial past, as Abe seemed interested in doing when he "declared at an Upper House Budget Committee hearing that he was committed to revising the constitution within his term of office" (Muto 1). In response to Abe's "intention to secure the first change to Japan's Constitution by 2020" (Sasaki 2), we might

[1] At its most benign, the change might appear, to some advocates, as simply a logical extension of the PKO debates of the 1990s.

see in this moment an opportunity to reflect on the consequences of Japan's past military endeavors. There is no shortage of literature that appeared in Japan at the end of World War II, and much of that corpus illuminates the human costs of war and the dangers of passive acquiescence to the government's bellicose policies. Many of the authors writing of the Pacific conflict appear unequivocal in their condemnation of the militaristic stance that gave rise, ultimately, to Japan's defeat and singular instance of occupation. At least one well-regarded novel paints a compelling picture of one end to which such a policy might lead and argues caution in embracing remilitarization.

1. Thesis and Context

Sixty years prior to the revisionist efforts by the Abe government, seven years after Japan's defeat in World War II, and two years into the Korean War, *Fires on the Plain* (*Nobi*, 1952; trans. 1957) by Ōoka Shōhei[2] (1909–1988), hit Japanese bookshelves. This version of the story is, in fact, a revision of its first public appearance some four years earlier,[3] a point of note precisely because one of the reasons Ōoka gives for reworking the novel was the outbreak of another war (*OSZ* 14:183–84), and his disappointment at the celerity with which nations reëngaged in this destructive form of statecraft. The protagonist, Tamura, is writing "the novel six years after he lost his memory in the war" with the consequence that "it places the telling of the tale in temporal proximity with the outbreak of the Korean War in June 1950. Ōoka notes that the events of the day now meant a reworked story in which [⋯] the protagonist could write the story 'now' rather than leave it for someone to find after his death as was Ōoka's original plan" (Lofgren, "Christianity" 273).

Although *Fires on the Plain* does not directly address the hawkish maneuvers of the Abe Government, its anti-war message is as relevant today as it was when Ōoka published it in 1952. The current political environment offers, then, an opportunity to revisit one of the seminal anti-war novels to have come out of Japan in the aftermath of the Second World War by "the author most notable among the many post-war authors" (Kusunoki 17).[4] Of particular relevance is the putative psychological state of the protagonist. His apparent insanity has allowed him, in no small degree, to sidestep responsibility for his cannibalistic actions in the Philippines. The following reading, however, suggests that a slippage between signifiers (two separate but clearly related character compounds) at one crucial moment late in the text means that accepting the claim of insanity unreservedly may be injudicious. Concomitant with that awareness comes the realization that responsibility for one's actions is not easily evaded by escape into sophistic excuses. Because one has little difficulty allowing the concrete example of cannibalism to expand into a metaphor for the totality of war, that conclusion, that cautionary note, should resonate forcefully as Japan appears to be edging closer to its militaristic past.

Immediately after the end of the Second World War in Japan, Ōoka Shōhei engaged in the cathartic process of literary construction, a process that served as a form of autotherapy for many intellectuals who experienced the deracinating effects of that conflict. He, like many of his peers, published a novel, but unlike his fellow writers, his work survived the heady days of easy obscurity that plagued many writing contemporaneously with him. Almost seven decades later, *Fires on the Plain*, "Ōoka's representative work, holding the position of a post-war classic" (Isoda 77), offers significant insight into the trauma experienced by the Japanese who

---

[2] All Japanese personal names are presented in accordance with Japanese custom: surname preceding given name.

[3] *Fires on the Plain* first appeared in serialized form in 1948 in *Buntai*. The magazine's bankruptcy after the fourth issue meant that only half of the story appeared. Ōoka subsequently reworked the novel and it was serialized in the journal *Tenbō* in 1951 before it was published as a book in 1952. The initial text setting the context for the story as it originally appeared in *Buntai* is available in *Ōoka Shōhei zenshū* 3:137–43. All subsequent references to this collection will be cited as *OSZ*.

[4] It is important to note that this evaluation was originally written in 1952, shortly after *Fires on the Plain* was published and when numerous novels treating the war by a broad group of authors loosely classified as the *Après-Guerre* writers were appearing regularly. All translations from the Japanese are mine unless otherwise indicated.

were conscripted and fought in the waning months of the Pacific War, and still evokes powerful images of a time that many in Japan would rather forget.[5] Its notoriety, as well as its controversial themes and images, have marked *Fires on the Plain* as fertile ground for academic scrutiny. This, and the almost intractable ideological orientation adopted by the Japanese towards the end of the war, and after the American occupation, that requires a perfervid rejection of war in general,[6] have assured that its place in the literary canon of major post-war works has remained virtually unassailable.

Much of the early critical writing that treats *Fires on the Plain* concerns itself with questions of influence, intention, or the points of homologous symbolism between the two main themes of cannibalism and Christianity. Such concerns, while offering valuable insights into the work, fail to fully explicate the text for the simple reason that most have been predicated, implicitly or explicitly, upon the assumption that the narrator/protagonist was insane.[7] Careful consideration of the text suggests that such a reading might be incomplete at least, if not outright erroneous. Attention to the tenability of Tamura's insanity provides a profitable approach in teasing out one interpretation of the text that has, to date, been overlooked by scholars. The following reading debunks the underlying assumptions inherent in many works that antedate this one: namely, that the protagonist of this memoir is, or was, mentally unstable. Once the text is allowed to liberate itself from the carefully nurtured façade of insanity, a deeper understanding of tensions immanent in the text imposes itself on the reader, one with far-reaching implications for a significant rereading of this pivotal Occupation-era work that stretches into the Abe era.

A brief synopsis will serve as a foundation for the following analysis. The bulk of story is set near the end of World War II on Leyte Island in the Philippines and concerns Private first class Tamura of the Japanese Imperial Army. It opens *in medias res* as he is expelled from his unit because his tuberculosis[8] prevents him from gathering food, the primary concern of the routed Japanese troops. After wandering alone in the mountains for many days, he encounters two of his countrymen who have been surviving on the flesh of straggling Japanese soldiers they have killed. A confluence of circumstances conspires to draw Tamura into their sordid world. The treachery of one of the trio requires the remaining two to kill him, ostensibly for protection, but protection both in the sense of removing the threat of bodily injury, as well as the sense of prolonging life through the

---

[5] Abe's attempts to revise the constitution are but the most recent in a long line of efforts that offer an imperfect reflection of one aspect of this desire.

[6] In contrast to what appears to be broad support for this anti-war stance, there is a marked lack of enthusiasm, often played out publicly, for a sweeping recognition of Japan's guilt for its imperialistic actions in World War Two. In this, Japan differs noticeably from the other major axis power, Germany. This ideological stance is undoubtedly a component of the Abe government's position on constitutional reform.

[7] Some representative examples might be both Terada Tōru and Miyaji Yutaka who, in the 1950s, reference Tamura's insanity when discussing Ōoka's unusual approach to writing about natural scenery in *Fires on the Plain* (Terada 25; Miyaji 47). Terada, however, is even more explicit, saying that "[t]he entirety of *Fires on the Plain* is the memoirs of a madman" (26), a fact that undergirds his disquisition. Kusunoki Michitaka sees the "madman's diary" aspect of *Fires on the Plain* as an essential component in the novel's successful and unusual construction (19). He claims that "Pfc. Tamura's starvation brought him to insanity" (20) and, after invoking the name of Freud, goes so far as to name the illness: "schizophrenia"(20). Writing of the changes between the first appearance in *Buntai* (1948) and the revised appearance in *Tenbō* (1951), Ikeda Jun'ichi highlights Ōoka's decision to conceal the fact that the protagonist is insane until the end of the novel as a significant improvement rectifying the original "danger that [the reader] will lose interest"(140). Finally, Haniya Yutaka gives an implicit nod to the protagonist's insanity by referencing *Fires on the Plain*'s insights into the psychology of its readers (40–44, *passim*).

[8] Tuberculosis is a provocative choice of illness beyond its long and obvious history in literature. The word for "tuberculosis"—*kekkaku*—has a homophonic meaning of "disqualification", suggesting that Tamura's sickness disqualifies him from continued service in the army. Tamura says of his actions (he is specifically describing murder rather than cannibalism) "even if I were to be rescued, it was undoubtedly forbidden to me to dwell in [the world of ordinary men]" (*OSZ* 3:91). The name of the disease thus serves as a constant reminder of the fact that he is unqualified to live in the world of humans. Such a rational awareness of one's own worth is one point in the argument against his claim of insanity.

consumption of his flesh. Morally unable to continue living in this way, Tamura kills his remaining companion and at that point loses his memory. The novel reopens six years later in a sanatorium. Tamura has withdrawn from the world and suffers from Messianic delusions. He is, ostensibly, insane and supposedly has been since he first considered eating human flesh. Tamura writes *Fires on the Plain* in an attempt to combat his retrogressive amnesia and stimulate his memory about the events between murdering his companions and being put into an American POW camp.

2. The Author/Narrator Homology Trap

Of the many topics for investigation immanent in *Fires on the Plain*, one that seems to inform much of the early scholarship[9] on the novel focuses on the question of fictionality and authenticity. A substantial body of the critical writing in this area intersects with *shishōsetsu*,[10] a monumental tradition which has been the dominant discourse of Japanese fiction in the modern era. Although *shishōsetsu* resist an easy definition, it is possible to offer a general framework within which they exist. Usually rendered into English as the "I-novel" reflecting the fact that the protagonist/narrator is often a thinly-disguised representation of the author, the primary concern lies in the *unmediated* representation of the author's life which is achieved by an author with an attitude of "unconcerned egocentricity that guarantees his sincerity and spontaneity" (Hijiya-Kirschnereit 186). In other words, *shishōsetsu* are a first- or third-person "narration about the author's own experiences with no fictional embellishment" (Fowler 292) read with an assumption of the authenticity of the experiences represented therein.[11] This form is deeply rooted both in the literary establishment in Japan, and in the apprehending consciousness of the readers. It took many decades before authors were truly able to break away from this form and experiment with newer styles without concern that their works might be measured against the expectations of the *shishōsetsu*. In the aftermath of the Pacific War, it still remained difficult to escape fully from the influence of this tradition. It is, therefore, not unreasonable to assume that the public would expect the work of an author writing immediately after the Second World War to conform to the dictates of this discourse, especially in those cases when the subject matter of the novel *appeared* to hew so closely to his life experiences.

Two qualities of the *shishōsetsu* contribute to the present argument. While qualifying as a novel in the Japanese context, *shishōsetsu* share some similarities with autobiography, albeit with notable caveats.[12] The basic premise of the *shishōsetsu* is that of the unmediated presentation of the author's life and emotions, but in practice, this is not entirely accurate. Indeed, while the myth of sincerity fostered by the *shishōsetsu* might induce one to claim it lacks any fictionality at all, the simple truth is that for authors writing *shishōsetsu*, "their common struggles with 'authentic' narrative representation were resolved in ways that, for all their supposed fidelity to lived experience, reveal considerable editorial license and imagination" (Fowler 292). In other words, mediation comprises an integral part of the process whereby a *shishōsetsu* is created (as it does in any written work) which introduces a degree of fictionality into the story for the simple reason that the mere act of writing is, *a priori*, a fictionalizing process. The conclusion that either *shishōsetsu* or autobiography are, to some extent, fictional should come as no surprise.

The second and more compelling point concerns the audience role of the literary coterie of the writer creating the *shishōsetsu*. The works were, in general, written for a specific group of people, people who were

---

[9] I am referring here to roughly the quarter-century period immediately after the novel's publication.

[10] The *shishōsetsu* is more formally known as *watakushi-shōsetsu*, the difference in pronunciation arising from the two possible readings of the first character. Most people accept *Futon* ("The Quilt", 1907; trans. 1981) by Tayama Katai (1872–1930) as the prototypical example of *shishōsetsu*. Both Edward Fowler (*The Rhetoric of Confession*) and Irmela Hijiya-Kirschnereit (*Rituals of Self-Revelation*) provide thorough explanations of what the *shishōsetsu* is and what its role in modern Japanese letters has been.

[11] This simple description, although convenient, is particularly problematic in its implicit ignorance of the mediating effects of writing.

[12] For a more complete explication of the relationship between autobiography and *shishōsetsu*, see Tomi Suzuki.

intimately familiar with the life of the author. Consequently, a reading of any given work operated on two levels: intratextual and extratextual. Those people reading the text brought to that task a knowledge of the author's life. Thus armed, they would read the work and see in it elements of the author. Once the protagonist was identified as the author, intratextual modification would take place as the work was further explicated *vis-à-vis* the earlier, privileged knowledge of the author's life. The immediate consequence of this was an extratextual codification of the author's rewritten life in light of the new material gleaned from the story: actions and thoughts of the protagonist were transferred out of the text and onto the author to enhance and expand the body of knowledge surrounding him. The reader embeds this new, revised knowledge back into the text and the process starts anew. The work does not become a *shishōsetsu*, however, simply because the reader wants it to be one. There is, rather, an implicit requirement that the author, too, agrees that the work fits this category. Only when there is this kind of unspoken agreement between the reader and author does the novel become a *shishōsetsu*. This distinction is essential to bear in mind as we consider *Fires on the Plain*.

Broadly speaking, the literary milieu in Japan at the time Ōoka was first writing, and for many years prior to that, predisposed the reading public to expect an author to write in accordance with the dictates and within the confines of the *shishōsetsu* framework. Ōoka was trying to contravene that convention in an atmosphere very unforgiving of such an attempt. While *Fires on the Plain* is clearly not a *shishōsetsu*, for a number of technical reasons, it is certainly possible for a reader to imagine echoes of that *shishōsetsu* tradition within its fictional confines.[13] Therein lies the problem. What is there in the text that would encourage the reader to associate the protagonist Tamura with author Ōoka? Although there is no clear one-to-one correspondence on all counts, one occasionally catches a reflection or refraction of the latter in the former.[14] Ōoka's fictionalized use of his lived experiences within the text of *Fires on the Plain* has, at the very least, the potential effect of encouraging readers to link him with his protagonist. That, in turn, has implications for understanding the insanity Tamura claims for himself.

3. Insanity and Linguitic Slippage

In the seven decades since *Fires on the Plain* first appeared in print, the prevailing apprehension, tending towards a consensus among readers, critics, and academicians, is that the protagonist produced the text as a form of therapy and that this action was rendered necessary by his mentally unstable state. Indeed, Tamura says "I am writing this in a room in a psychiatric hospital in the suburbs of Tokyo" (*OSZ* 3:124). If he were not insane, why else would he have voluntarily committed himself to a sanatorium six years after the end of the traumatic, disorientating, deracinating Pacific conflict? Why else would he have lost his memory shortly after partaking in the taboo of cannibalism, culminating in the murder of both of his cohorts? Indeed, one might well ask why else would he have engaged in the normally reprehensible act of cannibalism in the first place? In fact, the entire novel is revealed to be nothing more than "A Madman's Diary" (*Kyōjin nikki*), a point which is seemingly made explicit in the final three chapters (37–39) of the novel. There, we see the title of chapter 37, "Kyōjin nikki" which would seem to make the relation between Tamura's psychological state and the text

[13] Although too numerous to detail here, the similarities between the protagonist and the author of the novel are notable. A few representative examples are: age and rank, exposure to cannibalism, expulsion from the unit because of illness, and a childhood connection to Christianity.

[14] Critics often danced around the issue of how to evaluate *Fires on the Plain* in relation to the *shishōsetsu* for years after it was published. Isoda Kōichi is just one of many critics who are clear in their distancing of *Fires on the Plain* from a *shishōsetsu*. "I do not think of these works as *shishōsetsu* in the usual sense" (77). A representative summary of the general consensus might be that "[e]ven as *Fires on the Plain* is dependent upon actual experiences, it objectifies them and appeals to us by placing in a fictional world the warp and woof of war's calamity and the importance of the self" (Suzuki, *Ōoka Shōhei ron* 19). In other words, despite its clear reliance upon Ōoka's own experiences, it functions in a way fundamentally different from a *shishōsetsu*, making it, "fictional through and through" (Suzuki, *Ōoka Shōhei ron* 140).

of the preceding 36 chapters incontrovertible.[15] Despite this apparent evidence to the contrary, various textual, semantic, and linguistic elements argue persuasively against the convenient but naïve conclusion that Tamura is insane. It is to one of these textual ambiguities that we shall now turn our attention.

A close reading of *Fires on the Plain*, in its several iterations, reveals a linguistic contradiction that problematizes the long-accepted premise of the novel. In fact, Pfc. Tamura's putative insanity may simply be a condemnation of the very society that seeks to excoriate him for his extra-societal activities. The social sanctions and restructuring that serve as conventional limiters on humanity's excesses were, in essence, not applicable to the reality of the Philippines which the soldiers of the Imperial Japanese Army knew in the depths of their abandonment and subsequent disorganized katabasis.

The problematic linguistic element is rooted in the structure of the Japanese language itself. The myriad ideographs (*kanji*) that are currently in use in standard writing were largely originally imported from China over many years. The chronological gaps that separated the periods of borrowing provided the evolving Japanized character system with a vast number of *kanji* that were phonetically and visually dissimilar (multiple signifiers), yet ostensibly denoted the same thing (single signified). Further, although the characters were intrinsically differentiated phonetically an author could, in fact, assign to any character a reading (*ateji*) that matched the original Chinese meaning of the character.[16] The possibility of synonyms was great, but often synonyms that might be synonymous with two words of unrelated or opposite meanings: a root word with two branches of signifieds or synonyms while the branches remained dissimilar save for the root word.

The relevance this historical development has for understanding the uncertainty of Tamura's insanity is evident in a single word that appears at a critical moment in the text. In pre-war Japan, there were two accepted ways of writing *kaifuku*（回復 and 恢復）, a compound made up of two characters, *kai* and *fuku*.[17] The second character, 復 , is the same in both compounds. Among its varied, independent meanings are the following: "revert to", "be restored to", "return to normal or original state". It is the first character that is of significance to this discussion. Prior to the post-war educational reforms, the two characters used for the first element of the compound attributed different meanings to the new conjoined linguistic element. This multiplicity of forms, each ostensibly signifying the same thing, yet each concomitantly allowing slight slippage in that which is signified, construct the foundation upon which an insidious contradiction is built within the structural assumptions that govern the characters in the text of *Fires on the Plain*. In this tension is revealed how the text "functions *against* its own explicit (metaphysical) assertions, not just by creating ambiguity, but by inscribing a *systematic* 'other message' behind or through what is being said" (Derrida, *Dissemination* xiii, emphasis in original).

The trace structures that inhere in the first character of the compound thus complicate the potential meaning of *kaifuku*. When we consider the two possibilities, the character in the first compound, 回 , implies a simple revolving. In the second compound, the first character, 恢 , implies a widening or enlarging. Strictly speaking, when this "widening" *kai* is combined with *fuku* 復 , the second compound（恢復）connotes a simple

---

[15] Ōoka relates in both *Sokai nikki* (Evacuation diary, 1953) and *Nobi* no ito (My intention in *Fires on the Plain*, 1953) (not to be confused with an earlier essay with the same title that appeared in the July 1952 issue of *Sōgen*) that an early working title for *Fires on the Plain* was *Kyōjin nikki*. See *OSZ* 14:3–23 and *OSZ* 14:173–93. In "Jinnikushoku ni tsuite" (On cannibalism, 1973), Ōoka mentions the turn-of-the-century Chinese author Lu Xun's (1881–1936) *Kuangren riji* (Diary of a Madman; trans 1990) written in 1918 as an inspiration for both the concept and the title.

[16] This simplification ignores another aspect of *ateji*: characters may be assigned a reading (and, by extension, a specific signified) that is at odds with convention.

[17] Miyaji Yutaka claims his philologic study will consider "the characters and vocabulary" (41) Ōoka uses to explicate *Fires on the Plain*. Sadly, although he does discuss the frequency of some specific vocabulary items, he does not actually delve as deeply as individual character choices such as the one under consideration here. It is worth noting, however, that he does offer a general comment on Ōoka's choice of *kanji*. Despite the fact that Ōoka is consistent in his use of classical orthography, he "gives no consideration whatsoever to matters such as officially-sanctioned characters for daily use [*tōyō kanji*]" (45), although Miyaji opines that this may be a function of the author's age.

restoration to a previous condition (either good or bad) in contradistinction to the first compound（回復）which denotes not only a restoration to a previous condition but also a recovery from an illness to a healthy state; in short, getting better.[18]

In the years since 1948, this distinction has blurred to the point of meaninglessness. Asking a junior or senior high-school student in Japan today if there is a difference between these two compounds will likely elicit exclamations of uncertainty mixed with ignorance: most may not even know the *kai* character 恢 for the simple reason that it lies outside the 2,136 *jōyō kanji* (characters for regular use) currently proscribed for basic literacy by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology. The *kai* character 回 has almost fully replaced the multiplicity available to earlier authors. Ōoka, however, was under no such restriction in 1952 when he published the first complete serialized edition of *Fires on the Plain*. In order to distinguish between these two compounds, I will use the following convention. The 回復 compound shall be represented by $(Kf)_{rc}$, where (Kf) denotes *kaifuku* and the subscript 'rc' corresponds to recovery. In contrast to this $(Kf)_{rv}$ shall represent the 恢復 compound where (Kf) again represents *kaifuku* and the subscript 'rv' implies a reversion.

$(Kf)_{rc}$ = recovery from an illness 回復
$(Kf)_{rv}$ =reversion to a previous state 恢復

The meaning of *kaifuku*, in other words, is far from the stable meaning equated with speech precisely because it is written, that is to say, visual. Yet even in speech, the homophonous nature of the Japanese language resists stability. In fact, it struggles against the diacritical sense of language with its dependence on "a structured economy of differences which allows a relatively small range of linguistic elements to signify a vast repertoire of negotiable meanings" (Norris 25).

However, even the distinction between $(Kf)_{rc}$ and $(Kf)_{rv}$ presented above is artificial simply because $(Kf)_{rv}$ can signify $(Kf)_{rc}$ by convention reflecting the diachronic linguistic change all languages undergo. That is, the trace structure of *kaifuku* and the multiple implications the term embeds as a result of its constantly sliding signifieds means that the interpretation, the reading, is necessarily endlessly deferred. This instability, combined with the fact that both $(Kf)_{rc}$ and $(Kf)_{rv}$ can only be distinguished visually, not aurally, naturally calls to mind a neologism that encapsulates this avoidance of semantic stability. It is in the systematic play of the differences between the concepts inscribed in the chain of signification within which it refers to the other that "such a play, *différance*, is thus no longer simply a concept, but rather the possibility of conceptuality, of a conceptual process and system in general" (Derrida, "Différance" 11). The violent tension inherent in Derrida's usage of *différance*, which engenders a disruption or disturbance on the level of the signifier creating a visual reminder of the plurality of meaning suspended within the interstices of language, compares favorably with the tissue of interconnected traces that the term *kaifuku* sets up, its refusal to yield to a transcendental signified.

Ōoka's use of *kaifuku* appears at the end of the novel. Tamura has become the victim of a psychosomatic "illness" stemming from an incident during his time on Leyte. "[His] left hand grabbed the wrist of [his] right hand, which was holding the bayonet" (*OSZ* 3:100) when he attempted to cut off the meat from the body of a dead compatriot freely offered just prior to his death. The extent of this psychosis gradually expanded until all food, whether meat or not, prompted the same physical response. Tamura explains that "this strange action has become a habit for my left hand. When I think of eating something I shouldn't, my left hand moves of its own accord and grips the hand holding the spoon, that is, my right wrist, from above even before that food appears in front of me" (*OSZ* 3:100). Moreover, he would apologize to any food—animal or vegetable—prior to consuming it. Years later, while Tamura languishes in the mental institution, he ruminates about the course and root of his "illness," a natural consequence of which is reflection on his abnormal behavior. As the following

[18] See Morohashi: *fuku* 復 , no. 10183; *kai* 回 (revolving), no. 4690; *kai* 恢 (widening), no. 10577.

passage indicates, however, Tamura himself is not convinced that his actions and, the conditions that gave rise to them, are particularly abnormal; nor, by extension, that he is ill.

> Consequently, even when I again *reverted to* the ceremony of bowing before my dinner table and refusing all food five years later, there was, as far as I was concerned, no basis to think it particularly strange nor to feel it must be stopped. Even when once again, my left hand grabbed my right, I could not help it for—perhaps it was God—it was moved by something other than me.
>
> (*OSZ* 3:126, emphasis added)[19]

That the English translation does not—indeed, cannot—accurately reflect the subtle implications of the $(Kf)_{rv}$ characters used for *kaifuku*[20] is the linguistic sticking point of concern in this discussion.

Any system of language is entirely differential, for the meaning of a signifier lies not in a relation or representation, as a word to a thing, but only in its syntagmatic and associative difference from other signifiers. Consequently, because "'writing,' for example, no longer simply means 'words on a page,' but rather any differential trace structure, a structure that *also* inhabits speech" (Derrida, *Dissemination* xiii), one cannot simply accept the standard interpretation of *kaifuku* as $(Kf)_{rv}$. The text itself creates an ambiguity that resists disambiguation. Neither $(Kf)_{rv}$ nor $(Kf)_{rc}$ can claim presence as both are always-already in the text and, at the same time, not there, engaged in an eternal oscillation. This is, however, precisely the environment that produces a *différance*, a moment in the text where the unintentional significations borne of the pluripotency inherent in a sphere of meaning that lie beyond consciousness (although not out of its reach) are suddenly evident. Language is always bound and expanded by a network of differential traces, such as those we see with *kaifuku*, which can never fully be grasped by the individual speaker, yet which are essential for communication. Without the trace, all words would have an inviolable meaning, clear to all. The play, the uncertainty, that gives rise to contradictory meanings or double entendre, for example, would not exist. In the case we are considering, the *shishōsetsu* tradition placed Ōoka in the difficult position of—apparently and without his consent—being merged into the novel by readers.[21] These traces are also violently disruptive of the received truth of the work as it has been perceived for the past 70 years.

4. Insane or Sane?

Recognition of the play in signifieds inherent in *kaifuku* raises an important issue that substantially undermines any claim of insanity on the part of the protagonist. To say that Tamura was recovering something

---

[19] Ōoka uses $(Kf)_{rv}$. For the sake of comparison, I include here the text from Ivan Morris's translation:

> When, five years after my return, I *resumed* the ceremony of bowing in front of the dining table, and once more began to refuse all sorts of food, I was not inclined to regard this behavior as strange or to give it up. Nor could I help the fact that now my left hand would again stretch out to grasp my right hand; for I was being impelled by something outside myself—by God, perhaps.
>
> (Ooka, *Fires* 230, emphasis added)

[20] It is important to recognize that this appears to be the only instance in the entire novel in which Ōoka uses *kaifuku* of either stripe. Thus, it is impossible to state categorically that Ōoka was working consciously to subvert a particular reading through this specific choice; however, the fact that the choice was made—consciously or otherwise—is clear, and the potential consequences of that decision are what concern us here, for language constantly seeks to escape the fetters of intention.

[21] Obviously, the most damning equivalence would be in the realm of cannibalism. Ōoka categorically rejected any notion that he had actually practiced cannibalism in "*Nobi* no ito" (1953): "[h]ad I the experience of cannibalism, that would have been terrible" (*OSZ* 14:176). Two decades later, Ōoka still felt it necessary to stress his innocence. In "Jinnikushoku ni tsuite" (1973), he reiterates that "[T]he question I am asked most frequently is whether or not that [cannibalism] is my experience. If I had actually had a cannibalistic experience, that would have been abominable; of course, it is fiction" (*OSZ* 16:520).

lost [$(Kf)_{rv}$], returning to an original state, is merely to say that that original state is once again the dominant discourse of his actions. If, however, the additional, *permitted and logical*, reading of "recovery from an illness" [$(Kf)_{rc}$] is privileged, then the situation changes dramatically. It is to a supposedly anomalous state that he is recovering. Consequently, he is "getting better" by reverting to a state he—and the critics writing about *Fires on the Plain*—had thought was symptomatic of his insanity. In other words, what appeared to be sanity was, in fact, insane, and his "reversion" from that state was to one perceived as insane but which really is that of sanity.[22] Might, then, that state be, in fact, one that is not associated with insanity but, rather, normalcy? Certainly, this is neither unreasonable nor impossible given the extreme situation of ostracism, abandonment, and physical decay in which Tamura had been enveloped on Leyte.

Clearly, one might advance the argument that context guides the reading and this supposed ambiguity should be resolved before it becomes an issue. While this supposition is not without merit, it also fails to consider two points. The first is the effects of the readers' desire to see elements of the *shishōsetsu* in *Fires on the Plain* and the implications that has for a constant re-reading of a text in light of the information gleaned from that text and that known about the author. The second is the discontinuity inherent in Tamura's residence in a sanatorium which stands in direct contrast to—indeed, struggles against in an attempt to invalidate—his experiences in the Philippines.[23] The text up to the point in question has established that the protagonist views the ritualistic reaction of his hands with some sense of disquietude. The first time it occurred, Tamura was delirious, famished, and close to death.

"What, are you still here? Poor bastard. When I die you can eat this" (*OSZ* 3:99). With these words, a soldier on the verge of death offers Tamura his emaciated left arm as food. Tamura is thrown into a moral and ethical dilemma over whether he should eat this man's arm to preserve his own life. The thought is not a new one. Tamura has already seen countless corpses that were, mysteriously, "missing the flesh on their buttocks" (*OSZ* 3:95). A harbinger of the implications inherent in these mutilated bodies were the dead soldiers Tamura discovered around the church in an abandoned village by the sea. Gradually it dawns on him that these wounds originate not from the fierce battle for Leyte Island, but in the equally fierce struggle by the disorganized and unsupported Japanese troops to survive. Concomitant with this realization comes an assault by similar desires, and a sense of revulsion that the idea of cannibalism came to him so readily.

The rapid putrefaction of corpses under the tropical conditions of the Philippines as well as his own spiritual vacillation have kept Tamura from acting on his inhuman—or, extremely human—impulses. But now, not only is he presented with a fresh corpse, he has the blessings of its owner. Tamura decides to save himself and eat this gift. As soon as he makes a move in that direction, however, his body betrays him by instinctively protecting him from violating one of society's greatest taboos.

> At that moment, an odd thing occurred. My left hand grabbed the wrist of my right hand, which was holding the bayonet. Since that time, this strange action has become a habit for my left hand. When I think of eating something I shouldn't, my left hand moves of its own accord and grips the hand holding the spoon, that is, my right wrist, from above even before that food appears in front of me.
>
> (*OSZ* 3:100)

---

[22] Kamei Hideo focuses on this precise passage, also singling out the term *kaifuku* for emphasis, and arrives at a similar conclusion, albeit for a different reason. "That [resumption] is not to insanity; that is a "reversion" [$(Kf)_{rv}$] to sanity" (192). He goes on to observe that "[i]n this moment, one can recognize the actual meaning with which the author imbued this novel…" (192).

[23] This shift is seen by many critics as the novel's major flaw, a failed attempt to connect the context of one past war (World War II) to a conflict contemporaneous with the publication of the novel (the Korean War). Ichikawa Kon's 1959 film adaptation of *Fires on the Plain* omits these final chapters, a change that figures prominently in my earlier analysis. See Lofgren, "Christianity."

This is part of the evidence Tamura offers for his supposed insanity, yet where is the insanity in attempting to preserve the taboo against cannibalism? Surely this is a normal state. Or, perhaps, the insanity is simply an unwillingness to preserve life.

Tamura's cannibalism is certainly not unthinkable when considered rationally. Logically, the situation in *Fires on the Plain* should engender no sense of moral outrage, save that which might be associated with war in general. It was a soldier's obligation to fight for the Emperor and Japan. To do so, he had to be fit, which requires food. The Filipino natives were enemies of the Japanese Imperial Army, so shooting them was an action not without justification in the context of a military need for security. Once dead, why should the flesh not be consumed if it could save the lives of the Japanese soldiers, thereby allowing them to fight on for their country? Taken one step further, to kill a straggling Japanese soldier with no chance of survival in order that other soldiers might live and carry on the battle is not as execrable as it might, at first glance, appear. This aspect of the equation is seen in the contrast between Tamura's moral reticence and his companions' pragmatic approach to a life-sustaining substance (although in this case, neither Nagamatsu nor Yasuda had any intention of continuing to function as soldiers in service of their country).

Once the idea of insanity has been destabilized, it is, in effect, undergoing erasure, replaced, at least temporarily, with the possibility of sanity. It is instructive, in this context, to consider Derrida's observation that "if writing is *inaugural* it is not so because it creates, but because of a certain absolute freedom of speech, because of the freedom to bring forth the already-there as a sign of the freedom to augur" (*Writing* 13, emphasis in original). In the context of *kaifuku*, the augured already-there in $(Kf)_{rv}$ is the equally acceptable $(Kf)_{rc}$ which turns the text in upon itself: Tamura is sane. Therefore, when he is discussing his resumption of his ceremony of bowing before a meal, he is reverting to a healthy state and, by extension, one of sanity. Indeed, Tamura speaks of this condition as normal, for it is neither new nor surprising. "People saw me as insane. Yet I have decided—and it is still so—to feel no shame for performing an action I cannot help performing" (*OSZ* 3:125).

Recall that $(Kf)_{rv}$ and $(Kf)_{rc}$ are both signifiers of the notion of "recover" but that $(Kf)_{rv}$ also allows the slippage seen in the trace to the $(Kf)_{rc}$ notion of healing. This multiplicity, in turn creates an *aporia* of uncertainty. It is certain that "in speech there is already mediation but the signifiers disappear as soon as they are uttered; they do not obtrude, and the speaker can explain any ambiguities to insure that the thought has been conveyed. It is in writing that the unanticipated aspects of mediation become apparent. Writing presents language as a series of physical marks that operate in the absence of the speaker" (Culler 91). It is not, however, misfortune but insight that is offered here by the effects of mediation. They provide the valuable explication of the text that yields a revised reading which expands the understanding of *Fires on the Plain* and the discourse it engenders.

What value was there to Ōoka to present an image of Tamura as insane even though that contradicts a possible trace-structure reality of the written word which would indicate he is in full possession of all his mental faculties? It is not clear until the last section of the novel that the narrator/protagonist is ostensibly in a condition of mental instability. This delay also encourages the freeplay of the trace for readers are, as a consequence, already implicitly encouraged to consider Tamura sane. With this new (revealed) interpretation, the text disrupts itself with the result that Tamura's story becomes questionable, and once the narrative is loosed from the moorings of insanity, the freeplay immanent in the text and exemplified by the logographic distinction we have been considering work in concert to further the problematization of Tamura's claim of insanity.

Tamura relates the events leading up to his voluntary internment with a coldly clinical eye for detail. His analytical style and precise notation of the myriad details along his journey undermine his statement that he is (or was) insane. It is quite obvious that the chronological order of the events leading up to the point at which Tamura loses his memory is generally without the anachronous relationships that might be expected to permeate the story of a madman. In fact, even though the entire narrative is subordinate to the present in which

Tamura is in a sanatorium, the factual, chronological, accuracy is constant. Indeed, to paraphrase Derrida, how can Tamura "be mad when [he] think[s] and when [he has] clear and distinct ideas" (*Writing* 52).

We see, in some of the critical corpus, intimations that support this conclusion. Miyoshi Yukio, ostensibly writing about the war and God as manifest in *Fires on the Plain*, offers one such example. The seed of his argument lies in the duality Miyoshi perceives between the competing forces of reality and insanity that operate in the novel. Because Ōoka was unable fully to resolve the contradictions between these two forces, Miyoshi argues, he was forced to decide which would take precedence. Opting for the former, insanity is relegated to an ancillary position in the structure of the novel and reality is privileged in service of believability. Miyoshi builds a case against an insane person accurately describing an extreme situation, asserting instead that one requires full cognizance and use of one's mental faculties to engage in such a task.

> Of course the words "extreme situation of the insane" contain a clear self-contradiction. When a clear-headed person reports on the despairing consciousness of a situation that has happened to him, that is when the extreme nature of the situation materializes. He must not be insane. At the same time, Ōoka, author of *Diary of a POW*, absolutely could not have entrusted the reporting of the extreme conditions pursuing those humans thrown into the battlefield to a madman.
>
> (370–71)

This is a bold assertion that the author of *Fires on the Plain*, by virtue of the extreme conditions he is narrating, cannot be insane.[24] One cannot help wondering, however, why this conclusion, so carefully developed by Miyoshi, is not taken to its logical completion: explicit absolution of Tamura's insanity. The very element that casts doubt on Tamura's claim also suggests a solution to this conundrum:

> It is because of *différance* that the movement of signification is possible only if each so-called "present" element, each element appearing on the scene of presence, is related to something other than itself, thereby keeping within itself the mark of the past element, and already letting itself be vitiated by the mark of its relation to the future element, this trace being related no less to what is called the future than to what is called the past, and constituting what is called the present by means of this very relation to what it is not: what it absolutely is not, not even a past or future as a modified present.
>
> (Derrida, "Différance" 13)

The text has the past and future traces of a polysemous signifier in its present. The play of signifieds produces readings that inscribe both possibilities for it must embody that multiplicity and it, logically, offers even more readings. While it is clear that the text signifies in more than one way, it is equally evident that there will be varying degrees of explicitness in this signification. It is hardly surprising that within the critical corpus, the explicitness of "reversion" has overshadowed that of "recovery" for many years.

A second result of this revealed, alternate reading—although it has always-already been in the text—concerns a struggle extrinsic to the novel.

> Ōoka, saddled with the historical predisposition of the *bundan* and reading public to judge

[24] Miyoshi also implies that Ōoka and Tamura are, effectively, synonymous, demonstrating his faith in the Husserlian transparency of language—a position fundamental to the *shishōsetsu* paradigm and discourse which obviously informs his reading of this text and our consideration of $(Kf)_{rv}$.

> a novel's worth by the extent to which the author is visible in the work, [⋯] had to do something to break out of this constricting mold [⋯]. Consequently, he was forced to cast doubt upon the authenticity of *Fires on the Plain* by drawing attention to the one point that could most damn him in the eyes of the public judge. By problematizing the issue of culpability, Ōoka was, in effect, distancing his person from what the public may have been inclined to interpret as his literary persona.
>
> (Lofgren, "Ideological" 412)

It is evident, thus, that Ōoka retreated from factual reality *vis-à-vis* the theme of cannibalism as he tried to distance his person from that of his persona, Tamura.[25] From the point of view of subverting the undesirable assumption that *Fires on the Plain* was a *shishōsetsu*, it is evident that creating a character who is insane as a result of his contravention of a social taboo only strengthens the distancing of Ōoka from Tamura. A reading that acknowledges the trace structures inherent in *kaifuku*, however, subverts the simple conclusion that insanity is the implicit theme of *Fires on the Plain*. This is of particular importance as the veil of insanity is but one of several devices utilized by Ōoka in his effort to convince the reading public of the novel's unquestioned fictionality.[26]

Thus, the simple binary opposition established on the surface of the text, between sanity and insanity is called into question by a single word. This *aporia* generates a second text diametrically opposed to the first, where each becomes the other. Yet in so doing, a new binary opposition is created which, in turn, leaves itself open for rereading. The text collapses in on itself and, in the process, provides a tantalizing glimpse of the conflict of discourses that abound in the novel and, despite Derrida's contention that "*il n'y a pas de hors-texte*," outside it as well. For a comprehensive reading and understanding of *Fires on the Plain* and Ōoka's relation to that work and the reading public, it is essential that the trace structures of a single word *kaifuku* at the end of the novel be accorded the influence they are due. Failure in this regard beggars the text.

5. Conclusion

It is easy to see why scholars believe that Ōoka was "criticizing Japan for aligning itself with war" (Suzuki, *Ōoka Shōhei ron* 143) through its support of the United States. As we noted at the outset, the time in which Tamura was writing *Fires on the Plain* "coincides with the outbreak of the Korean War" (Kamei 192). This made him a putative spokesman for the nation which had just emerged from a disastrous war half a decade earlier, and whose people were still actively adopting a position of victim, both of the atomic bombs, and of their own government's militaristic excesses. In such an environment, critics and readers alike may be excused for accepting Tamura's narrative of insanity at face value, yet to do so unquestioningly is, as we have seen, to lose perspective that is equally important for evaluating Japan's war efforts and the ideological nexus that supported it.

The implications for an understanding of the novel of the slippage between $(Kf)_{rv}$ and $(Kf)_{rc}$ are profound. Insanity is one device Ōoka used to provide cover for his protagonist, and that cover is particularly important

---

[25] Kaga Otohiko echoes this view when he argues that having the story take place on Leyte rather than Mindoro implies a conscious distancing of creation from author (42).

[26] It is of particular note that Ōoka felt the need to buttress the fictionality of Tamura's narration. This was not, however, the only context in which he found himself battling readers' perceptions. His first novel, *Furyoki* (*Taken Captive: A Japanese POW's Story*, 1952; trans. 1996) explicitly drew upon the author's experiences as a prisoner of war. Even so, Ōoka preferred to view it as predominantly non-fiction reportage with a modicum of fictional license. Ōoka stresses this point, saying that while in some sense, *Furyoki* does accord with the tradition of *shishōsetsu*, "I would like to confess that in my case, however, as I was writing the novel of a POW, the 'I' in the work gradually moved away from me, myself" (*OSZ* 14:61). The putative reason for this gradual separation was a desire not to expose himself to the public (*OSZ* 14:62).

in 1952. Tamura was created under the American Occupation, and at a time, in 1948, just after-pre-publication censorship by SCAP had been lifted. That Tamura was guilty, in his role as a synecdoche for the Japanese military, of crimes, the sin of which besmirched his very person and resisted all attempts to expiate it. By 1952, however, the Occupation was packing up to leave and the general sense of the nation was undergoing a transformation from guilt for the war to a sense of victimhood stemming from Japan's position as the only nation to have suffered an atomic bombing.[27] In this context, the insanity claim provides, however marginally, a veneer of insulation from the tacit admission of guilt required under Japan's foreign occupiers. The play of multiple signifieds that inheres in the *kaifuku* compound further reënforces this shielding effect: if Tamura is not insane, then his actions are not necessarily deserving of excoriation. His role as synecdoche functions, rather, as one that proclaims the broader role of the soldier who was forced into an untenable situation in service of his country. The clear, positive emphasis is on the latter half of this statement.

The shift in Tamura's culpability might be seen as but the first step on a seven-decade journey to the Abe Cabinet slogan of "Retake Japan". Muto cautions that if "something has been lost," then "[i]t is the essence of the Empire of Japan" (5). It might be prudent for the Abe government to consider the warning Ōoka provides through Tamura: one cannot hide from the responsibility of war. Even allowing for a reconsideration of Tamura as synecdoche, *Fires on the Plain* is a work whose "principle objective is to emphasize the folly of war" (Suzuki, *Ōoka Shōhei ron* 62). The slippage of *kaifuku* signifieds that allows Tamura's insanity to apparently evaporate into the haze of Japanese post-war amnesia for responsibility also simultaneously calls the reader back to the constructed role of that insanity. Tamura needed what it provided as a way to cope with what the war had wrought on his psyche.[28] In other words, it was War that made Tamura do what he did, and it was War that left him broken and suffering six years later when he undertook to write *Fires on the Plain*.

The slippage of signifieds in *kaifuku* problematize Tamura's insanity, but that same slippage, that same lack of a transcendental signified mean that it is ever present as a trace. Ōoka's message is that the consequences of war are severe, and the repercussions for those involved are deep, long-lived, and so undesirable that they can lead to fantasies to protect the individual from the traumatizing experience. With knowledge of Tamura's deployment of insanity, we are primed to recognize that Abe's Retaking Japan may very well lead the nation's people back to the same hell inhabited by Ōoka's protagonist. Tamura's cogent observation that "[o]f those humans who do know not war, half are children" (*OSZ* 3:127) echoes particularly poignantly here for it is the young who will fight, the young who will inhabit that hell. As *Fires on the Plain* makes clear, it is a hell from which recovery is but a chimera and against which no claim of insanity can protect.[29]

Contact email: elofgren@bucknell.edu

---

[27] I provide an explication of the ideological transformation that one witnesses in the various iterations of *Fires on the Plain* ("Ideological" 401–21), including a consideration of the mental state of the protagonist, in the context of this shift from victimizer to victim consciousness. Muto examines this same transformation from the perspective of the war crimes trials (9–10). Tomoyuki Sasaki articulates how this notion of victimhood is one of three pillars supporting rightists'call for constitutional revision (3).

[28] The same might easily be said of Ōoka. Indeed, numerous works treating *Fires on the Plain* address the psychologically cathartic role writing the novel had for the author.

[29] I wish to thank Marjorie Perloff for her initial encouragement, and the two anonymous reviewers for the journal who provided thoughtful, stimulating feedback.

References

Culler, Jonathan. *On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism*. Ithaca: Cornell UP, 1982.

Derrida, Jacques. "Différance." In *Margins of Philosophy*. Trans. Alan Bass. Chicago: The U of Chicago P, 1982. 1–27.

_____. *Dissemination*. Trans. Barbara Johnson. Chicago: The U of Chicago P, 1981.

_____. *Writing and Difference*. Translated by Alan Bass. Chicago: The U of Chicago P, 1978.

Fowler, Edward. *The Rhetoric of Confession: Shishōsetsu in Early Twentieth-Century Japanese Fiction*. Berkeley: U of California P, 1988.

Haniya Yutaka. "*Nobi* to *Musashino fujin*" [*Nobi* and *Musashino fujin*]. *Ōoka Shōhei no sekai* [The world of Ōoka Shōhei]. Edited by Ōe Kenzaburō. Tokyo: Iwanami shoten, 1989.

Hijiya-Kirschnereit, Irmela. *Rituals of Self-Revelation: Shishōsetsu as Literary Genre and Socio-Cultural Phenomenon*. Cambridge: Council on East Asian Studies, 1996.

Ikeda Jun'ichi. "Ōoka Shōhei no kenkyū: *Nobi* to shoki sakuhin" [Research on Ōoka Shōhei: *Nobi* and the early works]. *Ōoka Shōhei / Fukunaga Takehiko*. Edited by Nihon bungaku kenkyū shiryō kankōkai. Tokyo: Yūseidō, 1978. 130–43.

Isoda Kōichi. "Ōoka Shōhei ron: tōshi no bigaku" [A theory on Ōoka Shōhei: clairvoyant aesthetics]. *Ōoka Shōhei / Fukunaga Takehiko*. Edited by Nihon bungaku kenkyū shiryō kankōkai. Tokyo: Yūseidō, 1978. 76–80.

Kaga Otohiko. "Ōoka Shōhei ni okeru sensō taiken to sōsaku" [The war experiences of Ōoka Shōhei and literary creation]. *Kokubungaku: Kaishaku to kyōzai no kenkyū* 22.4 (March 1977): 41–44.

Kamei Hideo. *Koga no shūgōsei: Ōoka Shōhei ron* [The collectivity of self: A disquisition on Ōoka Shōhei]. Tokyo: Kōdansha, 1977.

Kusunoki Michitaka. "Ōoka Shōhei *Nobi* ron" [Discussions on Ōoka Shōhei' s *Nobi*]. *Ōoka Shōhei / Fukunaga Takehiko*. Edited by Nihon bungaku kenkyū shiryō kankōkai. Tokyo: Yūseidō, 1978. 17–23.

Lofgren, Erik R. "Christianity Excised: Ichikawa Kon's *Fires on the Plain*." *Japanese Studies*, 23.3 (December 2003): 265–75. http://dx.doi.org/10.1080/1037139032000156342

_____. "Ideological Transformation: Reading Cannibalism in *Fires on the Plain*." *Japan Forum* 16.3 (Autumn 2004): 401–21. http://dx.doi.org/doi: 10.1080/0955580042000257891

Miyaji Yutaka. "Ōoka Shōhei no bunshō: *Nobi* o chūshin toshite" [Ōoka Shōhei's writing style: Focusing on *Nobi*]. *Ōoka Shōhei / Fukunaga Takehiko*. Edited by Nihon bungaku kenkyū shiryō kankōkai. Tokyo: Yūseidō, 1978. 40–47.

Miyoshi Yukio. "Sensō to kami: *Nobi* Ōoka Shōhei" [The war and God: *Nobi* by Ōoka Shōhei]. *Sakuhinron no kokoromi* [Attempts at a theory of works]. Tokyo: Shibundō, 1968. 341–399.

Morohashi Tetsuji. *Daikanwa jiten,* shūteiban [Great Han-Japanese dictionary, emended edition]. Tokyo: Taishūkan, 1986. 13 Vols.

Muto Ichiyo. "Retaking Japan: The Abe Administration's Campaign to Overturn the Postwar Constitution." Trans. John Junkerman. *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* 14.13.3 (July 2016): 1–18. https://apjjf.org/2016/13/Muto.html Accessed 5 November 2019.

Norris, Christopher. *Deconstruction: Theory and Practice*. rev. ed. New York: Routledge, 1982.

Ooka, Shohei. *Fires on the Plain*. Translated by Ivan Morris. Rutland: Tuttle, 1957.

Ōoka Shōhei. *Ōoka Shōhei zenshū* [Ōoka Shōhei: The complete works]. Tokyo: Chikuma shobō, 1994–1996. 24 Vols. [*OSZ*].

Sasaki, Tomoyuki. "The Constitution Must Be Defended: Thoughts on the Constitution's Role in Japan's Postwar Democracy." *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* 16.20.13 (October 2018): 1–16. https://apjjf.org/2018/20/Sasaki.html Accessed 5 November 2019.

Suzuki Akira. *Ōoka Shōhei ron: Jūnan ni soshite kongenteki ni* [A disquisition on Ōoka Shōhei: Flexibly, and then, primordially]. Tokyo: Kyōiku shuppan sentā, 1990.

Suzuki, Tomi. *Narrating the Self: Fictions of Japanese Modernity*. Stanford: Stanford UP, 1996.

Terada Tōru. "Ōoka Shōhei ron" [A theory on Ōoka Shōhei]. *Ōoka Shōhei / Fukunaga Takehiko*. Edited by Nihon bungaku kenkyū shiryō kankōkai. Tokyo: Yūseidō, 1978. 24–39.

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 91-104
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

研究ノート

日本の頂点文化―ミニマリズムの達成

Peak Cultures of Japan: The Minimalistic Achievements

津城　寛文（Hirofumi TSUSHIRO）
筑波大学人文社会系　教授

どの文化の土台にも、地理的な初期条件と、歴史的なプロセスによって育まれてきた指向性があり、諸条件が整った時、ほかの文化では及び難い、「頂点文化」と呼び得るものに達することがある。日本の伝統的感性の一面として指摘されている「省略」「暗示」「簡素」「凝縮」「集中」等々の特徴は、現代的なキーワードではミニマリズムとも呼ぶことができ、「能」「茶道」「武士道」「神道」「和歌」などの頂点文化では、それらが極限まで追及されて、西洋の魅惑に対峙しうる価値を達成している。

能の「居グセ」は、典型的な凝縮の達成である。茶道では、所作や道具を切り詰めて、禅的な美が目指される。武士道では、武力の極致において、相互の武力が無化される。神道では、神意の前に私意が無化される。そして、すべての頂点文化の頂点で、三十一文字の和歌が詠まれる。これらの頂点文化は、達人が敢えて力量を秘めて、表現を抑制するという、世界史でも稀有な文化である。他方、それが形骸化すると、もともと無能な者が何もしないという、戯画を呈する。

すでに高みを極め、現代ではおもに文化財的なものになっている頂点文化を、人類の遺産として保存するだけではなく、環境や人材その他の条件を得て、将来に向けて再生し、刷新し、創生し、新たな高みに達することが期待される。

Every culture with its own fundamental orientation cultivated by geographical initial conditions and historical processes, may attain some stages at its beneficial points and surpass other cultures, which I call 'peak culture.' Some characteristics are often noted as Japanese innate aesthetics, such as abbreviation, suggestion, simplicity, condensation, concentration and so on, which may be interpreted 'minimalism' in contemporary world. Peak cultures such as *No*-drama, *Sado*-tea-ceremony, *Bushido*-warrior' s way, *Shinto*-religion and *Waka*-poetry have pursued the ideals to the utmost limit, and achieved sufficient values competing with Western fascination.

'*Iguse*' in *No*-drama is typical achievement of concentration. *Sado*-tea-ceremony aims at *Zen*-Buddhistic beauty with least manipulations and items. In *Shinto*-religion, private willingness must be nulled in the presence of Divinity. And at the peak of all peak cultures, *Waka*-poetry is recited in thirty-one syllables. These peak cultures, achieved by gifted, trained and concentrated virtuosi with minimum performances, are rarely observed in the world history, and might lapse into mere farces that incompetent people do nothing.

The peak cultures have attained respective peaks once and now may remain mainly as cultural properties. We could expect, however, to regenerate, innovate, create and exalt them to new heights, with beneficial environments, gifted persons and other conditions, instead of merely preserving them as human heritages.

キーワード：頂点文化、深層文化、ミニマリズム、神道、和歌
Keywords：Peak Culture, Deep Culture, Minimalism, *Shinto*-Religion, *Waka*-Poetry

1、頂点文化とは何か

大小広狭のどの文化にも、地理的な初期条件と、歴史的なプロセスによって育まれてきた、「風合い flavor」「風情 taste」「趣味 preference」等々といわれる、基礎的な趨勢がある（レッドフィールド、1978）。そして、あれこれの有形無形の条件が整った時、文芸、芸術、思想、生活などの文化領域において、ある一定の傾向をもった発展が、ほかの文化では及び難い、頂点的な達成にいたる。それを私は「頂点文化 peak culture(s)」と名付けた[1]。これはまだ荒削りの概念であり、漠然とした言い方にならざるを得ないが、文化の風合いや趣味を分かち持つゆえに、それらの頂点には、ジャンルの違いを超えた共通性が見られる。いかなる頂点文化も、それぞれの「深層文化 deep culture」（津城、1995）と呼び得るものの洗練だからである。深層から頂点までをつなげて考えることは、当該文化の最良の可能性の理解につながるに違いない。E・カッシーラー（Cassirer, 1874 ～ 1945）が思想史・精神史について、「体系の頂点だけを追うのではなく、谷を抜ける道をたどり、そこからゆるやかな根気強い歩みで頂きへと登っていくこと」で、はじめてその意義がよく理解できる、と述べているとおりである（カッシーラー、1993）。

また、T・S・エリオット（Eliot, 1888 ～ 1965）が「詩」を論じていることは、私が頂点文化として語ろうとしていることと、重なるところがある。「一国民の詩はその生命を、国民の言語から引き出すと同時に、逆にそれに生命をあたえ、国民の自覚の最高点をしめし、その最大な力とその微妙な感受性の極限を示す」（『詩の効用と批評の効用』）、また「人々の最も深い感情の最も意識的な表現が、詩以外の芸術や他国語の詩によりも、母国語の詩にある」（『詩の社会的機能』）といった表現の、最上級の言葉遣い（most, highest, greatest, etc.）に注目し、「詩」を「文化」に置き換えると、文化の頂点的達成を説いたものと読むことができる（エリオット、1981a、1981b）。

さらにエリオットは「ヨーロッパ文化の統一性」を論じた中で、外からみれば似たようなヨーロッパ諸国は、「ローマとギリシアとイスラエル」という共通の根を持ちながら、「歴史はおのずからそこに差別」を示しており、「或る国民は何か一種類の芸術において他の国民に優る」として、イタリアとフランスは「絵画」において、ドイツは「音楽」において、イギリスは「詩」において優れている、と述べている（エリオット、1981c）。この主張に、ドイツの画家やイギリスの音楽家は、賛成しないかもしれないが、経験的に見て、国や地域ごとに何らかの偏りがあることは、否定できない。

これらの間接的なヒントにも増して、私が新たなターム「頂点文化」のヒントとしたのは、A・マズローの「ピーク体験」という心理学的なとらえ方、A・クローバーの「文化クライマックス」という文化人類学的なとらえ方、である。クローバーの用語が、生態学の「クライマックス」概念を下敷きにしたものであることは、言うまでもない（津城、2016）。「文化」の単位は、近代の制度に基づく「国家」に限られるわけではなく、より大きな単位で、あるいは逆により小さい単位で、「文化」を想像することは、もちろん可能である。とはいえ、歴史地理的なまとまりにより、「日本」という単位を設定することも、それほど恣意的なことではなく、十分な意味がある。

世界に発信できる日本文化は数多く、じっさいに多くのものが、発信されている。本稿では、それらの中から、とくに「能」という演劇、「茶道」という生活文化、「武士道」という職業倫理、「神道」という宗教、「和歌」という文学、この５つの「頂点文化 peak cultures」に注目する。

頂点文化に共通する、「省略」「暗示」「簡素」「凝縮」「集中」などと呼ばれる美意識は、近現代の西洋的キーワードである、ミニマリズムと重なるところがある。この「零度」への「極限化」を示

---

[1] Hirofumi TSUSHIRO, On the <Peak Culture> of Japan: *SHINTOH*-religion, *NOH*-drama, *SADOH*-tea ceremony, *BUSHIDOH*-warrior’s way, 2008, Hotel Sunroute Plaza Shinjuku, Tokyo. 2008年11月23日、外務省の外郭団体、国際交流基金 The Japan Foundation から、イスラム圏の若い知識人を対象に、日本文化についての講義を依頼された折、私は迷うことなく「頂点文化」をタイトルにかかげた。外国人向けの講義ということで、初歩的な紹介にとどまり、ここではまったく新たに書き直したが、「頂点文化」という課題は一貫している。当日の記録は未公刊。日本語プログラムは、「津城寛文」＋「頂点文化」で yahoo 検索すると、「H20「中東グループ研修」プログラムテーマ開発と社会」の記事から、PDF で閲覧可。2019年6月3日最終確認。サイト・アドレスは長すぎるため省く。

唆するキーワードは、1950年代に兆し、1960年代に音楽や美術の分野で、多様に展開したが（千葉、1987。ストリックランド、1998。Meyer, 2000）、今日ではシンプルなライフスタイルの呼び名としても、薄まりつつ流通している。他方、日本の頂点的達成は、古来、余剰をはぎ取った、針の穴に糸を通すような、「零度」への厳しい集中を特徴としていた。「わび」の語源が、不如意さによって背中が輪のように曲がることとされるとおり、その集中は、平均人には耐え難い。しかしまた、万人の趣向が茶道の影響を受けているといわれるように、頂点文化の美意識は、庶民のライフスタイルにまで、浸透している。このような視点から、日本文化を見たとき、私の視野に浮かび上がってきたのが、上記の５つの「古典」文化、「高位」文化であり、それらは、世界に発信できる日本文化の中でも、ひときわ高い位置を占めている。この５つは、能の世阿弥、茶の千利休、武士道の山本常朝など、突き詰められたテキストをもっていたり、さらに神道と和歌は、宮廷を中心に連綿と実践され、日本の全歴史と全地域を覆っていたり、その高みと広がりにおいて、著しいものがある。

すでに高い評価を受けているこれらの文化を、わざわざ「頂点」文化と呼び直す意図は、一つには、「深層」文化から立ち上がる、という来歴を強調するためであり、もう一つには、価値研究との接続を念頭においているからである。ミニマルなものを価値とすることは、日本文化の主流の傾向の一つで、これに対して、西欧でミニマルな音楽や美術が主張されはじめたのは、やっと20世紀の半ばからだった。また、日本に「特有」とは言わずとも、「特徴」ある価値として強調し、音楽評論や美術評論にも寄与できる（と言うのは、このようなとらえ方の需要があるゆえに）、文化実践的、価値論争的なものであることも目指している。

何を「頂点文化」として位置付けるかは、もちろん私の個人的な嗜好が反映しているが、まったく恣意的に選んだものでもない。これらがすべて、エリート的であることは、当然である。近代以降、西欧的な高文化に憧れて後追いを続けてきた日本人エリート層と、他方で、西洋文化の魅惑に対峙できる文化が日本にあることを「発見」「発明」「創造」しようとしたエリート層の、長きにわたる趣味のせめぎ合い、からみ合いがある。後者の典型的産物である「日本画」というタームは、「新たな伝統」の探究から生まれたものであった（北澤、2003。佐藤、1993）。さらに広く、外来文化と伝統文化全体の「反発」と「吸収同化」を契機とする「創造的な伝統」を、「鹿鳴館の系譜」と捉えるのも、このような視点である（磯田、1983）。

私の偏りを反省する意味で、このうちのいくつかを、それぞれ近縁のものと見比べてみると、しばしば問い質される「生け花」は、糸口となる重要テキストが一般に流通しておらず、したがって西欧のエリートだけではなく、日本のエリートにとっても、アクセスが困難である。「歌舞伎」と能との関係については、何世代か前の西欧知識人が、能を高価値に見たエピソードがいくつかある。また歌舞伎は能の大衆版であり、神楽はその宗教的基盤であり、「和歌」に関していえば、俳句（発句）は和歌の一部であり、物語のハイライトには和歌がくる、したがって文芸の中心は和歌にある、と説明できる。俳句は世界一短い詩歌として、国内外に嗜む人口が多く、また到達点としても、芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蝉の声」は、ミニマリズムの極致として、比類のない境地を詠みあげている。ただ、芭蕉ほどの高みを極めた作者、作品は稀で、芭蕉はいわば独立峰であるのに対して、和歌は、作者、作品とも、夥しい高みが連なる山脈である。なお、「禅」を日本文化、とくに武（士）道や茶道の契機とする考えに関しては（鎌田、1997）、その日本的な展開の重要な意義を認めつつ、発祥が国外にあるという意味で、「日本」の頂点として論じることには慎重でありたい。

すべての国や地域の文化の中に、それぞれの性格を突き詰めた頂点がある。書画のジャンルでいえば、人間を描く傾向が強い西洋画に対して、中国画や日本画は、風景画にも重きがある。そこには緻密な描写がある一方、形や色を消していく描写がある（Sallis, 2015）。イスラム美術の幾何学模様やカリグラフィと比べてみると、日本や中国では幾何学模様は目立たず、「書」が主要なジャンルとなっている、とも指摘できる（津城、2005、６章５節、2016）。このようなジャンルの嗜好、主題の選択、描写の技法は、深層文化から頂点文化までの連続性を辿ることで、その意義が浮き彫りになる。

以下は、５つの文化の頂点たる要素を浮き彫りにするための、挑戦的な試論である。

2、能

現代能楽界の第一者とされる五十六世･梅若六郎（1948 ～）が､ヨーロッパの世界遺産を背景に「羽衣」を舞う映像を見て、感動を覚えたことがある[2]。ただ一人の舞が、長い歴史を経た大建造物と対峙して、すこしも位負けしないのは、頂点的な文化と、それを体現する達人の力である。私が「頂点文化」ということを考えはじめた一つのきっかけは、この美しい映像にある。

能の頂点である世阿弥（1369? ～ 1443?）の数百年前の演劇理論は、ヨーロッパの前衛思想に衝撃を与えるほど､先端的なものだった（レヴィ･ストロース､1986､1988）[3]。そのような世阿弥への関心は､「幽玄」「花」「離見の見」といった概念、また「居グセ」という技法をめぐって、展開されている。

「幽玄」は、老荘思想や仏教で使われたものが、和歌で重用され、やがて連歌、能、茶道、等々の世界で共通に用いられるようになった、字義からして定義を拒む言葉で、世阿弥のオリジナルとしても、見るべきものはない。「花」も世阿弥のオリジナルではなく、そのころ用いられていた時代精神、時代感覚であり､「多分に開放的で生新で､官能的なものをその基盤にもっている」とされるが（北川、1973)、世阿弥は『風姿花伝』で独特の解釈をほどこし､「花」とは､「見る人の心に珍しき」「面白き」ことであり､「花と、面白きと、珍しきと」は、同じ意味とされる。「花」には､「時分の花（年齢に特有の一時的な美)」と「まことの花（芸そのものの美)」が区別され、さらに「秘する花」がある。

世阿弥特有の概念、技法として最も有名かつ難解とされるのは､「離見の見」である。哲学、文学から心理学、宗教学その他まで、さまざまな解釈がある中で、本人の説明が簡にして要を得ており、現代語を少し補えば、そのままで理解できる（久松、西尾、1961)。

> 目を前に見て心を後ろに置け……見所（観客席）より見るところの風姿（舞い姿）は、我が離見（舞人を外から見たもの）なり。しかれば、我が眼の見るところは、我見なり。離見の見にて見るところは、すなわち、見所同心（観客席と自分が一つになった心）の見なり。その時は我が姿を見得するなり。我が姿を見得すれば、左右前後を見るなり。

しかし､「離見の見」よりも、ミニマリズムの達成として重要なのは､「居グセ」という技法である。「秘する花」は、晩年の伝書『花鏡』では「せぬ所」「せぬひま」の面白さと言われ、舞や音曲その他の合間に､「心を捨てずして、用心を保つ内心」の力､「万能を一心につなぐ感力」が､「外に匂ひて面白き」と言いかえられた。「せぬ」ことが結晶した「居グセ」では、シテは舞や謡を止め、やがてうずくまる。囃子や地謡が流れる中で、動かずに身心の充実を持続するのは、極度の緊張を要するとされる。観世寿夫（1925 ～ 1978）の「半蔀」の居グセを見た、フランスの演劇人が､「能の静止は息づいている」と驚愕したように、見る目のある観客には、その緊張が共有される（増田、1971)。

頂点である能が、そこから立ち上がってくる土台＝深層文化は、神楽などの神事芸能、田楽、曲舞、散楽、芸能、踊念仏その他であった。「最高の達成といわれるものは産み出さなかったけれども、常にその一歩手前の水準は保っていた」と言われるように、その「様々な可能性にみちみちた文化的混沌」が、世阿弥という天才的な思想家、芸術家によって、取捨選択され、洗練されて、頂点的達成に至ったのである（松岡、1991)。

江戸時代に武家の式楽として採用された能は、様式性と儀式性を強め、明治以後は、武家の庇護を離れて民間の芸能として再出発し、そのプロセスで秘伝書が公開され、やがて大正期には達人が輩出する黄金時代を迎えた。この頂点的な時代を目撃したのが、フランス象徴派の詩人、大正末から昭和初めにかけての駐日大使、ポール・クローデル（Claudel, 1868 ～ 1955）であった。クローデルが能を

---

[2] 映像はNHK、タイトルは「梅若六郎　世界遺産に舞う」。

[3] レヴィ･ストロース（Lévi-Strauss､1908 ～ 2009）の *Le re gard éloigné* の邦訳のタイトル『はるかなる視線』は､「離見の見」にインスパイアされ､日本研究の同僚に直訳してもらったものである。この「視線」は､「観察者の文化とは大きく異なる文化に目を向け」つつ､「自らの文化を遠くから見る、あたかも自分が異なる文化に属しているかのように見る」という､「人類学的な省察の二重の本質」を表現したものだと、レヴィ・ストロースは考えた

外国語で語り、それがさらに現代日本語に訳されることで、業界用語の数百年の埃が払われた。頂点的な象徴派詩人が語った、日本の頂点文化のエッセンスは、日本人研究者によって、「能の仕草一つ一つをこれほど注意深く見つめ、その思い入れを言葉で表現し尽くすことに成功した作家はいまい」と評されるほど、見事な鑑賞である（クローデル、1988。津城、1995、６章６節）。

冒頭で触れた五十六世･梅若六郎の「羽衣」の舞については、当人の報告がある。平成14（2002）年、ヨーロッパ公演の途中、梅若の希望で、急遽フランスの世界遺産を背景に、「羽衣」の舞いを撮影することになった。初日は雨で延期となり、翌日は夜明けとともに空が明るくなって、撮影が始まると、「背後の大聖堂はいっぱいの柔らかな光」に包まれた。梅若は「神々しさに包まれながら」、「経験したことのない解放感」を感じ、「自分で自分に感動」しながら、「晴れ晴れとした気持ちで」舞い納めたという（梅若、2003）。私の「感動」も、ただの思い込みではなかった。

3、茶道

嗜好品である茶を飲むことは、世界中に広く見られるとはいえ、茶道では、作り方、供し方、飲み方から、全体の立居振舞まで、最小限の要素による儀式化、様式化、象徴化が突き詰められた。

（1）千利休

茶道の頂点、千利休（1522 ～ 1591）の言行録の体裁をとった『南方録』は、ちょうど『新約聖書』や仏典のように、偽書とされつつ、名文句のアンソロジーでもある。喫茶の習慣は、中国への留学僧によってもたらされ、流行当初は唐物（舶来品）で飾った書院での豪華な茶会であったり、遊技的な闘茶であったりしたのを、利休とその先人が、簡素な道具立てで行うようになった。これを最小限まで切り詰めたのが、わび茶である。このように敢えて不如意な条件で行われる茶道の目的は、「仏祖の行ひのあとを学ぶ」仏道修行にあった（西山、1986）。「珠光、紹鷗、悉く禅宗なり。密伝あり」（熊倉、2006）という山上宗二の一節は、茶道と禅とのつながりを端的に証言している。

明治以降、最も有名な茶道論を展開したのは、岡倉天心（1863 ～ 1913）である。その後、「禅者」にして「大茶人」と評される久松真一（1889 ～ 1980）に、まとまった茶道論があり、意外なところでは、「民芸」思想家の柳宗悦（1889 ～ 1961）に、特異な茶道論がある。両者の大きな違いは、柳があくまでも茶碗の美を強調するところにある。

（2）岡倉天心

茶道を日本文化の善きものの代表とすることは、茶と日本を二つながら論じた岡倉天心の *The Book of the Tea*（1906）以来、「この道のあらゆる崇拝者」の共通点である。

中国で優雅な娯楽として「詩歌の領域」に達した喫茶は、日本に入って「茶道 Teaism」という「審美主義の宗教」にまで高められた。それは「美しいものを崇拝」する「一種の儀式」であり、「人間と自然についてのわれわれの全見地」の表現であり、「衛生学」（清潔を励行させるから）、「経済学」（単純の中に慰めがあることを示すから）、「精神幾何学 moral geometry」（宇宙に対する人間の比例感を定義するから）である。禅は「世に処するの術 art of being in the world」のレベルで「美学の領域」に寄与し、茶道は、その理想を生活で実践するアートとなった。日本の「住居、習慣……文学」はすべて、また貴人から貧者まで、万人が茶道の影響を受けている。茶道は、「崇拝者を趣味の上の貴族にすることで、東洋の民主主義の真精神を代表」している（岡倉、1998）。

これらの箇所の、「趣味の上の貴族」は頂点的な達成を示し、「民主主義」は万人平等性を示している。茶道そのものを嗜む人口は少なくとも、茶道の影響は、日本人の生活文化の全領域に及び、遍く行き渡っていると考えるからである。

（3）久松真一

久松真一の茶道論の特徴は、「日本」「頂点」「文化」の３つのレベルを意識的に説き分けていることである。まず、茶道は「宗教のインカーネーション」「禅の化身」と言われるレベルでは、禅の究

極の哲学である「無相の自己」の自覚が説かれる（「茶道における人間形成」）。

つぎに、こうした「究極」レベルから、茶道「文化」のレベルになると、茶室や庭園、道具や点前などの芸術、道徳、哲学、日常生活の規矩が、「総合文化体系」として論じられる（「茶道文化の性格」）。

さらに、「日本の文化的使命」担うものとしての茶道、というレベルになると、「西洋の学者や文化人」に「深くまた高い文化」と考えられている茶道が、いかにして「文化日本に貢献」できるかという、文化政策的な課題が説かれる（「日本の文化的使命と茶道」）。

古来の「茶の十徳」と言われるもの（諸天加護、睡眠遠離、孝養父母、消除重病など）に代えて、久松が構想する茶の十徳は、つぎのとおりである。一、総合的に日本文化を行ずる。二、仏法に参ずる。三、仏教の日常生活化。四、道徳の向上。五、礼儀作法の尊重。六、高尚な趣味を養う。七、日本文化の高揚宣揚。八、日本文化の創造。九、文化財の保存。十、薬効、である（「茶の十徳」）。

この十徳を三つレベルに読み分ければ、十番目の薬学的な「徳」は除くとして、二が茶＝禅の究極レベルで「頂点」に、三～六が文化一般のレベルで「文化」に、一と七～九は日本文化論レベルで「日本」に、それぞれかかわっているのがわかる（久松、1987）。

（4）柳宗悦

「民芸」の造語者である柳宗悦は、もとはといえば宗教研究、とくにキリスト教神秘主義の研究から出発して、美術評論、宗教評論を展開した人物である。「民芸」という民衆的ものを対象とするとはいえ、西洋の最もエリート的な、しかし異端的な思想の流れを、しかもかなり若い時期に、足早に通過していることは、つねに念頭におくべき背景である。そのような早熟な柳の円熟期の思想は、「美」と「宗教」と「民衆」という三つのモチーフから成る日本論であり、そのうち「美」と「宗教」の組み合わせから、「茶道」論が展開している（津城、1995、７章）。

柳も久松と同様、茶と禅の密接な関係を強調し、「茶は禅修行の一様式……観法の一形式」と、たしかに言う（「『禅茶録』を読んで」）。しかし「「茶」は美の宗教である」と言うとき、重心は決定的に「美」のほうに移る（「茶道を想う」）。「美」が不要であれば禅だけでよく、茶は不要だからである。そこから、茶の美的側面に鈍感な禅者を「美を見る直観」がない、とする批判が出てくる（「『禅茶録』を読んで」）。そしてその美は、なによりも茶碗について説かれる。「見方が余りにも器物中心」と批判されたことに対して、柳は、「器物を選ぶのは美しさの世界に深く入ろうとするからである。それが美しければ美しいほど、茶の湯を更に茶の湯にする」と譲らなかった（「「茶」の病い」）。

他方、「日本（人）」という言葉はあまり目立たないが、二つの文脈で前景化している。一つは、「日本人の類いない美への教養は、多年茶道に訓練せられた賜物」で、「美の王国をこの世に」と志す人は、「茶道の真面目を甦らす」使命があるというもの、もう一つは、茶道がもたらした「美の標準」は、「味覚から来た平易極まる「渋い」という言葉」であり、「凡ての日本人はこの一語を知りぬいている」というものである（「茶道を想う」）。日本文化の全領域に浸透し、かつ他文化に等価物を見出しがたい「渋さ」という美感は、頂点的な茶道から滲み出てきたものなのである（熊倉、1987）[4]。

4、武士道

近代世界へ向けた武士道の発信は、新渡戸稲造による英文 *The Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought* (1900) であった。有名な序文で語られたとおり、西洋の「道徳の基礎」にキリスト教があるのに対し、日本の道徳の基礎は武士道にあると、士族出身者の新渡戸は気付いた。かつ、「よく似ているもの」として、「日本の武士道を、大ざっぱに英語でシヴァリー（Chivalry）と訳し……武士階級の身分に伴う義務 nobles oblige」と説明した。国民の一般的な水準よりも「はるかに高い山脈」を成しているこの武士道の中の、「さらに高いいくつかの峰 a few of the more prominent

[4] 死去の一年前、柳は、アメリカの雑誌の「渋さ」をテーマとする日本特集号に寄稿を求められ、英文を草し、後にそれをもとに「渋さについて」（1960）という日本文を発表した。執筆の経緯からして、「渋さ」をどう英訳するか、というのが、この一文の主題である。それをみると、一語でしっくりする既訳はないという理由で、「渋さ」は、単純性 Simplicity、簡素 Austerity など20近い言葉の集合として説明された。

peaks」、つまり武士道の頂点を、新渡戸は西洋に向けて発信したのである。

すでに武士階級が姿を消し、武士道は力を失いつつあると思われた当時にあって、新渡戸は、「桜の花と同じように、わが国土の固有の花」である武士道は、「現在でもなお、その力と美をもって、わが民族の心の中に生きつづけ……力強い感化を与えている」と、期待をこめて観察した。そして、ヨーロッパの騎士道が「キリスト教によって養い育てられ、新しい生命を得た」ように、武士道が「新しい生命」を得る可能性があるとすれば、それを養い得るのは「ただキリスト教あるのみ」と思われた（新渡戸、1998）。新渡戸にとって残念なことに、この結びつきは実現しなかった。

武士階級は、発生的には貴族の警備集団にあり、雇用契約の関係であったが、安定した武家政権が樹立され身分的安定がもたらされると、本来の働き場所である戦闘の機会が、極小化していった。戦闘の可能性がほぼゼロでありながら、いつでも戦う準備をしているのは、一種の超自然的な修道状態である。その中にあって、「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」という、山本常朝（1659 ～ 1721）『葉隠』の有名な言葉は、「絶壁を攀じ登る……離れ業」（トインビー、1979）のような、特異な突き詰め方をしたという意味で、一つの頂点ではあった。

比較対象にされる同時代の大道寺友山（1639 ～ 1730）『武道初心集』では、武士が「死を常に心にあつる」目的は、命がけの覚悟で生きること、人倫の指導者として天下国家に道を実現すること、である。このようなより良く「生きる事」を強調する「儒教的士道論」に対して、常朝は「死ぬ事」そのものを強調している。また、主従関係について、葉隠的武士道は「主従の契り」という情誼的な結合を離れないのに対して、儒教的士道においてその関係は絶対ではなく、天下に道を実現することが優先された。忠誠を尽くす対象が、前者では「藩」、後者では「天下国家」となる（相良、1974）。

しばしば指摘される通り、この「藩」と「天下国家」のスケールの違いが、武士道の光と影の問題に直結する。「儒教的」武士道は、忠誠の対象を藩から国にそのまま拡大した。典型例として、山岡鉄舟（1836 ～ 1888）の武士道論では、武士階級の行なう狭い武士道を「日本人の道」に拡大し（国民武士道論）、この道は「神・儒・仏三道一貫の大道」に基づくこと（普遍主義）、また「日本民族は……皇運を扶翼」すべきこと（国家主義）、が説かれている。ただし、普遍主義と国家主義が、理念としては接続できても、現実に矛盾しがちなことは、日本思想のみのことではなく、その調停は困難を極める（勝部、1999）。「普遍性」「全体性」の標榜すら、自己否定を伴わないと、あらゆる固着を免れない。騎士から修道士に転じたイグナチオ・デ・ロヨラの忠誠の対象も、何かしらの「部分」への固着を免れていない（ロヨラ、1995）。

もう一つしばしば問題となるのは、武士の末裔である近代軍人の行動規範をめぐってである。『徴兵告諭』（1872）、『軍人訓戒』（1878）、『軍人勅諭』（1882）、とくに『戦陣訓』（1941）に対して批判的な研究は、「退却しない攻撃精神」や「卑怯な戦術をとらない潔さ」は近代戦では必ず敗れるし、「自爆」は非合理な戦術につながったし、「捕虜となるのを拒む潔さ」は降伏して生き延びる選択を奪い、戦争は長引いた、とまとめている（武光、2015）。新渡戸が、「公平を期するために」言えば「日本人の欠点や短所もまた」、したがって「軍人の欠点や短所」もまた、「武士道」に由来するところがある、と注記したとおり、近代の軍人に受け継がれ武士道のさまざまな思想と実践の一部は、近代的な政治哲学としても戦争哲学としても、その弱点をあらわにする結果ともなったのである。

ところで、あまり強調されない、しかし重要なことは、武士道とそこから派生した思想が、中間的指導者層の職業倫理であり、最高指導者層のための帝王学とは異なる、という点である。その限定の中で、武士道の極意は「人を斬らざること」と述べた山岡鉄舟の一文は、ひときわ高い武士道の達成と考えられる。「武」の字義は「」を「止める」ことという異説と考え合わせれば、相手に戈を使わせないほどの力を持ち、かつその力を行使しない、というこの思想は、頂点的達成として、正負の意味で、再検討するに値する。武士道から展開した諸武道も、格闘技でありながら、野蛮さを抑制する規矩を組み込んで、「和」の武道になっている。象徴である「日本刀」に関していえば、「殺」を目的とする究極で「殺」を否定するという「矛盾」が、頂点的な達成を見せつつ（富木、1991）、極限まで研ぎ澄まされた日本刀は、「美しさと表裏一体の脆さ」を持つ稀有な美術品となり、実用的な武器であることを逸脱した（百田、渡部、2013）。

武士道との連想で筆頭にくる「切腹」について、最後に触れよう。これは日本だけで行なわれたものではないが、起源はどうであれ、意味はどうであれ、広がりはどうであれ、切腹を指導的階級の儀式にまで洗練したのは、武士道だけであった（千葉、1994）。私の知る限り、最も印象的な切腹の描写は、幕末維新期の英国の外交官、E・サトウ（Satow, 1843 ～ 1929）にある。1868年、神戸において、備前藩の行列を外国兵士が横切ったのをきっかけに、藩と外国勢とのあいだで撃ち合いになった。この「神戸事件＝備前事件」の後始末として、発砲を命じた滝善三郎（1837 ～ 1868）が、日本の代表者たち（伊藤博文ら）と外国人代表たち（サトウら）の居並ぶ前で、粛然と切腹した。

サトウは、武士の「紳士のような風采と顔つき」「きわめて平静な落ち着き」を敬意をもって記し、「いやな見世物ではなく、きわめて上品な礼儀正しい一つの儀式で、イギリス人がよくニューゲートの監獄の前で公衆の娯楽のために催すものよりも、はるかに厳粛なもの」だったと、イギリスの扇情的な新聞報道を批判している（サトウ、1960）。開国間もないころ起きた事件は、現場の責任者の切腹により決着し、その一部始終が、サトウの礼節ある証言によって、世界史に刻まれた。職務上の当事者として、責任を一身に引き受けたこの人物は、原因となった事件への対応の是非、賢愚、それへの評価と批判を含めて、武士道の体現者として記念されるにふさわしい。

5、神道

比較宗教学の祖 M・ミュラー（Muller, 1823~1900）は、すべての宗教は真理と誤謬をあわせ持つこと、そして諸宗教を比較研究することで人類は「宗教そのもの」に近付くことができること、それぞれの民族は、「地上の偶然によって」配属した自らの宗教を「育み浄化」すべきことを繰り返し述べ、また寓話のように、遠い将来それぞれの宗教伝統が最も良きものをもって一堂に集うビジョンを語っている（ミュラー、2003）。本論で神道を頂点文化として論じるのは、無批判な自己礼賛のためではなく、世界の諸宗教はそれぞれの頂点的な美徳をもって集まるというビジョンに、神道が何をもって参加できるか、日本文化の「善きもの」を相続したいと願う一人として、考えたいからである。

大陸や半島からの影響を受けつつ、日本の「固有宗教」として成立してきた神道には、伝統行事や民間信仰から、各神社の伝承や祭祀、国家神道と呼ばれる政治的な思想と行動、また教派神道と呼ばれる教団や運動など、多様な区分がある。それらを、「社会的神道」と「他界的神道」に分けて考えると、前者は「国体論」に収斂し、後者は「憑依、託宣」として現われたり、また神道の審美的な側面をなす「自然神秘主義」となって現れたりしている。

神道の頂点はどこにあるのか、という指摘は、随所で出される問いである。またそもそも、なぜ仏教、とくに禅ではなく神道か、という問いがある。前者について、私見では、人間中心主義とは対極の自然神秘主義、あるいは達人における無私の祈りといったところに、神道の頂点的な達成があり、他の部分、たとえば退行的な憑依や統制的な国体論は、よりよい頂点をめざすべき、未熟な固着であった、と位置づけることが妥当である。後者については、「地上の偶然によって」ある地域と歴史に配属されたわれわれ人類は皆、それぞれの「深層文化」に根差して頂点を目指すしかなく、日本に配属された者（の一定数）には、「神道」と総称されるものの中に、頂点的達成を目指すことが求められている、と考える。部外者がその課題を担ってくれることは、期待できないからである。

（1）国体論

近代日本の政教関係について、大きく分けて、国家神道と呼び得る一貫した実体はなかったという見方と、皇室祭祀を中心に、神社、学校、軍隊、祝祭日、メディアなどの儀礼がつながって、たしかなまとまりがあったという見方がある。私は後者の側に近く、この時期の日本は「国教」＝「国家レベルの公共宗教」を持って、やがて「統制国家」に至ったもの、と捉えている。近代日本だけではなく、人類史の随所で起こってきて、今も起こっている未熟な固着の一例として、私たちに切実なこの時期を捉えることで、普遍的問題と特殊な事例、宗教共通の問題と神道固有の問題を、相補って論じることができる（津城、2005、2011）。

宗教と政治というテーマは、突き詰めると、他界的宗教の極限である「神意」と、社会的宗教の極

端な実践である「宗教戦争」との関係に極まる。「神意」の一方の極には徹底的な平和主義が前景化し、他方の極には人道的見地からは認められない残忍な思想が析出する。「天皇は私を祈らず」と言われるように、「私事」を願う者は、天皇としての資質に欠ける。神意は「私なき」天皇をとおして臨在するというのが、他界的神道の頂点であるすれば、そこへ至る道は、神道の最高祭司（大神主）が、平和の神に平和を祈り、神道信仰者たちがそれを支えることである。この他界的な実践はまだ行われやすいのに比べ、平和を政治社会に実現する社会的神道の精練は、他界的信仰に加えて、社会的調整という、両方向の知恵が求められ、したがって困難は倍増する（津城、2014b）。

（2）憑依、託宣

古今東西の政治の周辺に、神意を伝える宗教者がいて、憑依・託宣は、繰り返し表面化し、社会を突き動かした。古代の記述としては、仲哀天皇が琴を弾き、竹内宿祢がとなって、神功皇后が「神がかり」した場面がある。道鏡事件（宇佐八幡宮神託事件、769）は、皇位継承という政治案件に、宇佐神宮の託宣が絡み合って事件化したものである。憑依・託宣の物語であふれている寺社縁起の中にあって、失脚した菅原道真（845 ～ 903）を祀る天満社は典型例である。この「史実とフィクション」のせめぎ合いは、「道真の怨霊が人口に膾炙」していたことを背景に、「真言系と天台系」が主導権を握ろうとする動きの反映であるといった、歴史のダイナミズムを知るためにも、注目に値する（山田、2014）。近代においても、二・二六事件の首謀者として処刑された北一輝が、妻を霊媒とした「霊告」と称する託宣を青年将校らに伝え、それが事件の展開に陰に陽に影響を与えた（津城、2014a）。意識水準の低下を伴い、集合的な退行につながるという意味で、憑依現象が危険視されるのは当然として、無視すれば死角が生じてさらに危険であることは、強調しておかなければならない（津城、2011）。

（3）自然神秘主義

A・ハクスリー（Huxley, 1894 ～ 1963）が、中国や日本の詩歌や風景画に見られる深い宗教性に注目し、「自然神秘主義」を残している日本文化に関心をもったとされる（鶴見、1985）ように、「間」「空」といった日本語の概念が、宗教美学的な意味を持つという説は、内外で再生産されている。たとえば、日本文化は「審美的モードをより強調」することで、「あらゆるものの基盤に横たわる未分化の聖なる統一体」を賦活しているとされる（Pilgrim, 1995）。M・エリアーデ（Eliade, 1907~1986）のキーワードは、「聖なるもの」が自然や人間や人工物を媒体にして「顕現」すること、つまり「ヒエロファニ hierophany」だったが、そのエリアーデ派の教科書も、「日本では、美、とくに自然の美はほとんど宗教の形式である。かくして、美的なるものは救済への道として仕える」と説いている（Cunningham, et al., 1995）。

現れたものはすべて仮象であり、作られたものはすべて偶像であるという立場からは、トーラーも新約聖書もコーランも偶像である。これに対して、すべては神的なもののであるという立場からは、仮象も偶像もヒエロファニとなる。自然を通じて神が顕現すると考える神道の自然神秘主義は、ヒエロファニ論となじみがよい。岡本太郎が、その注目すべき沖縄論においてに注目し、そこで覚えた「「何もないこと」の眩暈」を、「素肌で神にふれ、対決する、きびしい切実なつながり……神聖感はひどく身近に、強烈だ」と証言したのは、メディアの極少化である（岡本、1994。津城、2017、4章）。これら自然神秘主義の洞察に共通するのは、人類と自然を含む存在全体の連続性という思想であり、ハクスリーが「永遠の哲学」として祖述したものと別物ではない（ハクスリー、1988。津城、2019a）。このような自然神秘主義が、西洋の神秘主義に匹敵する達成として、西洋的エリートを魅惑するのである。

（4）神道の「発達」

武士道で問題となった、国家主義と普遍主義のせめぎ合いは、神道ではさらに先鋭化する。神道の比較宗教学的、「発達史」的（進化論）研究で知られる加藤玄智（1873 ～ 1965）は、神道は自然教期の「多霊教期」、「多神教期」＝「高等自然教期」を経て、知的倫理的要素に富んだ「文明教期」の神

道が成立したとして、神道全体を価値的に判断する。対照的に、折口信夫（1887 ～ 1953）は、戦後すぐの一連の論考で、「神道は……極めて茫漠たる未完成の宗教」で、「世界の宗教になることはむづかしい」と述べた。ただし加藤玄智は、普遍主義への志向を抑制しないところでは、部族的宗教であるユダヤ教から普遍的世界宗教であるキリスト教が出たように、神道から黒住教や金光教が出たと位置付けて、神道の発達を、脱ナショナリズムの方向にも見ていた（津城、1985）。ユダヤ教とキリスト教の違いを考えれば、神道の将来の「発達」が、どのような頂点に達し得るか、想像の範囲にある。

西洋的、キリスト教な世界観、文明観とも批判されるトインビーは、「狭苦しいこの現世」で起こることは、「神の計画……演出」であり、神が作り、神が肉化したこの世界を、「神の御心を体」したわれわれが、「より住みよい世界にするために努力」するのは、「西欧的でもなく非西欧的でもなく」、「何らかの意味において正しく、また意味あるもの」だと述べている（トインビー、1966）。この宗教の社会的側面と他界的側面が相乗するビジョンは、「西欧的でもなく非西欧的でもなく」、キリスト教に独占されるべきものでもない。神の使命を受けて（神の命もちて）、この世を作り治め（修理固成）、良い世界にする（弥栄）というのは、神道の思想と別物ではない。トインビーから学ぶことで、神道が「西欧」「キリスト教」的なものに取り込まれる、ということにはならない。

6、和歌

日本の諸頂点文化の中でも、ほかの文化の到達点となるという意味で、和歌は頂点の頂点 Peak of peaks を占めている。渡部昇一が、キリスト教徒は「神」の前に平等であり、近代市民は「法」の前に平等であったのと同様、日本人は「和歌」の前に平等であった、とくに『万葉集』は「全国民が身分や性別に関係なく参加」した国民歌集であったと、卓見を述べているように（渡部、2008）、和歌は、日本語を語る人すべてに平等に臨む、至高の審級だった。

本居宣長は若書きの『排蘆小船』で、「我邦の大道」は「自然の神道」であり、和歌はそうではないこと、「歌詩を以て政道のたすけとする事」は政治利用にすぎないことを述べて、和歌を宗教・道徳・政治から切り離し、独自の領域に隔離した。このような物語論、和歌論が、晩年の『源氏物語玉の小櫛』において、「物のあはれを知る」というキーワードに収斂し、恋歌至上主義が高らかに主張された（本居、1969）。

他方、茶＝禅の達人である紹鷗や利休らは、茶の境地を、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ」（藤原定家）、「花をのみ待らん人に山ざとの雪間の草の春を見せばや」（藤原家隆）といった和歌に読み込み、「茶の本心」はそれらの「歌の心」に等しいと考えた（『南方録』「覚書」）。

しかし、「歌の心」は、宣長の言う恋愛＝「物のあはれを知る」心と、利休らの茶＝禅的な境地だけに限られるわけではない。あらゆる精神活動がそうであるように、和歌にも政治的な側面と、超越的あるいは瞑想的な側面がある。それぞれはさらに、政治的儀礼と呪術的儀礼、仏教的真理実践と瞑想的自然観照に分けられ、これらのどれにも落とし込めない和歌が、伝統的な歌論の対象として区別し得る（津城、2019b）。

（1）政治的儀礼としての和歌

御製と賀歌との応答は、宮廷における、和歌の政治的実践である。菅江真澄（1754 ～ 1829）の膨大な地誌を、和歌によるブランド作りと捉えた研究は、そのような政治的実践としての和歌の性格を、地方の視点から照らし出している。和歌がさまざまな頂点文化の頂点を成すのは、歴史的には古代から当代まで、地理的には国土の隅々にまで流布・浸透し、すべての人がそこに組み込まれているからである。このような和歌の「歴史性」「領土性」「万民性」によって、日本は「和歌に包まれた国」になっている。名所や旧跡も、和歌に詠まれることで、「和歌の帝国」のリストに登録され、「都を中心とする巨大な価値体系」「美の制度」のなかに位置付けられてきた（錦、2011）。

ブルデュー（Bourdieu, 1930 ～ 2002）の一連の著作によって浮き彫りになった、文化資本の相続による社会的地位の再生産という、「意外に簡単な」メカニズムは（ブルデュー他、1994）、相続や再生産の戦略、制度の疲労や停滞といった弊害を含めて、日本においては和歌を中心として動いていた。

（2）呪術儀礼としての和歌

「和歌の力を実践して歩く」のは、近現代のポリティックスが考えるようなブランドの魅力を行使するだけではなく、「神仏を喜ばす……大きな呪力」でもあった。「国霊の籠る場所」である歌枕・名所を和歌に詠むことで、神仏に通じる呪力が発動するという信仰を論じたのが、折口信夫（1887～1953）の古代歌論論、言霊論、そしてその基盤にある鎮魂論である。「歌はすべて、たまふり――鎮魂――の目的から出てゐた」「歌に乗ってくるところの清らかな魂が、人間の身体の中に這入る」などと言われるように、和歌を含む歌舞奏楽によって、対象（者）に何らかの「魂」が入っていくことを、折口は鎮魂の「呪術」と考えていた。このような「呪術」が、高度な政治的場面で行われると、鎮魂の「儀礼」が成立する。即位儀礼は、臣下が新王に歌を奉ることで、歌によって国の魂その他が献上されるという、高度に呪術儀礼的な政治と説明される（津城、1990、１章、２章）。

（3）仏教的真理実践としての和歌

中世歌論の一角では、仏教思想との関係で「歌道＝仏道」論が、歌人や仏僧たちによって展開された。茶道を立ち上げた達人たちが、異口同音に「茶道＝仏道」と唱え、その「境界」を名歌に託したのは、この系譜にほかならない。藤原俊成は最晩年の「古来風体抄」で、これまでの歌論のような語彙では述べがたい「歌の姿心」「姿詞」「深き心」「深き道」を、天台の「空・仮・中の三諦」に通わして説明するとして、はじめて歌道＝仏道の考えを述べた。仏僧としては、無住がはじめて、歌道＝仏道、和歌＝真言の思想を打ち出し、、と続く。

このように、和歌が真言陀羅尼と捉えられるようになった事態を、栗田勇は「三夕の歌」を例に、語り直している。西行の和歌は、「鴫立つ沢」という「フェノメノン」「仮」が、「秋の夕暮」という「空」のなかで、羽ばたきによって、一挙に「超越的なものの存在をあらためて自覚させ、呼び覚ます」「中」の一瞬を詠ったものである。定家の和歌における「花」は「仮象」、「紅葉」は「空」の象徴であり、「花ももみぢもなかりけり」というのは、「「仮」でもなく「空」でもない」ということ、「浦の苫屋」という「機」によって喚起されるのが、「仮」と「空」をはらんだ「中」としての「秋の夕暮れ」である。こうした仏教の「形而上学的なストラクチャ」を具現した和歌を、瞑想的センスのない者たちは、「だるま歌」といって嘲り批判したのである（栗田、1999）。

鎌田東二が、和歌は真言陀羅尼であり、「負の感情」を「浄化」すると述べているのは、「形而上学的なストラクチャ」とは別の意味ながら、救済論的な仏道＝歌道論につながっている（鎌田、2015）。

（4）瞑想的自然観照としての和歌

折口信夫には、古代的な鎮魂の呪術・儀礼としての和歌論のほかに、もう一つのテーマがある。それは、叙景詩と密接にかかわる、瞑想的な自然観照歌であり、神道における自然神秘主義と表裏をなしている。折口は随所で、万葉集は鎮魂歌集である、と述べているが、その万葉解釈は、霊魂の授受という呪術的意味ばかりではない。とくに重要なのは、「日本の歌の中で、最も眼を着けねばならぬもの」と言われる叙景詩である。その例として、折口はしばしば万葉歌、「ぬばたまの　夜の更け行けば　久木生ふる　清き河原に　千鳥しば鳴く」（山部赤人）を引き、「聴覚から自然の核心に迫らう」とする注意集中が、「静かな」「瞑想的」な境地に人を導くと述べている。

この歌の境地は、折口にして「深い暗示」としか述べられないものだが、他方で折口信夫＝釈迢空は、それと同じ方法を、「心　ふと　ものにたゆたひ、耳こらす。椿の下の暗き水音」（『海やまのあひだ』）などの迢空短歌で、実践してもいた（津城、1990、５章）。

この、古代万葉歌と近代迢空短歌をつなぐものとして、中世的な自然観照歌がある。とくに、多くの論者によって叙景歌の到達点と評価されるのが京極為兼であり、その「沈み果つる　入り日のきはに　あらはれぬ　霞める山の　なほ奥の峰」（「題知らず」『風雅和歌集』）は、類歌のない為兼の代表作とされる。ここに表われた「自然を天象の動きから見る見方……印象ぶかい状態にある一瞬をとらえて味わうという態度」は、「和歌的観照の中世における終極」であり、「和歌文学は、これを限りに新しい詩を生む力を失いはてる」という捉え方は、和歌の一つの頂点の在り処を、ピンポイントで示

している（風巻、1985）。

（5）和歌プロパーの詩学

数ある和歌の技法の中から「本歌取り」「詞書」に注目すると、これは一般的な用語では、引用、変奏、パロディであり、和歌に限らず、また日本の詩歌に限らず、世界文学史・文化史に共通の、基本的な技法であるが、これがヨーロッパで詩歌の技法としてはっきり自覚されたのは、20世紀のモダニズムにおいてであるともいわれる。前近代的と思われていた「本歌取り」や「詞書」は、こうしてモダニズムという外からの光に照らされて、前衛的な詩学の最先端で、再発見され、翻訳、引用されることになった（富士川、1983）。

7、頂点文化の離れ業、停止、刷新

頂点的なものは、定義からして稀なものであり、高みを維持することは難しく、不安定で、たやすく滑り落ちてしまう。私が日本の頂点文化と考えるものは、切り詰めた最小限の要素によって、質的に彫琢を極める精神を共有する。茶道の軌矩を定めた当人は作法を超越して、「定法なし」と言い放った。能は「せぬが面白き」「秘すれば花」という逆説によって、限界状況を露わす。武士道の頂点では「死ぬこと」「殺さないこと」「戦わないこと」が説かれた。神道の頂点で「天皇は私を祈らず」と言われ、黒住宗忠は「あるものはみな吹き払へ」と説いた。三十一文字の中に、「天地を動かし……武士の心を和らげる」力を持つ和歌は、「花も紅葉もない」境地を目指した。これらが証言しているのは、道を極めたところでは、人為が無化されるという、日本の頂点文化の逆説である。それらの文化は、頂点に近づくにつれ、ジャンルを突き抜け、人為を超えて、「道」としか呼びようのないものに収斂していく。これまであげた頂点文化は、それにふさわしい達人を得られず、刷新されないときは、よくて亜流か、しばしば戯画に成り下がる。あるいは、伝統に留まろうとして、生命力を失う。極限を目指して高みに達した頂点文化が、「発達停止」（トインビー、1979）となるのか、あるいはさらに一歩を進めるのかは、それを相続する者にゆだねられている。

柳宗悦は、日本の「美の標準」である「渋さ」の対辞として、派手 Showy, Gaudy、騒がしさ Noisiness、奢り・華麗 Gorgeousness などをあげていた（熊倉、1987）九鬼周造も『「いき」の構造』で、「いき」とその類語、それぞれの対語を論じていた。これらを、縄文／弥生という相補的な対語と重ねれば、「渋さ」や「いき」は、おおまかに弥生寄りにある。縄文／弥生は、ちょうどデュオニュソス的／アポロ的がそうであるように、対立的、相補的な特性をさまざまな割合で配合することで、矛盾するかのような多くの現象を、便利に説明できる。たとえば能について、シテは、単純簡素な舞台で、絢爛豪華な衣装をまとい、激しい心の充溢を、何もしない「居グセ」で表現する、あるいは囃子方は、簡素な楽器で絢爛と演奏する、などと説明できる。

日本美の中の絢爛豪華な爆発力は、ほかの地域文化のそれに劣らない。その頂点で、一定数の達人たちが、形や色や動きを無化していくのは、その美意識に人為を抑制する因子が組み込まれていて、表現の「零度」に近づくからだろう。自己否定が働かない文化は、表現の増殖に歯止めがかからない。一般信徒が参加し、エネルギーを「沸騰」させる集合的儀礼に対して、少数の専門職の実践は、見えないところで、密かに行われる。日本文化は、「縄文」的なものを孕みつつ、「弥生」的になる傾向が、たしかにある。岡本太郎が「爆発」と評した芸術の対極に、楽しむことを厳しく拒む「深海の底」のような武満徹の芸術がある。爆発を最小限の中に凝縮した比類のない達成が、日本の頂点文化なのである[5]。

[5] 本稿は JSPS 科研費、挑戦的研究（萌芽）「「日本語文化」の保存・刷新・発信のための分野横断的・統合的な理論構築」（課題番号：17K18610、代表者：津城寛文、H29 ～ H31年度）の成果の一部である。

参考文献

ブルデュー、ピエール、他、山下雅之訳『美術愛好――ヨーロッパの美術館と観衆』人文書院、1994 [Bourdieu, et al., 1969]。
カッシーラー、エルンスト、三井礼子訳『英国プラトン・ルネサンス――ケンブリッジ学派の思想潮流』工作舎、1993 [Cassirer, 1953]。
千葉成夫『ミニマル・アート』リブロポート、1987。
千葉徳爾『日本人はなぜ切腹するのか』東京堂出版、1994。
クローデル、ポール、内藤高訳『朝日の中の黒い鳥』講談社学術文庫、1988 [Claudel, 1927]。
Cunningham, Lawrence S., Kelsay, John, et al., *The Sacred Quest: An Invitation to the Study of Religion*, 2 nd ed., Prentice Hall, 1995 [1 st. 1991].
エリオット、T. S.、上田保訳『詩の効用と批評の効用』『エリオット全集　3　詩論・詩劇論』中央公論社、1981a [Eliot, 1933]。
エリオット、T. S.、山田祥一訳『詩の社会的機能』『エリオット全集　3　詩論・詩劇論』中央公論社、1981b [Eliot, 1945]。
エリオット、T. S.、深瀬基寛訳『文化の定義のための覚書』『エリオット全集　5　文化論』中央公論社、1981c [Eliot, 1948]。
富士川義之『風景の詩学』白水社、1983。
久松潜一、西尾実校注『日本古典文学大系　65　歌論集　能楽論集』岩波書店、1961。
久松真一『茶道の哲学』講談社学術文庫、1987。
ハクスリー、オルダス、中村保男訳『永遠の哲学』平河出版社、1988 [Huxley, 1945]。
百田尚樹、渡部昇一『ゼロ戦と日本刀－美しさに潜む「失敗の本質」』PHP 研究所、2013。
磯田光一『鹿鳴館の系譜――近代日本文芸史誌』文芸春秋、1983。
鎌田茂雄編『叢書　禅と日本文化　6　禅と武道』ぺりかん社、1997。
鎌田東二「「身心変容技法」としての歌と剣 ―「身心変容技法研究」試論」『身心変容技法研究』4 号、2015年。
勝部真長編『山岡鉄舟の武士道』角川ソフィア文庫、1999。
風巻景次郎『中世の文学伝統』岩波文庫、1985。
北川忠彦『世阿弥』中公新書、1973。
北澤憲昭『「日本画」の転位』ブリュッケ、2003。
熊倉功夫編『柳宗悦茶道論集』岩波文庫、1987。
熊倉功夫校注『山上宗二記』岩波文庫、2006。
栗田勇『西行から最澄へ――日本文化と仏教思想』岩波書店、1999。
レヴィ・ストロース、クロード、三保元訳『はるかなる視線』みすず書房、全 2 巻、1986、1988 [Lévi-Strauss, 1983]。
ロヨラ、イグナチオ・デ、門脇佳吉訳『霊躁』岩波文庫、1995 [Loyola,1548]。
増田正造『能の表現――その逆説の美学』中公新書、1971。
松岡心平『宴の身体』岩波、1991。
Meyer, James ed., *Minimalism*, Phaidon, 2000.
『本居宣長全集』 2 巻、筑摩書房、1968。
『本居宣長全集』 4 巻、筑摩書房1969。
ミュラー、マックス、津城寛文訳『人生の夕べに』春秋社、2003 [Muller, 1905]。
錦仁『なぜ和歌 (うた) を詠むのか――菅江真澄の旅と地誌』笠間書院、2011。
西山松之助校注『南方録』岩波文庫、1986。
新渡戸稲造、須知徳平訳『対訳　武士道』講談社インターナショナル、バイリンガル・ブックス、1998 [Nitobe, 1900]。

岡倉天心、浅野晃訳『対訳　茶の本』講談社インターナショナル、バイリンガル・ブックス、1998 [Okakura, 1906]。
岡本太郎『沖縄文化論――忘れられた日本』中公叢書、1994。
Pilgrim, Richard, 'Foundations for a Religio-Aesthetic Traditions in Japan,' Apostolos-Cappadona, Diane ed., *Art, Creativity, and the Sacred: an Anthropology in Religion and Art,* new revised ed., The Continuum Publishing Company, 1995[1 st. 1984].
レッドフィールド、ロバート、染谷道臣、宮本勝共訳『未開社会の変貌』みすず書房、1978 [Redfield, 1968]。
相良亮「『葉隠』の世界」『日本思想体系26　三河物語　葉隠』岩波書店、1974。
John Sallis, *Senses of Landscape*, Northwestern University Press, 2015.
佐藤道信編『日本の近代美術　2　日本画の誕生』大月書房、1993。
サトウ、アーネスト、坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』上・下、岩波文庫、1960 [Satow, 1921]。
ストリックランド、エドワード、柿沼敏江、米田栄訳『アメリカン・ニュー・ミュージック――実験音楽、ミニマル・ミュージックからジャズ・アヴァンギャルドまで』勁草書房、1998 [Strickland, 1991]。
武光誠『昭和の武士道――悪用された戦陣訓』河出書房新社、2015。
富木謙治『武道論』大修館書店、1991。
トインビー、アーノルド、深瀬基寛訳『試練に立つ文明（全）』社会思想社、1966 [Toynbee, 1948]。
トインビー、アーノルド、長谷川松治訳『歴史の研究』中央公論社、1979 [Toynbee, 1934~1954]。
鶴見俊輔「ハクスリーの日本文化」片桐ユズル編『オルダス・ハクスリー――橋を架ける』人文書院、1985。
津城寛文「加藤玄智――穏健中庸なる天皇教徒」『日本の宗教学説Ⅱ』東京大学宗教学研究室、1985。
津城寛文『折口信夫の鎮魂論――研究史的位相と歌人の身体感覚』春秋社、1990。
津城寛文『日本の深層文化序説――三つの深層と宗教』玉川大学出版部、1995。
津城寛文『＜公共宗教＞の光と影――近代日本という雛形』つくばリポジトリ、2017 [初版、2005]。
津城寛文『社会的宗教と他界的宗教のあいだ――見え隠れする死者』世界思想社、2011。
津城寛文「国家改造と急進日蓮主義――北一輝を焦点に」西山茂責任編集『シリーズ日蓮 4　近現代の法華運動と在家教団』春秋社、2014a。
津城寛文「社会的神道と他界的神道について」『明治聖徳記念学会紀要』復刊51号、2014b。
津城寛文「日本オリジナルの人文社会系キーワード」『国際日本研究紀要』 8 号、2016。
津城寛文「身心変容における陶酔と覚醒」『身心変容技法研究』 8 号、2019a。
津城寛文「和歌の宗教学――２つのポリティックスと２つのポエティックス」『媒介する＜モノ＞』リトン、2019b。
梅若六郎（五十六世）『まことの花』世界文化社、2003。
渡部昇一『日本史百人一首』育鵬社、2008。
山田雄司『怨霊とは何か』中公新書、2014。

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 105-120
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

Research Note

A New Analysis of Persian Visits to Japan in the 7th and 8th Centuries

James Harry MORRIS
University of Tsukuba, Faculty of Humanities and Social Sciences, Assistant Professor

This research note describes the biographies of Dārāy and Ri Mitsuei, two Persians whose visits to Japan in the 7th and 8th Centuries are recorded in the *Nihon Shoki* and *Shoku Nihongi*. The research note outlines and critically engages with contemporary research, and seeks to suggest that much of the current knowledge regarding the biographies of the two figures is unsubstantiated. Furthermore, the research note seeks to provide new starting points for the analysis of the two figures. Whilst it argues that little can be known about the figure of Dārāy, the research note seeks to interact and add to debates regarding his name, nationality, rank, and the roles of other people who are often mentioned alongside him in scholarly works. Turning to Ri Mitsuei, the research note adds to previous research undertaken by the author revising some of the conclusions that he drew elsewhere.

Keywords: Persian-Japanese Relations, Ri Mitsuei, *Shoku Nihongi*, *Nihon Shoki*, Dārāy

The classical Japanese histories, the *Nihon Shoki* 日本書紀, completed in 720CE, and the *Shoku Nihongi* 続日本紀, completed in 797CE, refer on numerous occasions to the visits of foreigners from distant lands including Tocharoi, Kosalans, and Persians.[1] Whilst these figures and their visits have received attention in Japanese language scholarship, they are yet to be explored extensively in the English language. There is little scholarly consensus on the biographies of these figures, who receive only a cursory mention in Japan's historical record. Furthermore, many theories lack substantive evidence or are based on outdated scholarship. Nevertheless, researching the visits of Tocharoi, Kosalans, and Persians[2] to Japan is important not only for deepening our understanding of Japanese history, but for understanding the history of trade, immigration, and the journeys of travellers on the Silk Road and Maritime Silk Road. This research note will assess and problematize some of the hitherto popular theories regarding the visits of two Persians to 7th and 8th Century Japan and will seek to explore the veracity of these theories and their usefulness or lack thereof. The research note, moreover, offers some new interpretations and analyses of these figures, which may be used as a starting point for future research on the topic.

---

1 Itō Gikyō, *Perushia bunka torai kō: Shirukorōdo kara Asuka e* (Tokyo: Iwanami Shoten, 1980), 1-30.

2 In this paper, the term "Persian" refers to peoples from the Sasanian Empire (224-651CE) and its pre-Islamic successor states. Contemporaneously, the Chinese referred to Sasanian Persia as *Bōsī* 波斯 and its people as *Bōsīrén* 波斯人, and these terms are usually translated into English as "Persia" and "Persian." Edwin G. Pulleyblank notes that from the early 8th Century until 755CE the term referred to a Chinese puppet state in the region of the eastern borders of Afghanistan (Bactria). See: Edwin G. Pulleyblank, "Chinese-Iranian Relations i. In Pre-Islamic Times," *Encyclopedia Iranica,* 2011.

The Figure of Dārāy

According to Itō Gikyō, the first reference to a Persian in the *Nihon Shoki* appears in the reign of Empress Saimei (J. Saimei Tennō 斉明天皇 , 594-661CE) in 660CE.[3] In classical English translations of the piece such as William Aston's famous *Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697,* the term Kenzuhashi Dachia, Kenzu Fasi Datia, or Kenzuhashi Tatsua 乾豆波斯達阿 (C. *Gān dòu bōsī dá ā*) is often presented as a person's name as is illustrated in the following passage:

> Again, the man of Tukhāra, Kendzuhashi Tatsua, desired to return to his native country, and asked for an escort officer, saying:— "I intend later to pay my respects to the Court of the Great Country, and therefore, in token of this, I leave my wife behind." Accordingly, he took the way of the Western Sea with several tens of men.[4]

The passage notes that the figure is from Tokharistan (Bactria) through its use of the contemporaneous Chinese term, *Dūhuòluórén* 覩貨羅人[5] (J. *Tokara no hito,* E. Tocharoi), however, the ensuing passage often taken to be the figure's name contains an additional two place names. Firstly, the term *Kenzu* 乾豆 , a possible Sinicized version of the Persian word *Hindūg* or *Hindūgān* (India) or a reference to the place name Kunduz, and secondly the Sino-Japanese term *Hashi* 波斯 (C. *Bōsī*) which refers to Persia.[6] Itō argues that these place names should be understood as prenominal descriptions of a person called Dachia 達阿 (C. *Dá ā*) likely a Japanese version of the name Dārāy.[7] Itō, therefore, posits two possible ways to translate the text dependent on whether the term *Kenzu* 乾豆 refers to India or Kunduz; either 'Man from Toxārestān: Persian Dārāy who had remained in or come from India'[8] or 'Man from Toxārestān: Persian Dārāy of/from Kunduz.'[9] Okamoto Kenichi who accepts the same premises as Itō argues that the term *Kenzu* 乾豆 is a reference to Samarkand, and therefore that Dārāy is a Tocharoi Persian from Samarkand.[10] A similar position is also taken by Imoto Eiichi who argues that *Kenzu* likely refers to a city within Persia.[11] Itō's, Okamoto's, and Imoto's arguments are convincing as it is highly unusual to find a surname built from two primarily geographic terms. Nevertheless, as noted by Nishimoto Masahiro the use of the term *Bōsī* 波斯 as a name is not uncommon in contemporaneous Chinese

---

[3] Itō, *Perushia bunka torai kō*, 14-17.

[4] William Aston, trans., *Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697, Two Volumes in One* (Tokyo: Tuttle Publishing, 1972), 266. In the original text:

> 又覩貨羅人。乾豆波斯達阿。欲歸本土。求請送使曰。願後朝於大國。所以留妻爲表。乃與數十人。入于西海之路。(*Nihon Shoki*, Page 1574, Paragraph 5).

[5] The term *Dūhuòluóguó* 睹貨邏國 is used to refer to the region in Xuánzàng's 玄奘 (602-644), *Great Tang Records on the Western Regions* (C. *Dà táng xīyù jì* 大唐西域記) completed in 646CE (Xuánzàng, *Dà táng xīyù jì*, Volume 1, Paragraphs 54 and 85).

[6] Itō, *Perushia bunka torai kō*, 14-15.

[7] Ibid., 14-15; Itō Gikyō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," *Orient* 15 (1979), 58. Some scholars have noted the possibility that the name may be derived from the Sanskrit *Datta*, but have generally rejected this possibility, see: Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 55-63; Imoto Eiichi, *Kodai no Nihon to Iran* (Tokyo: Gakuseisha, 1980), 21. While the name Dārāy has, therefore, received widest acceptance, it appears to me that the Middle Persian name *Dād* from the Old Persian *Dāta* is also a potentially valid origin for the name, although it would have likely been Sinicized in a different way.

[8] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 59.

[9] Ibid., 60.

[10] Okamoto Kenichi, "Nihon ni Kita Seiikijin," *Higashi Ajia no Kodai Bunka* 17 (1978), 62.

[11] Specifically, Imoto suggests the city of *Kando* or *Yārukato,* but I have not been able to trace either of these place names. He also notes that Samarkand and other locations are potential alternatives. Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*, 23-24.

sources,[12] and therefore it remains a possibility that Kenzuhashi 乾豆波斯 is a name rather than a geographic description. Furthermore, Itō's first suggested translation is problematic since the passage lacks the relevant verbs to suggest that this man had sojourned in India. His second translation or the one provided by Okamoto provide mere geographic specificity (Dārāy's country, region, and city of origin), and because that specificity makes logical geographic sense (he is from Tokharistan – Kunduz in Persia),[13] the second translation or Okamoto's alternative is, in my opinion, likely accurate. Indeed, although it is not possible to specify which city or geographic locality that the term *Kenzu* refers to, there is some scholarly consensus regarding Itō's assertion that the passage demarks that the man in question as a Tocharoi man named Dārāy who came from Persia.[14]

Given the foregoing conclusions we might be able to theorize that other figures described as "Tocharoi" who came to Japan were similarly considered to have hailed from Persia, however, due to a lack of textual evidence such figures cannot be identified. There is debate in regards to the location of *Tokara no kuni* 吐火羅國 or 覩貨邏國 in the *Nihon Shoki* with scholars suggesting that the term may refer to *Xīyù* 西域 , the Tokara islands (J. *Tokara rettō* 吐噶喇列島), the Philippines, Burma, Thailand, Indonesia, or Persia.[15] Nishimoto argues that *Tokara no kuni* cannot be identified with Persia (a popular position accepted by Okamoto and Takatō Gorō),[16] since contemporaneous Chinese sources refer to both regions as separate entities.[17] Drawing on the usage of the term in Chinese sources, he argues that the region is best identified as Tokharistan, situated in modern day Afghanistan, Uzbekistan, Tajikistan, and Turkmenistan.[18] Indeed, given the terms' usages in contemporaneous Chinese sources it is not possible to affirm that *Tokara no kuni* is anywhere other than Tokharistan without abandoning textual evidence in favour of potentially spurious philological arguments. Whilst I agree with Nishimoto, that the term *Tokara no kuni* (referring to Tokharistan) should be understood in contradistinction to Persia given its usage in Chinese sources; Sasanian control, patronage, and influence in the region during and before the 7th Century[19] cannot be dismissed, and it would therefore not be unusual to find Persians in Tokharistan, Tocharoi in Persia or Tocharoi Persians, like Dārāy.

Since Dārāy's leaving Japan was important enough to warrant inclusion in the *Nihon Shoki*, it is likely that his arrival was also recorded. Nevertheless, his name is not recorded elsewhere, and therefore the date of his arrival can only be conjectured from the *Nihon Shoki*'s references to the arrival of Tocharoi prior to Dārāy's outbound journey in 660CE. There are two possible dates for Dārāy's arrival, either the fourth month of 654CE during the reign of Emperor Kōtoku (J. Kōtoku Tennō 孝德天皇 , 596-654CE), when two men and two women

---

[12] Nishimoto Masahiro, "Asuka ni Kita Seiiki no Toharajin," *Kansai Daigaku Tōzai Gakujutsu Kenkyūsho Kiyō* 43 (2010), 6.

[13] Kunduz is a part of the area of Greater Khorasan which was under the control of the Sasanian Empire until the Arab conquest of 647CE, see: Hamid Wahed Alikuzai, *A Concise History of Afghanistan in 25 Volumes,* Vol. 14 (Bloomington: Trafford Publishing, 2013), 110.

[14] Okamoto, "Nihon ni Kita Seiikijin," 62-63; Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*, 21-24.

[15] Nishimoto, "Asuka ni Kita Seiiki no Toharajin," 4-7.

[16] Okamoto, "Nihon ni Kita Seiikijin," 58-63; Takatō Gorō, "Asuka to Seiiki," *Higashi Ajia no Kodai Bunka* 18 (1978), 108-117.

[17] Nishimoto, "Asuka ni Kita Seiiki no Toharajin," 6-7, 11.

[18] Ibid., 7-10.

[19] Abd Al-Husain Zarrinkūb, "The Arab Conquest of Iran and its Aftermath," *The Cambridge History of Iran,* Vol. 4, *The Period from the Arab Invasion to the Saljuqs,* edited by R. N. Frye (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), 1-53; E. V. Zeimal, "The Political History of Transoxiana," *The Cambridge History of Iran,* Vol. 3, *The Seleucid, Parthian and Sasanid Periods, Part 1,* edited by E. Yarshater (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), 232-262.

from Tokharistan (J. *Tokara no kuni* 吐火羅國) were driven ashore by a storm,[20] or the seventh month of 657CE (during Empress Saimei's reign), when a further two men and four women from Tokharistan (J. *Tokara no kuni* 覩貨邏國) drifted ashore.[21] Itō favours the date of 654CE[22] due to his theories regarding Dārāy's role and identity (discussed below), however, I believe that the compilers choice of the characters *Tokara* 覩貨邏 to describe Dārāy, the same characters used to describe the Tocharoi who arrived in 657CE, rather than the characters *Tokara* 吐火羅, used to describe those who arrived in 654CE, indicate that Dārāy was amongst those who arrived in 657CE. It would, therefore, appear that Dārāy spent around three years in Japan from 657CE to 660CE. On the other hand, if one accepts Itō's dating Dārāy spent six years in Japan.

It is difficult to establish a great deal about Dārāy's life, role, and position. His inclusion in the *Nihon Shoki*, his noted desire to pay respects at the court, the fact that several tens of men left with him, and the fact that he is named in the text, indicate that he was of high social status. The text furthermore notes that he had a wife or wives. Itō argues that Dārāy was of royal blood, which due to the figure's evident high rank is a possibility, however, Itō's argument is unconvincing on several levels. Itō suggests that the name Dārāy, which he believes was derived from the name of legendary king, *Dārayaw*, betrays the figure's royal blood.[23] Amongst the first group of Tocharoi to arrive in Japan was a person described as *Shě wèi nǚ* 舍衛女 (J. *Shaei no onna*).[24] Traditionally this has been translated as a 'woman from S'râvastî.'[25] Itō, however, argues that due to the absence of the suffix *guó* 国 (J. *koku*, E. country) or *chéng* 城 (J. *jō*, E. castle), which are usually used when referring to Shravasti as a place, and because it would be odd to find Indians and Tocharoi travelling to Japan together, that this term should be understood as a title rather than a place name.[26] He then seeks to illustrate that the term is a Japanese transliteration of the Middle Persian, *šāh duxtag*, meaning "king's daughter."[27] Following this he argues that Dārāy was *Shě wèi nǚ*'s father, due to his theory that Dārāy was of royal blood, and his identification of *Shě wèi nǚ* as the "king's daughter."[28] Itō argues that sometime after Dārāy became her husband, since *Shě wèi nǚ*'s marriage to a Tocharoi is noted in the *Nihon Shoki*,[29] and such marriages (between father and daughter) were not contemporaneously uncommon.[30] He then identifies a further figure, *Duò luó nǚ* 堕羅女 (J. *Dara no onna*), whose name Itō translates as *Dārāy-duxtag* or "Dārāy's daughter," as the couple's daughter.[31] Affirming Dārāy's royal lineage, Itō transforms Dārāy into an important figure who assisted Peroz III during his military campaigns.[32]

---

[20] The original text states:

夏四月。吐火羅國男二人女二人。舍衛女一人。被風流來于日向。(*Nihon Shoki*, Page 1538, Paragraph 1).

[21] The original text states:

三年秋七月丁亥朔己丑。覩貨邏國男二人女四人。漂泊于筑紫。言。臣等初漂泊于海見嶋。乃以驛召。(*Nihon Shoki*, Page 1547, Paragraph 5).

[22] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 60.
[23] Ibid.
[24] *Nihon Shoki*, Page 1538, Paragraph 1.
[25] Aston, trans., *Nihongi*, 246.
[26] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 56-57.
[27] Ibid., 57.
[28] Ibid., 57, 60.
[29] The original text states:

丁亥。吐火羅人。共妻舍衛婦人來。(*Nihon Shoki*, Page 1562, Paragraph 4).

[30] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 60.
[31] Ibid., 60-61.
[32] Ibid., 59.

I am not convinced by these arguments. Itō does not reference necessary textual or extra-textual evidence to support his claims and there is no reason to assume that *Shě wèi nǚ* is a title. To the contrary within the context of the sentence, which lists people arriving in Japan according to their place of origin and their gender, it is more reasonable to assume that *Shě wèi* 舍衛 refers to a place, such as Shravasti, as has been theorized by other scholars.[33] Indeed, the fact that the term *Shě wèi nǚ* is followed by the counter *Yīrén* 一人 (J. *Hitori*) meaning "one person" indicates that *Shě wèi* is more likely a place of origin than a name. If *Shě wèi nǚ* were a name, the text would likely follow standardized patterns by which a figure's nationality precedes their name, as was the case with the passage concerning Dārāy explored above. Accepting Itō's argument that the term is a name would mean that information indicating *Shě wèi nǚ*'s nationality and gender are absent from the text, which is unusual. In addition, all other figures referred to in the passage in question are identified by their nationality and gender, whereas their names are not provided.[34] The concept that it is odd for a place name to lack qualifying suffixes such as the term "country" is also problematic. Not only does it nullify Itō's argument that Dārāy is from Kunduz or India and Persia (terms which lack the relevant suffixes in the passage), but other geographic areas such as the country of Baekje (J. *Kudara* or *Hyakusai* 百濟) are frequently referred to without such qualifiers throughout the *Nihon Shoki*. Neither is it a rarity to find people from multiple countries on the same voyage; a passage explored later in this research note records a Persian arriving alongside Chinese and Japanese.[35] Imoto argues that *Shě wèi* may be the name of a city in the Tokharistan region, suggesting that it may refer to Kashgar or Saveh.[36] However, accepting this notion would beg the question as to why four of the party are referred to as Tocharoi, whereas a further figure is identified as coming from a specific city within the same region. Given the context of the sentence and the usage of the term *Shě wèi* to refer to Shravasti in other texts, it doesn't appear that there are issues with affirming that the term *Shě wèi nǚ* means "a woman from Shravasti." One potential problem arises when it is noted that Xuánzàng 玄奘 in his *Dà táng xīyù jì* 大唐西域記 (646CE) records that the city had been deserted, although there were still some people.[37] Therefore, there is a potentiality, as Imoto suggests, that *Shě wèi* may refer to a separate location. Nevertheless, Itō's use of *Shě wèi nǚ* as evidence for Dārāy's royal lineage cannot be maintained. Whilst the historical record notes that this woman married one of the Tocharoi, it is unclear whether this was Dārāy since the text does not provide her husband's name. By the same logic that I used to suggest that Dārāy came to Japan in 657CE, it would appear that the woman from Shravasti was married to someone from the first group of Tocharoi visitors since her husband is described using the characters *Tokara* 吐火羅 rather than Dārāy's *Tokara* 覩貨邏 . Nevertheless, Imoto and Nishimoto both concur with Itō in suggesting that the woman from Shravasti and Dārāy were a married couple,[38] although neither provide further evidence to make this case. As for Dārāy's potential daughter, *Duò luó nǚ*, other scholars have argued that the term *Duò luó* 墮羅 is an alternative transliteration of the term *Tokara*[39] as is noted in the *Nihon Shoki*'s annotations.[40] Since the *Dà táng xīyù jì* refers to a country by the name of *Duò luó bō dǐ guó* 墮羅鉢底國 (J. *Darahatsutei no kuni*, E. Dvaravati),[41] which shares the characters *Duò luó* 墮羅 , it might be possible to argue that the term refers to this country instead. However, to accept such an argument

[33] Notably by: Imoto Eiichi, "Perushiajin no raichō to urabonkai," *Daihōron* 大法論 45, No. 9 (1978), 48. Itō argues that *Shě wèi* cannot be a place name, since the place names from whence other members of the group hailed are not mentioned, however, this is simply not factual since other members are referred to as hailing from Tokharistan. Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 57.

[34] *Nihon Shoki*, Page 1538, Paragraph 1.

[35] Kuroita Katsumi and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen* (Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan, 1979), 141.

[36] Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*, 24.

[37] Xuánzàng, *Dà táng xīyù jì*, Volume 6, Paragraph 6.

[38] Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*, 24; Nishimoto, "Asuka ni Kita Seiiki no Toharajin," 3.

[39] Nishimoto, "Asuka ni Kita Seiiki no Toharajin," 3.

[40] *Nihon Shoki*, Page 1548, Paragraph 1.

[41] Xuánzàng, *Dà táng xīyù jì*, Volume 10, Paragraph 30.

we would need to prove that the *Nihon Shoki*'s definition of the term is incorrect, that the *Nihon Shoki*'s compilers had poor geographical knowledge, or that the term *Tokara* refers to Dvaravati. Again, the context of the sentence, which lists people according to their place of origin and gender or title, suggests that rather than a name the term *Duò luó nǚ* refers to a "woman from Tokharistan."[42] Moreover, there is nothing in the sentence which suggests that this figure is the daughter of the woman from Shravasti or Dārāy. In summation, there are numerous issues with accepting Itō's argument regarding the personage of Dārāy. Many of his theories rely on textual and extra-textual assumptions which lack sufficient evidence to establish a burden of proof.

In lieu of the accuracy of Itō's argument, there is little we can say about Dārāy beyond that which is recorded in the text. He was a Tocharoi from Kunduz in Persia or a Tocharoi Persian from Samarkand, he was married, and was of sufficient social status to be recorded in Japan's imperial histories and to have a retinue of men who left the country with him. We may affirm, as Nishimoto does, that Dārāy was somewhat of a leader amongst the Tocharoi in Japan due to the presence of this retinue.[43] He left Japan for his home country travelling via Táng 唐 dynasty (618-907CE) China[44] in 660CE leaving his wife (or wives) there, after having likely arrived in 657CE. As for religious affiliation, which Itō argues was indisputably Zoroastrian,[45] nothing can be conclusively established. Whilst Imoto thinks that there is a potentiality that Dārāy was a Zoroastrian,[46] he also suggests that Dārāy may have been a Buddhist. He notes that if the term *Kenzu* 乾豆 refers to India it may indicate a Buddhist religious identity, which causes him to translate the term Kenzuhashi Dachia as "Dārāy, a Buddhist from Persia."[47] In itself this argument is unconvincing due to the issues associated with linking *Kenzu* to India, however, Imoto also notes that the *Nihon Shoki* records the Tocharoi participating in the festival of *Urabon* 盂蘭盆[48] shortly after the arrival of the second group (of which I have argued Dārāy was a member) in 657CE.[49] Moreover, Dārāy's petition to leave Japan in 660CE was presented the day following *Urabon* on the 16th of the 7th month.[50] Whilst this is far from conclusive as a plethora of religions flourished in contemporaneous Persia and Tokharistan, as noted by Imoto it may be the case that Dārāy's connection to *Urabon* is far from accidental.[51]

We do not hear of Dārāy again in the *Nihon Shoki*; there is no record of what happened to him after he left Japan in 660CE or if he ever returned. Itō creates an imaginative scenario linking Dārāy to the escape and subsequent campaigns of Peroz III following his father, Yazdgerd III's death in 651CE. He writes:

For the then about 15-year-old prince Pērōz, to cope with the difficulty was too hard and exacting without

---

[42] The original text states:

四年春正月丙午朔。大學寮諸學生。陰陽寮。外薬寮。及舍衛女。堕羅女。百濟王善光。新羅仕丁等。捧薬及珍異等物進。(*Nihon Shoki*, Page 1713, Paragraph 3).

[43] Nishimoto, "Asuka ni Kita Seiiki no Toharajin," 3.
[44] Ibid.
[45] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 61.
[46] Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*, 35.
[47] Ibid., 26.
[48] The original text states:

辛丑。作須彌山像。於飛鳥寺西。且設盂蘭盆會。暮饗覩貨邏人。[或本云。堕羅人。] (*Nihon Shoki*, Page 1548, Paragraph 1).

[49] Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*, 26.
[50] Ibid.
[51] Ibid.

assistance from someone else with whom I should like to identify 達阿 (Dārāy). The campaign must have set in while Yazdgerd's stay still in Khorāsān, but having heard the death of the king of kings, Dārāy escaped from the army-and-troop with his lord, Pērōz, and other followers among whom was found most probably his own daughter (舍衛女) to seek refuge in *Zhǎng-ān*.[52]

This story, used by Itō to support his theory that Dārāy was a royal, cannot be substantiated and seems unlikely given the problems of dating that would arise if it were accepted. Pērōz III did not arrive in Cháng'ān 長安 until the early 670s.[53] Although Dārāy had returned to the mainland meaning that it was possible that he travelled to Cháng'ān, *Shě wèi nǚ* remained in Japan into the 670s with a reference to her personage appearing in the first month of 676CE.[54]

Despite our limited knowledge of Dārāy, he is an important figure for understanding early Japanese, foreign relations. Although the testimony of *Nihon Shoki* indicates that a whole community of Tocharoi were present in Japan, it is only Dārāy, a probably high-ranking Tocharoi from Kunduz in Persia, who is demarked by name. Ultimately, little can be known of the potential influence that Dārāy, as an individual, had on contemporaneous Japan, although we may concur with scholars such as Itō and Imoto, that the Tocharoi may have influenced some Japanese religious and secular practices.[55] The interesting historical episode of which Dārāy was a part elucidates some of the ways in which early Japanese foreign relations were conducted and the sort of interactions which occurred between foreigners and Japanese at court. Nevertheless, following the collapse of the Sasanian Empire in the 650s, Tocharoi-Japanese relations appear to have come to an end with no Tocharoi receiving mention following the final appearance of *Duò luó nǚ* in 676CE. It is likely that the Tocharoi community eventually became amalgamated with the Japanese through intermarriage. While scholarship on the figure of Dārāy has often proven problematic, I believe that the conclusions made here may provide new starting points from which the figure and related topics can be researched.

The Figure of Ri Mitsuei

A second Persian is recorded as coming to Japan in the *Shoku Nihongi.* The text notes that in the eighth month of 736CE, Nakatomi no Nashiro 中臣名代 (?-745CE), the returning vice-envoy to the Táng, led a group of three Chinese and one Persian to have an audience with Emperor Shōmu (J. Shōmu Tennō 聖武天皇 , 701-756CE).[56] In the 11th month, Nakatomi no Nashiro and others were given promotions in rank in an audience with the Emperor.[57] During the same meeting, the Chinese, Kōho Tōchō 皇甫東朝 (C. Huángfǔ Dōngcháo), and

---

[52] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 59.

[53] Matteo Compareti, "Chinese-Iranian Relations xv. The Last Sasanians in China," *Encyclopedia Iranica,* 2009.

[54] The original text states:

> 四年春正月丙午朔。大學寮諸學生。陰陽寮。外薬寮。及舍衛女。堕羅女。百濟王善光。新羅仕丁等。捧薬及珍異等物進。(*Nihon Shoki*, Page 1713, Paragraph 3).

[55] Imoto, *Kodai no Nihon to Iran*; Itō, *Perushia bunka torai kō*.

[56] The original text states:

> 八月庚午。入唐副使從五位上中臣朝臣名代等率唐人三人波斯人一人拜朝。(Kuroita and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen*, 141).

[57] Kuroita and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen*, 141.

Persian, Rimitsuei 李密翳 (C. Lǐ Mìyì), were presented with ranks according to their social status.[58] Scholars have argued that the Persian identified as Rimitsuei and the Persian referred to as having had an audience with the Emperor several months earlier were the same person.[59] This seems evident given the presence of Nakatomi no Nashiro in both passages and the context of the passages. As such, it is also evident that Rimitsuei had accompanied Nakatomi no Nashiro (alongside the three Chinese) to Japan during the latter's return from his post as vice-envoy.[60]

Various theories have emerged regarding Rimitsuei's personage, and popular amongst these are the concept that he was either a doctor or a Syriac Christian missionary, or both. I have been critical of these positions elsewhere.[61] The theory that Rimitsuei was a Syriac Christian missionary first appeared in the work of Peter Yoshirō Saeki. In his *Keikyō hibun kenkyū* 景教碑文研究 , he argues that because the term *Bōsī* 波斯 acted as a prefix which linked terms such *sì* 寺 (temple) or *jiào* 教 (teaching) to Syriac Christianity in contemporaneous Chinese, that the term *Bōsīrén* 波斯人 (E. Persian person) should be understood to identify Rimitsuei as an adherent of Syriac Christianity.[62] Such usage of the word *Bōsīrén* is not present in other contemporaneous texts where it exclusively means "Persian person" rather than "Syriac Christian."[63] Moreover, it would be unusual given the context of the sentence, which describes visitors to the court with reference to both their nationality and their name, to find one of these figures demarked by their religious identity rather than their nationality. In his *The Nestorian Monument in China,* Saeki provides different evidence to identify Rimitsuei as a Syriac Christian. He suggests that the common Chinese name, Lǐ Mì 李密 , used to refer to Rimitsuei in the *Shoku Nihongi* derived from a scribal error.[64] Rather, Saeki believes that the name should have been rendered as Mìlǐ 密李 , which would correspond to the Persian name Mīlis or Mīles.[65] If Rimitsuei was in fact a Persian named Mīlis, Saeki suggests that he may have been the priest Mīlis, father of Yazdbōzīd/Yazbōzēd, the man who erected the Nestorian Stele (C. *Dàqín Jǐngjiào liúxíng Zhōngguó bēi* 大秦景教流行中國碑).[66] This is problematic since no link can be established between Mīlis and Rimitsuei other than a potential similarity of names and the fact that they had

---

[58] The original text states:

十一月戊寅。天皇臨朝。詔授入唐副使從五位上中臣朝臣名代從四位下。故判官正六位上田口朝臣養年富。紀朝臣馬主並贈從五位下。准判官從七位下大伴宿祢首名。唐人皇甫東朝。波斯人李密翳苛授位有差。(Kuroita Katsumi and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen*, 141).

[59] Yano Kenichi, "Kentōshi to rainichi 'Tōjin' Kōho Tōchō o chūshin toshite," *Senshū Daigaku Ajia Sekai Kenkyū Senta Nenbō* 6 (2012), 133; Mori Kimiaki, "Ri Mitsuei," in *Asahi Nihon rekishi jinbutsu jiten*, edited by Asahi Shinbunsha (Tokyo: Asahi Shinbunsha, 1994), 1802.

[60] Mori Kimiaki, "Nakatomi no Nashiro," in *Asahi Nihon rekishi jinbutsu jiten*, edited by Asahi Shinbunsha (Tokyo: Asahi Shinbunsha, 1994), 1199; Mori, "Ri Mitsuei," 1802.

[61] James Harry Morris, "The Case for Christianity in Japan prior to the 16th Century," *Oriens Christianus* 98 (2015), 109-137; James Harry Morris, "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," *Journal of the Royal Asiatic Society* 27, No. 2 (2017), 313-323; James Harry Morris, "The Legacy of Peter Yoshirō Saeki: Evidence of Christianity in Japan before the arrival of Europeans," *The Journal of Academic Perspectives* 2016, No. 2 (2016), 1-22; James Harry Morris, "Rereading the evidence of the earliest Christian communities in East Asia during and prior to the *Táng* Period," *Missiology: An International Review* 45, No. 3 (2017), 252-264.

[62] Saeki Yoshirō, *Keikyō hibun kenkyū* (Tokyo: Tairō Shoin, 1911), 16.

[63] Morris, "The Legacy of Peter Yoshirō Saeki: Evidence of Christianity in Japan before the arrival of Europeans," 7-8.

[64] Peter Yoshirō Saeki, *The Nestorian Monument in China* (London, Society for Promoting Christian Knowledge, 1916), 62.

[65] Ibid.

[66] Ibid.

both been present in the Táng capital of Cháng'ān.[67] Moreover, as noted by Max Deeg, it would be unusual to render Mīlis (Mîlês) as 密李 in Middle Chinese.[68] If Rimitsuei was a Syriac Christian monk or priest, we would also expect to find a title such as *sō* 僧 (C. *Sēng*) demarking him as such,[69] as is the case when Syriac Christian monks and priests are referred to in contemporaneous Chinese documents.[70]

Elsewhere, I have argued that since Zoroastrianism, Judaism, Manichaeism, Buddhism, and Christianity were all present in contemporaneous Persia, Rimitsuei's religious identity will remain a mystery.[71] Whilst I maintain that Rimitsuei's religious identity cannot be established with certainty, Ishihara Tsutomu provides important evidence for estimating Rimitsuei's potential religious affiliation. He argues that Manichaeism had been outlawed in Táng China since 732CE meaning that it would have been nearly impossible for Nakatomi no Nashiro to receive permission from the Chinese authorities to bring a Manichaean to Japan.[72] This appears to be a misunderstanding on the part of Ishihara, since other sources note that the laws to which he refers permitted the practice of foreign religions, but banned the preaching of those religions to the Chinese.[73] Ishihara also notes that no references to Rimitsuei appear in contemporaneous Buddhist texts unlike contemporaneous foreign, Buddhist visitors.[74] Indeed, since Rimitsuei is not mentioned alongside Buddhist visitors, Dōsen 道璿 (702-760CE) and Baramon 婆羅門 (alternatively known as *Bodaisenna* 菩提僊那 704-760CE), two other members of Nakatomi no Nashiro's embassy[75] who graced the court without the other embassy members shortly after Nakatomi no Nashiro first introduced his whole party to the Emperor,[76] it seems unlikely that he was a Buddhist priest. Finally, Ishihara notes that Zoroastrians rarely made attempts to spread their religion to the Táng or beyond.[77] Although these pieces of evidence are potentially useful, they rely on the assumption that Rimitsuei visited Japan for primarily religious purposes, something which has not been proven. In the case that Rimitsuei did visit Japan for religious purposes, I believe that Ishihara's thesis may be used as an interesting starting point to explore Rimitsuei's religious affiliation, however, in the case that Rimitsuei visited for secular purposes, Zoroastrian, Manichaean, Buddhist, or Christian religious affiliation all remain equally plausible. In summation, there is insufficient evidence to suggest that Rimitsuei was a Syriac Christian missionary and insufficient evidence to identify his religious affiliation.

Saeki also recorded the possibility that Rimitsuei was a doctor, due to an alternative version of the final character of his name.[78] The alternative version of Rimitsuei's name, Rimitsui 李密醫 (C. Lǐ Mìyī), contains the

---

[67] Morris, "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," 317.
[68] Max Deeg, *Die Strahlende Lehre: Die Stele von Xi'an* (Vienna: LIT Verlag, 2018), p. 20, no. 39.
[69] Morris, "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," 318.
[70] See for instance descriptions of Syriac Christian priest, Adam (Jǐngjìng 景淨) as *Dàqín sì bōsī sēng Jǐngjìng* 大秦寺波斯僧景淨 (E. The Persian monk Adam of the Syriac Temple) in contemporaneous Chinese documents: Zhēnyuán xīndìng shìjiào mùlù juǎn dì shíqī, *CBETA Hànwén dàzàng jīng CBETA*, T55, no. 2156, 756; Dàtáng zhēnyuán xù kāiyuán shìjiào lù juǎn shàng, *CBETA Hànwén dàzàng jīng CBETA*, T55, no. 2157, 892.
[71] Morris, "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," 318-319.
[72] Ishihara Tsutomu, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," *Higashi Ajia no Kodai Bunka* 18 (1978), 32.
[73] Samuel N. C. Lieu, "Manicheism vi. In China," *Encyclopaedia Iranica*, 2002.
[74] Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 32.
[75] Mori, "Nakatomi no Nashiro," 1199.
[76] Kuroita and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen*, 141.
[77] Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 32.
[78] Saeki, *Keikyō hibun kenkyū*, 15-16.

character, *i* 醫 , which refers to medical practitioners.[79] The other spelling for Rimitsuei's name used thus far in this research note in which the final character *ei* 翳 is present lacks any such connotation.[80] This version of the name appears to be more popular in modern reprints of the text,[81] and according to Saeki Ariyoshi and Itō was original to the text.[82] In my own exploration of older copies of the *Shoku Nihongi,* I have found that the name Rimitsui and the use of characters which suggest a role in medicine to be more prevalent.[83] P. Y. Saeki argues that given the presence of this alternative final character that Rimitsuei's name should be translated as Mīlis, the doctor.[84] On the other hand, Matsuki Akitomo, who accepts the thesis that Rimitsuei was a doctor, but rejects the concept that his name is incorrectly rendered, argues that the man should be thought of as Rimitsu, the doctor.[85] Indeed, the fact that Emperor Shōmu was engaged in reforming Japanese medical practices[86] perhaps lends to the case that Rimitsuei was a medical practitioner. Scholars such as Arthur Lloyd, Junjirō Takakusu, and Joseph Needham have all argued that he was a physician active within these reforms.[87] Identifying Rimitsuei as a doctor is, however, problematic. Itō notes that if the character *i* 醫 indicates that Rimitsuei was a doctor, grammatically it should precede his name so as to read *i Rimitsu* (C. Yī Lǐ Mì).[88] Additionally, Rinoie Masafumi illustrates that there are no references to a doctor named Rimitsu in contemporaneous documents from Cháng'ān.[89] Due to the paucity of textual evidence from Cháng'ān and on a grammatical basis, it is therefore problematic to assert that Rimitsuei was a doctor. The suggestion that Rimitsuei was a doctor is often used to strengthen the argument that he was a missionary due to a perceived link between medicine and Syriac Christianity,[90] however, although Syriac Christians did practice medicine it would be misleading to suggest that they monopolized the trade.[91]

Elsewhere I wrote that:

> ...we should also conclude that Li-mi-i [Rimitsuei] visited in a secular rather than religious capacity as a physician. Such a conclusion...[suggests] that Li-mi-i had a purpose in one of Emperor Shōmu's projects, most likely his medical reforms.[92]

---

[79] Ibid.

[80] Morris, "The Legacy of Peter Yoshirō Saeki: Evidence of Christianity in Japan before the arrival of Europeans," 8-10.

[81] Ibid., 9.

[82] Saeki Ariyoshi, *Zōho Rikkokushi* (Tokyo: Meichō Fukyūkai, 1988), 259; Itō "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 63 n. 25.

[83] Morris, "The Legacy of Peter Yoshirō Saeki: Evidence of Christianity in Japan before the arrival of Europeans," 9-10.

[84] Saeki, *The Nestorian Monument in China*, 62.

[85] Matsuki Akimoto, "Kinmeichō ni Rainichi shita Kudara no ishi Ōyuryōda ni tsuite," *Nihon Ishi Gaku Zasshi* 29, No. 4 (1983), 448.

[86] William Wayne Farris, *Population, Disease, and Land in Early Japan, 645-900* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1995), 50-73.

[87] Arthur Lloyd, *Shinran and his work: studies in Shinshu theology* (Tokyo: Kyo Bun Kwan, 1910, 171-172; Arthur Lloyd, *The Creed of Half Japan: Historical Sketches of Japanese Buddhism* (London: John Murray, 1911), 222-223; Junjirō Takakusu, "Le Voyage de Kanshin en Orient (742-754)," *Bulletin de l'École français d'Extrême-Orient* 28 (1928), 7-8; Joseph Needham, *Science and Civilization in China,* Volume 1, *Introductory Orientations* (Cambridge: Cambridge University Press, 1954), 188.

[88] Itō, *Perushia bunka torai kō*, 28.

[89] Rinoie Masafumi, *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi* (Tōkyō: Tōhō Shoten, 1986), 65-74.

[90] Saeki, *Keikyō hibun kenkyū*, 15-16; Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 31-32.

[91] Morris, "The Legacy of Peter Yoshirō Saeki: Evidence of Christianity in Japan before the arrival of Europeans," 9.

[92] Morris, "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," 319.

Following further consideration, I do not believe that it is possible to affirm that Rimitsuei was a physician since this is grammatically and terminologically problematic, and lacks support in Chinese sources, although it remains a possibility. Nevertheless, I abide by my conclusion that he came to Japan for primarily secular purposes. Kōho Tōchō, the man with whom Rimitsuei received rank from the Emperor, is featured extensively in the *Shoku Nihongi*.[93] Kōho was involved in the office of court music and later became a Vice-Governor.[94] Yano Kenichi argues that he was brought to Japan to perform at the opening ceremony of the Nara *Daibutsu* 奈良大仏 and in order that his expertise might be used in the country.[95] Since Kōho's name is listed prior to Rimitsuei's, Rinoie argues that it is possible to conjecture that Rimitsuei was the younger of the pair (below the age of 18 or 19) or of lower rank.[96] In any case, while the following is potentially the product of crude reasoning, I would suggest that the *Shoku Nihongi* illustrates that the foreigners who returned to Japan with Nakatomi no Nashiro's were categorized by their roles as either secular or religious. As noted, after the whole of Nakatomi no Nashiro's group had an audience with the Emperor, Dōsen and Baramon, who had explicitly religious roles, met with the Emperor alone.[97] Following this Kōho, whose role was primarily secular in nature, and Rimitsuei, met with the Emperor without Dōsen and Baramon.[98] This suggests that the foreigners were categorized by their roles, with those involved in religious professions meeting the Emperor at one point, and those involved in secular positions at another. This conclusion is further strengthened by the fact that there are very few instances of religious figures receiving rank from the Emperor in the *Shoku Nihongi*, and under Emperor Shōmu no monks or priests received imperially awarded rank.[99] Since Rimitsuei met the Emperor separately from Dōsen and Baramon, and since he received a rank from the Emperor, it would appear that he came to Japan in a secular capacity. Some scholars have suggested that Rimitsuei may have been involved in the field of music due to his featuring alongside Kōho in the text,[100] however, as with his potential role as a doctor this remains unclear in the source material. Indeed, Rinoie argues that Rimitsuei could not have been a musician since he does not appear alongside Kōho and his family at later points in the text.[101] Despite all this, since Dōsen, Baramon, and Kōho all had a role (religious, scholarly, musical or political) to play in Tenpyō 天平 era (729-749CE) and post-Tenpyō era Japan,[102] it is highly likely that Rimitsuei was also brought to Japan due to some service that he was able to render to Shōmu's government.

Whilst Yano notes that the year of Rimitsuei's birth, and details regarding his life once in Japan are completely untraceable,[103] I believe that it may be possible to make some estimations regarding Rimitsuei's personage. From the text, we know that he is a Persian who received rank from the Emperor according to his social status,[104] and (as discussed above) it seems likely that he came to Japan in a secular role. Furthermore, his receiving of a low rank[105] and his mention in the *Shoku Nihongi* suggest that he held a fairly high social status. Like other scholars, I believe that Rimitsuei's name may point to details about his personage. Itō suggests

---

[93] Yano, "Kentōshi to rainichi 'Tōjin' Kōho Tōchō o chūshin toshite," 129-141.
[94] Ibid. 129-141; Morris, "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," 314-315.
[95] Yano, "Kentōshi to rainichi 'Tōjin' Kōho Tōchō o chūshin toshite," 129-141.
[96] Rinoie, *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi*, 105.
[97] Kuroita and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen*, 141.
[98] Ibid.
[99] Ibid., 97-202.
[100] Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 34-25; Mori, "Ri Mitsuei," 1802.
[101] Rinoie, *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi*, 103.
[102] Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 34-35.
[103] Yano, "Kentōshi to rainichi 'Tōjin' Kōho Tōchō o chūshin toshite," 131.
[104] Kuroita and Kokushi Daikei Henshūkai, eds., *Shoku Nihongi: Zenpen*, 141.
[105] See discussion in: Rinoie, *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi*, 104-106.

that the name Rimitsuei may be derived from the Persian name Rāmyār.[106] This seems unlikely since Lǐ 李 (J. *Ri*) was a Chinese surname popular amongst Persians contemporaneously.[107] Although Ishihara agrees that Lǐ is Rimitsuei's surname, he notes the difficulties associated with translating the character's first name into contemporaneous Chinese, and therefore argues that the name Mitsuei 密翳 was likely constructed in order to encapsulate some sort of meaning rather than according to phonetics.[108] As such, he favors the rendering Mitsui 密醫 , allowing him to suggest that Ri Mitsuei was a doctor.[109] Nevertheless, as discussed above there are issues with accepting not only the spelling "Mitsui," but also the concept that it betrays some sort of meaning related to medicine. On the other hand, Imoto notes that the name is likely derived from Persian.[110] He argues that since the character *Mitsu* 密 was used to transliterate foreign phonics such as *mir*, *mur*, or *mihr* into Chinese, the name Mitsuei was likely originally a Persian name such as *Mihr-ay*, *Mihr-ey* or *Mihr-ag*.[111] Building on the work of Philippe Gignoux, Deeg has also suggested the Middle Persian name *Rēv-Mihr* as a potential point of origin.[112] Rinoie, who explores Mitsuei's name at length proposes *mi-wei* or *miwai*.[113] Following Imoto and Deeg, I would also suggest that *Mihr-dād*, *Mihr-ād*, or perhaps even a derivative of the Sogdian *Miši* are potential origins for the name Mitsuei. Nevertheless, on the whole I believe that Imoto's suggestions of *Mihr-ay* and *Mihr-ey* resemble the Japanese, Mitsuei, more closely than *Mihr-ag*, *Mihr-dād* or *Mihr-ād*. The concept that Rimitsuei had a Sogdian name is unlikely, although artefacts containing both Sogdian and Middle Persian inscriptions have been discovered in the Tenpyō era capital, Nara.[114] These names are all theophoric in nature, consisting of the theonym *Mihr* (E. Mithra)[115] and some additional phonic(s). Israel Campos argues that theophoric names have a religious meaning which represent either:

> an act of religious devotion by the individual's progenitors or...a personal option of the person, who chooses this name in a certain moment of his adult life.[116]

Since names containing the theonym, *Mihr*, were popular amongst Zoroastrians and Manichaeans,[117] it is reasonable to assume that Ri Mitsuei's parents were Zoroastrian or Manichaean. Unless, Ri Mitsuei converted to another religion he too was likely Zoroastrian or Manichaean. Itō, who believes that other Tocharai and Persian visitors to Japan were Zoroastrian, suggests that because Ri Mitsuei is not mentioned further in the *Shoku Nihongi*, he must have been a Manichaean who fell victim to the slander of his Zoroastrian countrymen.[118] Although this is a possibility, there appears no way at present to determine which of the two religions he

---

[106] Itō, *Perushia bunka torai kō*, 28.
[107] Matsuki, "Kinmeichō ni Rainichi shita Kudara no ishi Ōyuryōda ni tsuite," 449; Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 31.
[108] Ishihara, "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō," 31.
[109] Ibid.
[110] Imoto Eiichi, *Kyōkai Saishi kūkan* (Tokyo: Hirakawa Shuppansha, 1985), 170.
[111] Imoto Eiichi, "Mihrak (弥勒) and other Iranian words," *Orient* 18 (1982), 131.
[112] Deeg, *Die Strahlende Lehre: Die Stele von Xi'an,* p. 20, n. 39. See also: Philippe Gignoux, *Iranisches Personennamenbuch (hrsg.v. M. Mayrhofer u. R. Schmitt), Band II: Mitteliranische Personennamen, Faszikel 2: Noms propres Sassanides en moyen-Perse épigraphique* (Vienna: Verlag der Östereichischen Akademie der Wissenschaften, 1986), p. 154, Nr. 812.
[113] Rinoie, *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi*, 75-97.
[114] Morris, "The Case for Christianity in Japan prior to the 16th Century," 125-126.
[115] Rüdiger Schmitt, "Personal Names, Iranian V. Sasanian Period," *Encyclopedia Iranica*, 2005.
[116] Campos Israel, "Theophoric names as a matter of faith," 2009.
[117] Philippa Adrych, Robert Bracey, Dominic Dalglish, Stefanie Lenk and Rachel Wood, *Images of Mithra* (Oxford: Oxford University Press, 2017), 94-95; Samuel N. C. Lieu, *Manichaeism in Central Asia and China* (Leiden: Brill, 1998), 194; Michael Allen Williams, *The Immovable Race: A Gnostic Designation and the Theme of Stability in Late Antiquity* (Leiden: E. J. Brill, 1985), 68.
[118] Itō, "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," 63 n. 25.

belonged to.

Since Ri Mitsuei's surname, Lǐ 李, was popular amongst Persians in Táng China it is difficult to ascertain a great deal from his surname. There were some 4,000 foreign families residing in Cháng'ān by 787CE.[119] Ye Yiliang notes that most Persians in Táng China were merchants although some were employed as administrators or in the military.[120] Statistically the likeliness that Ri Mitsuei was a merchant is therefore high, and this may explain why there are no further references to him in Japanese sources. Nevertheless, the *Shoku Nihongi* rarely mentions merchants (J. *Shōnin* 商人), and rarely refers to them by name. Due to his status, which I believe is illustrated by the fact that he is named in the document, he may have been related to other high ranking, Persian, Lǐ mentioned in contemporaneous Chinese texts. Nevertheless, there is no possible way to link Ri Mitsuei to these other figures. Prominent Lǐ include descendants of the Sasanian line, such as Lǐ Sù 李素 who was a Christian cleric and a court astronomer,[121] as well as poets and medical experts such as Lǐ Xún 李珣.[122] The recent discovery of a *mokkan* 木簡 (E. a document recorded on a piece of wood) from 765CE,[123] may also shine some light on Ri Mitsuei. The *mokkan* notes the employment of a Persian called Hashi no Kiyomichi 破斯清通 at the Imperial university known as the *Daigaku ryō* 大学寮.[124] Whilst few have conducted research into the figure, Watanabe Akihiro of the Nara National Research Institute for Cultural Properties (J. *Nara Bunkazai Kenkyūsho* 奈良文化財研究所) has suggested that Hashi no Kiyomichi may have been Ri Mitsuei, a member of his family, or someone else with links to the figure.[125] If true, this suggests that Ri Mitsuei or his family integrated into Japan, and that they were involved in the field of education.

Like his predecessor Dārāy, Ri Mitsuei is a mysterious figure about which little is known, but much is conjectured. Classical scholarship which has viewed Ri Mitsuei as a Syriac Christian missionary or doctor cannot be maintained. Since he visited the Emperor and received rank it is unlikely that he came to Japan in a religious role, rather it seems most likely that he was engaged in a secular field perhaps linked to education, or as Rinoie suggests that he possibly died shortly after having come to Japan.[126] Moreover, because his name is recorded in the *Shoku Nihongi* and because he received rank, he likely held high social status. Such is the lack of knowledge that surrounds the figure that even his original name is debated. This research note argued that his surname was likely the common Sino-Persian, Lǐ, whereas his first name was likely derived from a Mithraic

---

[119] Ye Yiliang, "Introductory Essay: Outline of the Political Relations between Iran and China," *Aspects of the Maritime Silk Road: From the Persian Gulf to the East China Sea*, edited by Ralph Kauz (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2010), 4.

[120] Ibid.

[121] Chengyong Ge and Matteo Nicolini-Zani, "The Christian Faith of a Sogdian Family in Chang'an during the Tang Dynasty," *Annali. Istituto Universitario Orientale di Napoli* f64 (2004), 181; Domenico Agostini and Sören Stark, "Zāwulistān, Kāwulistan and the Land Bosi 波斯 – on the question of a Sasanian Court-in-Exile in the Southern Hindukush," *Studia Iranica* 45 (2016), 25.

[122] Zheng Jinsheng, Nalini Kirk, Paul D. Buell and Paul U. Unschuld, eds., *Ben Cao Gang Mu Dictionary,* Volume 3, *Persons and Literary Sources* (Oakland, CA: University of California Press, 2018), 274.

[123] Miyata Osamu, *Isuramu yuītsu no kibō no kuni Nihon* (Tokyo: PHP Kenkyūsho, 2017).

[124] The following is a rendering of the text. Backslashes mark the separation of sentences, whilst the character □ demarks illegible characters. It states:

> 大学寮解 申宿直官人事／員外大属破斯清通／天平神護元年□□□□. (Sankei West, "Heijōkyū ni Perushajin no yakunin ga hataraitera!! 765 nen mokkan ga shōmei "kokusaiteki chishiki de tōyō ka" to senmonka," 2016).

[125] Sankei West, "Heijōkyū ni Perushajin no yakunin ga hataraitera!! 765 nen mokkan ga shōmei "kokusaiteki chishiki de tōyō ka" to senmonka," 2016.

[126] Rinoie, *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi*, 107.

theonym, *Mihr*, with the addition of a further phonic. If this is the case, it is highly likely that Ri Mitsuei was a Zoroastrian or Manichaean. Ri Mitsuei's visit to Japan, like Dārāy's before him, helps to further demythologize the commonly held conception that Japan's early foreign relations were limited to relations with Táng China and the Three Kingdoms of Korea (Baekje, Silla, and Goguryeo). Although, the episode illustrates that relations with non-East Asian nations were often facilitated by Sino-Japanese interaction, it also suggests that the nationals of other foreign nations influenced and interacted with early Japan.

Conclusions

In this research note, I have sought to offer some thoughts on early Persian visitors to Japan, and some of the potential issues with hereto accepted scholarly opinion on the topic. Previous scholarly attempts to deal with the biographies of the figures explored in this research note have often been based on outdated scholarship or have lacked sufficient evidence to ratify. This research note has attempted to provide a new starting point from which to study these figures based on new analyses and past interpretations that seem to hold some credence. While we can ascertain that Persians visited Ancient Japan and can garner limited information on these people from contemporaneous sources, there is very little that we can concretely say about these figures beyond that which is recorded in the source texts. It appears that early Persian visitors to Japan mentioned in the *Nihon Shoki* and *Shoku Nihongi* were of a high social status. Dārāy sought permission to leave Japan with a retinue of men, leaving behind his wife and promising to return in the future. Ri Mitsuei arrived as part of a returning Japanese embassy to Táng China and received rank from the Emperor. However, neither figure receives mention in Japan's classical histories after their initial appearance. Our limited knowledge of these figures does not mean that their visits were insignificant. On the contrary, the episodes elucidate the ways in which foreigners met with Japan's Emperors and the ways in which Japan's foreign relations with non-East Asian nations occurred. Moreover, the episodes illustrate that Japan's early foreign relations were not limited to relations with the Táng and the Three Kingdoms of Korea as is commonly assumed. As a closing thought it must also be noted that the figures explored in this research note were not necessarily the earliest Persians to arrive in Japan. Some scholars such as Matsuki Akimoto have contended that Persians arrived even earlier,[127] although this doesn't seem to have gained widespread acceptance.

References

Adrych, Philippa, Robert Bracey, Dominic Dalglish, Stefanie Lenk & Rachel Wood. 2017. *Images of Mithra.* Oxford: Oxford University Press.

Agostini, Domenico & Sören Stark. 2016. "Zāwulistān, Kāwulistan and the Land Bosi 波斯 – on the question of a Sasanian Court-in-Exile in the Southern Hindukush," *Studia Iranica,* Vol. 45: 17-38.

Alikuzai, Hamid Wahed. 2013. *A Concise History of Afghanistan in 25 Volumes,* Vol. 14. Bloomington: Trafford Publishing.

Aston, William (trans.) 1972. *Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697, Two Volumes in One.* Tokyo: Tuttle Publishing.

Compareti, Matteo. 2009. "Chinese-Iranian Relations xv. The Last Sasanians in China," *Encyclopedia Iranica.* http://www.iranicaonline.org/articles/china-xv-the-last-sasanians-in-china (Accessed July 26, 2018).

Dàtáng zhēnyuán xù kāiyuán shìjiào lù juǎn shàng 大唐貞元續開元釋教錄卷上 . *CBETA Hànwén dàzàng jīng CBETA* 漢文大藏經 , T55, no 2157. http://tripitaka.cbeta.org/T55n2156_001 (Accessed May 8, 2018).

Deeg, Max. 2018. *Die Strahlende Lehre: Die Stele von Xi'an.* Vienna: LIT Verlag.

[127] Matsuki, "Kinmeichō ni Rainichi shita Kudara no ishi Ōyuryōda ni tsuite," 447-453.

Farris, William Wayne. 1995. *Population, Disease, and Land in Early Japan, 645-900.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Ge, Chengyong & Matteo Nicolini-Zani. 2004. "The Christian Faith of a Sogdian Family in Chang'an during the Tang Dynasty," *Annali. Istituto Universitario Orientale di Napoli,* Vol. 64: 181-196.

Gignoux, Philippe. 1986. *Iranisches Personennamenbuch (hrsg.v. M. Mayrhofer u. R. Schmitt), Band II: Mitteliranische Personennamen, Faszikel 2: Noms propres Sassanides en moyen-Perse épigraphique.* Vienna: Verlag der Östereichischen Akademie der Wissenschaften.

Ishihara, Tsutomu 石原力 . 1979. "Nara jidai ni rainichi shita Perushajin Rimitsuei (Ri Mitsu) kō" 奈良時代に来日したペルシャ人李密翳（李密）考 , *Higashi Ajia no Kodai Bunka* 東アジアの古代文化 , Vol. 18: 28-41.

Imoto, Eiichi 井本英一 . 1980. *Kodai no Nihon to Iran* 古代の日本とイラン . Tokyo: Gakuseisha.

Imoto, Eiichi 井本英一 . 1985. *Kyōkai Saishi kūkan* 境界・祭祀空間 . Tokyo: Hirakawa Shuppansha.

Imoto, Eiichi. 1982. "Mihrak (弥勒) and other Iranian words," *Orient,* Vol. 18: 129-132.

Imoto, Eiichi 井本英一 . 1978. "Perushiajin no raichō to urabonkai" ペルシア人の来朝と盂蘭盆会 , *Daihōron* 大法論 , Vol. 45, no. 9.

Israel, Campos. 2009. "Theophoric names as a matter of faith." https://www.researchgate.net/publication/259442447_Theophoric_names_as_a_matter_of_faith (Accessed May 8, 2018).

Itō, Gikyō 伊藤義教 . 1980. *Perushia bunka torai kō: Shirukorōdo kara Asuka e* ペルシア文化渡来考 : シルクロードから飛鳥へ . Tokyo: Iwanami Shoten.

Itō, Gikyō. 1979. "Zoroastrians' Arrival in Japan (Pahlavica I)," *Orient,* Vol. 15: 55-63.

Japanese Historical Text Initiative, University of California at Berkeley (ed.) *Nihon Shoki* 日本書紀 . https://jhti.berkeley.edu/cgi-bin/jhti/select.cgi?honname=1 (Accessed May 8, 2018).

Kuroita, Katsumi 黒板勝美 & Kokushi Daikei Henshūkai 國史大系編修会 (eds.) 1979. *Shoku Nihongi: Zenpen* 続日本紀 : 前編 . Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan.

Lieu, Samuel N. C. 1998. *Manichaeism in Central Asia and China*. Leiden: Brill.

Lieu, Samuel N. C. 2002. "Manicheism vi. In China," *Encyclopaedia Iranica*. http://www.iranicaonline.org/articles/manicheism-v-in-china-1 (Accessed May 8, 2018).

Lloyd, Arthur. 1910. *Shinran and his work: studies in Shinshu theology.* Tokyo: Kyo Bun Kwan.

Lloyd, Arthur. 1911. *The Creed of Half Japan: Historical Sketches of Japanese Buddhism.* London: John Murray.

Matsuki Akimoto 松木明知 . 1983. "Kinmeichō ni Rainichi shita Kudara no ishi Ōyuryōda ni tsuite" 欽明朝に来日した百済の医師王有陵陀について , *Nihon Ishi Gaku Zasshi* 日本醫史學雜誌 , Vol. 29, No. 4: 447-454.

Miyata, Osamu 宮田律 . 2017. *Isuramu yuītsu no kibō no kuni Nihon* イスラム唯一の希望の国 日本 . Tokyo: PHP Kenkyūsho.

Mori, Kimiaki 森公章 . 1994. "Nakatomi no Nashiro" 中臣名代 , in *Asahi Nihon rekishi jinbutsu jiten* 朝日日本歴史人物辞典 , edited by Asahi Shinbunsha 朝日新聞社 : 1199. Tokyo: Asahi Shinbunsha.

Mori, Kimiaki 森公章 . 1994. "Ri Mitsuei" 李密翳 , in *Asahi Nihon rekishi jinbutsu jiten* 朝日日本歴史人物辞典 , edited by Asahi Shinbunsha 朝日新聞社 : 1802. Tokyo: Asahi Shinbunsha.

Morris, James Harry. 2015. "The Case for Christianity in Japan prior to the 16th Century," *Oriens Christianus,* Vol. 98: 109-137.

Morris, James Harry. 2017. "The Figures of Kōho and Li-mi-i, and the origins of the case for a Christian missionary presence in Tenpyō Era Japan," *Journal of the Royal Asiatic Society,* Vol. 27, No. 2: 313-323.

Morris, James Harry. 2016. "The Legacy of Peter Yoshirō Saeki: Evidence of Christianity in Japan before the arrival of Europeans," *The Journal of Academic Perspectives,* Vol. 2016, No. 2: 1-22.

Morris, James Harry. 2017. "Rereading the evidence of the earliest Christian communities in East Asia during and prior to the *Táng* Period," *Missiology: An International Review,* Vol. 45, No. 3: 252-264.

Needham, Joseph. 1954. *Science and Civilization in China, Volume 1: Introductory Orientations.* Cambridge: Cambridge University Press.

Nishimoto, Masahiro 西本昌弘 . 2010. "Asuka ni kita seiiki no Toharajin" 飛鳥に来た西域の吐火羅人 , *Kansai Daigaku Tōzai Gakujutsu Kenkyūsho Kiyō* 関西大学東西学術研究所紀要 , Vol. 43: 1-23.

Okamoto, Kenichi 岡本健一 . 1978. "Nihon ni kita seiikijin" 日本に来た西域人 , *Higashi Ajia no Kodai Bunka* 東アジアの古代文化 , Vol. 17: 58-63.

Pulleyblank, Edwin G. 2011. "Chinese-Iranian Relations i. In Pre-Islamic Times," *Encyclopedia Iranica.* http://www.iranicaonline.org/articles/chinese-iranian-i (Accessed October 3, 2019).

Rinoie Masafumi, 李家正文 . 1986. *Tenpyō no kyaku, Perushiajin no naji: Ri Mitsei to Keikyōhi* 天平の客、ペルシア人の謎：李密翳と景教碑 . Tōkyō: Tōhō Shoten.

Saeki, Ariyoshi 佐伯有義 . 1988. *Zōho Rikkokushi* 増補六国史 . Tokyo: Meichō Fukyūkai.

Saeki, Yoshirō 佐伯好郎 . 1911. *Keikyō hibun kenkyū* 景教碑文研究 . Tokyo: Tairō Shoin.

Saeki, Peter Yoshirō. 1916. *The Nestorian Monument in China.* London: Society for Promoting Christian Knowledge.

Sankei West 産経 West. 2016. "Heijōkyū ni Perushajin no yakunin ga hataraitera!! 765 nen mokkan ga shōmei 'kokusaiteki chishiki de tōyō ka' to senmonka" 平城宮にペルシャ人の役人が働いていた !! 765年木簡が証明「国際的知識で登用か」と専門家 . https://www.sankei.com/west/news/161005/wst1610050057-n1.html (Accessed May 8, 2018).

Schmitt, Rüdiger. 2005. "Personal Names, Iranian V. Sasanian Period," *Encyclopedia Iranica.* http://www.iranicaonline.org/articles/personal-names-iranian-v-sasanian (Accessed May 8, 2018).

Takakusu, Junjirō. 1928. "Le Voyage de Kanshin en Orient (742-754)," *Bulletin de l' École français d' Extrême-Orient*, Vol. 28: 1-41.

Takatō Gorō 高遠五郎 . 1978. "Asuka to Seiiki" 飛鳥と西域 , *Higashi Ajia no Kodai Bunka* 東アジアの古代文化 , Vol. 18: 108-117.

Williams, Michael Allen. 1985. *The Immovable Race: A Gnostic Designation and the Theme of Stability in Late Antiquity.* Leiden: E. J. Brill.

Xuánzàng 玄奘 , *Dà táng xīyù jì* 大唐西域記 . https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=944265 (Accessed May 6, 2018).

Yano Kenichi 矢野建一 . 2012. "Kentōshi to rainichi 'Tōjin' Kōho Tōchō o chūshin toshite" 遣唐使と来日「唐人」皇甫東朝を中心として , *Senshū Daigaku Ajia Sekai Kenkyū Senta Nenbō* 専修大学東アジア世界史研究センター年報 , Vol. 6: 129-141.

Ye Yiliang. 2010. "Introductory Essay: Outline of the Political Relations between Iran and China," in *Aspects of the Maritime Silk Road: From the Persian Gulf to the East China Sea*, edited by Ralph Kauz: 3-6. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Zarrinkūb, Abd Al-Husain. 1975. "The Arab Conquest of Iran and its Aftermath," in *The Cambridge History of Iran, Volume 4: The Period from the Arab Invasion to the Saljuqs,* edited by R. N. Frye: 1-53. Cambridge: Cambridge University Press.

Zeimal, E. V. 1983. "The Political History of Transoxiana," in *The Cambridge History of Iran, Volume 3: The Seleucid, Parthian and Sasanid Periods, Part 1,* edited by E. Yarshater: 232-262. Cambridge: Cambridge University Press.

Zheng, Jinsheng, Nalini Kirk, Paul D. Buell & Paul U. Unschuld (eds.) 2018. *Ben Cao Gang Mu Dictionary, Volume 3: Persons and Literary Sources*. Oakland, CA: University of California Press.

Zhēnyuán xīndìng shìjiào mùlù juǎn dì shíqī 貞元新定釋教目錄卷第十七 . *CBETA Hànwén dàzàng jīng CBETA* 漢文大藏經 , T55, no. 2156. http://tripitaka.cbeta.org/T55n2157_017 (Accessed May 8, 2018).

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 121-136
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

研究ノート

自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇化によるタイプ分析

Type Analysis of Self-responsibility Discourse through Meta-pragmatic Categorization

青山　俊之（Toshiyuki AOYAMA）
筑波大学人文社会科学研究科　博士前期課程

本稿では、日本社会における「自己責任」を用いた言語コミュニケーションを自己責任ディスコースとし、その記号的特徴とイデオロギーを言語人類学的観点から考察する。「自己責任」は、抽象名詞かつ複合名詞であり、また「自己」と「責任」という本質的定義が困難な概念でもある。曖昧な自己責任ディスコースは、多様なコンテクストとともに日本社会で用いられてきた。日本社会という時空間上で反復的に転送される記号過程と日本語話者の自己観や規範性を分析するため、歴史社会学的な言説分析の手法も援用する。エスノグラフィと言説分析という二つの手法の類似点を引き合いに、これらの調査と分析から自己責任ディスコースが転送される過程には、日本的自我やその規範性が関係していることを論じる。事例をもとにメタ語用論的範疇化した８つの「タイプ」を分類して分析を行う。

Self-responsibility discourse is the notion of language communication discussing self-responsibility in Japan. This study analyzes the semiotic features and the ideology from the view point of linguistic anthropology. Ziko-sekinin is an abstract and compound noun. "Ziko (self)" and "sekinin (responsibility)" cannot be defined essentialistically. This study considers ziko-sekinin as an indistinct used in diverse contexts in Japan. This article tries to utilize a method of Discourse Analysis of historical sociology framework as well as Linguistic Anthropology in order to analyze self-responsibility discourse to capture the transformation of discourse in Japanese society. Using ethnography and discourse analysis to analyze the social field, the paper presents the analytical notion of "type" which is a meta-pragmatic category and separate the types of self-responsibility discourses into 8 types and analyzes the examples of those discourses. Based on the results, I arugue that the transformation of self-responsibility discourse lies in the sense of Japanese self-consciousness and the norm consciousness.

キーワード：自己責任、指標性、イデオロギー、メタ語用、タイプ
Keywords：Self-responsibility, Indexicality, Ideology, Meta-pragmatics, Type

1. はじめに

本稿では、「自己責任」という概念をめぐる一連のやり取りを含めたコミュケーションを自己責任ディスコースとし、言語人類学的観点から研究するための一考察を行う。とりわけ、自己責任ディスコースが用いられる個々のコンテクストやジャンルを中心にメタ語用論的範疇として類型化し、自己責任ディスコースがメタ語用作用としてイデオロギーを伴って指標する記号過程の分析に向けた試論を展開する。

「自己責任」は、さまざまな研究者に取り上げられる抽象的な概念である。例えば、90年代において日本社会で経済構造の転換が進められる中で「自己責任とはなにか」という問いかけをした桜井（1998）や種村（2005）、社会心理学・哲学的な責任の虚構性に関する研究は小坂井（2008）、日本の戦後レジームにおいて「連帯責任」から「自己責任」へと変遷してきた関係と国際政治上の観点から「リ

スク管理」を市民に求める政治的言説として「自己責任」が機能していることを指摘する Hook and Takeda（2009）、2004年のイラク日本人人質事件における「自己責任論」を引き合いに「自由」の哲学的検討を行った佐伯（2013）、「自己責任」を新自由主義イデオロギーとしてはたらく政治言説であるとし、社会哲学的な観点から批判的な論考を記した吉崎（2014）、失踪現象に着目し社会学的に「責任」をモデルとして考察した中森（2017）の研究などがある。

本稿は、全国五紙における「自己責任」の使用数の変遷を引き合いに、日本社会における自己責任ディスコースが用いられてきた経緯を整理し、メディアディスコース上で用いられる自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇のパターンを「タイプ」として分析する。抽象的概念であれ、時空間を越えた異なるコンテクストであれ、常に「今ここ」で用いられるテクストにより、連続的なコンテクストを引き継ぐのが「ディスコース」である。同時に、「今ここ」でありつつも一定のパターンを持ち、知識や規範を構築するディスコースが特定の社会空間に配置されることを捉える上で、記号と解釈者を媒介する言語イデオロギーが介在して遂行的に影響を与え合うパワー関係を分析する視座が必要である。上記の位置づけを言語人類学と歴史社会学的な言説分析の観点から整理し、今後の自己責任ディスコース研究に向けた位置づけを示すのが本稿の目標である。

2. 自己責任に関する先行研究

「自己責任」は「責任」に「自己」が付随した複合名詞である。広辞苑第6版によると、責任は「①［荘子（天道）人が引き受けてなすべき任務］。②政治・道徳・法律などの観点から非難されるべき責（せめ）・科（とが）。法律上の責任は主として対社会的な刑事責任と主として対個人的な民事責任とに大別され、それぞれ一定の制裁を伴う。」と記載されている。「責任をとる」や「責任を引き受ける」をはじめとした用法で責任は用いられるが、いかにして「責任がある」ということを示すことができるのだろうか。以下、責任概念を考えるにあたって、中森（2017）で提示される三つのモデルを参照する。

一つ目は、個人の自由意志や主体性を重んじる「行為－因果モデル」である。「行為－因果モデル」では、前提として「個人」による「自由な行動」が可能であり、その行為の結果はその個人が負うものであることを強調する責任モデルである。この「行為－因果モデル」を突き詰めると「自分のなした行為の責任はその個人が負う」という規範に行き着く。二つ目は、責任を「responsibility（応答性）」として捉えるものであり、「責任を否定しようとすればするほど応答を行っている」のであり、行為と因果の関係は個人で完結するのではなく、むしろ他者との応答関係から逃れられないと捉えるものを「根源的責任論」と呼ぶ（瀧川 , 2003; 中森 , 2017）。三つ目は、Goodin（1985）により「行為－因果モデル」に対して批判的な見地から提唱された「傷つきやすさを避けるモデル」である。このモデルでは「必ずしも出来事の原因とみなされる行為者が責任を負うわけではなく、責任を果たすことが可能である者であれば誰もが責任を負うべき主体となる（中森 , 2017: 243）」とし、理論モデル上は「責任」を複数の者、とりわけ責任を果たすことができる者に分有可能なものにする。

しかし、中森（2017）は「行為－因果モデル」における責任を「帰責ゲーム」ではないものにするため編み出された「傷つきやすさを避けるモデル」は、「他者が傷つくことを防ぐことができる者は誰か」という新たな帰責ゲームを生むことを指摘する。つまり、個人化が進み、リスク管理を行う主体としての個人にその能力を求めることを志向する「自己責任」にさらなる根拠を与えるものとして両者の責任モデルは共存してしまうのである。上述の哲学的・社会学的議論を参照すれば、責任の定義困難性や現代社会において責任を個人に帰属させる背景が浮かび上がるだろう。

「自己責任」は名詞化された表現であり、具体的な行為者や責任の所在を曖昧化して表象する文法的隠喩でもある（フェアクラフ , 2012）。「自己責任」には、抽象的・曖昧な「責任」に「自己」という概念が付与されている。しかし、小坂井（2008）は、「他者」との関係性や言及なしには自己という主体も責任も成り立ちえないことを指摘する。「社会秩序という意味構造の中に行為を位置づけ辻褄合わせをする、これが責任と呼ばれる社会慣習の内容だ」と論じ、責任という概念を本質主義的に定義づけるのではなく、あくまでも社会的な関係性や文化的な連続性の中で責任が構築されることを示す（ibid, 2008: 152）。次に、本研究が目指す自己責任ディスコースの研究に関わる理論的試論に関

してまとめる。

3. 理論的試論―自己責任ディスコースとイデオロギー

（1）言語人類学―指標性を起点にした文化研究

言語人類学は、「今ここ」という偶発的で個別具体的な出来事であるコミュニケーションと言語構造や形式をはじめとした規則性の両者を複合して捉える学問分野である。両者の関係性を捉え、コミュニケーションを介して蓄積的に前提化されたものと、コミュニケーションによって創発的に遂行化されていく諸相を分析する上で指標性（indexicality）の概念が重要になる。指標性とは、ある記号と記号の関係を「連続的・隣接的」に捉える記号作用を指す（小山 , 2012）。例えば、「風見鶏と風の向き」や「煙と火事」の関係性はそれぞれ連続的に見出すことができ、そのような記号と記号の二項関係を指すのが指標性である。言語コミュニケーションにおいては、敬語の使用により権威やジェンダーをはじめとした話者のアイデンティティが表出されるのも、指標性という観点から分析的に見出すことができる。つまり、指標性に着目することで、言語形式と言語外現実との関係性を捉えることが可能となる。言語コミュニケーションにおける参与者（発話者・受信者）のインターアクションにおいて「調和・協調」から「不調和・対立」がどのように起きているかをミクロに記述・分析する上でも、指標性は欠かせない分析概念である。

一方、ミクロなインターアクションそのものだけでなく、マクロな社会文化的次元を射程にする際に重要な分析概念となるのが言語イデオロギー（language ideology）である。言語イデオロギーとは、意識／無意識的にことばについて抱く人々の考えを指す（小山 , 2011: 4 ）。宮崎（2016: 136）によると、言語イデオロギーは言語関係と社会関係の「間に入る」ことで、その結びつきを説明するものとして有効であるという。言語コミュニケーションとして表出されたものと社会文化的な権威や規範との関係を捉える言語イデオロギーも、指標性によって説明可能である[1]。言語コミュニケーションを行う研究者自身をも含みこんだ社会的実践としてのディスコースをも言語イデオロギーとして捉える言語人類学において、「ディスコース」は知識や権威を構築する社会文化的産物として重要な位置づけとなる（Foucault, 1980; 松木 , 2007）。

言語人類学では、「今ここ」という個々具体的な場面における言語コミュニケーションを基本的な分析対象としているものの、言語イデオロギーという分析概念を用いて差別や権力をめぐるマクロな社会文化的次元をも含み込んだ分析も行われてきた。しかし、「今ここ」の言語コミュニケーションに着目する中で、その前提となる「共有された知識」に対する理論的な検討や実際の分析が背景化しているという批判的な指摘もなされている（井出 , 2019: 199－201）。これに対し、有効な分析概念の一つであるのが「文化モデル（Cultural models）」である。文化モデルとは、「社会の成員により広く共有され、環境の理解とそこにおける振る舞いに多大な役割を果たす、前提化・規定化された世界の範型」と定義される」（片岡 , 2016: 283, Holland and Quinn, 1987: 4）。このような定義は、特定の社会集団に共有される暗黙的な前提知識を意味する「スキーマ」と類似する。ディスコースとして反復的に表出する規則性からスキーマを発見するアプローチが Quinn（2005）などによってなされている。日常的な言語コミュニケーションを介して特定の社会集団に共有される規範意識を捉える上で、有標化されたディスコースから無標の文化モデル（≒スキーマ）を分析するアプローチは有用な手法の一つであろう（井出 , 2019: 199－201）。

（2）メタ語用的機能―詩的機能、メタ言語的機能、レジスター、社会文化的知識

言語人類学で指標性に注目するのは、「今ここ」で起こる一回限りの言語コミュニケーションとし

[1] 松木（2005: 5 － 6 ）は言語イデオロギーを用いる論者によっても定義が定まっていないことを指摘し、Woolard（1998）の二つの捉え方を紹介する。一つは、「世界観（worldview）」や「価値体系（value system）」、「文化（culture）」をはじめとした「中立的な」捉え方であり、もう一つが特定の社会的立場や価値観を「正当化（justification）」したり、「自然化（naturalization）」したりする「否定的な」捉え方である。松木（2005）によると、後者の「否定的な」捉え方として言語イデオロギーを用いる論者が多いという。

てトークンレベルの意味生成を分析するからである。そのような姿勢は、言語コミュニケーションが起こる出来事が偶発的であり、無限とも言えるコンテクストの中で生起すると捉えることに起因する。しかし、実際の言語コミュニケーションはなんらかの形で統制されることで、「意味」として解釈される。ローマン・ヤコブソンに師事した言語人類学者であるシルヴァステインは、そのような言語コミュニケーションに対する枠付けをメタ語用と呼ぶ。

言語コミュニケーションと人々の意識を指標的に紡ぐ分析概念として重要な役割を果たすのが詩的機能である[2]。詩的機能とは、ヤコブソンが提唱するコミュニケーションの6機能モデルの一つであり、あるメッセージを「メッセージ化」して強調する指標性のことを指す。散文で用いられることばと比較した場合、韻文では音・文字・意味などといったなんらかの形式的類似性を持つことで、メッセージ自体に関心が集中し、メッセージを前景化する。つまり、詩的機能には「反復構造」が顕著に見られ、コンテクストは背景化される一方で、テクストそのもののメッセージ性が浮き上がるようにはたらく。詩的機能は、「繰り返し（反復）や対称性を通じて、当該の対象を「並置関係」に置き、それらを「セット」「ユニット」としてまとめる・束ねる機能」を持つことから、メタ語用的機能を果たす（榎本, 2017: 34－36）。詩だけではなく、広告やプロパガンダなど政治談話にも顕著に現れるのが詩的機能である[3]。

詩的機能だけでなく、社会文化的空間にて言語コミュニケーションが転送される過程を捉える上で、メタ言語的機能も重要である。メタ言語的機能は、メタ意味論的機能とメタ語用論的機能の二つの指標性を持つ。メタ意味論的機能は語彙などに対する「命題的意味」についてのコミュニケーションであり、メタ語用論的機能は「言語使用」についてのコミュニケーションを指す。

自己責任ディスコース分析に関わるメタ語用的機能として、象徴性の高い二つの機能をあげる。一つは、「特定の社会的範疇・要素を内在化しているとステレオタイプ的に理解されている言語範疇」を意味する「レジスター」である（ibid: 39）。レジスターは、男ことばや女ことばといったジェンダーを象徴的に指標することばから、標準語などの社会方言・地域方言、特定の職業で用いられる専門用語などが該当する。例えば、社会言語学では「方言」ではなく、「言語変種」と呼称されるが、これも社会言語学者によるレジスターである。もう一つが、「この世界にある物、人、場所、などに関する整合的な知識の総称」を意味する「社会文化的知識」である（ibid: 40）。社会文化的知識には必ずしも正しくない言明（例：「水は透明である」）である「文化的ステレオタイプ」も含まれ、特定の社会集団に特有の知識として用いられることで、慣習的な規範を指標する。

（3）言説空間におけるイデオロギーとその転送過程

言語人類学では、指標性という「今ここ」の言語コミュニケーションを介して動的に形成される社会文化を分析してきたが、理論的にも方法論的にも「コンテクストとは何か」ということが絶えず問題として浮かび上がってきた（井出, 2019: 180）。本稿では、言語イデオロギー、文化モデル、メタ語用的機能といった、「今ここ」のみでは回収されない社会文化的次元を捉える分析概念をあげてきた。個々具体的な出来事、つまりトークンレベルの自己責任ディスコースを取り上げ、その分析を言語人類学的な観点から行うことは可能である。しかし、多様なコンテクストの中で用いられる「自己責任」は、「自己」と「責任」の複合名詞かつ抽象名詞であり、本稿では、むしろ「自己責任」という語彙が繰り返され、タイプとしてパターン化される言語コミュニケーションに着目したい。

---

[2] Jakobson（1960）は、詩的機能を「等価の原理を選択の軸から結合の軸に投射する（The poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination）」こととする。選択の軸には「類像性の原理」が、結合の軸には「指標性の原理」がはたらいており、これらは必ずしも言語コミュニケーション上のみではたらいているのではない。教室の机の並びや順番交替をしながら挨拶をすることなど、選択から結合（類像性→指標性）としてなされる反復性が主導的にはたらいていることそのものが詩的機能であり、その結果として「メッセージ」そのものが強調化される。

[3] 反復構造を生み出す詩的機能により、カテゴリー化を意味する範疇とコミュニケーションに沿って現れることを意味する連辞が構成され、言及指示継続としての名詞句と名詞句とのつながり、また動詞・述語句・節と動詞・述語句・節とのつながりが文法的体系を持って紡がれる（小山, 2009a, 2009b）。

トークンレベルだけでなく、タイプレベルにも着目する理由は二つある。一つは、さまざまな意味合いで用いられる「自己責任」ということばを一定のパターンとして類型化することで、「自己責任」に対する認識を相対化する必要があると考えるからである。例えば、「教育」における議論では「他責ではなく自責を持つ」ことが肯定的に用いられることがあり、また「リスク」を考慮し、その「責任」を自覚的に持つことが称揚される上で「自己責任」が用いられる。このような意味づけをする上で、必ずしも「自己責任」は否定的なニュアンスを持たない。一方で、なんらかの被害を受けた者に対し、他者が「自己責任」としてその被害者を批判・非難することもある。「自己責任」に対し肯定的・否定的な意味づけがされるのは、コミュニケーションの参与者が属する社会的立場やその者が持つ価値観とそのコンテクストに応じてである。それらの認識枠組みがどのようになされているかを整理し、自己責任ディスコースが歴史的変遷の中で転送される記号過程を捉えたい。これは次の理由とも大きく関連する。

もう一つは、「自己責任論」と呼ばれる主張、あるいは議論がなぜ・どのように日本社会で繰り返されるのかに関心があるからである。「自己責任」というディスコースは新自由主義といった政治経済的ヘゲモニーとも関連して、一部の研究者に否定的に捉えられるが、個々具体的な自己責任の言及とマクロな社会文化的次元、あるいは歴史的コンテクストはどのように折り重なっているのだろうか。自己責任ディスコースが反復的に転送される諸条件として、新自由主義イデオロギーの形成過程と日本語話者が持つ規範意識との入り組んだ相互作用が関係しているのではないかという仮説を筆者は持つ。そのような条件をあぶり出すためには、トークンレベルだけでなく、タイプレベルで起きているディスコースにも着目する必要がある。言説空間におけるトークンレベルの自己責任ディスコースは社会文化的知識としてイデオロギーを伴って認識され、社会的立場や価値観を持つ主体によって発話され、またその発話があることを資源にした言及が再帰的に繰り返される。つまり、トークンレベルのディスコースはタイプレベルを含み込んで反復するのであり、それらがどのように展開されているかの記号過程に着目するためにもタイプレベルの認識が必要になる。自己責任ディスコースが用いられることを安易に新自由主義と関連づけるだけでなく、それを発話・解釈する日本語話者の暗黙裡の文化モデルを分析し、自己責任ディスコースが反復される複雑な諸条件をその記号過程の分析から照射していきたい。

自己責任ディスコースの転送過程に着目する上で、人類学的志向を持ってイデオロギーを捉える浜本（2007）の議論が参考になる。浜本（2007）は、真理を暫定的なものとして捉える真理化のプロセスと言説空間の構造の関係性がどのように展開されているかを問うことが人類学の役割だとする。二つの真理化のプロセスとして、①社会空間に参加しているそれぞれのエージェントの受容能力・転送能力には違いがあること②既存のコンテクストが特定の観念の転送と流通の可能性を制限していることを挙げ、言説空間が変容していく過程で考慮すべき点だとする。浜本（2007）は、人類学の二つの研究領域として①権力問題：言説空間での発話と行為における力能と効果の非均衡な配置の問題②文化や象徴体系や意味の問題：言説空間を流通する諸概念の配置が形成するパターンの問題を挙げ、世界に対して人びとがどのようにチューン合わせとしての社会的実践を行っているかを分析する試論を展開している。「自己責任」を単に新自由主義イデオロギーとして問題視し、「正当」な根拠に基づいて批判的に論じるのではなく、「日本」という地理的空間上で日本語話者がどのように自己責任というディスコースを再帰的に転送しているかを問う上で、上述したイデオロギーの理論的認識は重要だと考えている。

（4）言語人類学と歴史社会学的な言説分析との相違

上述した言語人類学の分析概念は、主に社会記号論系の言語人類学と呼ばれる研究群で扱われている。一方、言語人類学の系譜では記号論を理論的枠組みとして持ちつつも、実際の事例分析はフィールドワークを中心にしたエスノグラフィが行われてきた。それは、まさしくトークンレベルで生起する一回限りの出来事に着目するからである。しかし、上述したように本研究が分析対象とする自己責任ディスコースに付随して生起するイデオロギーとその転送過程は、フーコー的な言説分析に類似し

た「フィールド」概念を持つ[4]。記号論系の言語人類学では、メタ理論としてアカデミックコミュニティが生み出すディスコースをも対象とし、言語コミュニケーションがなされる全体性と外在的・内在的かつ超越的な批判をその理論に含みこんでいる。そのため、単にフィールドで生起する具体的なディスコースとしてだけではなく、歴史・社会文化的なマクロコンテクストの中で出来事が生起し、それゆえにその発話・解釈を枠づけるものとして言語コミュニケーションが時空間上で連続的に紡がれていると捉える。このような理論的視点はフーコーの「言表・言説」概念に近接した捉え方である。

最後に、歴史社会学的な言説分析と言語人類学的な言説分析との相違点に着目し、本研究がその両理論的枠組みの隣接点に位置づけられることを示したい。歴史社会学における言説分析を行う赤川（2001: 98－99）は、フィールドワークについて述べた佐藤（1992）の言及を引用し、フィールドワークがさまざまな手法を駆使して研究を行うことの「全体論的な志向」があることや文化や社会の複雑な成り立ちを「まずそのまま丸ごととらえよう」とする姿勢があることを述べる。その上で、言説分析に固有な社会の見方を下記のように述べる。

> 明示するのは難しいが、要するに言説分析がフーコーによって「知の考古学」と命名された、その原点に立ち返えればよいのではないか。考古学は、発見された人骨や石器など、遺物としてのモノの存在様態を基盤に据え、それがどういう地層に存在するのか、どのような形態で発見されたのかといった情報を参照しながら、生活や社会の全体像を復元しようとする。言説分析は、考古学が人骨や石器を扱うと同じ態度で、言説をモノとして扱えばよい。そもそも、とある場所にとある形態で言説が存在しているのはなぜなのか、と。

言説分析は、特定の社会空間（雑誌、共同体、ジャンル etc.）における特定の「言説」を対象に、言説空間上で言説が用いられる形式の変遷やその言説間の対立から主体や概念が構築されていく過程とその全体性を分析するアプローチである。一方、言語人類学では、「今ここ」で展開される言語コミュニケーションとその「環境」との指標的な関係性によって構築される「文化」をフィールドワーク中心に分析するアプローチである。言うなれば、言説分析は「ディスコースフィールド」として「言説から空間的パワー関係」に注目した社会研究を行うのに対し、言語人類学は「フィールドディスコース」として「空間から言説的パワー関係」に注目した文化研究を行うのである[5]。

言語人類学は、無限に拡がるとも言えるテクストがある一定のパターンとして用いられ、解釈される社会文化的な状況や条件を問いかけてきた。エスノグラフィであれ、言説分析であれ、研究者が対象とする固有の言説空間が何で、どのように言説が展開されてきたかを仮説生成的なアプローチとして問いかける点は共通している。ある言説が言説としてあることそのものを問いかけ、その言説がメタ語用的に機能することで人々の解釈を枠付けていき、ある主体が構成されていくこと、それらが社会的実践としてなされていることを分析するのは言語人類学的なアプローチの基盤だと言えるだろう。

自己責任ディスコースは、「どのように語られるか／語られないか」の語用的・相互行為的な側面に着目する分析概念である。自己責任ディスコースという言語使用のみを分析するのではなく、自己

---

[4] 「言説分析」は、多義的に用いられる用語であり、社会学的な「言説分析」としても、多様な理論的・方法論的な立場があり、社会学理論との関係からその「不可能性」も論じられている（佐藤・友枝 , 2006）。言語学的な言説分析としては、批判的談話研究（Critical Discourse Studies: CDS）が知られているが、CDS は「社会的不平等や抑圧を批判的に読み解くことによる解放」を共通の方法論的態度とする研究群であり、社会学的な言説分析とも言語人類学的な談話分析とも研究・実践に対するスタンスが異なる。

[5] 言説分析における「空間」は「言説の形式・配置とその差異的関係における全体性」、言語人類学における「空間」は「人びとが生活する場所と言語コミュニケーションを介したその連続的な関係性（= 指標性）」であり、厳密には異なる意味合いを示している。一方、「言語」そのものが社会的実践としてテクスト化・コンテクスト化され構築されていることを理論的に捉える言語人類学では、歴史社会学的な言説分析とは異なる対象とその分析を行ってきたものの、「ことば」そのものに着目する類似した「フィールド」概念を持つといえるだろう。

責任ディスコースがどのように社会文化的な影響（自己観や規範性）を生み出し、与えているかを分析していくことを本研究の課題としたい。「どのように語られるか／語られないか」といった問題設定は、上述した歴史社会学的な言説分析において持ち出されるものである（赤川 , 2001）。しかし、本研究では、上記の問題設定と同時に、言語コミュニケーションに表象される「自己」や「他者」を取り巻く位置関係や文化モデルをも研究対象とする。小坂井（2008）が指摘するように、責任そのものへの言及や遂行的指示は一種の社会慣習として表出するのであり、「慣習」として積み重ねられてきた「歴史」や、その慣習を絶えず更新する言語コミュニケーションが前提的・創発的（蓄積的・遂行的）になされている。つまり、自己責任ディスコースを研究するにあたり、自己責任の「語られ方」や「歴史」、「文化」を無視することはできない。そこで本稿では、両者の問題設定を包含する学問分野として記号論系の言語人類学のアプローチにて自己責任ディスコースを研究することとする。

4. 自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇

（1）全国五紙における「自己責任」使用数の変遷

日本社会にて全国展開されている新聞紙（朝日新聞、産経新聞、毎日新聞、読売新聞、日経新聞）における「自己責任」の使用数と変遷を1980年から2018年の期間でグラフ化したものが下記の図１である[6]。図１により、1990年代初期から2000年代初期にかけて用いられるようになったのが「自己責任」だと読み取れる。

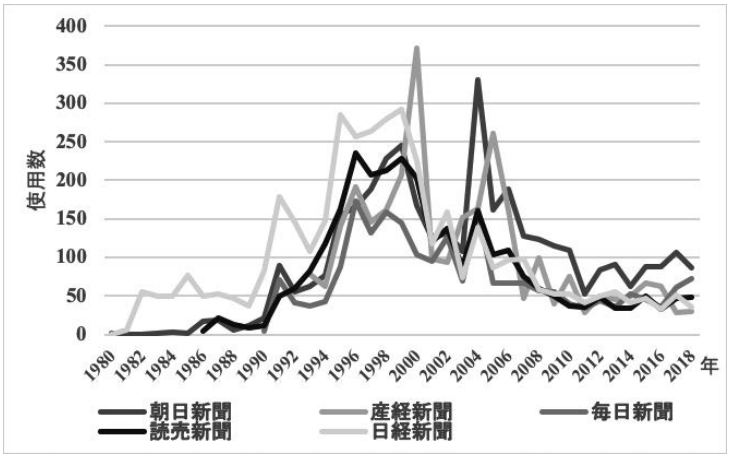


図1　全国五誌における「自己責任」使用数の変遷[7]

種村（2005）は、1991年に大手新聞紙上で「自己責任」の使用数が急増したのは、当時「証券不祥事」が起き、新聞メディアにより社会問題化されたことだとしてその経緯を整理している。図１上でも、「日経新聞」が80年代から90年代初頭まで一早く使用され、2000年まで最も使用数が多い全国新聞であることからも、「経営・経済・金融」領域で「自己責任の原則」というレジスターとして主に用いられてきたことが読み取れる。一方、2004年に最も使用数が上昇したのは「朝日新聞」であり、イラク日本人人質事件が起きた時期と重なる。全国新聞紙上の「使用数」のみから読み取れることは限られて

[6] 全国五紙の新聞データはそれぞれ、朝日新聞は「聞蔵Ⅱ」、産経新聞は「産経電子版」、毎日新聞は「毎索」、読売新聞は「ヨミダス歴史館」、日経新聞は「日経テレコン21」のデータベースから検索して抽出した。検索は、「キーワード」、「同義語・シソーラス」の項目を非選択、「地方紙」を除く全国版（「全国」の設定がないものは「東京」を選択）、「朝刊・夕刊」、「見出しと本文」を対象に設定して行った。

[7] 筆者が運営する Web サイト『Discourse Guides[https://discourseguides.com/]』の記事（2017年３月14日公開）「2015年 IS 日本人人質事件における自己責任言説の分析まとめ【https://discourseguides.com/2015_is_self-responsibility/】」にて「朝日新聞のみ」を対象にした検索結果数を公開している。

いるものの、マスメディアを媒介した出来事の表象やそれに付随した「自己責任」の使用は、レジスター、あるいは社会文化的知識として特有の記号イデオロギーを付与してきたと言えるだろう。

（2）本研究におけるデータの取り扱い

本稿がとりあげるデータは、特定の新聞、年代、出来事、ジャンルとして分析対象を特定化できておらず、恣意的な資料選択、ならびに分類であり、分析の一貫性を担保する上では未熟慮な内容となっている。この点に関しては今後の重要な研究課題であり、質的研究として解釈・分析を行なっていく上で絶えず問われるものである。先述したように、エスノグラフィの手法も、言説分析の手法も、研究者自身の問題意識や価値観をメタ認識しつつも、仮説生成的なアプローチによって分析対象に対する「厚い記述」を施していくものである。

全国五紙における「自己責任」の使用数の変遷を取り上げるのは、マスメディアは社会文化的知識を言説空間上に流布する上で多大な影響力を持つ主体の一つだからである。さらに、特定のジャンルのみで扱われる事象だけでなく、「自己責任」という語彙を共通して用いるディスコース間の相違を取り上げる上でも、新聞メディアは重要な指標となる。さらに注意しておきたいのが、現在のメディア環境は、情報技術の進展やスマートフォンをはじめとしたデバイスの普及と相まって大きく変容している点である。マスメディアの情報を受動的に受け取るオーディエンスではなく、積極的に自らの情報を発信するユーザーも生まれており、その主体化のプロセスも自己責任ディスコースが転送される一つの条件であろう。そうした認識から、自己責任ディスコースが各年代や環境に応じて変遷する過程と条件を問いかけ、言説空間上の差異と反復を捉えていくことが今後の研究課題の一つであることを注記しておきたい。

（3）自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇

本稿では、今後の研究に向けた一整理として、自己責任ディスコースが用いられている事例を抽出し、タイプとして分類する。このタイプ分類は、社会的実践としてのコミュニケーション的行為に対する範疇化の一つであり、これを本稿では「メタ語用論的範疇」と呼ぶこととする[8]。先述したように、新聞紙上における「自己責任」という語彙の使用は、主に経営そのものや貸借、金融における投資に対して「自己責任の原則」と呼ばれる経営・金融用語として用いられてきた。経済・金融用語としての「自己責任」は社会的な共同体で用いられるレジスターとして捉えられる。1962年９月４日の朝日新聞の社説「産業界は自己責任制を固めよ」では、下記のように述べられている。

> 自由経済の本質は企業の自己責任制にある。この点がこれまで為替管理と高率関税という温室的保護の下で、とかく明確を欠いていたが、今後はあくまでこの原則を徹底させ、企業の安易な経営態度には反省が求められねばならない。

「自由経済の本質は企業の自己責任制にある」という言及により、「経済市場」における企業の営利活動と競争の前提には、その行為が「自由」のもとで行われ、競争によるリスクを引き受ける主体として企業の「責任」が指示されている。

「経営・金融原則タイプ」は、各主体の自由な経済活動や投資を行う自由の権利が保証されていることと関連しており、「リスク管理タイプ」における前提的規範としての「自己責任」と間ディス

[8] 本稿では詳述しないが、ある送り手と聞き手の価値観・解釈やメッセージをやり取りする参与者のスタンス、特定の社会関係の中で慣習化された行為としてのジャンル、種々のトピック選定による焦点化、さらに言及・論証方法を示すストラテジーが絡み合ってテクスト化される特定のタイプをメタ語用論的範疇とする。メタ語用論的範疇は、必ずしも特定の範疇として用いられているわけではない。ディスコース上でどのタイプが主導的に表象されているかを読み取り、「今ここ」に焦点化した言語人類学的なディスコース分析と「歴史的変遷」に焦点化した歴史社会学的な言説分析による言説形式や言説資源（言説レパートリー）を位置づける分析概念がメタ語用論的範疇である。

コース性があると言えよう。間ディスコース性とは、「特定の出来事の参与者の視点から投射される、出来事と出来事の間の指標（指し示し）関係、およびつながり（connectedness）」のことを指す（榎本 , 2017: 140）。例えば、「経営を行う上で、資金繰りをするために金融機関から資金を借り入れする」という社会的行為は「借り入れた資金を返済する」もしくは「経営を行う上での経営破産ならびに借入金返済に対するリスクを負う」といった間ディスコース性を喚起する。一方、「経営・金融原則」と「リスク管理」において共通して「自己責任」という語彙が喚起される出来事がある場合、それは間テクスト性があると言える。間テクスト性は言語的側面（言われていること）の共通性を指すが、間ディスコース性はより根源的に社会的実践（為されていること）としての出来事間の関係性を指す（ibid: 140）。このことから、自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇は、言及されるコンテクストに応じて間ディスコース性と間テクスト性を伴って指標的な関係性を持つ。

「自己責任」は抽象的概念であり、さまざまな出来事と出来事を指し示すことが可能である。ある出来事に対する「自己責任」という言及を、類似した出来事に対しても連鎖的に「自己責任」と関連づけるのは間ディスコース性によるものである。こうした自己責任ディスコースの循環がどのように為されているかを捉える上で、試論的なタイプ分類を下記の図１としてまとめる。

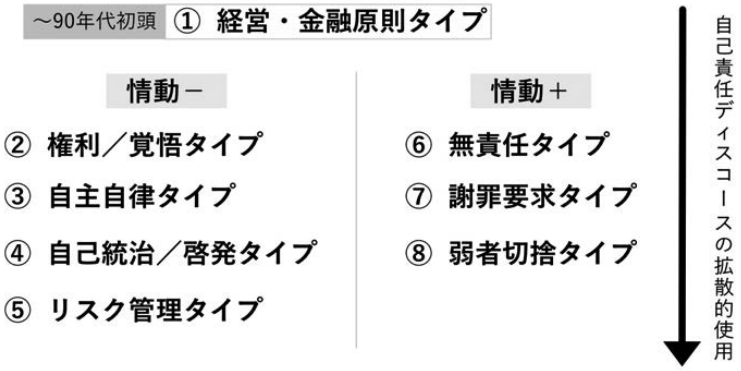


図1　自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇

全国五紙のデータから、80年代から90年代初頭に「日経新聞」において「経営・金融原則タイプ」として自己責任ディスコースは主に用いられてきた。しかし、経営・金融領域のみに限らず、多様なコンテクストで自己責任ディスコースは用いられている。本稿では、得られた資料データと自己責任ディスコースに対する情動的志向性の有無から、暫定的に二つのグループに分類した。情動とは、明示的に言語化しえない身体感覚に関わる知覚を指し、パース記号論でいう情動的解釈項（直接的解釈項）に関わるものである。「情動－」は規範性を伴った理知的な自己責任ディスコースのタイプグループであり、「情動＋」はある出来事や社会的行為に対する前提的な規範が守られなかったことに対する感性的な自己責任ディスコースのタイプグループである。

前述したように、本稿では十分な資料データからタイプとして分類したわけではない。しかし、本研究は、自己責任ディスコースをタイプに分けて分類していくことを研究の目標とするのではなく、各タイプの間ディスコース的関係やイデオロギーを伴ったメタ認識そのものやその効果を捉えることを研究の目標としている。対象とする出来事やその資料データに応じて、また新規的な発見からデータの再解釈があり得ることを注記しておきたい。その上で、本稿の暫定的な自己責任ディスコースのタイプ分類について下記以降にまとめる。

（4）自己責任ディスコースのタイプ分析

（4－1）「情動－」タイプグループ

自己責任ディスコースのタイプとして、経営・金融原則タイプをタイプ１とし、次にタイプ２とし

て「権利／覚悟タイプ」をとりあげる。「権利／覚悟タイプ」では、個々人の「自由」が規範的な前提となり、自由を行使するにあたっての「権利」や「覚悟」が強調され、その結果として「自己責任」を引き受ける／引き受けるべきものとする自己責任ディスコースのメタ語用論的範疇である[9]。言い換えれば、個々人が自由に行為することの権利、もしくは行為することの結果を受け入れる覚悟が自己責任ディスコースにおいてメタ的に言及される際、「自由」という価値規範が無標的に位置づけられている。

事例として2015年に起きたISIS日本人人質事件を挙げよう。この事件では、人質となった日本人二名が「責任」を果たすことができないにも関わらず責任が求められるという矛盾が自己責任ディスコースとして表出していた[10]。しかし、人質である後藤健二氏はダーイッシュ（イスラム国の別名）に入国する前に撮影していたビデオメッセージで、自身の「責任」について以下のように語っている[11]。

> えー、私は、私の名前はゴトウ・ケンジ。ジョーゴ・ケンジです。ゴトウ・ケンジ。ジャーナリストです。これからラッカに向かいます。イスラム国、ISISの拠点といわれますけれども、非常に危険なので、何か起こっても、私はシリアの人たちを恨みませんし、どうかこの内戦が早く終わってほしいと願っています。ですから、何が起こっても、責任は私自身にあります。どうか、日本の皆さんもシリアの人たちに何も責任を負わせないでください。よろしくお願いします。まぁ、必ず生きて戻りますけどね。よろしくお願いします。

「何が起こっても、責任は私自身にあります。どうか、日本の皆さんもシリアの人たちに何も責任を負わせないでください。」と述べ、ジャーナリストとして取材活動を行うこと、非常事態が起きた際には「責任」を引き受けること、それ故にシリアの人びとに「責任を負わせないこと」を要望するメッセージである。明示的な「責任」の意味内容が捨象されているものの、日本人によるシリア人への批判／非難ではなく、行為者としての危険を引き受ける「覚悟」が価値規範として位置づけられている。

上記のメッセージは後藤氏の「自己責任」をめぐって批判的・再帰的に言及されることもある。下記は、デヴィ夫人のブログ『デヴィの独り言　独断と偏見』「大それたことをした 湯川さんと 後藤記者（2015年１月29日）」におけるコメント（番号411）である[12]。

> 後藤さんも自己責任で行くと言いながらも、テロリストに脅されたら、日本政府のせいで私は助からないなどと言ってしまう始末。あなたのために、閣僚の方々がどれほど尽力しているのか分かっているのかと私は言いたい。その程度の覚悟しかないならば、やはり紛争地域には行くべきではないのだと私は思いました。どの面下げて日本に帰ってくるのか分かりませんが、深く反省して欲しいと思います。

後藤氏のメッセージ「責任は私自身にあります」が、デヴィ氏によるブログ記事本文とコメントにて「自己責任」として再コンテクスト化されている。ブログではデヴィ氏のブログ記事本文に書かれた「いっそ自決してほしい」という言及に呼応する形で、コメント欄には責任を取ることが求められてい

---

[9] 「自由」は抽象的な概念であり、その意味することの本質・定義に関するさまざまな議論が寄せられてきた。人権を確保する運動により構築されてきた近代社会とその国民国家としての政治システムは、「自由な個人」を支える「権力を持った国家」という関係性を持つ。自由に関する詳細な議論を経た定義を本稿で示すことはできないが、上述した民主主義社会における「近代的自由」を指すものとする。

[10] 佐伯（2013）はイラク日本人人質事件における同様の矛盾を指摘する。

[11] 産経ニュース（2015年１月22日）「「これからラッカへ」「必ず生きて戻ります」…　後藤健二さんメッセージ動画全文」［2019年６月18日確認］【https://www.sankei.com/affairs/news/150122/afr1501220005-n1.html】

[12] 以下、抜粋における自己責任の下線部は筆者によるものである。

る[13]。自己責任ディスコースでは、行為者による「権利／覚悟」を指標する「自己責任」と、個々の状況・ジャンルに応じた再帰的な言及として「自己責任」を引き受けることが反復化されている。2018年11月に人質から解放されたジャーナリストである安田純平氏は、帰国後の会見にて下記のように述べている[14]。

> 自己責任についても当事者である私が述べるのは非常に言いづらい。紛争地のような場所に行く以上、当然、自己責任であると考えています。これは紛争地において日本政府が何かしらの救出をするのは非常に厳しい環境である。だからこそ、政府は退避勧告といったものを出しています。そういった場所にあえて入っていく以上、自分が相応の準備をし、何かあった場合に自分に起きたことは自分で引き受ける準備、態勢としての準備、それから自分自身の心の準備をやって入るものだと思っています。そこで自分の身に対して起きることははっきり自業自得だと考えています。

危険地域にて取材活動を行う上での「心の準備」が語られ、「何かあった場合」に自分の身に対して起きることは「自業自得」だという意見を述べている。デヴィ夫人ブログ記事におけるコメントでも「自業自得」という言及が繰り返される。ジャーナリストとしての取材活動というジャンルにおける規範として、取材を行う権利と被害が自身に及ぶことを受け入れる覚悟が一連となって自己責任ディスコースが展開されている。個々人の自由な活動を行使する権利と、それゆえのリスクを引き受ける覚悟が他者によって言及されうるメタ語用論的範疇として「権利／覚悟タイプ」を位置づける。

タイプ３の「自主自律タイプ」は、前提として個人の自律的な行為を行うことが規範的に位置づけられ、行為に対する結果は他者をはじめとした諸要因に帰するのではなく、個々人による自律の結果として「自己責任」が言及される。主に教育におけるジャンルで用いられる自己責任ディスコースが自主自律タイプである。下記は、1985年２月12日、朝日新聞「教育自由化論、「個性主義」を前面に臨教審第一部会、学区制緩和など列挙」における記事抜粋である。

> そのうえで、「教育改革の方向」として「画一主義から個性主義への大胆かつ細心な移行、改革」を明示。個性主義とは「個人の尊厳、個性の尊重、自由、自律、自己責任の原則の確立」と規定。「個性主義の推進」のための具体的方策を十項目列挙した。そこでは義務教育段階で「過度の画一化を戒め、少なくとも学校選択について配慮する」として学区制の緩和、見直しの方向を打ち出しているほか「大学の設置基準、許認可条件の見直し」などを掲げている。

画一主義から個性主義への移行が教育改革で促される中、個性主義の要素の一つとして挙げられるのが「自己責任の原則」である。さらに、1985年７月25日、朝日新聞「「自己責任の考え方徹底」 教育改革で首相」で下記のように述べられている。

> 中曽根首相は24日午後、首相官邸で行われた民放テレビ番組「総理と語る」の録画撮りで、教育改革について「一番大事なのは、学生生活の基本は自己責任、独立性だという考え方を徹底させることだ。大学入試も偏差値や共通１次試験で大学を割り振られて受けるのでなく、

[13]「いっそ自決してほしい」という言及は、人質となった湯川遥菜氏と後藤健二氏の二人が国際・国内的に「迷惑」をかけていること、また後藤氏の母、石堂順子氏がマスコミに出ることを引き合いに、自身の危険地域における活動と娘が「敵の手」に陥るくらいなら娘の命を「我が手で断つ」ことから、不謹慎ではあると断りを入れつつ、「もし後藤さんに話すことができたらいっそ自決してほしいと言いたい」と述べている。デヴィ夫人（2015年１月29日）『デヴィの独り言　独断と偏見』「大それたことをした 湯川さんと 後藤記者」［2019年６月11日確認］【https://ameblo.jp/dewisukarno/entry-11983065803.html】

[14] 産経新聞（2018年11月２日）「安田純平さん会見詳報（９）「紛争地に行く以上は当然、自己責任」」［2019年６月11日確認］【https://www.sankei.com/affairs/news/181102/afr1811020031-n1.html】

自分の考えで判断し、挑戦することが大切だ」と述べ、現行の共通１次試験を廃止することを改めて強調した。

80年代に志向されてきた教育改革の中で、責任の帰属を「集団／他者→個人／自己」として位置づけることが自己責任ディスコースとして表出している。

タイプ４の「自己統治／啓発タイプ」では、前提として個々人の自由意志による行為と同時に能力拡張／付与がなされうることが自己責任として規範化されている。つまり、行為の結果を本人の意志や努力により解決することが遂行的に称揚される自己責任ディスコースである。

2018年６月、株式会社 ZOZO のコミュニケーション室長を努める田端信太朗による Twitter 上の発言をきっかけにして「過労死は自己責任」をめぐる議論が起こった。下記が、きっかけとなった田端氏によるツイート１である[15]。

現行法でも一方的な残業強制は違法なのに高プロを「残業させ放題」とか言ってる人って？何百時間の残業で過労死した人も鎖で繋がれ鞭打ち強制労働でもなけりゃ、例の日大アメフト危険タックル選手と同じ程度には本人の自己責任もあるのでは？＞残業は強制できるのか？

※　リンク：「残業は強制できるのか？残業命令を拒否できるケースとは？」カケコム　離婚や不倫・浮気のトラブル解決サイト（2018/10/26/ 更新）

上記のツイートに対して、引用リツイートの形で言及したツイート２では「過労死した形の家族を前にするような場面であってもあなたは「本人の自己責任もあるのでは？」と言い放つおつもりか？」と疑義が提起された[16]。それに対し、「はい、もちろん。鎖で繋がれて鞭打ちされるような奴隷でもなけりゃ、本人の責任も、ゼロとは言えません。日大危険タックルのアフメト選手が自己責任を否定しなかったのと一緒。過労死のほとんどは、自分で自分に危険タックルしてるようなもんです。」と引用リツイート（ツイート３）を行っている[17]。

田端氏によるツイート１やツイート３から、本人の自由意志による行為を認める以上は不利益を被るリスクを回避する「自己責任」があることが規範的に位置づけられている。これはタイプ４のリスク管理タイプとの間ディスコース性が読み取れるが、本件に関する田端氏のツイートではその他にも数多くの個人主義的ツイートが発信されていた[18]。本件の自己責任ディスコースでは、「自己」という指標により「個人」へと「責任」を帰属させている。さらに、具体的な状況や複雑な現象を名詞化された「自己責任」という語彙にて曖昧化させており、必然的に「自己責任」をめぐる解釈が再帰的に発生していると言えるだろう。個々人の努力や能力を拡張していくことそのものに「自己」の「責任」を位置づけるメタ語用論的範疇として自己統治／啓発タイプを位置づける。

タイプ５の「リスク管理タイプ」は、ある活動や行為に付随するリスクに対する規範意識から、逸脱する行為に対して言及される自己責任ディスコースである。登山をはじめとした危険を伴うレジャー活動だけでなく、災害や犯罪等による被害者に対するリスク管理不足としての言及や、リスク管理の必要性が論じられる際に「自己責任」が用いられる。

朝日新聞（2011年12月25日）の記事「別府秘湯事件が解決　自己責任論の定着、疑問」では、下記のように「自己責任」が述べられている。

---

[15] ツイート１（2018年６月１日）【https://twitter.com/tabbata/status/1002796215010906113】［2019年６月11日確認］

[16] ツイート２（2018年６月２日）【https://twitter.com/takmyg0306/status/1002897450376425472】［2019年６月11日確認］

[17] ツイート３（2018年６月２日）【https://twitter.com/tabbata/status/1002897832620130304】［2019年６月11日確認］

[18] 2018年６月に起きた「過労死は自己責任」をめぐる Twitter 上の炎上は2019年９月17日開催の社会言語科学会第一回スチューデント・ワークショップにて「Twitter を媒介に「感染」するイデオロギー　「過労死は自己責任」ディスコースを事例に」という内容で口頭の発表を行った。

2009年５月に大分総局に赴任して以来、多くの事件や事故を取材した。どれも痛ましいが、旅行中の被害者が見ず知らずの男に殺害されたこの事件は、私の中で最も大きかった事件だ。その取材で常に心に引っかかっていたことが「自己責任論」だった。
発生当初から犯人が逮捕された現在でも、「夜に女性１人で行くのが悪い」とか「無防備過ぎた」といった批判めいた声を多く聞いた。秘湯の場所柄を知っている地元の人に特に多いように思われたが、事件を報道で知った地元以外の人も同じような意見を持っていた。
犯罪が起きるたび、自己責任論が聞こえてくる。04年にイラクで日本人３人が人質になった事件でも国内では「危険な場所に行った方が悪い」と突き放すような意見が相次いだ。後を絶たない振り込め詐欺事件でも「振り込む被害者の方が悪い」と主張する人たちがいる。

引用の最後の段落にて2004年のイラク日本人人質事件が言及されているように、人質事件の加害者ではなく被害者に向けた「リスク管理」の不十分性が自己責任ディスコースとして用いられる。

（4－2）「情動＋」タイプグループ

タイプ６の「無責任タイプ」では、ある行為とその結果の当事者による受け入れやリスク管理の失敗を他責化する認識に対して、「無責任から自己責任へ」という規範性を促すメタ語用論的範疇である。中東地域日本人人質事件のように、個々人の行為による結果が関連する他者にも波及する事態になる際、その行為の無責任性が問われ同時に自己責任ディスコースが用いられる。

下記は、デヴィ夫人のブログ『デヴィの独り言　独断と偏見』「大それたことをした 湯川さんと 後藤記者（2015年１月29日）」におけるコメント（番号213）である。

デビィ夫人の意見に同意です
無責任かつ身勝手な行為をしたと思います
［自分の命は自分で守れ］です
自己責任で行ったわけですから自分の力で日本に帰ってきてほしいです

人質二名に対して、「無責任」かつ「身勝手な行為」だという認識を示し、「自己責任で（危険地域へ）行った」ため（理由）、「自分のちからで日本に帰ってきてほしい（要望）」と言及されている。自己責任ディスコースの中で有標化され、無標化されている規範として他者に対して「迷惑をかけない」個人による行為が推奨されるのが無責任タイプである。

タイプ７の「謝罪要求タイプ」は、前述の無責任タイプと同様にある行為に対する結果が他者への「迷惑」となるという規範性であると同時に、迷惑をかけたことに対し謝罪を要求するメタ語用論的範疇である。下記は、デヴィ夫人のブログ『デヴィの独り言　独断と偏見』「大それたことをした 湯川さんと 後藤記者（2015年１月29日）」におけるコメント（番号326）である。

まず、デヴィ夫人に、ご自身の立場をふまえた上でこのような声を上げて下さった事に感謝致します。多数の日本人が思っていた事です。
湯川さんは、本人のブログを見るに海外での実績作りの為に出向いて行った、真剣味に欠ける、そう思いました。正直バカバカしい。
後藤さんは自身の動画で「自己責任。まぁ生きて帰りますけどね」とコメント。
捕まったらどうやったって自分だけの力では逃れる事なんて出来ないでしょう。
本人だけの責任では済まないです。そうは思われなかったのでしょうか。
今の現状がそれを表しています。
反対を押し切ってまで向かった意味が理解出来ません。
人に迷惑をかけないという事は教わらなかったのでしょうか。

もちろん無事に戻って欲しいと思いますが。
そして、後藤さんの実母と嫁の発言には呆れます。１番の理解者であるはずの二人の立場です。私ならば息子（夫）の職業を理解し、本人の意思で出向いたのだから仕方ないと、苦しいですが納得するでしょう。
それよりも先ず、文面を読むのではなく自身の言葉で世界中の方々に「息子の事で多大なるご迷惑をお掛けして本当に申し訳ない」と話すべき。
身代わりになるなんて非現実的な事をいっても全く伝わりません。
子供には父親が必要と言いますが、世の中には父親がいなくても立派に子育てしていらっしゃる方々はたくさんいます。
自分の子供が生まれる、でも今はそれよりも大事な事がある。と決断したのは後藤さん本人です。

後藤氏のメッセージ「責任は私自身にあります」という言及が、再び「自己責任」という名詞にて再コンテクスト化されている。「本人だけの責任では済まない」と言及するように、本人が危険地域に向かったことだけでなく、親族の発言に対しても批判的に言及し、かつ「迷惑」をかけたことを謝るべきであると述べている[19]。人質事件の当事者だけでなく、外部者に対する行為の影響が「日本人」という規範性を持つカテゴリーに及んだことを否定的に捉え、人質の親族という隣接的な主体に対しても迷惑をかけたことに対し「謝罪」を要求する。「自己」に対する指標が「責任」の規範性や処理へとディスコースの中で拡張した際、「迷惑をかけた」から「謝罪をするべき」という行為への遂行的指示となって現れている。謝罪要求タイプの自己責任ディスコースでは、日本語話者による自己観と規範性がイデオロギーとして際立って表象されている。

タイプ８の「弱者切捨タイプ」は、相対的弱者の行為やその結果の因果を個人に帰責することが自己責任ディスコースに対するメタ的な認識として言及されるメタ語用論的範疇である。自己責任ディスコースによる個人への帰責の徹底化に対する対抗的な言及として知的エリートによって用いられることが多い。

2018年11月14日、Web メディア『HUFFPOST』の記事「「自己責任が他人を切り捨てる言葉になっている」 今井紀明さんが危惧する日本社会の空気」では、イラク日本人人質事件における三名の人質のうちの一人である今井紀明氏が「自己責任」に対してインターネット番組「ハフトーク」にて出演した内容が再編集されている[20]。冒頭では、「《「自己責任」はおかしな言葉として使われている。他人を否定して、切り捨てる言葉になっている。》――。」と記述されているが、下記の発言がまとめられたものだと解釈できる。

「自己責任」はおかしな言葉として使われていますよね。他人を否定して、切り捨てる言葉になっている。本当に大事なのは、自分たちがどういう社会を次の世代に残したいかなのに、そこは語れない。

とラジオにおける言及が引用されている。続けて、自身が取り組む認定 NPO 法人「D×P」（ディーピー）が行う定時制・通信制高校の支援活動が紹介され、「社会的にひきこもりになってしまうのは彼らの責任なのかって思うんですよ。そこは変えていきたいと思いながら活動しています。」という発言に見られるように、個人に行為の結果を引き受けさせる表象として「自己責任」を位置づけ、それに対抗するディスコースを展開している。

[19] 実際、「迷惑」をかけたことを会見にて謝罪している。これは実際に為された発話出来事を再コンテクスト化し、意図的／非意図的に誤謬を含みこませるファラシーである。
[20] 石戸論（2018年11月14日）「「自己責任が他人を切り捨てる言葉になっている」 今井紀明さんが危惧する日本社会の空気　14年前、イラクで拘束された今井さんが語る「対話」の可能性」［2019年６月18日確認］【https://www.huffingtonpost.jp/2018/11/13/hufftalk-imai-noriaki-dp_a_23587979/】

5. おわりに―自己責任ディスコース研究に向けた展望

四節では、自己責任ディスコースが日本社会で実際に用いられた事例を参考に、メタ語用論的範疇として８つのタイプを試論的に分類した。「自己責任」という共通する語彙を抽出し、個々のコンテクストを部分的に示しているものの、言及されるジャンルをはじめとした状況や語彙が用いられる年代に応じた概念の差異を、より詳細な資料の収集と談話分析によって浮き彫り立たせることが必要である。

自己責任ディスコースにまつわる歴史的な変遷と個々のジャンル・事例を論理的一貫性として結びつけるためにも、「ディスコース」と手法の位置づけも検討する必要がある。批判的談話研究における「ディスコース」概念の一整理を行う中西（2008: 29）が、「「ディスコース」という用語が呈する広範な概念の射程をとらえることは極めて困難な仕事であると考える。その概念を定義したりその議論の範囲を論じたりすることじたいが大きな研究になりうるからである。」と述べるように、「ディスコース」を位置づけること自体が大きな研究テーマとなりうる。しかし、本稿の二節で論じたように、「自己責任ディスコース」にまつわる日本語話者による自己観や規範性を研究するにあたり、具体的なトークンレベルの言及と形式的なタイプレベルの言語コミュニケーションを詳細に分析し、歴史性や全体性を重視する言語人類学による文化研究が可能だろう。

また、「日本」と「文化」という研究を行うにあたりこれまでの文化ナショナリズムとして退けられてきた議論に対しても注意を払うことが重要である。飯田（2011）は、文化ナショナリズムやポストコロニアル的議論を乗り越える上で、言語コミュニケーションにおける「相対的な丁寧さの度合い」の議論を引き合いに、「丁寧さ」の使用が社会的に構築されることやそれらが「日本的自我」といった心理領域と関係することを論じている。単に日本文化論的な役割を行為者が内面化しているのではなく（非強制性）、状況の中で行為者はお互いの距離を位置づけあうのである（相互行為的な共有性）。言語人類学をはじめとした話し言葉から書き言葉の相互行為性や言語的特徴の詳細な対象化によるディスコース分析を通して、「責任」を枠づける語用的・心理的な特徴を実証的に検討することができるだろう。

「自己責任」と対をなす概念に「連帯責任」がある。本稿では、自己責任ディスコース研究としてのイデオロギーやメタ語用論的範疇の一整理を行ったが、歴史的連続性として「責任」にまつわる日本的規範を浮き彫り立たせるにあたって、「連帯責任」との関係性も射程に入れることができるだろう。「自己責任」と「連帯責任」に共通するのは、日常的に用いられる語彙として責任を主体に帰属させるディスコースとして用いられていることである。これを「帰責ディスコース」として位置づけ、実際の言語使用から規範性や自己観がどのように有標・無標化されているかを分析することができるだろう［Yamaguchi, 2007; 片岡 , 2016］。帰責ディスコースとして概念を用いることで、各言語話者が具体的な状況の中で責任をどのような語用を介して位置づけるかを分析する可能性が開けるのではないだろうか。

参考文献

赤川学（2001）「言説分析とその可能性」『理論と方法』16（１）p.89-102

Foucault, M.（1980）*Power/Knowledge*. New York: Vintage.

Goodin, Robert E.（1985）*Protecting the Vulnerable: A Reanalysis of Our Social Responsibility*. University of Chicago Press

フェアクラフ , ノーマン（2012）『ディスコースを分析する　社会研究のためのテクスト分析』くろしお出版

Fairclough, Norman（2003）*Analysing Discourse: Textual analysis for social research*, Routledge

Jakobson, R.（1960）Closing statement: Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok（Ed.）, Style in language（p. 350-377）. Cambridge, MA: MIT Press.

浜本満（2007）「イデオロギー論についての覚書」『くにたち人類学研究』2 : p.21－41

Holland, Dorothy and Naomi Quinn（eds.）（1987）*Cultural Models in Language and Thought*. New York: Cambridge University Press.
Hook, Glenn D. and Takeda, Hiroko（2007）"Self-responsibility" and the Nature of the Postwar Japanese State: Risk through the Looking Glass. *The Journal of Japanese Studies*, 33（1）p. 93－123
井出里咲子・砂川千穂・山口征孝（2019）『言語人類学への招待　ディスコースから文化を読む』ひつじ書房
飯田美希（2011）「文化人類学における「日本的自我」を読みなおす　文化ナショナリズム批判を超えて」『政策科学』19（4）p.103－125
片岡邦好（2016）「雑談とゴシップを超えて　規範と逸脱から考える」
村田和代・井出里咲子［編］（2016）『雑談の美学　言語研究からの再考』, p.281－307ひつじ書房
小坂井敏晶（2008）『責任という虚構』東京大学出版会
小山亘（2008）『記号の系譜　社会記号論系言語人類学の射程』三元社
―――（2009a）「社会文化コミュニケーション、文法、英語教育：現代言語人類学と記号論の射程」『言語人類学から見た英語教育』, p.9－85ひつじ書房
―――（2009b）『記号の思想　現代言語人類学の一軌跡　シルヴァステイン論文集』三元社
―――（2011）『近代言語イデオロギー論　記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社
―――（2012）『コミュニケーション論のまなざし』三元社
松木啓子（2005）「言語イデオロギーとディスコース研究　インタビューにおける二つの言語をめぐって」『講座社会言語科学〈第５巻〉社会・行動システム』, p.2－16ひつじ書房
――――（2009）「アカデミックライティングの社会記号論　知識構築のディスコースと言語イデオロギー」『言語文化』9（4）, p.635－668
宮崎あゆみ（2016）『日本の中学生のジェンダー一人称を巡るメタ語用的解釈　変容するジェンダー言語イデオロギー』『社会言語科学』第19巻第１号 p.135－150
中西満貴典（2008）「ディスコース概念の再考、Van Dijk 及び Fairclough の言説概念の検討」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』57, p.29－39
中森弘樹（2017）『失踪の社会学　親密性と責任をめぐる試論』慶應義塾大学出版会
佐伯啓思（2013）『自由とは何か　「自己責任論」から「理由なき殺人」まで』講談社現代新書
桜井哲夫（1998）『＜自己責任＞とは何か』講談社現代新書
佐藤俊樹・友枝敏雄（2006）『言説分析の可能性　社会学的方法の迷宮から』東信堂
佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク』新曜社
瀧川祐英（2003）『責任の意味と制度　負担から応答へ』勁草書房
種村剛（2005）「「自己責任」の時代　1991年の損失補てんを事例として」『自然人間社会』38, p.147－172
Woolard, K. A.（1998）Language Ideology as a Field of Inquiry. In B. B. Schieffelin, K. A. Woolard, & P. V. Kroskrity（eds.）（1998）*Language Ideologies: Practice and Theory*. New York: Oxford University Press. p.3－47
Yamaguchi, Masataka（2007）Non-understanding as a heuristic to hypothesizing cultural models: A meta-oriented sociolinguistic strategy. *Journal of Sociolinguistic* 13（3）p.387－410
吉崎祥司（2014）『「自己責任」を乗り越える―連帯と「社会的責任」の哲学』学習の友社

Journal of
International and Advanced
Japanese Studies
国際日本研究

© 2020 Journal of International and Advanced Japanese Studies
Vol. 12, February 2020, pp. 137-153
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

Research Note

A Corpus-Linguistic Analysis of Media Discourses on Nuclear Phase-out in Japan, 2011-2014

Olena KALASHNIKOVA
Friedrich-Alexander-University Erlangen-Nuremberg, Chair of Japanese Studies, Ph.D. Student

Fabian SCHAEFER
Friedrich-Alexander-University Erlangen-Nuremberg, Chair of Japanese Studies, Full Professor

The Fukushima Daiichi nuclear disaster led to catastrophic environmental and economic consequences in Japan, leading to a temporary shift in public attitudes towards nuclear energy not only in Japan but globally. In 2011, the Japanese DPJ-led government gained worldwide attention for their plan to phase-out. However, while some countries seized the opportunity to transition away from nuclear energy and to expand the use of renewable energy sources, the succeeding Japanese government eventually decided to restart nuclear plants in 2012 and to continue to rely on nuclear energy in its energy mix for the time being, despite growing public distrust in the safety of nuclear facilities.

In this article, we will present the results of a corpus-assisted discourse analysis of the contexts and framings of nuclear phase-out by contrasting data from one newspaper (Yomiuri Shinbun) and social media (Twitter) in the period of 2011-2014. Our analysis not only shows the growing media convergence between social media and the mass media and thus their close interrelatedness but also instances in which social media has become more influential than the legacy media outlets.

Keywords: Fukushima, Mass Media, Discourse Analysis, Social Media, Nuclear Energy

1. Existing research on the media framing of nuclear energy in Japan

(1)Pre-Fukushima framing[1] of nuclear power: "safe" and "peaceful"

According to previous studies on mass media coverage of nuclear energy in Japan (Yamakoshi 2015; Kitahara 2011; Itou 2004; Yasuhito Abe 2013; Kinefuchi 2015) — following U.S. President Eisenhower's famous "Atoms for Peace" speech that aimed at establishing a positive image of atomic energy in Japan after the tragedies of Hiroshima and Nagasaki or the Daigo Fukuryū Maru incident[2], thereby indirectly pushing Japan to join the U.S. "nuclear umbrella" (Yoshimi 2012) — peaceful use and nuclear non-proliferation became a coupled set. The Japanese mass media, such as the two newspapers, the Asahi and the Yomiuri, played an important

[1] We understand framing as the representation and interpretation of an event in media through a certain perspective in which journalist insert a message to the audience.

[2] Daigo Fukuryū Maru (Lucky Dragon 5, 第五福龍丸) was a Japanese fishing boat that was eliminated during the U.S. nuclear testing on Bikini Atoll in 1954.

role in promoting the use of nuclear power and its alleged safety until the end of the 1970s. Moreover, after the oil crisis at the beginning of the 1970s, concerns over energy security became an essential issue in Japan, leading to justifications of the necessity of nuclear energy use as a means of economic development and well-being in the editorials of Japan's leading newspapers (Oyama 1999).

Interestingly, the framing of atomic power as a safe technology in the media and in politics was particularly prominent in the aftermath of the Chernobyl accident (1986) in Japan, based on the assumption that Japan's nuclear technology was more advanced than the one used in the USSR. Journalists of the Yomiuri, for instance, described the accident at Chernobyl as an "operator error", contrasting it with Japan's technological superiority and technological efficiency (Penney 2012; Yasuhito Abe 2013). Moreover, in the reports about the Chernobyl, the accident was not only opposed to Japan on a techno-nationalistic level, but also related to the tragedy of Hiroshima and Nagasaki by emphasising Japan's commitment to a uniquely peaceful use of nuclear power and Japan's readiness to contribute to the technological development and safety measures of its own nuclear industry (Yasuhito Abe 2013; Funabashi and Kitazawa 2012). Thus, one might argue that — other than for instance in Germany, that was directly affected by radioactive fallout — the nuclear disaster of 1986 was not covered as a potential threat to the Japanese society, which had also to do with the upcoming general elections in Japan at that time (Yamakoshi 2015). Both the Asahi and the Yomiuri focused on covering the reactions of European media outlets and governments, touching on the rising anti-nuclear protests in Japan only very briefly, thus framing the Chernobyl accident as a problem of others, not Japan's. In Japan, it took at least two years for the anti-nuclear movement to accelerate, leading to growing anti-nuclear sentiments and opposition. A planned test run at Unit 2 of the Ikata Nuclear Power Station in Shikoku in February 1988 poured fire onto the anti-nuclear movement, causing a sequence of protests in 1988-1990 (Avenell 2016). In the course of these events, both newspapers became more differentiated and nuanced in their coverage of the nuclear issue and the Japanese anti-nuclear movement since around 1988, also leading to reports and editorials that questioned the safety of nuclear power plants (Itou 2005; Yamakoshi 2016). Despite some newspapers supported the participants and praised the new anti-nuclear movement, the editorial line of the Yomiuri did not significantly change, still taking up a pro-nuclear stance.

When Japan signed the Kyoto Protocol (1997), but not with binding targets, a new framing of nuclear power as a method to effectively reduce carbon emissions appeared in the mass media and in politics. Having the name of Japan's ancient city Kyoto attached to the international treaty, the implementation of the Kyoto Protocol in Japan was also seen as a way to create a positive reputation of Japan at the international level, being one of a group of countries actively contributing to environmental protection. Although particularly conservative media outlets framed nuclear power as a clean way to tackle climate change since the second half of the 1990s, the Asahi's stance continued to be critical of the use of nuclear power, starting to suggest raising the share of alternative energy sources and continuing to stress the necessity of tightening the safety measures for nuclear plants (Oyama 1999). Moreover, Itou's study (2004; 2005) on Asahi shows that nuclear events that happened in Japan, namely, the Monju nuclear power plant (NPP) accident in 1995, the Tokai-mura nuclear accident in 1997, and the Mihama NPP accident in 2004 boosted more negative evaluation of the safety of nuclear energy, nuclear power plants' ageing and critics of related institutions. Particularly, after the Tokai-mura nuclear accident, the Asahi started to raise the question of nuclear phase-out which suggests that national nuclear accidents affected the Asahi editorial more than international events (Itou 2005, Tsuchida and Kimura 2011).

(2) Post-Fukushima framing of nuclear energy

On 11 March, 2011, a magnitude 9 earthquake struck the north-eastern coast of Japan. The earthquake on the Pacific coast of Tohoku and the subsequent tsunami led to the nuclear disaster at the Fukushima Daiichi NPP. The world's second largest nuclear disaster led to a shift in the attitudes towards nuclear energy around

the world. It was not only in Japan's neighbouring countries, namely Taiwan, India, South Korea and China, that public concerns regarding the safety of nuclear power plants were raised, but also in European countries, such as Germany, Belgium or Switzerland, eventually leading to the political decision to phase out atomic energy in all three countries (Hindmarsh and Priestley 2015).

In May 2011, Prime Minister Naoto Kan (DPJ) announced to end Japan's nuclear program in reaction to the events in Fukushima and a quickly rising and growing anti-nuclear movement in Japan (Poortinga, Aoyagi, and Pidgeon 2013). Demonstrations lasted until 2013, with the largest taking place on September 2011, June 2012 (in reaction to restart the Ōi NPP), and March 2013. After a landslide victory of the LDP in the 2012 elections, the Abe administration revoked this policy and made its plan public to restart nuclear power plans after approval by the Nuclear Regulation Authority. The Strategic Energy Plan of 2014, also enacted by the Abe administration, explicitly states that Japan sees itself as an "advanced nuclear nation", setting the general energy mix for the subsequent year to include a 20-22% share of nuclear energy (Iimura and Cross 2016). The plan also stated that the "dependency on nuclear power generation will be lowered to the extent possible by energy saving and introducing renewable energy as well as improving the efficiency of thermal power generation, etc." (METI 2014, 24).

Several studies (Hartwig et al. 2016; Yuki Abe 2015; Itou 2012) have pointed out that the Asahi actively promoted nuclear phase-out in 2011, advocating to reduce nuclear dependency and to allow more soft-path alternative energy into the market, evoking a soft path frame. The Yomiuri, in contrast, continued to frame nuclear energy as vital for Japan's economy in the aftermath of the disaster and claimed that the announcement of nuclear phase-out was "amplifying public distrust of nuclear energy policy", potentially leading to a lag in Japan's technological and economic development and inability to contribute to global nuclear security management (Yuki Abe 2015, 95).

2. Research design

(1) Research questions

It is argued that the combination of a strong pro-nuclear advocating fraction of the Japanese mass media (the Yomiuri in particular) and the pro-nuclear stance of the Abe administration are important factors responsible for the fact that nuclear energy still makes up a significant share in the domestic energy mix. Despite the fact that nuclear discourse in the Japanese mass media has been thoroughly studied, studies regarding the development of the discourse on social media are still insufficient, not to speak of studies comparing and relating the public sphere to the "semi-public sphere" of social media (cf. Schäfer et al. 2017, Schäfer 2017). Yet, previous studies (Binder 2012; Li et al. 2016; Rantasila et al. 2018) have examined transnational reaction to Fukushima accident in English tweets, spread of Japanese tweets containing information about radiation (Aoki et al. 2018), the role of influencers in Japanese Twitter after the Fukushima accident (Tsubokura et al. 2018) and Inako (2019) studied professional tweeters and their impact on recipients in Japan.

Hence, considered to be a first step towards cross-media analyses, the focus of this study lies on differences and convergences between the mass media (the Yomiuri Shinbun) and social media (Twitter) regarding the nuclear discourse in Japan, the notion of "nuclear phase-out" in particular, namely, its contexts and framings across media between 2011 and 2014.

In particular, the article will address the following questions:

How did the discourse in reporting about nuclear phase-out changed in different media and over time?

What are the differences in the framing/contextualization of "nuclear phase-out" in different media?

Is it possible to identify changes and/or unilateral or bilateral influences between different media regarding the framing or connotation of "nuclear phase-out" over time?

(2) Corpus collection

We gathered the data for our analysis from a database of the conservative Japanese newspaper the Yomiuri Shinbun and from Twitter. Originally, it was planned to purchase data from the liberal newspaper Asahi Shinbun as well. However, the Asahi does not offer data for research outside Japan, hence we are still working on a solution to this issue. Our Twitter collection comprises a 10%-sample of all tweets from the relevant period (2011-2014). Since we were more interested in finding out about the choice of words in the discourse of nuclear phase-out in general and over time, we have included all articles regardless of its journalistic genre (e.g. report or editorial, for instance). Both corpora we used in our analysis were built by using a list of words relating to either the term "phase-out"[3] itself, or to "anti-nuclear"[4] vocabulary, including hashtags:

脱原発 , # 脱原発 , 脱原子力 , 原発停止 , 減原発 , 卒原発 , 原発ゼロ , # 原発ノー , 原発を廃止 , #nonuke, #stop_genpatsu, #no_nukes, #nonukes, #611nonuke, 廃炉 , #hairo, # 廃炉 , 反原発 , # 反原発 , 原発反対 , 反原子力 ; 再稼働反対 , # 再稼働反対 (nuclear phase-out/# nuclear phase-out, stop NPP, reduce dependence on NPP, graduate from NPP, zero nuclear, #no NPP, stop NPP, #nonuke, #stop_genpatsu, #no_nukes, #nonukes, #611nonuke, decommissioning, anti-nuclear, against NPP, against restart)

In our corpus, we excluded duplicates (most likely sent by bots, thus causing a potential overrepresentation of certain trends) and identical re-tweets (cf. Schäfer et al. 2017).[5]

Despite the total amount of data in the Yomiuri remained stable throughout our research period, the Yomiuri corpus in 2012 is more than twice as large than in 2011, whereas in 2013 as well as in 2014 our corpus with nuclear phase-out related vocabulary shrank considerably. Moreover, the Twitter corpus for the year 2014 consists of only 36,723 words and as many near-duplicate messages, hence it is not large enough for a representative analysis:

Table 1 Total amount of words in corpora by year

Corpus	2011	2012	2013	2014
Yomiuri	668,416	1,652,904	623,351	622,078
Twitter	5,250, 466	1,504,197	591,483	36,723

The collected corpora were processed using the Japanese morphological analyser and POS tagger MeCab and the ipadic-neologd dictionary (Satou, Hashimoto, and Okumura 2017), which splits Japanese texts into

[3] Despite the *廃炉 decommission* term semantically relating to the phase-out theme, it was not included into search terms for the Yomiuri corpus because it links to news of technical issues of nuclear power plant decommission that were also discussed before the Fukushima accident, and the focus on technical issues remains throughout the investigated period. However, in the Twitter corpus *廃炉 decommission* is used differently than in the Yomiuri corpus.

[4] The search terms include anti-nuclear–related vocabulary, assuming that Twitter contributors use anti-nuclear movement terms and phase-out terms interchangeably as opposed to the press coverage. This assumption is partially confirmed by a study on the anti-nuclear movement after the Fukushima accident (Satoh et al. 2014), which concluded that the variety of new terms such as *脱原発依存 withdrawal from dependency on nuclear energy, 卒原発 graduating from nuclear energy, 減原発 reducing dependence on nuclear energy, 縮原発 reducing dependence on nuclear energy* caused confusion in meanings in literature.

[5] Despite the Twitter data being filtered to exclude social bots, retweets with added commentaries and slightly modified retweets using different symbols or links to different websites were identified as unique and added to the corpus.

short-unit morphemes. In order to analyse the corpus, a software called CQPweb[6] was used. CQPweb allows a range of analytical types of analysis to be performed such as keywords, collocation and concordance analysis (KWIC).

3. Methodology

The study relies on techniques central to the field of corpus linguistics: keywords, collocations and concordance analysis.

Keywords are statistically more frequent words in one corpus when compared to another corpus (Scott 2004), giving a compact presentation of the content in which phase-out-related words occur. The keyword analysis in this paper was used to determine words that were significantly more frequent in the Yomiuri sub-corpora and Twitter sub-corpora if compared against the reference corpus. The whole Yomiuri corpus of the same period was used as reference corpus for the Yomiuri, and a sample of general tweets gathered in September 2017 was used as reference corpus for the Twitter corpora. Using the reference corpus of the same genre helps to avoid genre-specific vocabulary. Analysis of keywords in such a way showed the elements of the discourse that remained stable in all periods or specific to one period. Retrieved keywords are represented as the list of words ordered according to the statistic value. For this analysis, the log-likelihood (LL, a measure of significance) value was used. The top 50 keywords were retrieved in each period for each media and grouped by key semantic categories (see Appendix) to identify their use in discourses of nuclear energy and related topics, following the approaches of Baker (2015) and McEnery (2015). The table excludes function words, such as particles, discursive words, reporting verbs and mentions in Twitter.

Collocation analysis helps to clarify and specify the meaning of a search word in a specific context and to identify common ideas associated with the search word, therefore giving indications about the ideological framing of a search word beyond the usage of a certain word to describe similar things (connotation). The idea that the attributes of the collocate provide an insight into the meaning of the node in a given discourse is described as semantic prosody. Semantic prosody is a qualitative approach of collocation analysis in corpus linguistics based on a word's connotation derived from its collocates, that are "positive or negative in their evaluative orientation" (Hunston and Thompson 2000, 38). Louw defined this as the "consistent aura of meaning with which a form is imbued by its collocates" (Louw 1993, 157).

According to John Sinclair, collocation refers to "the occurrence of two or more words within a short space of each other in a text" (Sinclair 1991, 170). However, the most important feature of collocates in corpus linguistics is frequency, thus a more accurate way of defining collocations refers to the fact if the occurrence of a lexical item is more frequent than it is expected by chance within the given window (Stubbs 1995; Baker et al. 2008; McEnery and Wilson 2001). In our case, collocates were calculated within the span of five words to the right and five words to the left (5L5R) of the search word. The LL score was used to calculate the strength of these collocations. For the purposes of this paper 20 most frequent collocates were analysed.

Concordance technique, also known as keywords in context (KWIC), is a list of all occurrences of a search word or phrase with its co-text on both sides. The concordance analysis is a qualitative approach used in corpus linguistics and discourse analysis, making corpus linguistics study more interpretative. Analysis of surrounding co-text of a search word (concordance lines) can reveal not only typical grammatical patterns, a common set of words and phraseologies, but the difference of the meaning of the search word, identify themes and attitude and, more importantly, to reproduce a context (Hunston 2002).

---

[6] CQPweb is a web-based corpus interface that allows to search corpora for words and patterns of varying size and perform linguistic analysis by applying various kinds of quantitative analysis.

4. Results and discussion

(1) The transition of "nuclear phase-out"[7]-related terminology across media over time

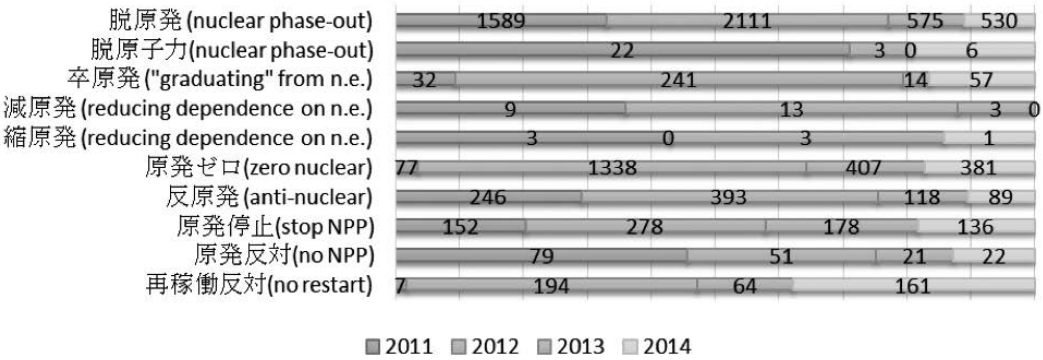


Figure 1 Absolute frequencies of nuclear phase-out-related terms in the Yomiuri in 2011-2014

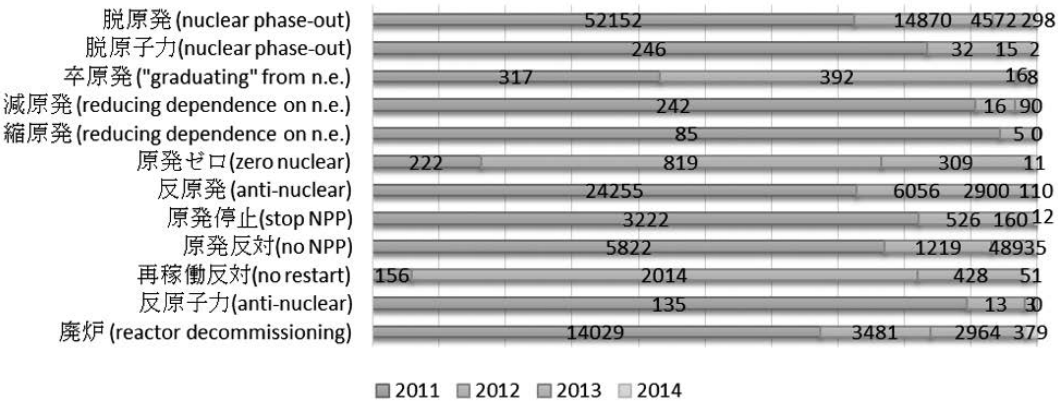


Figure 2 Absolute frequencies of nuclear phase-out-related terms in Twitter in 2011-2014

Figure 1 and Figure 2 summarize the distribution of the nuclear phase-out discourse-related terms used when compiling our corpora over time and across media. In the Twitter corpora, *脱原発 nuclear phase-out* keyword ranks number one between 2011 and 2013, giving way to *廃炉 decommissioning* in 2014. Furthermore, most of the instances of all terms decline steadily throughout the researched periods in line with the shrinking corpora size. On the contrary, it is already interesting to note the *脱原発 nuclear phase-out* keyword never occurs at the top of the keyword lists in the Yomiuri corpus, dropping from rank two in 2011 to five in 2014, whereas *原発 nuclear power plant* and *（再）稼動 (re)start* become more and more frequent. By 2014, *（再）稼動 (re) start* (in the Yomiuri) and *廃炉 decommissioning* (in Twitter) replace *脱原発 nuclear phase-out*, clearly showing a contrast between media discourses in the Yomiuri and the semi-public sphere of Twitter with regard to nuclear energy. In the Yomiuri corpus *（再）稼動 (re)start* keyword ranked two and three versus *脱原発 nuclear phase-out* which ranked fifth. In the Twitter corpus *廃炉 decommissioning* surpassed *脱原発 nuclear phase-out* and ranked first.

The term *原発ゼロ zero nuclear* shows an upward trend in 2012 and becomes almost as frequent as *脱*

[7] In this study we use the term "nuclear phase-out" as an umbrella term for the words related to nuclear phase-out and anti-nuclear movement.

原発 nuclear phase-out between 2013 and 2014. Other terms used frequently in 2012 include *再稼働反対 against restart*— being connected to anti-nuclear demonstrations, most specifically with the demonstration on 29 June 2012 against the restart of Ōi NPP in Fukui Prefecture — or *卒原発* "*to graduate from NPP*", which is often referenced to Yukiko Kada (leader of the Tomorrow Party of Japan, 日本未来の党), who was one of the first who used it in June 2011 in mass media. However, our data show that this term, in fact, appeared first on Twitter, namely in March 2011 (the beginning of the time frame of our corpus), and in Yomiuri only three months later. *カダ Kada* is also one of the top collocates of the phrase *卒原発* "*to graduate from NPP*" in the whole Yomiuri corpus. In 2012 Yukiko Kada started a political campaign to run in the general elections in 2012, actively using the term in her campaign to appeal to the users of social media. With the dissolution of the party on May 2013, the frequency of the term drastically decreases in both corpora, which could be taken as proof of the fact that Kada was unsuccessfully trying to actively change the framing of nuclear phase-out during her campaign by using this catchy term.

(2) Keywords analysis

In our keyword analysis, we studied the framing of nuclear phase-out in relation to politics, geography, safety issues, and renewable energy.

As shown in the table in our Appendix, nuclear phase-out occurs predominantly within political discourse in news media, while the tweets reflect citizens' stances against nuclear energy of protest movements. This lines with the assumption that the predominant functions of social media lie in the ability to engage in the political sphere and to actively participate in and influence decision making (Zappavigna, 2012).

In 2012, the range of themes within each corpus and shared topics between media is notably smaller, with the main themes established in 2011 repeating and evolving over time. The main focus in the Yomiuri corpus is unambiguous and refers to politics, and to elections in particular. The dominance of election-related vocabulary is caused by (a) the general election held on 16 December 2012, (b) the 23rd election of the House of Councillors held on 21 July 2013, (c) the Tokyo gubernatorial election held on 9 February 2014 and (d) the general election held on 14 December 2014. The share of election-related vocabulary in the Yomiuri corpus takes up approximately 60%, suggesting that nuclear phase-out discussion was strongly related to campaign promises of politicians' manifested in the electoral agenda discourse of the various candidates and parties. In Twitter, the theme of nuclear phase-out correlated with elections, especially in 2012 (Heinrich et al. 2018; Heinrich and Schäfer 2018).

In addition, nuclear phase-out and its various semantic instances were also related to other political issues in both media in 2012-2013, namely other election's campaign messages like *消費増税 consumption tax increase*, *環太平洋経済連携協定 the Trans-Pacific Partnership Agreement* and *TPP, 消費税 consumption tax, 増税 tax increase*. This suggests that politicians used nuclear phase-out to attract voters at least in the immediate aftermath of the Fukushima disaster. On Twitter, these keywords link to the agreement or disagreement with politicians or manifestation of users' consent with a political agenda.

The topic of "restart" became more prevalent in 2012, if opposed to 2011. At that time, protest against this policy grew stronger, particularly assuming shape in the weekly large-scale anti-nuclear demonstrations in front of the office of the prime minister. The salience of this topic is represented by the keywords *大飯原発 Ōi NPP, 大飯原発再稼働 restart of Ōi NPP, 関電 KEPCO,* and *首相官邸 Office of the Prime Minister*, linking it directly to the messages of the aforementioned demonstration.

In 2014, the instances of the keyword *脱原発 nuclear phase-out* declines rapidly in our Twitter corpus. This suggests that the term *脱原発 nuclear phase-out* disappeared from the Twitter sphere as the protests died away. This tendency can also be observed with regard to the appearance of hashtags related to the protest movement, such as *#nonukes* or *#脱原発 nuclear phase-out*. In recent scholarship on social movements and the use of social media, hashtags are considered as an important tool for "connective action" (Bennett and

Segerberg 2013). Despite these hashtags were the most frequent in 2014, no single message tagged *#nonukes* and only 75% of messages tagged # 脱原発 *nuclear phase-out* were connected to the topic of nuclear phase-out.

We will now discuss the different framings of nuclear phase-out across media in the remaining part of our article in detail.

(3) Framing 1: Nuclear phase-out in a political context

An analysis of the keywords associated with political actors helps to understand how key actors changed their terminology regarding an issue, and thus the way in which they frame it politically or ideologically over time. Whereas the mass media is not only an important tool for politicians or the government to communicate their political agenda to the people, but also fulfils the function to criticize or appeal to political actors and thus performs its function as watchdog role in democratic societies, Twitter is also not merely used as an instrument in political campaigning, but as a channel to criticize and raise discontent from the bottom-up perspective of civil society, namely individuals or social movements.

As for the period of our study, the keywords *首相 prime minister* and *菅首相 Prime Minister Kan* are associated with nuclear phase-out saliently in both corpora only in 2011. More importantly, however, is the fact that in the Yomiuri corpus the term *退陣 resignation* together with *正式 formal, 即時 instant, 居座り stay put* also linking to this topic are among the top 20 collocates of the keyword *菅首相 Prime Minister Kan*, hinting at a campaign against DPJ-politician Kan orchestrated by the Yomiuri. Other collocates include *13日 thirteenth day of the month*, *記者会見 press conference*, *6日 sixth day of the month* and *記念式典 memorial ceremony*, referring to two speeches delivered by Kan on July 13th and on the occasion of Peace Memorial Ceremony on August 6th, in which he demanded a decrease in the dependence on nuclear energy. Already two days after the first event, it was criticized in the Yomiuri that this was allegedly Prime Minister Kan's personal idea, proposed without prior consulting with the government. This suggests that despite Prime Minister Kan being the most active advocate of nuclear phase-out among the heads of the government, in the Yomiuri, his decision was represented as inappropriate, thereby destabilizing the prime minister. Despite Kan`s resignation being requested by the politician Takeo Nishioka (西 岡 武 夫) on May 19th, according to the Yomiuri, our data shows that the keywords *退陣 resignation, 危機 crisis* and *失敗 failure* in the Twitter corpus link to the demonstration held on April 16 entitled "菅首相の退陣、脱原発社会" *"Resignation of the prime minister, nuclear-powered society"* with the slogan "菅首相は危機対応に失敗した責任を取れ！" "*Prime Minister Kan, take responsibility for failing to respond to the crisis!*".

Despite being a proponent of nuclear phase-out, Kan was also under attack from the Twitter sphere at the time, putting him in an almost impossible position to act properly. Whereas the Yomiuri was getting at him for his allegedly single-handed demand to reduce the use of nuclear energy, Twitter users started to demand the shutdown of the Hamaoka NPP, something he eventually ordered on May 6th 2011. In the Twitter corpus, *浜岡原発 Hamaoka NPP, 停止 stop,* and *要請 request* are among the most frequent collocated of *菅 Kan* in 2011. Interestingly, the Yomiuri mentions the Hamaoka NPP for the first time only after Prime Minister Kan demanded its shut down, thus it was not a matter reported by the Yomiuri previous to the shutdown. In the Twitter sphere, an analysis of concordances *菅首相 Prime Minister Kan + 浜岡原発 Hamaoka NPP* show that 11 out of 30 random concordance lines include a positive evaluation of Prime Minister Kan's action, with affirmative phrases such as *英断 excellent decision, もっと頑張れよう let's do more, 頑張ってください good luck, えらい well done, 祈る pray, やったぞ he did it* being used in these tweets. By contrast, this decision was accompanied more saliently by criticisms of editorial writers of opposing politicians in the Yomiuri.

In general, as already mentioned, the term of phase-out was more and more disassociated from the political realm in the following years. Thus, *野田 Noda* co-occurs with the term nuclear phase-out seven times, whereas there are no co-occurrences of Prime Minister Abe with *脱原発 nuclear phase-out* and only five co-occurrences

with *原発ゼロ zero nuclear* in our Yomiuri corpora. In those rare cases when Prime Minister Abe co-occurs with nuclear phase-out, the other frequent collocate is *見直す revise*, hinting at the discontinuation of nuclear phase-out policy. The term *原発ゼロ zero nuclear* most likely refers to Genpatsu Zero no Kai (Group for Zero Nuclear Power), a trans-party group of politicians that published a list of Japan's most dangerous nuclear reactors in Japan. In the Yomiuri, Abe is quoted as having said the following:

> 首相は「『原発ゼロ』で電力を安定的に保てるのか。責任ある立場として、ゼロと言うことは出来ない」と強調した。 *(The prime minister stressed "Can we keep power stable with 'Zero Nuclear'? We can not say that 'zero' is a responsible position.")* (2013/07/21).

Instead, nuclear phase-out is more closely connected to the policies of the Abe administration, particularly the keyword *アベノミクス Abenomics* (economic policies introduced by the Abe administration) appears amongst *安倍政権 Abe administration* in the Yomiuri in 2013. Collocates of these two keywords suggest an assessment of his policies (*評価 evaluation, 効果 results*) and a critical stance towards the policies regarding, for instance, nuclear phase-out of other politicians prior to the upcoming elections (i.e. *批判 critique* and *副作用 side effect*), thus creating negative semantic prosody of the keywords. The collocate *良い good* (30% of instances), which usually has positive semantic prosody, and *景気 business* (36% of instances) are used in negative constructions in the Yomiuri corpus. The only collocate among the top 20 used positively is *期待感 hopes*.

On Twitter, *自民党 LDP* is the only political party mentioned among the top 50 keywords in the Twitter 2013 corpus and is more tightly connected with phase-out on Twitter in contrast to Yomiuri. The first top three collocates *没収 confiscations, プラカード placard, 関係者 affiliate* link to the negative reaction to the news "安倍総理の福島演説で原発廃炉プラカードを自民党員が没収" "*LDP members seized nuclear decommission placard during Prime Minister Abe's speech in Fukushima*" with links to internet media. *自民党* or *自民 LDP* and *原発推進 nuclear promotion* are not only strong mutual collocates of each other in 2013 tweets but LDP is the only political party that collocates with *原発推進 nuclear promotion*. However, that tendency could be observed already for 2012 as well.

The other frequent collocates include *勝つ win, 大勝 great victory,* and *圧勝 clear victory*, which appeared on the next day after the results of elections were announced. On the whole, such words have discourse prosody to refer to positive events. But in the Twitter corpus, they rather evoke a negative prosody evaluation, linking it to the questions why/how LDP was able to win despite being pro-nuclear. The negative appraisal of the news was highlighted with particles and phrases such as interactional particles *だろう／でしょう* with the meaning *isn't it right?, の＋？* (sentence-final particle, imply question*), が信じられない I don't believe that, 間違いないでしょう no doubt, right, 疑問を放置 leave questions, に対して against* or to discontent with the results of the elections conveying feelings of sadness and anger. Regarding the grammatical patterns used in tweets, such messages aimed not just to show the frustration, negative affect and judgments of the users, but also aimed at creating or maintain an online community by means of phatic communication (Miller 2008) of anti-nuclear and like-minded people for "connective action". The same is also true for two other frequent collocates in the Twitter 2013 corpus, namely *落とす let fall* and *公式 official*, often being accompanied by hashtags such as *#自民を落とせ #脱原発 #let fall LDP #nuclear phase-out*, even when the message itself did not contain nuclear energy-related information.

(4) Framing 2: nuclear phase-out in a geographic context

Keywords belonging to the semantic category *country* and *region* can give an idea of the spatiality or dissemination of the term nuclear phase-out and how its geographical context shrank from the international to the local. In the first period, both media referred to the conditions in other countries, particularly Germany. The term *ドイツ Germany* is among the top 50 keywords in the Twitter 2011 corpus (ranked 43, compared with Yomiuri: 85). It is argued that it was particularly the critical coverage of the Fukushima accident in Germany's mass media that played a great role in mobilizing for anti-nuclear protests, something Gono'i (2015) has

described as "boomerang effect". Despite *ドイツ Germany* not being among the top 50 keywords in Yomiuri, it is a strong collocate of *脱原発 nuclear phase-out*.

In both media, Germany often appears as collocates of *スイス Switzerland* and *イタリア Italy*, namely countries in which the Fukushima accident led to a significant political change regarding nuclear energy, as opposed to, for instance, *フランス France*, a country that decided to continue nuclear energy usage. Moreover, a closer look at concordance lines reveals some differences in media. In the Yomiuri, the collocates *国内 domestic, 2022年 2022, 決める decide, 事故後 after the accident, 17基 17 reactors, 全廃 complete decommissioning* refer to the debates in Germany on domestic energy issues. Furthermore, Germany colligated with the exemplifying particle *など and so on* (in 77% of cases), *のような like* (in 100% of cases), coordinate conjunction *や and* (in 50% of cases), setting Germany as a bad example with further commentaries regarding the consequences that countries, which decided to phase-out, were going to face in the energy market. This suggests that the Yomiuri was trying to save the face of nuclear energy by framing it as an economically vital source of energy.

On Twitter, geographical collocates can be grouped in three semantic sets: (a) countries with a strong public opinion leaning towards phase-out, (b) countries that had large-scale demonstrations, or (c) where nuclear phase-out was turned law. Hence, if appearing together with *スイス Switzerland* and *イタリア Italy* Japan is placed in a group with countries phasing-out or seen as a country where nuclear phase-out is discussed as a desirable outcome. However, this is most prevalent in the case of Germany, where grammatical patterns following the keyword *ドイツ Germany* suggest that the users were taking Germany's course as an ideal model (such as the exemplifying particle *など and so on* (in 50% of instances), the coordinate conjunction *や and* (in 76% of instances) and with the meaning "*like*", "*in a manner*" (*のような/のように* (in 75% of instances), *の様に* (in 88% of instances), *みたいに* (in 80% of instances) and *見習う follow the example* (in 64 % of instances). Below is one example of this pattern:

> *Twitter:* 代替エネルギー（太陽光、地熱、風力、バイオマス）は脱原発の決め手にはならないが、シフトすべき。決め手じゃないからやる価値がない、などという話でもない。原発はトータルコストが掛り過ぎる。ドイツに見習おう。日本はこの分野で遅れ過ぎた。省エネニッポンは、もう過去の 話。京都議定書は見直せ . (*Alternative energy [solar, geothermal, wind, biomass] is not the deciding factor for nuclear phase-out, but it should be shifted. It is not about being not worthwhile because it is not a decisive factor. The nuclear power plant takes too much total cost. Let's follow Germany. Japan was too late in this field. Energy saving Nippon is in the past. Review the Kyoto Protocol.) (2011/04).*

In general, international references of this kind became less significant in the subsequent years from both media, thereby leading to a strong re-localization of this event and its global consequences in Japan and thus also a collapse of a formerly transnational protest movement.

(5) Framing 3: Nuclear phase-out and safety

As was mentioned earlier, the Yomiuri framed nuclear energy and Japanese NPPs as *safe* and *reliable*. Despite inquiries of the Fukushima accident that revealed numerous flaws in the safety of Japanese NPPs, pro-nuclear ideology still permeates the agenda of Yomiuri articles. This is clear from the safety-related vocabulary which includes *安全性 safety, 安全 safety, 安全対策 safety measures*, which all share common enhancement-related vocabulary such *as 強化 strengthening, 高める enhancement, 最優先 top priority, 向上 improvement, 新基準 new standard, 世界最高 best in the world*. Furthermore, *安全 safety* in the Yomiuri corpus is connected to reports or references of expertise by the International Atomic Energy Agency (IAEA) and conferences regarding the strengthening of safety measures, framing Japan's involvement as (a) having learned its lesson and obligation to learn from the accident and (b) making a contribution to international safety measure development. Below is one example belonging to this group:

> *Yomiuri*: 野田首相が原発事故の早期収束と、原子力の安全利用を国際公約として表明した。事故から得られた教訓を生かし、世界の原発の安全性向上に貢献することが日本の責務だ。(*Prime*

Minister Noda declared the early resolution of the nuclear accident and the safe use of nuclear energy as an international commitment. It is Japan's responsibility to contribute to improving the safety of nuclear power plants around the world by learning lessons from the accident) (2012/08/06).

Tweets containing *子供 children, 守る protect, 危険 dangerous* as collocates of nuclear energy emphasize the perspective of the victims and potential dangers of nuclear power. Thereby nuclear energy is framed as a runaway technology (Gamson and Modigliani 1989), with nuclear phase-out as the only means of rescue. By contrast, public safety issues do not appear in the Yomiuri corpus as top-ranking keywords.

Another keyword in the Twitter 2014 corpus which contributes to the runaway framing is *噴火 eruption*, which links the dangers of nuclear energy to the eruption of Mount Ontake in September 2014. Thereby, this incident revived the anti-nuclear discourse by reminding that tectonic and volcanic situation in Japan poses a direct threat for the safety of NPPs. In particular, the volcanic activity is collocating with the restart of *川内原発 Sendai NPP* located in Kyushu, which is an area with an active volcano. However, the term *脱原発 nuclear phase-out* is rarely used in 2014 in this case, instead, words and phrases such as *廃炉 decommissioning*, *原発止める stop NPP, 原発反対 against NPP*, *再稼働反対 against restart* appear more often, allowing the assumption that a total withdrawal from the use of nuclear energy is not very prevalent in 2014 even in the Twitter sphere. Moreover, this case shows very vividly as well as the fact that the formerly international and transnational proportions of the Fukushima incident had already shrunken to the level of the national (Japan) or even local (a plant in Kyūshū).

(6) Framing 4: nuclear phase-out and renewable energy

Renewable energy as a theme appears in the top collocates only in 2011. The representation of renewable energy reveals another aspect of preparedness for nuclear phase-out. The most frequent collocates shared by keywords *再生可能エネルギー renewable energy* and *自然エネルギー natural energy* in both media belong to growth- and promotion-related vocabulary (*導入 introduction, 普及 spread, 拡大 expansion, 開発 development, 増やす increase, 利用 use, 活用 application, 推進 promotion, 促進 facilitation*), representing alternative energy as a developing field.

Other collocates, such as *特措 special measure, 買い取り purchase, 義務 duty, 電力会社 power company*, refer to the introduction of 再生可能エネルギー特別措置法 *the Renewable Energy Special Measures Law*, discussed in the Yomiuri. Furthermore, the Yomiuri often refers to the share of renewable energy in Japan`s energy mix (*割合 percentage, 占める account for, 量 amount, 比率 ratio*) and its costs (*コスト cost*), framing alternative energy as energy that is economically inefficient and not developed enough to replace nuclear power. Thus, the share-related vocabulary often co-occurs with phrases reporting the small share of alternative energy, e.g. *わずかに約1% barely about 1 %, 約 1%にすぎない no more than about 1 %, 1%程度にすぎない no more than some 1%*. The term *コスト cost* co-occurs with quantifying vocabulary such as 高い *high, 何倍もの multi, 下げる reduce, 低下 cut down,* creating negative prosody around renewable energy in the nuclear phase-out discourse, as the following example from the Yomiuri shows:

Yomiuri: 火力発電は地球温暖化対策と逆行する。風力などの自然エネルギーは何倍ものコストがかかり、現状では安定供給は困難だろう。*(Thermal power generation goes against global warming countermeasures. Wind power and other natural energy cost many times more, and at present, a stable supply will be difficult) (2011/06/19).*

In Twitter, collocates contributing to the soft path frame, refer to energy shift-related vocabulary, such as *転換 transition, シフト shift, 移行 change* and colligate with the particle へ, used to indicate a direction, and are linked to messages that support the transition to new types of energy. In addition, collocates such as *100%* or *社会 society* are also to debate on the energy transition. Positive representation of renewable energy of this kind suggests that discourse in Twitter affirms the use of renewable energy.

Furthermore, in the Twitter sphere, an analysis of concordances containing *脱原発 nuclear phase-out+ 自*

然エネルギー natural energy showed that when nuclear phase-out occurs as a second left-hand collocate, it is connected to the keyword by coordinating conjunctions, such as と (25% of instances), や (5.2% of instances), および (0.6% of instances) and symbols such as & (13.2% of instances), slash (28.7% of instances), comma (25.9% of instances), used to signify "and" and "all". Since conjunctions are used to connect words of similar importance in a sentence, *脱原発 nuclear phase-out* and *自然エネルギー natural energy* are often referred to as mutually complementary. This becomes obvious from the following example from our Twitter corpus:

Twitter: 脱原子力と自然エネルギー促進でがんばりましょう。緑の社民党でがんばります。(*Let's promote nuclear phase-out and natural energy. Go green Social Democratic Party!) (2011/04).*

5. Conclusions

To summarize, we can draw the following conclusions from the analysis of the term nuclear phase-out in the Yomiuri and Twitter corpora. First of all, the study shows a decline in the quantity of nuclear phase-out-related terms in both media in the period studied. Furthermore, the study indicates shifts in the ways those terms are framed in different media. This, however, requires further qualitative and in-depth research.

Regarding the framing of phase-out in the political context, the term does not completely disappear over time. However, the focus in the debate regarding nuclear phase-out shifted from criticisms of PM Kan's pro-nuclear phase-out campaign to the pro-nuclear political campaign of the Abe government and voices criticizing his stance. Our keywords and collocational analysis show no significant link between the term nuclear phase-out and PM Abe and his policy in 2013-2014 in the Yomiuri, whereas in the Twitter sphere disagreement with Abe and LDP was more salient. In addition, we also argued that users on Twitter used the medium to maintain a phatic communion by sharing certain paroles to create connective action.

Regarding the geographical context of nuclear phase-out, we have shown that the contextualization of the Fukushima incident and nuclear phase-out is narrowed from an international political contextualization to the very regional (Fukushima) or even local (e.g. the precarious location of certain NPPs). In 2011, the pro- and anti-nuclear political stance (Kan and Abe) was affirmatively or negatively linked to Germany's decision to phase-out. In the Yomiuri, Germany's nuclear phase-out is contextualized with the potential economic effects of such a drastic energy shift (and potentially also for Japan) and its influence on the global energy market, whereas on Twitter Germany's decision is considered as an example that Japan should follow.

Frames regarding the safety of NPPs or alternatives to nuclear energy appear only in the first period of our study. In the Yomiuri, the frame of "peaceful use" is re-framed in terms of Japan's potential international contribution to the development of safety measures of NPPs if the country would continue to use nuclear energy. On the opposite, nuclear energy is framed on Twitter as a runaway technology being dangerous from a social perspective. Furthermore, whereas renewable energy (and the discontinuation of the use of nuclear energy) is seen as having negative economic effects because of the economic insufficiency of renewable energy in the Yomiuri, on Twitter renewable energy is presented as the only alternative to the runaway nuclear technology, thus evoking a soft path framing.

Overall, the Yomiuri is concerned more with economic issues of a potential nuclear phase-out and more straightforward in regard to framing nuclear energy in a positive way in the post-Fukushima period. This is true for all four categories, namely geographical, political, safety, and renewable energy. By contrast, from the result of our analysis of the Twitter corpus, we can say that nuclear phase-out is represented as a necessary step towards a safe future. Germany is often described as a role model in this case. Furthermore, it has become clear that the Yomiuri did not relate to discourses taking place in social media, but continued to reframe social protests in accordance with its pro-nuclear editorial line.

Acknowledgements

The research presented in the article was supported by the Emerging Fields Initiative (EFI) Friedrich-Alexander-University Erlangen-Nuremberg (project title: Exploring the 'Fukushima Effect').

Ethics statement

The research presented in this article was conducted in accordance with the recommendations for safeguarding good scientific practice by the German Research Foundation (DFG).

References

Abe, Yasuhito. 2013. Risk Assessment of Nuclear Power by Japanese Newspapers Following the Chernobyl Nuclear Disaster. *International Journal of Communication* 7: 1968–1989.

Abe, Yuki. 2015. The Nuclear Power Debate after Fukushima: A Text-Mining Analysis of Japanese Newspapers. *Contemporary Japan* 27 (2): 89-110. https://doi.org/10.1515/cj-2015-0006.

Aoki, Tomohiro, Teppei Suzuki, Ayako Yagahara, Shin Hasegawa, Shintaro Tsuji, and Katsuhiko Ogasawara. 2018. Analysis of the Regionality of the Number of Tweets Related to the 2011 Fukushima Nuclear Power Station Disaster: Content Analysis. *JMIR Public Health and Surveillance* 4 (4): e70. https://doi.org/10.2196/publichealth.7496.

Avenell, Simon. 2016. Antinuclear Radicals: Scientific Experts and Antinuclear Activism in Japan. *Science, Technology & Society* 21 (1): 88–109. https://doi.org/10.1177/0971721815622742.

Baker, Paul, Costas Gabrielatos, Majid KhosraviNik, Michał Krzyżanowski, Tony McEnery, and Ruth Wodak. 2008. A Useful Methodological Synergy? Combining Critical Discourse Analysis and Corpus Linguistics to Examine Discourses of Refugees and Asylum Seekers in the UK Press. *Discourse & Society* 19 (3): 273–306. https://doi.org/10.1177/0957926508088962.

Baker, Paul, and Tony McEnery. 2015. Who Benefits When Discourse Gets Democratised? Analysing a Twitter Corpus around the British Benefits Street Debate. *Corpora and Discourse Studies*, 244–65. London: Palgrave Macmillan.

Bennett, W. Lance, and Alexandra Segerberg. 2013. The Logic of Connective Action: Digital Media and the Personalization of Contentious Politics. Cambridge: Cambridge University Press. http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/1369118X.2012.670661.

Binder, Andrew R. 2012. Figuring Out #Fukushima: An Initial Look at Functions and Content of US Twitter Commentary About Nuclear Risk. *Environmental Communication* 6 (2): 268–77. https://doi.org/10.1080/17524032.2012.672442.

Funabashi, Yoichi, and Kay Kitazawa. 2012. Fukushima in Review: A Complex Disaster, a Disastrous Response. *Bulletin of the Atomic Scientists* 68: 9–21.

Gamson, William A., and Andre Modigliani. 1989. Media Discourse and Public Opinion on Nuclear Power: A Constructionist Approach. *American Journal of Sociology* 95 (1): 1–37. https://doi.org/10.1086/229213.

Gono'i, Ikuo. 2015. 2015-Nen ANPO, Minshushugi Wo Futatabi Hajimeru Wakamono-Tachi (ANPO in 2015. The Youth That Is Restarting Democracy). Webronza. http://webronza.asahi.com/politics/articles/2015091600007.html.

Hartwig, Manuela, Okura Sae, Leslie Tkach-Kawasaki, and Yohei Kobashi. 2016. Identifying the 'Fukushima Effect': Assessing Japanese Mass Media Coverage of International Nuclear Power Decisions. *Journal of International and Advanced Japanese Studies* 8: 109–24.

Heinrich, Philipp, Christoph Adrian, Olena Kalashnikova, Fabian Schäfer, and Stefan Evert. 2018. A

Transnational Analysis of News and Tweets about Nuclear Phase-Out in the Aftermath of the Fukushima Incident. In *Proceedings of the LREC 2018 "Workshop on Computational Impact Detection from Text Data,"* 8–16. Miyazaki, JP: Paris: ELRA.

Heinrich, Philipp, and Fabian Schäfer. 2018. Extending Corpus-Based Discourse Analysis for Exploring Japanese Social Media. In *Proceedings of 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference*, 135–140. Takamatsu, Japan.

Hindmarsh, Richard, and Rebecca Priestley. 2015. The Fukushima Effect: A New Geopolitical Terrain. London, UK: Taylor & Francis Ltd.

Hunston, Susan. 2002. Corpora in Applied Linguistics. Cambridg: Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/CBO9781139524773.

Hunston, Susan, and Geoffrey Thompson, eds. 2000. Evaluation in Text: Authorial Stance and the Construction of Discourse. Oxford, New York: Oxford University Press.

Iimura, Akiko, and Jeffrey Scott Cross. 2016. Influence of Safety Risk Perception on Post-Fukushima Generation Mix and Its Policy Implications in Japan. *Asia & the Pacific Policy Studies* 3 (3): 518–32.

Inako, Ayumi. 2019. Different Bonds around Plutonium: Physicists' and Freelance Journalists' Tweets at the Time of the 3/11 Nuclear Crisis. *Discourse, Context and Media* 29. https://doi.org/10.1016/j.dcm.2018.11.003.

Itou, Hiroshi. 2004. A Media Agenda Regarding the Development and Use of Nuclear Energy: The Analysis of the Editorial of the Asahi Shimbun(1). *Journal of Poole Gakuin University* 44: 63–76. https://ci.nii.ac.jp/naid/110001136834.

———. 2005. A Media Agenda Regarding the Development and Use of Nuclear Energy: The Analysis of the Editorial of the Asahi Shimbun (2). *Journal of Poole Gakuin University* 45: 111–26. https://ci.nii.ac.jp/naid/40007268001.

———. 2012. "The Atomic Energy News after the Accident at Fukushima No. 1 Nuclear Power Plant Viewed It from the Tone of Newspapers Editorials during the Period Three Months after the Accident." *Journal of Poole Gakuin University* 52: 199–212.

Kinefuchi, Etsuko. 2015. Nuclear Power for Good: Articulations in Japan's Nuclear Power Hegemony. *Communication, Culture & Critique* 8 (3): 448–65. https://doi.org/10.1111/cccr.12092.

Kitahara, Tokihiko. 2011. Nihon No Shinbun Wa `genshiryoku'o Dono Yō Ni Tsutaete Kita Ka: Asahishinbun to Yomiurishinbun No Shasetsu Ronchō No Kōsatsu (Dai Ⅰ-Ki to Dai Ⅱ-Ki) (How Have the Japanese News Papers Reported 'Atomic Energy'? : Comparative Studies of Editorials of The Asahi Shimbun and The Yomiuri Shimbun (the 1st. & 2nd. Period). *Shobi Journal of Policy Studies, Shobi University* 13: 35–53. http://ci.nii.ac.jp/naid/110009477751.

Li, N., H. Akin, L. Yi-Fan, D. Brossard, M. Xenos, and D.A. Scheufele. 2016. Tweeting Disaster: An Analysis of Online Discourse about Nuclear Power in the Wake of the Fukushima Daiichi Nuclear Accident. *Journal of Science Communication* 15 (5): 1–20.

Louw, Bill. 1993. Irony in the Text or Insincerity in the Writer? The Diagnostic Potential of Semantic Prosodies. *Text and Technology. In Honour of John Sinclair*, 157–76. Amsterdam: John Benjamins.

McEnery, Tony, Mark McGlashan, and Robbie Love. 2015. Press and Social Media Reaction to Ideologically Inspired Murder: The Case of Lee Rigby. *Discourse and Communication* 9 (2): 1-23.

McEnery, Tony, and Andrew Wilson. 2001. Corpus Linguistics: An Introduction. Edinburgh University Press.

METI. 2014. Fourth Strategic Energy Plan. http://www.enecho.meti.go.jp/en/category/others/basic_plan/pdf/4th_strategic_energy_plan.pdf.

Miller, Vincent. 2008. New Media, Networking and Phatic Culture. *Convergence: The International Journal of Research Into New Media Technologies* 14 (November): 387–400. http://dx.doi.org/10.1177/1354856508094659.

Oyama, Nao. 1999. Genshiryoku Hōdō Ni Miru Media Furēmu No Hensen (Changing Media Frames on

Nuclear Power). *Proceedings of the Faculty of Letters of Tokai University* 72: 41–60. http://ci.nii.ac.jp/naid/110000195514.

Penney, Matthew. 2012. Nuclear Nationalism and Fukushima. *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* 10 (11): online journal. http://apjjf.org/2012/10/11/Matthew-Penney/3712/article.html.

Poortinga, Wouter, Midori Aoyagi, and Nick F. Pidgeon. 2013. Public Perceptions of Climate Change and Energy Futures before and after the Fukushima Accident: A Comparison between Britain and Japan. *Energy Policy* 62: 1204–11. https://doi.org/10.1016/j.enpol.2013.08.015.

Rantasila, Anna, Anu Sirola, Arto Ilmari Kekkonen, Katja Valaskivi, and Risto Kunelius. 2018. #fukushima Five Years On: A Multimethod Analysis of Twitter on the Anniversary of the Nuclear Disaster. *International Journal of Communication* 12: 928–49. https://researchportal.helsinki.fi/fi/publications/fukushima-five-years-on-a-multimethod-analysis-of-twitter-on-the-.

Satoh, Keiichi, Okada Atsushi, Sunmee Kim, JiYoung Kim, Reeya Komoda, Tomoyuki Tatsumi, Uichi Tan, and Takashi Machimura. 2014. Reshaping the Nuclear Energy Policy Domain: The Japanese Anti-Nuclear Movement after the Fukushima Nuclear Power Plant Accident. *Reconstruction from the Disaster Project*, 178–99.

Satou, Toshinori, Taiichi Hashimoto, and Manabu Okumura. 2017. Tango Wakachigaki Jisho Mecab-Ipadic-NEologd No Jissō to Jōhō Kensaku Ni Okeru Kōkatekina Shiyō Hōhō No Kentō (Implementation of a Word Segmentation Dictionary Called Mecab-Ipadic-NEologd and Study on How to Use It Effectively for Information Retrieval). *Proceedings of the 23 Annual Meeting of the Association for Natural Language Processing*, B6–1. Tsukuba, Japan: The Association for Natural Language Processing.

Schäfer, Fabian. 2017. *Medium als Vermittlung. Medien und Medientheorien in Japan.* (The Medium as Mediation: Mass Media and Media Theory in Japan). Wiesbaden: Springer.

Schäfer, Fabian, Stefan Evert, and Philipp Heinrich. 2017. Japan's 2014 General Election: Political Bots, Right-wing Internet Activism and PM Abe Shinzō's Hidden Nationalist Agenda. In Big Data, 5(4), 294–309.

Scott, Mike. 2004. WordSmith Tools Version 4. Oxford: Oxford University Press.

Sinclair, John. 1991. Corpus, Concordance, Collocation. Oxford: Oxford University Press.

Stubbs, Michael. 1995. Collocations and Semantic Profiles: On the Cause of the Trouble with Quantitative Studies. *Functions of Language* 2 (1): 23–55. https://doi.org/10.1075/fol.2.1.03stu.

Tsubokura, M., Y. Onoue, H.A. Torii, S. Suda, K. Mori, Y. Nishikawa, A. Ozaki, and K. Uno. 2018. Twitter Use in Scientific Communication Revealed by Visualization of Information Spreading by Influencers within Half a Year after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident. *PLoS ONE* 13 (9). https://doi.org/10.1371/journal.pone.0203594.

Tsuchida, Tatsuro, and Hiroshi Kimura. 2011. Research of the Way of Communicating Information to the Mass Media by Comparison with the Media Coverage about Nuclear Accidents. *Transactions of the Atomic Energy Society of Japan* 10 (2): 132–43. https://doi.org/10.3327/taesj.J10.030.

Yamakoshi, Shūzō. 2015. Discourse Analysis on the Chernobyl Nuclear Disaster : A Case Study on Japanese National Newspaper Coverage during 1986. *Media Komyunikēshon* 65: 17–27. http://ci.nii.ac.jp/naid/120005844705.

———. 2016. Cherunobuiri Genpatsujiko Ni Kansuru Media Gensetsu No Bunseki: 1986-Nen No Zenkoku-Shi No Shoki Hōdō o Jirei to Shite (Discourse Analysis on the Anti-Nuclear Movement : A Case Study on Japanese National Newspaper Coverage from 1987 to 1989). *Keio Media Communication* 66: 73–85. http://ci.nii.ac.jp/naid/120005844705.

Yoshimi, Shunya. 2012. Radioactive Rain and the American Umbrella. *The Journal of Asian Studies* 71 (2): 319–31. https://www.jstor.org/stable/23263422.

Zappavigna, Michele.2012. Discourse of Twitter and Social Media: How We Use Language to Create Affiliation on the Web. London: Bloomsbury.

Appendix

Table 2. Top 50 KW in Yomiuri and Twitter corpora in 2011-2014 organized by themes

Theme	2011	2012	2013	2014
Phase-out	Common: 脱原発 nuclear phase-out, 稼働 operation, 再 re-, 廃炉 decommissioning, 停止 stop, 原発停止 stop NPP, 浜岡原発 Hamaoka NPP Twitter: # 脱原発 nuclear phase-out, もんじゅ Monjyu	Common: 脱原発 phase-out, (再) 稼動 (re)start Yomiuri: ゼロ zero Twitter: # 脱原発 phase-out, 大飯原発再稼働 restart of ŌiNPP, 廃炉 decommissioning, 原発停止 NPP shutdown	Common: 脱原発 nuclear phase-out, 再 re- Yomiuri: ゼロ Zero, 稼働 operation, 原発停止 stop NPP Twitter: 廃炉 decommissioning, # 脱原発 nuclear phase-out	Common: 脱原発 nuclear phase-out, 稼働 operation, 再 re-, 川内原発 Sendai NPP Yomiuri: ゼロ Zero Twitter: 廃炉 decommissioning, 原発停止 stop NPP, (# 脱原発) nuclear phase-out
Political actors	Common: 首相 Prime Minister, 菅首相 Prime Minister Kan, 政府 government Yomiuri: 株主 shareholders, 海江田 Kaeda	Yomiuri: 議員 Congressman Twitter: 橋下 Hashimoto	Twitter: 山本太郎 Yamamoto Taro	Yomiuri: 細川氏 Hosokawa, 舛添 Masuzoe, 議員 congressman
Political parties		Common: 未来の党 Future party Yomiuri: 党 party, 自民党 (自民 , 自) LDP, 民主党 (民主) DPJ, 共産 Communist party, 維新の会 Japan Innovation Party, 新人 newcomer, 陣営 camp; 政党 political party, 維新 restoration Twitter: 政府 government	Common: 自民党 LDP Yomiuri: 民主党 (民主 , 民) DPJ, 共産党 (共産) Communist party, 自民 / 自 LDP, 幸福実現党 Happiness Realization Party, みんなの党 Your party, 維新 Restoration party, 党 party	Yomiuri: 自民党 (自民 , 自) LDP, 党 party, 共産党 (共産) Communistic party, 民主党 (民主) DPJ
Politics	Yomiuri: 転換 shift, エネルギー政策 energy policy, 政策 policy, 原子力政策 nuclear energy policy	Yomiuri: 政策 policy, 政治 government, 第 3 極 a third pole	Yomiuri: 政策 policy, アベノミクス Abenomics, 安倍政権 Abe administration, 政治 government	Yomiuri: アベノミクス Abenomics, 政策 policy, 安倍政権 Abe administration, 政治 government
Elections	Yomiuri: 選 elections, 知事 governor, 民主党 DPL, 候補 candidate	Common: 選挙 elections Yomiuri: 候補 candidate, 衆院選 lower house elections, 新 new, 選挙区 electoral district, 立候補 candidacy, 層 layer, 小選挙区 single-seat constituency, 有権者 electorate, 候補者 voter, 1 区 1 st district, 2 区 2 nd district, 擁立 support	Common: 参院選 House of Councillors election Yomiuri: 候補 candidate, 新 new, 議席 legislative seat, 新人 new candidate, 現 current, 現職 incumbent, 立候補 candidacy, 改選 re-election, 擁立 support, 無党派層 independent, 元 ex-, 選挙戦 election campaign, 公示 public notice	Common: 候補 candidate Yomiuri: 衆院選 General elections, 都知事選 Governor elections, 選挙 (選) elections, 新 new, 立候補 candidacy, 選挙区 election district, 小選挙区 single-seat constituency, 候補者 voter, 無党派層 nonaligned voters
Campaign		Yomiuri: 街頭演説 street speech, 支持層 supporting layer, 支持 support	Yomiuri: 街頭演説 street speech, 支持層 supporting layer, 支持 support	Yomiuri: 街頭演説 street speech, 支持層 supporting layer, 支持 support, 出馬 run campaign, 陣営 camp
Other political issues	Yomiuri: 退陣 resignation	Common: TPP Yomiuri: 消費増税 consumption tax increase	Common: TPP	Twitter: 集団的自衛権 right of collective self-defence

Groups	Twitter: 派 faction/group, 原発推進 nuclear supporters, 反対派 opposition faction	Twitter: 派 fraction, 原発推進 NPP promotion	Twitter: 派 group, 原発推進 nuclear promotion	Twitter: 派 group, 原発推進 nuclear promotion
Company	Twitter: 東電 TEPCO Yomiuri: 東京電力 TEPCO, 電力会社 electric company	Twitter: 関電 KEPCO, 東電 TEPCO	Twitter: 東電 TEPCO	Twitter: 東電 TEPCO, 電力会社 electric company
Ideology	Twitter: 推進 promotion	Twitter: 推進 promotion, 原発推進 nuclear promotion	Twitter: 推進 promotion, 原発推進 nuclear promotion	Twitter: 原発推進 nuclear promotion
Economy	Common: エネルギー energy, 電力 electricity Yomiuri: 依存 depend, 発電 generate	Common: 電力 electricity Yomiuri: 経済 economy	Common: 電力 electricity Yomiuri: エネルギー energy	Yomiuri: 電力 electricity
Nuclear energy	Common: 原発 NPP, 原子力 nuclear energy, 浜岡原発 Hamaoka NPP Yomiuri: 発電 generation Twitter: # 原発 (#genpatsu) NPP, もんじゅ Monjyu, 福島原発 Fukushima NPP	Common: 原発 Twitter: #GENPATSU, # 原発) NPP, 大飯原発 ŌiNPP, 原子力 nuclear energy	Common: 原発 NPP	Common: 原発 NPP Twitter: # 原発 NPP
Renewable energy	Common: 再生可能エネルギー renewable energy, 自然エネルギー natural energy			
Country, region	Yomiuri: 国 country Twitter: 日本 Japan, ドイツ Germany, 福島 Fukushima	Twitter: 日本 Japan, 福島 Fukushima	Twitter: 日本 Japan, 福島 Fukushima	Twitter: 福島 Fukushima
Consequences	Common: 事故 accident, 原発事故 nuclear accident Yomiuri: 福島第一原発 Fukushima Daiichi NPP Twitter: 放射能 radiation	Twitter: 放射能 (# 放射能) radioactivity, 福島 Fukushima	Twitter: 汚染水 contaminated water, 被曝 elimination, 放射能 radiation, 原発事故 nuclear accident	
Natural disaster				Twitter: 噴火 eruption
Safety	Yomiuri: 安全性 safety, 安全 safety, 安全対策 safety measures, 立地 siting			
People	Common: 国民 citizens	Common: 国民 citizens		
Actions	Common: 反原発 anti-nuclear, Twitter: 要請 demand, デモ demo, 反原発デモ anti-nuclear demo, 署名 signature, 集会 gathering	Twitter: 反原発 ,# 反原発 anti-nuclear, デモ demo, 抗議 protest, デモ -demo, 反原発 anti-nuclear, 反原発デモ anti-nuclear demo, 集会 meeting, 運動 movement, 官邸 official residence, 首相官邸 office of Prime Minister, 福島 Fukushima	Twitter: 反原発 anti-nuclear, # 反原発 anti-nuclear, デモ demo, 抗議 demo, 反原発デモ anti-nuclear demo, デモ demo, 運動 movement, 国会 diet, 原発停止 stop NPP, 官邸 Prime Minister office, 福島 Fukushima	Twitter: #nonukes, 反原発 (# 反原発) anti-nuclear, 抗議 demo, デモ demo, 福島 Fukushima
Objection	Common: 反対 against	Common: 反対 opposite Twitter: 反 anti-	Common: 反対 against Twitter: 反 anti-	Common: 反対 against Twitter: 反 anti-

University of Tsukuba
Journal of
International and Advanced
JAPANESE STUDIES

Volume 12 / February 2020

Contents

Articles

■ Asaji HIRAYAMA 1
Japanese *Gengo*, Historical Consciousness and Christianity

■ Teruo HIRASAWA 23
Transfer to a Local City and Business Development of a Japanese Niche Top Small and Medium Sized Enterprise in Domestic and Overseas Areas: A Case Study of Kyoritsu Seisakusho Co., Ltd.

■ Yoko TANAKA and Hikaru TANAKA 45
Comparative Historical Study on Cooperative Banks in Japan and Germany

■ Masako SHIBATA 63
Discussions on the Introduction of *Studium generale* in Post-WWII Occupied-Germany: Enquiry into the Societal Mission of the University

■ Eric R. LOFGREN 75
Recovery versus Reversion: The Implications of Multiple Signifieds in Ōoka Shōhei's *Fires on the Plain*

Research Notes

■ Hirofumi TSUSHIRO 91
Peak Cultures of Japan: The Minimalistic Achievements

■ James Harry MORRIS 105
A New Analysis of Persian Visits to Japan in the 7th and 8th Centuries

■ Toshiyuki AOYAMA 121
Type Analysis of Self-responsibility Discourse through Meta-pragmatic Categorization

■ Olena KALASHNIKOVA and Fabian SCHAEFER 137
A Corpus-Linguistic Analysis of Media Discourses on Nuclear Phase-out in Japan, 2011-2014

Online Edition (ISSN 2189-2598)

To access online articles and research notes, please refer to the following web-page:
http://japan.tsukuba.ac.jp/research

Articles

■ Yang GAO 155
Discourse Structure of Refusal from Repeated Request to Consensus Building:
A Comparison Between the Requestee of Native Speakers of Japanese and
Chinese Learners of Japanese

Research Notes

■ Yuka OMOYA 172
Is 'Migrant' Still Taboo in Japan? :
A Quantitative Analysis of the National Diet Deliberations on the
Amendment of the 2018 Immigration Act
■ Naomi KATAYAMA 184
Establishing Mutually Understandable Japanese (Wakari aeru Nihongo):
An Awareness Survey Conducted Among the Kurdish Community Regarding
Japanese Language Learning
■ Hsiang CHEN 198
Semantic Extension and Cognitive Process of "Shiro", "Shiroi", "Shirajira", and "Shirajirashii"

The *Journal of International and Advanced Japanese Studies* is published by the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. The journal aims to promote open debate through publishing the results of leading research in Japanese Studies and welcomes submissions from the perspectives of cross-national and international studies (encompassing politics, economy, society, media and information studies, culture, linguistics and pedagogy, fine arts, and literature).

The *Journal of International and Advanced Japanese Studies* aims at contributing to the development of research involving Japanese Studies, Japanese Linguistics, International Comparative Studies, and International Studies.

Notice Regarding Copyright

The copyright for the content of each submission rests with its respective author(s), and they take full responsibility for the content of their submission, including quotations and usage permission. Except where copyright privileges are explicitly indicated to be held by the author(s), the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba, holds the copyright for this *Journal* and its related content posted on the Program's website (http://japan.tsukuba.ac.jp/research).

Journal of International and Advanced Japanese Studies, Volume 12

〔Editorial Board〕
Ruth VANBAELEN (Editor-in-Chief)
Leslie TKACH-KAWASAKI
Masako IKEFUJI
Cade Conlan BUSHNELL
Katsunori SEKI
Hiroyuki TAGAWA

Published on February 15, 2020
Edited and Published by
Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies,
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba

Printed by:
Inamoto Printing Co., Ltd.
Telephone: 029-826-1221

Copyright © 2020 by the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. All rights reserved.

ISSN 2186-0564

Journal of International and Advanced JAPANESE STUDIES

Volume 12 / February 2020

Articles

- Asaji HIRAYAMA
  Japanese *Gengo*, Historical Consciousness and Christianity
- Teruo HIRASAWA
  Transfer to a Local City and Business Development of a Japanese Niche Top Small and Medium Sized Enterprise in Domestic and Overseas Areas: A Case Study of Kyoritsu Seisakusho Co., Ltd.
- Yoko TANAKA and Hikaru TANAKA
  Comparative Historical Study on Cooperative Banks in Japan and Germany
- Masako SHIBATA
  Discussions on the Introduction of *Studium generale* in Post-WWII Occupied-Germany: Enquiry into the Societal Mission of the University
- Eric R. LOFGREN
  Recovery versus Reversion: The Implications of Multiple Signifieds in Ōoka Shōhei's *Fires on the Plain*

Research Notes

- Hirofumi TSUSHIRO
  Peak Cultures of Japan: The Minimalistic Achievements
- James Harry MORRIS
  A New Analysis of Persian Visits to Japan in the 7th and 8th Centuries
- Toshiyuki AOYAMA
  Type Analysis of Self-responsibility Discourse through Meta-pragmatic Categorization
- Olena KALASHNIKOVA and Fabian SCHAEFER
  A Corpus-Linguistic Analysis of Media Discourses on Nuclear Phase-out in Japan, 2011-2014

Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba